

Ⅳ. 考 察

1. 中津平野の地形

大分大学教育学部地理学教室

千 田 昇

はじめに

英彦山を源とする山国川は金吉川、津民川、山移川、跡田川、尾形川などの支流を集めて北流し、中津平野を涵養しながら周防灘に注ぐ。その流路延長は54.3km、流域面積は536km²である。山国川下流域にあたる中津平野では段丘地形の発達がよく、右岸側では土田付近より北東方向に開析扇状地として広がり、その末端は海岸付近まで続く。一方、左岸側は山国川のその後の浸食により、断片的に段丘が残っているにすぎない。また、西方の豊前市、新吉富村、吉富町を流れる佐井川流域のより新期の扇状地も同様に山国川の浸食によって開析されている。

現河道沿いには三口付近より扇状地形に拡がる沖積平野が発達し、沖代平野とよばれている。

本稿では中津平野の扇状地の地形を述べた後、地形面の分類により地形の発達過程を明らかにする。

Ⅰ 地質概観

中津平野の地質については首藤（1962）、坂本・長谷（1972）、渡辺（1973）、亀山・下山（1978）などの研究がある。

首藤（1962）はこの地域の第四系を下位より耶馬溪層、（豊前）中津層、新期洪積礫層・砂丘層に区分した。ここで、耶馬溪層は中津市の後背地をなす耶馬溪の山地をつくり、大分層群滝尾層に対比される地層であり、（豊前）中津層は中津市から豊後高田市にいたる開析扇状地をつくる水平な礫層・火山砂層で、10～30mの厚さの地層である。

坂本・長谷（1972）は中津から豊後高田にいたる、広義の中津平野の地質を調査し、地質層序を明らかにした。それによれば花崗岩、耶馬溪層を基盤として、糸口山丘陵や宇佐台地では河成砂礫層、駅川軽石流堆積物、高森軽石質砂・礫・シルト層、糸口山泥流堆積物、宇佐礫層が順に堆積している。一方、中津台地では首藤（1962）の（豊前）中津層が堆積し、その上には被覆火山灰層がのっている。これらの第四系はそのほとんどが下末吉期より新しく、武蔵野期に形成されたと考えられている。

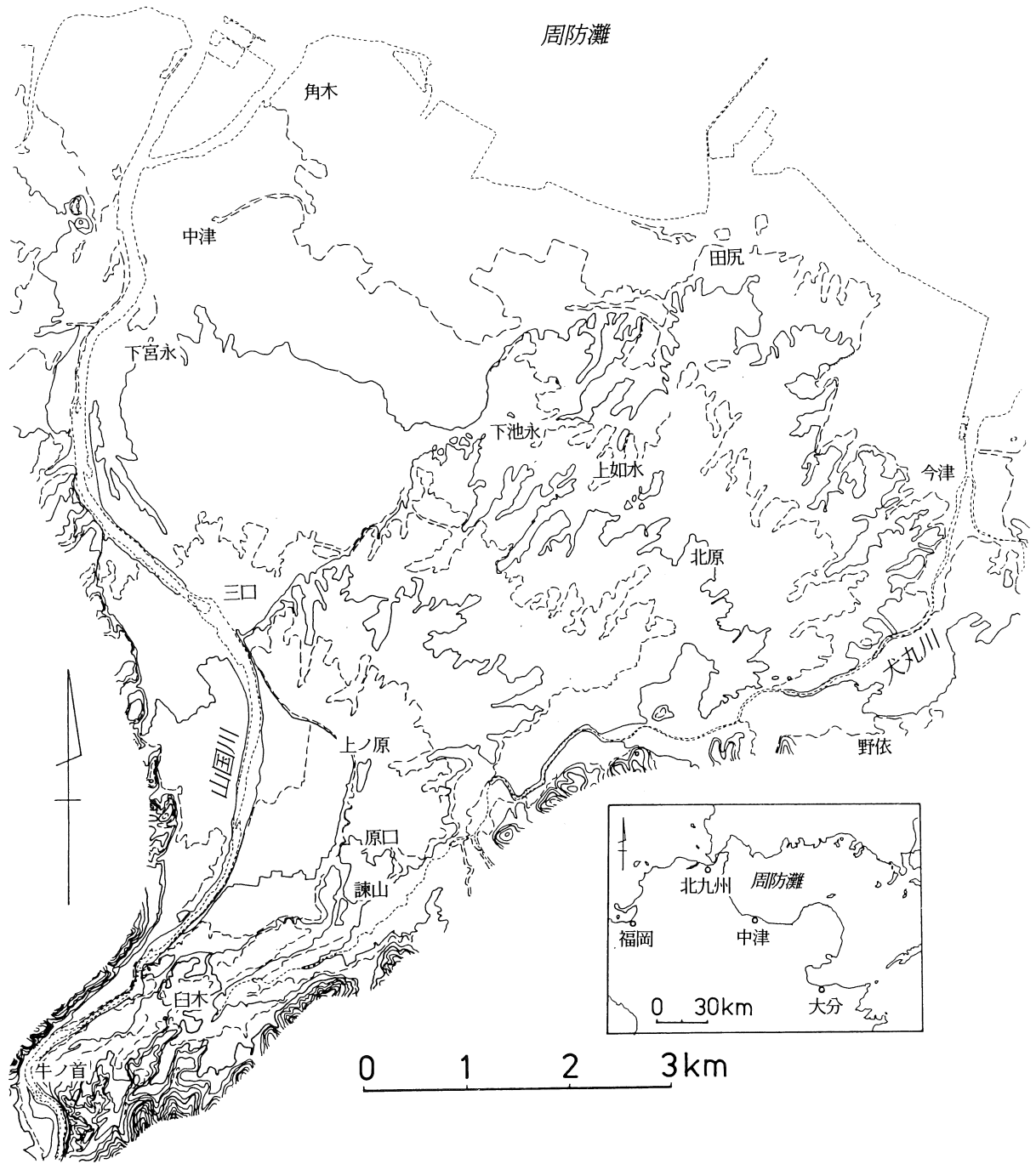
渡辺（1973）は中津平野のボーリング調査により堆積物の様子や地質構造を明らかにした。

亀山・下山（1978）は首藤（1962）の（豊前）中津層を検討した結果、下部の礫層、中部の浮石質火山灰層、そして上部の粗粒砂層とオレンジ色ローム層に分かれることを明らかにし、下部を豊前中津層、上部を諫山層と名づけた。また、それぞれは別の時期の扇状地であり、それゆえ中津台地はこれらの堆積物を堆積させた2つの扇状地からなるとした。

Ⅱ 地形概観

山国川沿いに上流から中津平野への入口にあたる土田付近より下流に大規模な開析扇状地（中津扇状地と名付ける）が発達する。これは（豊前）中津層（首藤、1962）の堆積面で、これにアバットするように野路付近では阿蘇4火砕流がのることから、この開析扇状地は阿蘇4火砕流流入以前に形成されたものであることがわかる。扇端部では海成砂がみられるが、このことは、これが海進期に形成された段丘面である可能性を示唆する（千田ほか、1989）。

山国川の現流路沿いには沖積面が発達する。とくに三口から下流部は開析扇状地を浸食して、沖積面としての新しい扇状地が広がっている。また海岸線に平行して浜堤が発達する。



第451図 中津扇状地の地形 (1:2.5万地形図中津・土佐井・和間・宇佐による)

1) 中津扇状地の地形

中津台地あるいは下毛原とよばれる開析扇状地の地形を2万5千分の1地形図（等高線間隔：主曲線：10m、補助曲線：5m）で見ると次のようなことがわかる（第451図）。

- i) 扇状地面の最高高度は60m、勾配は4.6/1000である。
- ii) 扇状地面の高度分布は一部を除き、牛ノ首付近を扇頂とするほぼ同心円状の構造を示す。

しかし、その構造はいくつかの部分でやや乱されている。一つは臼木の集落ののる部分である。ここでは50～55mの等高線が近接し、55～60mの平坦面が割合広く分布する。二つめは上ノ原の集落付近の海拔40mの高まりである。原口の集落部付近を40mの等高線が通るとすると、それはほぼ等間隔で並ぶが、それより扇端側の上ノ原にある40mの高まりを含めると、35～40mの部分に緩やかな傾斜の変換点が存在することになる。三つめは20～25mの等高線の部分、四つめは5～10mの等高線の部分で、後者はこの扇状地としては急すぎる高度変化を示す。

このうち、一番目については海拔50mの三角点が50mの等高線より約250m扇端側にあり、そこを50mとする等高線の間隔に全く矛盾がない。二番目の上ノ原付近の高まりを詳しくみると、河川争奪が行われた截頭川がかなり深く掘られ、溜池になっており、その東方の原口の集落付近にかけての帯は全体として耕地整理が行われている。このことから水田開発のために集落を残して一段掘り下げて、より平坦化した可能性がある。三番目の傾斜変換部は上如水から北原にかけての地域で、ここは建造物をたてるための盛土・切土で人工的に高度変化がおきた可能性がある。最後は扇状地末端で、海域の影響が現れたものと考えられる。

以上のことから、中津扇状地の主体は基本的にはほとんど同時期に形成されたもので、その後の浸食期において部分的に開析されて消失した部分、一時的な堰止めや河流により堆積物が堆積した部分などがあるものと考えられる。その意味から諫山層は扇状地形成後に部分的な堰止めや河流で堆積したもので、亀山・下山（1978）の言うように後に形成された全く別の扇状地ではないようである。また扇端部は後の海進により浸食されたものと考えられる。

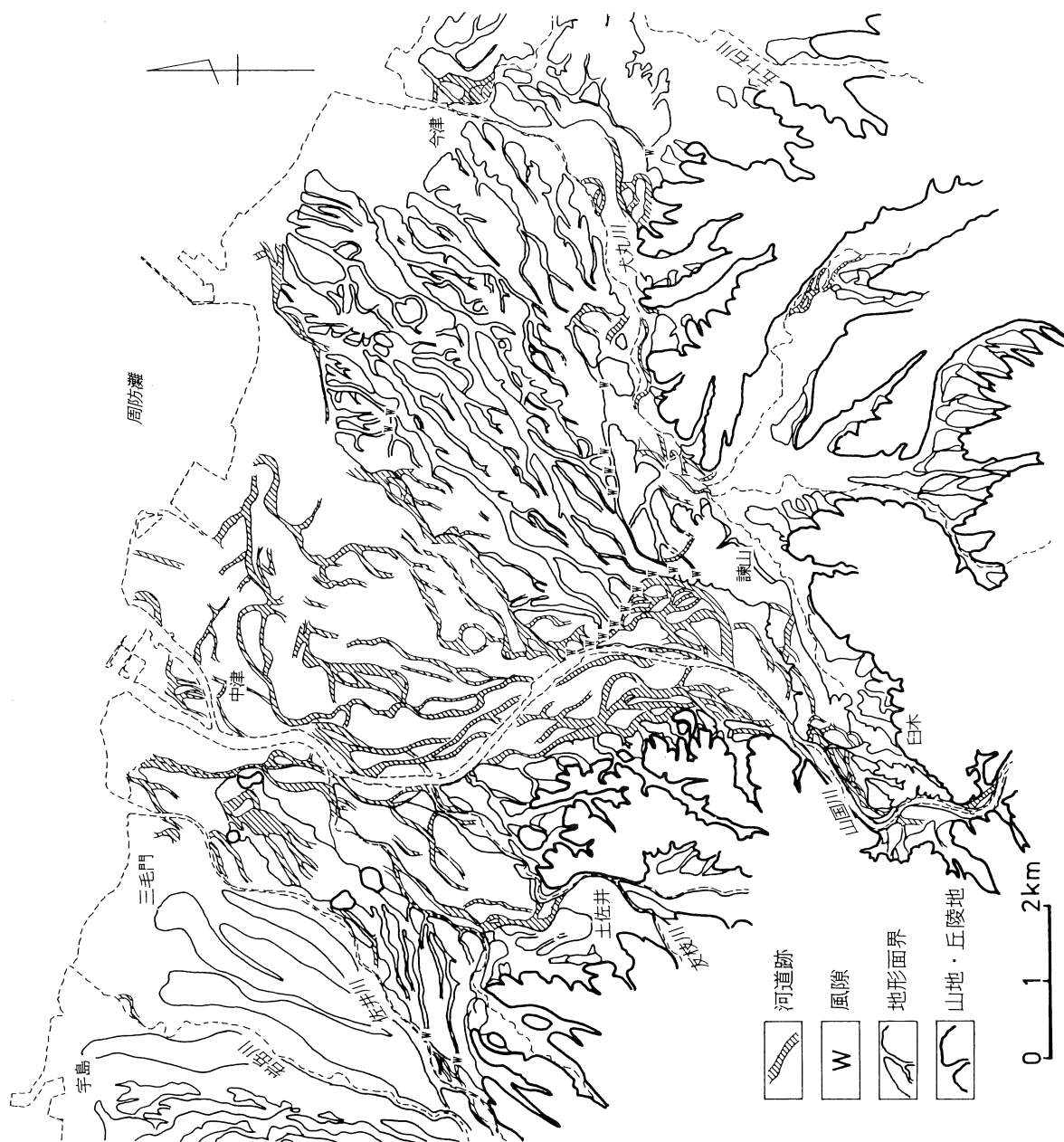
2) 中津扇状地上の微地形

中津扇状地の扇状地面には河道跡が多く見られる。その中には短期間で放棄されたもの、開析谷として現在も扇状地面の開析にあたっているものなどがある。比較的規模の大きな開析谷は扇状地形成に関与した河流を受け継いでおり、それゆえ現在は山国川のより大規模な下方浸食と側方浸食により、上流部を失っている。これは一種の河川争奪の現象で、原口から三口にいたる段丘崖上にはその遺物としての風隙の地形が多く観察され、また、開析谷には多くの溜池が分布する（第452図）。

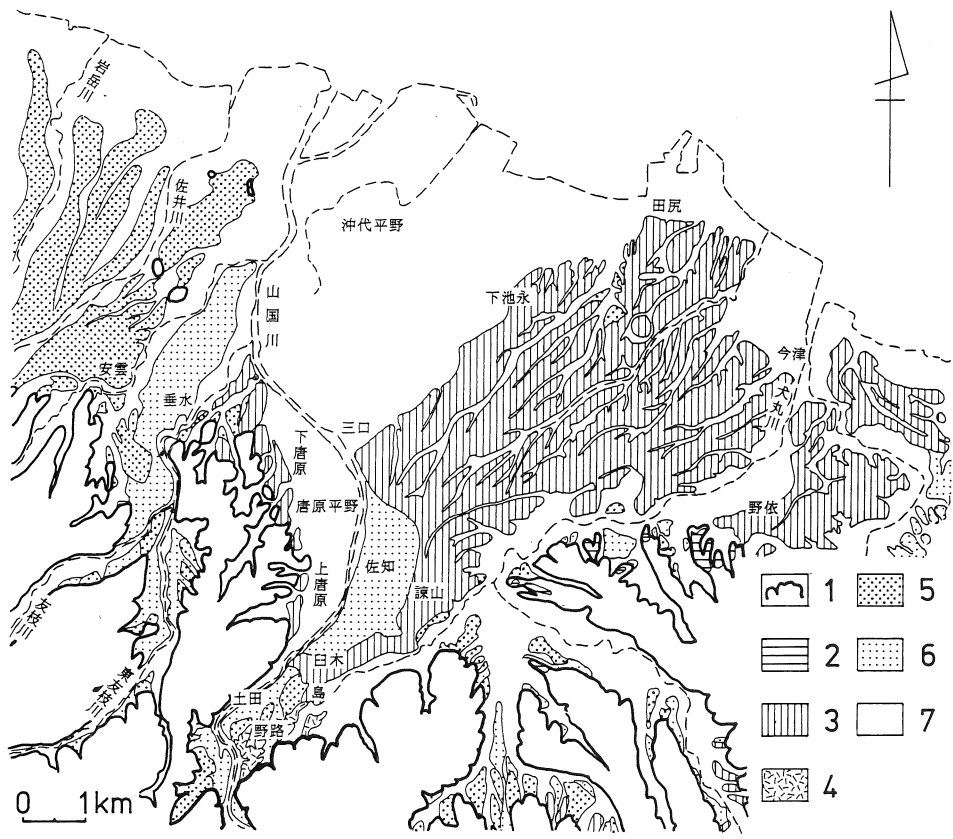
現在の中津扇状地の地形は犬丸川流域では段丘崖の比高が小さく、逆に西部の三口から下池永にかけては比高の大きな段丘崖が連続する。これは犬丸川がもともと高度が小さい扇状地の東端部をながれ、また河川規模が小さいため浸食がそれほど進んでいないのに対し、山国川は下方浸食と側方浸食が大きく進行し、扇状地の中軸部近くまで開析された結果であり、それゆえ扇頂部ほど比高の大きな段丘崖がみられる。

3) 低位扇状地の地形

低位の扇状地は三口の海拔20m付近を扇頂とする扇状地で、3/1000の勾配を持ち、中津扇状地より緩傾斜である。扇状地面には河道跡が明瞭で、三口付近から網状流として流下したことがわかる。また、河道跡は東部ほど古く不明瞭になっており、山国川が西方にシフトしていった様子を読み取ることができる。特に万田から高瀬、宮永、市街地にかけての部分は名残川としての河道がなお存在している。扇端部は海成の地形としての浜堤と合している。

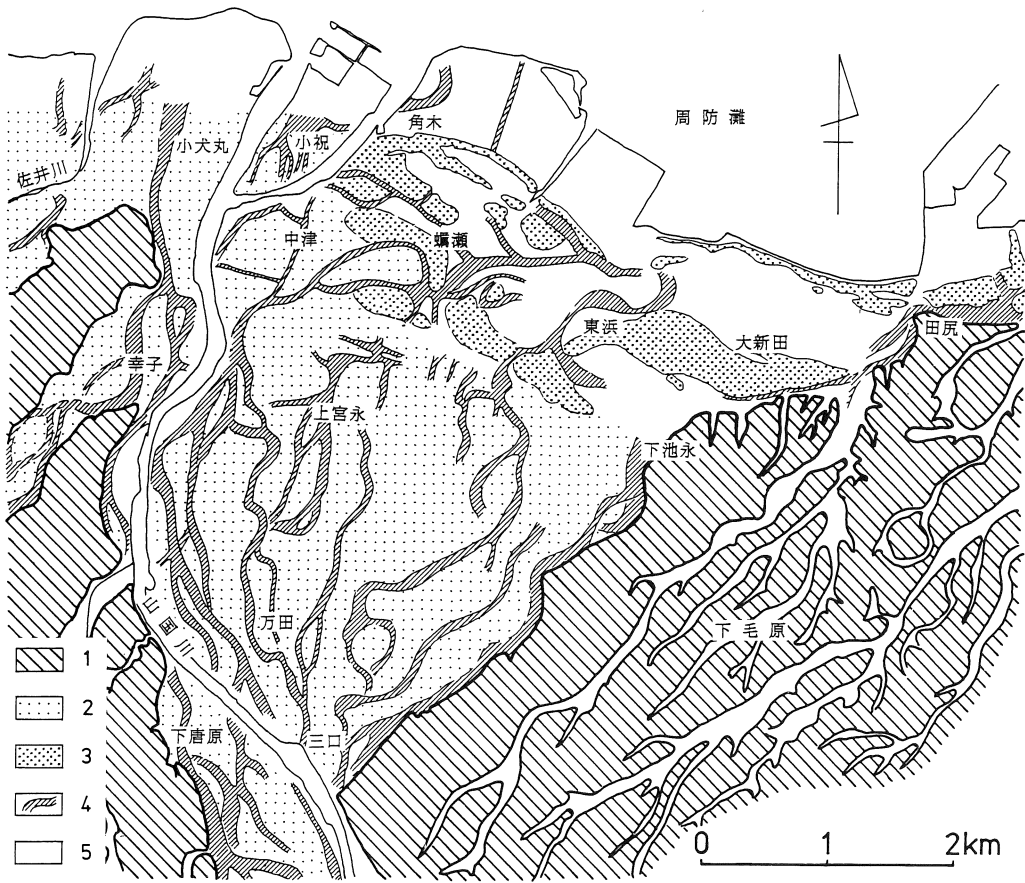


第452図 中津平野の微地形



第453図 中津平野の地形面分類図

1. 山地・丘陵地 2. 高位段丘面 3. 中津面 4. 阿蘇火砕流堆積図 5. 安曇面
6. 垂水面 7. 沖積面



第454図 中津平野の沖積面の地形分類図

1. 山地・丘陵地・台地 2. 自然堤防 3. 浜堤 4. 流路跡 5. 後背湿地・干拓地・埋丘地

Ⅲ 中津平野の地形面

耶馬溪を涵養して流下してきた山国川が平野に出る三光村野路付近から中津平野は始まる。中津平野を構成する地形面を低位より沖積面、垂水面、安雲面、阿蘇4火砕流堆積面、中津面、高位段丘面に分ける（第453図）。このうち高位段丘面は耶馬溪層からなる山地麓部の堆積面であるが、詳細は不明である。中津平野で最も広く分布するのは中津面と名付けた開析扇状地（中津扇状地）である。

1) 中津面

中津面は山国川右岸では前述のように三光村臼木付近を扇頂部として北東方向へ田尻、今津付近まで、高度的に海拔60～10mまで4.6/1000の傾きで傾下する扇状地で、多くの谷により開析されている。その西側は山国川本流の蛇行により深く浸食され、浸食崖の高さは20mに達する。一方、扇状地面上にある開析谷は上流部が山国川本流より争奪された截頭川であるため深さが2～5mの浅い谷である。扇状地の東側は犬丸川水系により開析されるが、河川規模が小さいための浸食崖は10m以下である。山国川左岸では上唐原から下唐原にかけて丘陵的に分布する。

中津面を形成する堆積物は全体として、あまり分級のよくない安山岩の円礫を主とする砂礫層である。礫層の地表付近は風化によりクサリ礫化している。この砂礫層は（豊前）中津層（首藤、1962）とよばれている。

下池永では最大径25cm、平均3～5cmのクサリ礫化した安山岩円礫からなる礫層が1.5mの厚さでみられ、その上位には黄褐色の火山砂層が2mの厚さでのっている。上池永でも同様な礫層の上に4mの厚さで赤色化した火山砂層がのる。最上位にある火山砂層は場所により風化した粘土質ローム層であることもある。諫山では最大径6cm、平均径3cmの礫層中に灰白色の粘土質ロームが30cmの厚さで含まれている。礫層上位には2mの厚さの粗粒砂層が整合的にのる。この中には直径5mmの安山岩円礫が含まれている。

中津面の末端部の今津では黄白色のローム質砂層とその上にのる赤褐色のローム質シルト層がみられる。この砂層中には平行葉理や斜交葉理が発達し、円磨された細礫～小礫を含んでいる。

2) 阿蘇4火砕流堆積面

耶馬溪地域で点散的に分布する阿蘇4火砕流堆積面は中津平野では扇頂部の野路から島にかけての地域に分布する。分布高度は海拔70～90mで中津面より高位置にある。一般的に、より古い地形面は高位置におかれるが、この場合はより古い中津面が新しい阿蘇4火砕流に埋め残された状態を呈している。すなわち山国川の狭い通路を通して流下した火砕流が、鮎婦の峡谷部をすぎたところで速度を急減したため、そこに広がっていた扇状地としての中津面の扇頂部の一部を覆ったものと考えられる。

島では最上部30cmの腐植層の下に5mの厚さで灰白色の未固結の阿蘇4火砕流堆積物がある。火砕流中には最大径40cmの全体的に大きな角礫層の軽石が含まれている。この下位には厚さ5m以上の層理の明瞭な最大径20cm、平均径8～10cmの安山岩亜円～亜角礫からなる礫層がある。この礫層は（豊前）中津層で、上部はクラックをもつ砂層となり、その上に不整合で凝灰岩層がのることから、中津面を形成する礫層の上に直接火砕流が堆積したことがわかる。野路では粘土化した火砕流堆積物があり、中には炭化した木片が含まれている。

3) 安雲面

安雲面は山国川本流沿いでは中津面と阿蘇4火砕流堆積面を浸食する段丘面として野路付近にみられるのみである。また八面山山麓では小規模な扇状地としてみられる。山国川の下流部における支流である友枝川流域では河岸段丘として、佐井川、岩岳川流域においては開析扇状地として新吉富村から吉富町までみられる。扇状地の部分で高度は80mから5mまで低下し、扇端は波食を受けたと思われる崖で終わる。きわめて低平な面、深さ1m～2mの旧河道に起源する開析谷が多く分布する。

安雲では厚さ5.5m以上の分級のよくない砂礫層がみられ、礫は最大径50cm、平均径15cmの円～亜円礫からなる。

礫層の上部1.5mは50%程度の礫が風化している。

4) 垂水面

友枝川左岸の垂水で最もよく発達する河岸段丘面で、本流沿いでは土田、佐知付近に分布する。この段丘面は中津面や安雲面を開析して形成されたもので、より下流側ではその先端が沖積面下に埋没することから、最終氷期に形成されたと考えられる。

5) 沖積面

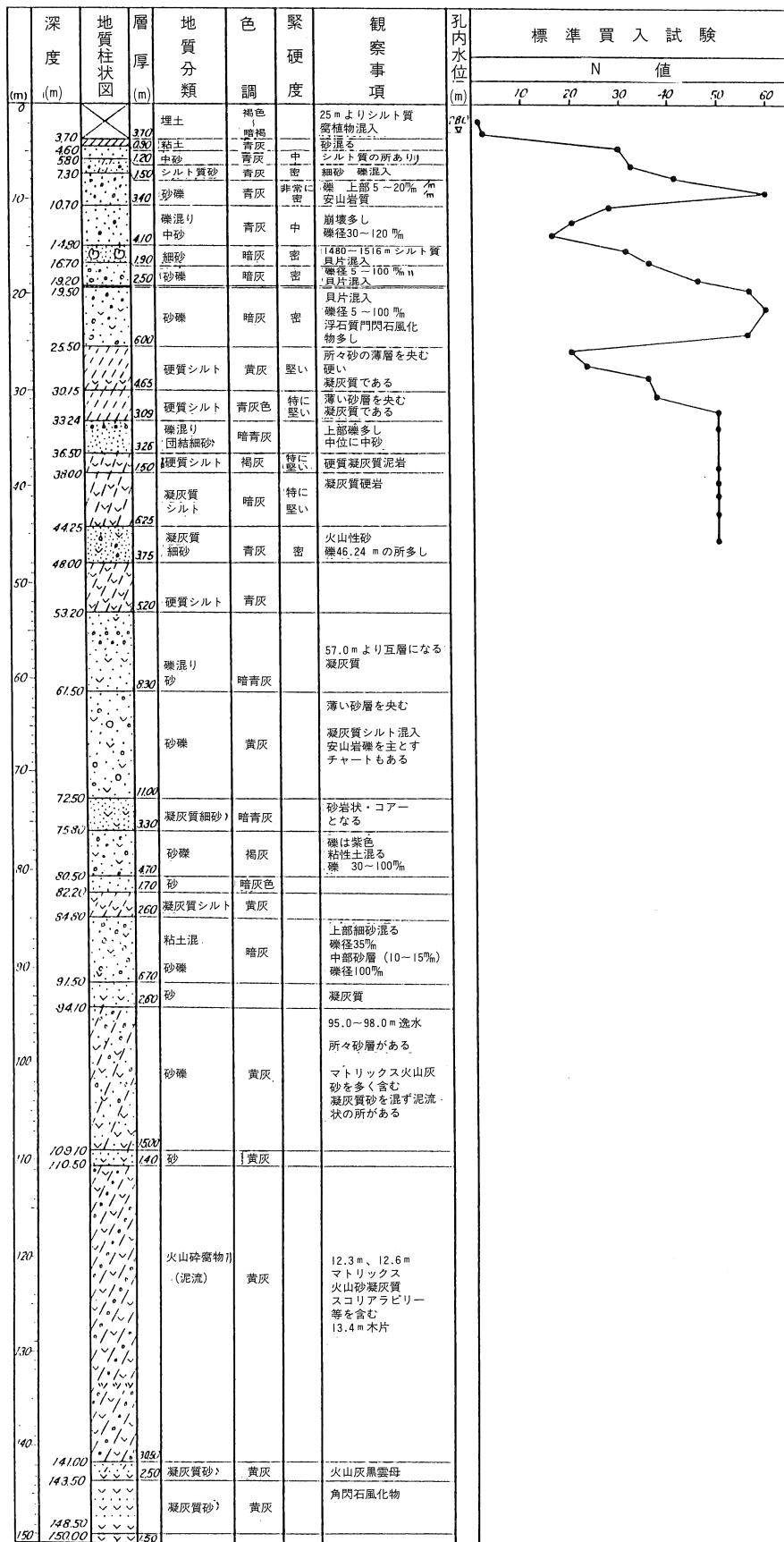
中津平野の沖積面は山国川左岸の唐原平野と右岸の沖代平野からなり、とくに三口から下流の沖代平野が広い。これは中津市街地をのせる面であり、扇状的な河川の性格を反映して網状の流路跡、自然堤防の発達が著しい。しかしながら、その末端部では海岸扇状地に平行する数列の浜堤が明瞭にみられ、沖積面が海方へ前進していったことを示している（第454図）。

沖積面の地下地質はいくつかのボーリング資料からわかる。通産省地質調査所は昭和45年度に中津・宇佐・豊後高田の陸側で4点、海側で2点のボーリングを、また周防灘南部海域では音波探査を行った（渡辺、1973；室住、1973）。その結果の一部を第455図に掲げる。地質柱状図の0～7.30mが沖積層、7.30～25.50mが段丘礫層、それ以深が耶馬溪層と思われる。段丘礫層のうち貝片を含む14.80～25.50mは中津面の構成物の中津層で、それ以浅が垂水面をつくる最終氷期の堆積物と考えられる。音波探査で得られた海底の堆積物からもその様子がわかり、陸側の延長がそのまま海底にあらわれているといえる。地質調査所のデータは地下150mまで達しているが、通常は建築物の基礎地盤調査であることから、地下10m程度のものがほとんどである。地質調査所A地点（中津市角木）－北部小学校－市庁舎－沖代小学校－鶴居小学校を結ぶ地質断面（第456図）からは基底礫層とその上位のいわゆる沖積層の様子がわかる。基底礫層は高度的に垂水面を形成する礫層の連続と考えられ、その上面が最終氷期の最低海面時に下刻され、その谷部にいわゆる沖積層が堆積したと考えることができる。その時の海域が平野のどの地域まで広がっていたかは貝化石などの環境を示す化石の記載がないことから、不明である。一方、犬丸川沿いでは緑黒色の粘土質中砂層が海拔-0.42mから2.38mまでみられ、その上に現在の犬丸川の堆積物である砂礫層がのる。この粘土質中砂層がいわゆる沖積層の中部泥層に相当するようであるが、堆積環境は不明である。

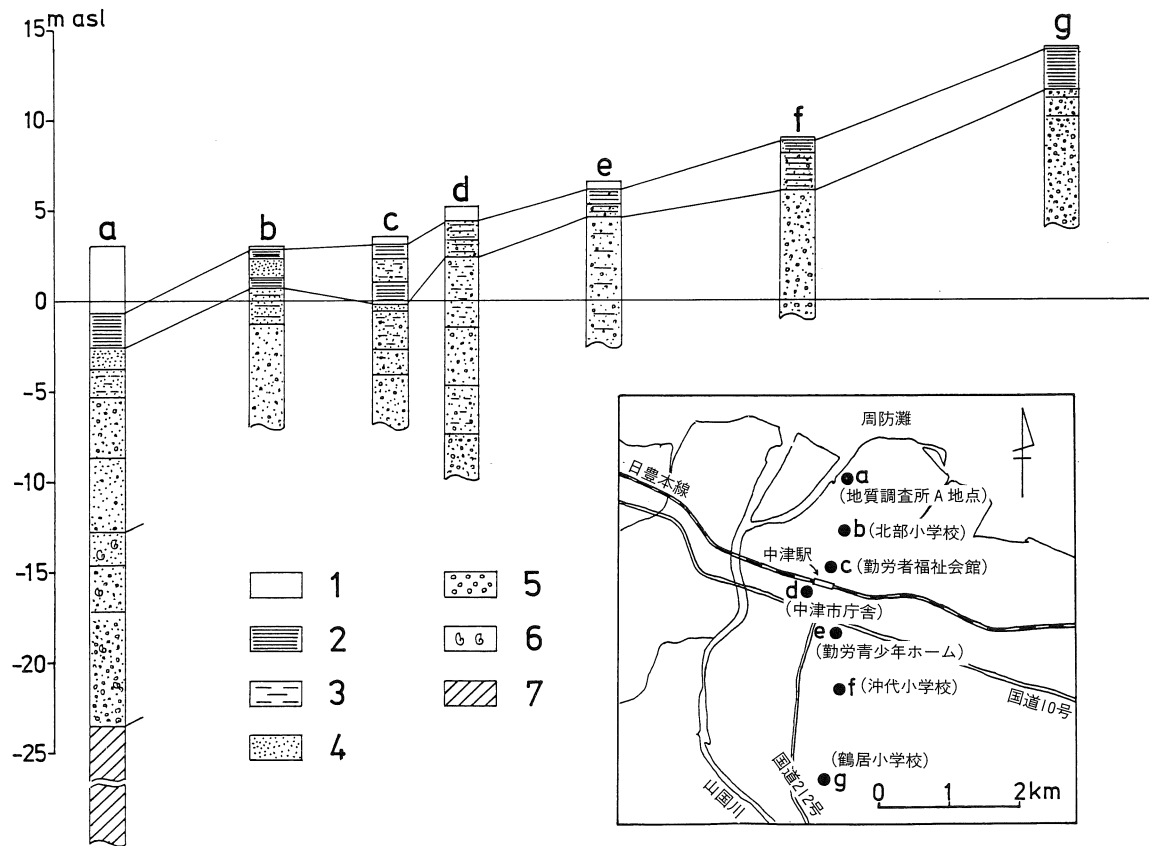
IV 中津平野の地形発達

中津平野の地形発達を考える時の基準になるのは山国川上・中流部と同様、阿蘇4火砕流である。これはその本体が堆積面をつくるとともに、それにとまなう火山灰が広く分布することによる。中津面にみられる火山砂層や粘土質ローム層はいずれも阿蘇4火砕流に関連した火山灰層と考えられる。また中津面は一部でその上を阿蘇4火砕流でおおわれる。すなわち中津面は7.5万年前以前に形成された扇状地面で、礫層上部が風化によりクサリ礫化していること、その末端部で海成砂層に移化することからみて、下末吉期に形成されたと考えられることができる。

中津面形成後、山国川上流より阿蘇4火砕流が流下してくる。これは鮎婦の峡谷部までは埋谷的に堆積し、溶結しているが、それをすぎて中津平野にはいと急激に拡散される状態になったため非溶結で、かつ層厚も薄くなる。また、分布地域もごく扇頂部だけに限られる。阿蘇4火砕流堆積後、山国川は下刻により以前に形成された地形面の開析を強める。この時、犬ヶ岳から北方に向かう岩岳川・佐井川水系は、その下流で大規模な扇状地の形成を行う。これが安雲面である。山国川右岸では階段的で小規模な河岸段丘を残すのみで、さらに下刻が進展するが、左岸以西では扇状地形成がなされたことになる。安雲面形成後は地域全体で下刻が進み、垂水面が浸食段丘として形成される。この段丘面はその末端が沖積面下に埋没することから、最終氷期に形成されたものである。これは沖積層からもわかる。中津市中心部の地下において、沖積層の基底礫層はその分布高度から垂水面



第455図 地質調査所A地点(中津市大字角木字龍王591)の地質柱状図(渡辺, 1973による)



第456図 中津平野の沖積地の南北地質断面図

1. 埋土 2. 粘土 3. シルト 4. 砂 5. 礫 6. 貝化石 7. 耶馬溪層

の堆積物の連続と思われる。また、基底礫層が浸食により谷状の地形を呈することは、基底礫層堆積後に下刻作用を受けたことを示している。すなわち、低位段丘構成層としての基底礫層堆積後に更なる海面低下があったことを意味する。

いわゆる沖積層は北部小学校、福祉会館では1m前後の厚さの粘土層をはさむが、いずれも貝化石の記載はなく、それ以外は粘土あるいはシルト混じりの砂礫層で、海域の影響下におかれた証拠が乏しい。このことは縄文海進による海面上昇があったとしても、中津平野内にはほとんど海域の侵入がなかった可能性を示唆する。犬丸橋で2.8mの粘土質中砂があり、この部分のみ海域の影響が考えられるが、より詳細は不明である。

おわりに

山国川流域の平野は中・上流部でいくつかのニックポイントの存在にもかかわらず、阿蘇4火砕流堆積面と低位段丘が流域全体にみられ、これにより流域の平野の地形発達についてはそれほど矛盾もなく説明できる。中津平野において、中津面は下末吉面に対比できるが、沖積面と同様、海面上昇にもかかわらず、わずかに最先端の部分が海域に関係するだけで、実際はほとんど平野内に海域は広がらなかったと考えられる。すなわち上流域での河川の下流浸食が激しく、生産された砂礫が下流に、海面上昇を上回って供給されたことによると考えられる。

参考文献

- 千田 昇・猪原順二・吉田 進「山国川流域の地形」『山国川-自然・社会・教育』大分大学教育学部1-16. 1989
 亀山徳彦・下山正一「大分県中津市に分布する豊前中津層の再検討-堆積様式とその水理地質学的意味-」『北九州大学文学部紀要』B. 12. 83-91. 1978
 室住正義「周防灘南部音波探査報告」『地調月報』24. 49-57. 1973
 坂本 享・長谷紘和「大分県北部、中津平野の第四系」『地調月報』23. 539-545. 1972
 首藤次男「九州の最新統諸層の吟味-対比の基礎」『地質学雑誌』68. 301-312. 1962
 渡辺和衛「周防灘南部地域（大分県側）の標準地質柱状図と地下構造に関する知見」『地調月報』24. 41-47. 1973

2. 遺構

(1)横穴墓の時期と形態変遷 (付図2参照)

村上久和

横穴墓研究の必須テーマは、形態(形式)、時期、分布、被葬者の問題である。本項では、そのうち当横穴墓の形態およびその時期的変化をまとめ、次項で分布の特徴について述べることにする。

横穴墓の形態研究は、東北地方を主たる対象とした氏家和典氏、関東地方を中心とした赤星直忠・金井塚良一・明石新氏、北陸地方を中心とした田島明人氏、近畿地方を中心とした花田勝広氏、山陰地方を中心とした山本清・門脇俊彦氏、九州地方を中心とした小田富士雄・佐田茂・高木正文・長嶺正秀氏等の一連の研究およびこれら研究を全国的視点から総括した池上悟・杉山博久氏等の研究が注目されるのみである。これは、横穴墓の分布が全国一律にあるのではなく、地域的に偏在していることあるいは、古くから盗掘等を受け貧弱な遺物しか出土せず、研究を困難なものとしていたことにもよる。

しかしながら近年、東・北部九州地方、山口・山陰地方において保存状態の良好な横穴墓が相次いで調査されており、本横穴墓群もその代表的な一つと言えよう。

九州地方の横穴墓の形態(形式)を論じたものに佐田茂氏の研究がある。これでは6世紀中頃以降の九州地方の横穴墓をⅠ類(単室構造)とⅡ類(複室構造)に分け、それに玄室の平面形、立面形、構造等を加え出土土器を参考にしながら4期に分類している。その後、行橋市竹並横穴墓群の報告のなかで佐田・長嶺正秀両氏は、5世紀後半～8世紀初頭までの横穴墓を共伴土器に準拠して8期に分類し、形態変遷を追及している。なお、小田富士雄氏は豊前型、肥後型など地域的な特徴をもつ横穴墓を明確にしている。

さて、このような既研究に於いても明らかなように横穴墓の形態は、時間(時期)と空間(地域)によって多種多様な様相を示しており、細部まで完全に一致しているものはほとんどないと言っても過言ではない。しかしながら、既研究でも行なっているように横穴墓各部の形態における構造変化に着目し、その総合的なもので形態変遷をたどることは可能である。そこで、本横穴墓群においても墓道(前庭部)規模・形態、羨道規模・天井形態、玄室平面形・天井形態の各部位を主要構成要素として分類し、それに墳丘(テラス状遺構)、羨門形態、玄室構造を副構成要素として分類してみると第190表ようになる。

この表をもとに本横穴墓群の各横穴墓の構成をもとに形態一覧表を作成したものが第191表である。ここから本横穴墓は39種類の横穴墓形態に細分類することができる。次にこれらの構成要素のうち共通要素を持つもので分けると、墓道規模で2種類(ⅠとⅡ・Ⅲ類)に、羨道天井形態で2種類(a、b)に区分できる。これらの構成要素をタイプ別にまとめるとAタイプ→Ⅰ-aの構成要素を持つグループ、Bタイプ→Ⅰ-bの構成要素を持つグループ、CタイプⅡ・Ⅲ→3-a・bの構成要素を持つグループで大区分をすることが可能となる。

次に、このように区分した各タイプの時期変化を検討する。Aタイプとした横穴墓で土器を共伴した代表的横穴墓には5号、8号、19号、25号、35号等がある。出土土器は上ノ原Ⅰ段階に相当するものであり、絶対年代としては5世紀後半～末を前後する時期に比定できる。Bタイプとした横穴墓で土器を共伴した代表的横穴墓には11号、15号、17号、21号、27号、44号等がある。出土土器は上ノ原Ⅱ段階～Ⅲa段階に相当するものであり、絶対年代としては5世紀末～6世紀初頭前後に比定できる。AタイプとBタイプには全体的には大きな差は認められないが、Bタイプでは羨道天井部が明確になる点が異なる。この変化は堅穴系横口式石室における楯石・前壁の確立化の影響を受けたものであろうか。Cタイプとした横穴墓で土器共伴例は多数認められる。その内最も古い20号横穴墓^{20号}でⅢa期の土器が出土していることから、6世紀初頭前後に出現し、その後Ⅴ段階の7世紀初頭～前半前後まで継続することがわかる。このCタイプのものは前記のA・Bタイプと大きな差異が認められる。それは5m以上の長大な墓道を持ち、玄室平面形が隅丸方形を基本とし、同縦断面形がドーム状を呈すものが主流を占める様相が認められることである。この変化は定形化した横穴式石室にその影響を認めることができよう。さらに、Cタイプ横穴墓はA・Bタイプに比べその存続期間が長いことなどからCタイプ横穴墓を形態確立期の

横穴墓と呼ぶことができよう。また、Cタイプとした横穴墓の中でも羨道長C形態のものが後出的傾向を示す。以上、本横穴墓群では墓道（前庭部）長、羨道部天井形態に最も有位な時間的変差が、羨道部長、玄室天井形態に若干の時間的変差の有位性を認めることができよう。なお、A・Bタイプの横穴墓には上部斜面上に方形あるいは円形のテラス状遺構を付設させ、小墳丘を持つものも認められる。また玄室内死床はA、Bタイプは玉砂利を主とした部分的なものに対してCタイプは人頭大河原石を玄室から羨道全体に敷きつめ死床範囲は明確でなくなる。さらに玄室壁面にはA・Bタイプのものは赤色顔料で全体を塗布するものが多く認められるのに対してCタイプのものはそれが認められなくなる傾向もある。以上が本横穴墓の時期的形態変遷である。

第190表 上ノ原横穴墓群形態分類表

墓道（前庭部）			羨道		玄室		
長さ	断面形態	平面形態	長さ	天井形態	袖部	平面形態	天井形態
I 5m以下	1 羨道に向って下る	(一) 逆台形	A 0.5m以下	a 玄室との間に段無	イ 両袖	い 正方形	α ドーム
II 5~10m	2 水平	(二) 漏斗形	B 0.5~1m	b 玄室との間に段有	ロ 片袖	ろ 横長方形	β アーチ
III 10m以上	3 羨道に向って上る		C 1m以上		ハ 無袖	は 横長楕円形 に 縦長方形 ほ 縦長楕円形 へ 逆台形	γ 家形

第191表 上ノ原横穴墓群形態一覧表

Aタイプ（上ノ原Ⅰ期）		Cタイプ（上ノ原Ⅲ新~Ⅵ）	
I-1-(一)-A-a-イ-い-α	39号、77号	II-3-(一)-B-b-イ-い-α	14、16、26、29、57、73号
I-1-(一)-A-a-イ-ろ-α	19、58、70号	II-3-(一)-B-b-イ-ほ-α	33、38号
I-1-(一)-A-a-イ-は-α	5、10号	II-3-(一)-C-b-ロ-い-α	55号
I-1-(一)-A-a-イ-に-α	52、64号	II-3-(一)-C-b-イ-ほ-α	40、45、65号
I-1-(一)-B-a-イ-は-α	8、13号	II-3-(一)-C-b-イ-へ-α	1、4号
I-1-(一)-B-a-イ-に-α	25、50号	II-3-(二)-B-b-イ-い-α	12、20、31、42、56号
I-2-(一)-B-a-イ-ろ-α	34号	II-3-(二)-B-b-イ-ろ-α	9号
I-2-(一)-B-a-イ-い-α	35号	II-3-(二)-B-b-イ-ほ-α	71号
Bタイプ（上ノ原Ⅱ期~Ⅲ古）		II-3-(二)-B-b-イ-へ-α	47号
I-1-(一)-A-b-イ-ろ-α	62号	II-3-(二)-B-b-イ-は-α	49号
I-1-(一)-A-b-イ-は-α	15号	II-3-(二)-C-b-イ-い-α	53、59、81号
I-1-(一)-A-b-イ-に-α	48号	II-3-(二)-C-b-イ-ほ-α	36、54号
I-1-(一)-B-b-イ-い-α	17号	II-3-(二)-C-b-イ-は-α	51号
I-1-(一)-B-b-イ-ろ-α	3号	III-3-(一)-B-b-イ-い-α	6、18、74号
I-1-(一)-B-b-イ-は-α	11・32号	III-3-(二)-B-b-イ-ほ-α	43号
I-2-(一)-A-b-イ-い-α	23・30・37・76号	III-3-(二)-C-a-イ-ほ-α	61号
I-2-(一)-A-b-イ-に-α	27号	III-3-(二)-C-b-イ-ほ-α	2・7・22・24号
I-2-(一)-A-b-イ-ほ-α	44、63、66、68号	III-3-(二)-C-b-イ-い-α	69号
I-2-(一)-A-b-イ-は-β	41号		
I-2-(一)-B-b-イ-ろ-α	60号		
I-2-(一)-B-b-イ-に-α	46号		
I-2-(一)-B-b-イ-に-α	21号		

(2)横穴墓の時期と分布の特徴 (付図参照)

村上 久和 吉留 秀敏

本横穴墓群の調査横穴墓数は81基である。地形・地質的にみて横穴墓群の北端は押えられたが、南端部については横穴墓は連続する可能性が強く不明である。しかしながら群構造の特徴については今回の調査で明確になった。

まず、本横穴墓個々を時期別にその数を示したものが第192表である。この表で、上段の数は供献あるいは副葬土器によって築造時期を決定したもの、下段は前述した横穴の形態分類をもとに築造時期を推定したものである。この結果、第Ⅰ期の築造にかかる横穴墓20基、第Ⅱ期の築造にかかる横穴墓19基、第Ⅲ期の築造にかかる横穴墓30基、第Ⅳ期の築造にかかる横穴墓10基、第Ⅴ期の築造にかかる横穴墓1基となる。ただし、この結果はあくまでも築造時期別の集計値であるので使用時期の実数を得る手段として、追葬が複数にわたる横穴墓については、それぞれの時期を各1基として計算すると、Ⅰ～Ⅳ期にわたる埋葬例が1例、Ⅰ～Ⅱ期にわたる埋葬例が6例、Ⅱ～Ⅲ期にわたる埋葬例が2例、Ⅲ～Ⅳ期にわたる埋葬例が22例、Ⅳ～Ⅴ期にわたる埋葬例が2例認められる。この数を先の結果に加えるとⅠ期は20基、Ⅱ期は25基、Ⅲ期は32基、Ⅳ期は32基、Ⅴ期は2基となる。ただし、この数は追葬時に土器を使用することを前提にした場合であり、本横穴墓の追葬例（墓道内埋土の切り合い関係）は土器を伴わない場合もある。また、土器を伴った場合でもその土器が埋葬に伴わない祭祀儀礼に使用されていることもあり、（本横穴墓においては墓道内埋土の切り合い関係などから取り除いている。）その面も考慮すべきであるが、前2者の状況から傾向は変わらないと考えて良からう。この結果から、本横穴墓においてⅠ～Ⅱ期は20基前後で推移し、Ⅲ～Ⅳ期は30基前後でピークを迎え、Ⅴ期に3基に激減し本横穴墓群の終焉をむかえるのが特徴である。

次に、築造時期別に横穴墓の分布を見てみよう。付図3上段はⅠ～Ⅱ期横穴墓の分布状況である。これを見ると中央に谷の入る地形に規制され、大きく2ブロック（地区）に大別されるが（これをⅠ・Ⅱブロックと呼ぶ）、Ⅰ～Ⅱ期の横穴墓は、両ブロックにまんべんなく分布し、すでにこの時期に墓域の範囲が規定されa～vの22群が認められる。

さらに、これらの横穴墓は幅5～10m前後の墓域を専有して分布する。特に35号横穴墓はその専有幅が15m前後と最も広いのが特徴である。また、このⅠ～Ⅱ期の横穴墓は、出土土器や横穴形態により専有する墓域内において矢印の方向への時期的移動が認められる。この墓域専有状態および移動状態から20単位群（支群）を認めることができる。なお、この時期の横穴墓は墳丘あるいはテラス状の区画によってそれぞれの横穴墓の外標示を行っている。次に、付図3中段はⅢ～Ⅴ期の横穴墓分布である。ここでも各横穴墓が5m前後の等間隔で分布するが、明確にⅠ・Ⅱ期の横穴墓を避けて築造しており、玄室レベルも高位に位置する。これらの事実からⅢ～Ⅴ期の横穴墓はⅠ～Ⅱ期の墓域を踏襲して築造されていることがうかがわれる。さらに、前項で述べた土器の破碎散布の接合関係から、地形的にⅠ、Ⅱグループに分けられた横穴墓群が α 、 β 、 γ の3グループに再編成された状況も認められる。

次に、これらⅠ～Ⅴ期の横穴墓が時間と空間によってどのようにグルーピングされるかをみてみよう。付図3下段がそれを示したものである。グルーピングの基本にはⅠ・Ⅱ期における墓域の区画とⅢ～Ⅴ期におけるその空間の利用に注目し、支群を設定した。

A小支群（1～5号横穴墓）は、Ⅰブロックの最も北側に形成されている。5基の横穴墓が5c後半～7c初頭にまで築造、追葬を行っている。築造順位は5号－3号－1号－2号－4号で、この内5c後半の5号には直

第192表 上ノ原横穴墓群築造時期表

時期	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ
基数	15	16	30	10	1
土器					
形態	5	3			

刀が、6世紀末の2号には馬具がそれぞれ認められた。

B小支群（6～11号横穴墓、1号石蓋土壙墓）は、A小支群の南側に位置し、6基の横穴墓と1基の石蓋土壙墓が5c後半～7c初頭まで築造、追葬を行っている。築造順位は8号・10号・1号石蓋—11号—9号—6号・7号であるが、10号は小児専用横穴墓、1号石蓋土壙墓は成人女性墓と考えられる。なお、6・7号は土器の接合関係からはほぼ同時期であるが、7号が6号を避けるように築造されているところから順位としては6号—7号の可能性もある。これらのうち5c後半の8号より直刀、鉄鏃が、6c初頭の11号より鉄剣、鉄鏃が出土している。

C小支群（12～15号横穴墓）は、B小支群の南側に形成され、4基の横穴墓が5c後半～7c初頭まで築造、追葬を行っている。築造順位は13号—15号—12号—14号で、このうち6c後半～末の14号に馬具が副葬されていた。

D小支群（16～19号）は、C小支群の南側に位置し、4基の横穴墓が5c後半～7c前半まで築造、追葬を行っている。築造順位は19号—17号—16号—18号で、このうち5c後半～末の16号には直刀2本、5c末～6c初頭の17号には開口していたものの鉄鏃10本前後が、6c中～後半の16号には鉄鏃、馬具が副葬されていた。

E小支群（20～21号）は、D小支群の南側に位置し、2基の横穴墓が5c末～7c初頭まで築造、追葬を行っている。築造順位は21号—20号で、このうち5c末の21号から鉄剣、鉄鏃が6c前半～中頃の20号は開口していたが馬具、鉄鏃の出土が伝えられている。

F小支群（22号～25号）は、E小支群の南側に位置し、4基の横穴墓が5c後半～7c初頭まで築造、追葬を行っている。築造順位は25号—23号—24号・22号で、このうち5c後半の25号に鉄剣、鉄鏃が6c後半の24号に直刀、鉄鏃、馬具が、6c後半～7c初頭の22号は開口していたが朝鮮系銅釧、鉄鏃がそれぞれ副葬されていた。

G小支群（26～30号）は、F小支群の南側に位置し、5基の横穴墓が5c後半～7c前半まで築造、追葬を行っている。築造順位は27号—30号—29号—26号—28号で、このうち5c後半の27号に石突鉄器・鉄鏃が、5c末の30号に鉄剣・鉄鏃が、6c後半～末の26号に直刀・鉄鏃がそれぞれ副葬されていた。

H小支群（31～34号）は、G小支群の南側に位置し、4基の横穴墓が5c末～7c前半まで築造、追葬を行っている。築造順位は34号—32号—33号—31号の順で、このうち5c末の32号には直刀が副葬されていた。

I小支群（35号）は、1基のみの横穴墓で5c後半～7c初頭まで築造、追葬を行っている。本横穴墓は5c後半～7c前半まで成年～熟年男性5体と小児1体が順次埋葬され、女性が認められないのが特徴である。副葬品としては5c後半～6c後半まで直刀・威信財（須恵器大甕、器台）・鉄鏃多数や直刀・馬具・鉄鏃多数、直刀・鉄鏃のセットがそれぞれ認められた。このように被葬者、横穴規模、副葬品等から本支群が5c後半～6c前半期における本横穴墓群の盟主墓と考えられる。

J小支群（36～39号）は、I小支群の南側に位置し、4基の横穴墓が5c末～7c初頭まで築造、追葬を行っている。築造順位は39号—37号—36号・38号の順で、このうち6c後半の38号に直刀・馬具・鉄鏃が同じく6c後半の36号に馬具・鉄鏃が副葬されていた。

K小支群（40～42号）は、J小支群の南側に位置し、3基の横穴墓が5c末～7c初頭まで築造、追葬を行っている。築造順位は41号—40号・42号の順で、このうち6c後半の40号より銀象嵌鍔直刀、鉄鏃が、42号より馬具、鉄鏃が出土している。

L小支群（43～45号）は、K小支群の南側に位置し、3基の横穴墓が5c末～7c初頭まで築造、追葬されている。築造順位は44号—45号—43号の順である。

M小支群（46～49号）は、4基の横穴墓で構成され、5c後半～7c初頭まで築造、追葬されている。築造順位は、48号—46号—49号—47号の順で、このうち6c初頭～前半の46号から直刀が出土している。

N小支群（50～55号、2号石蓋土壙墓）は、M小支群の南側に位置し、7基の横穴墓と1基の石蓋土壙墓が5c後半～8c前半まで築造、追葬されている。築造順位は50号—52号・2号石蓋—54号—51号・53号—55A号—55B号であるが、52号と54号、55Aと55B号の間に若干の時間的ギャップが認められる。このうち、6c後半の

54号に直刀、鉄鏃が、6c末～7c初頭の51号に銀装圭頭大刀、馬具、鉄鏃が、7c前半代の55A号に直刀、馬具、鉄鏃の副葬がそれぞれ認められた。このような副葬品の量や質からみて本小支群が6c後半～7c中頃前後までの本横穴墓群の盟主墓群と考えられる。

以上が、Iブロックのグルーピングであるがここでは14の小支群に分割でき、さらに6世紀後半～7世紀前半代における各横穴墓間の破碎散布土器の接合関係から α 、 β の二大支群がこの時期に再編された可能性もある。また、副葬品の質・量から本横穴墓形成時から格差がみられ、それは造墓領域とある程度の相関関係を持つようである。さらにI小支群とN小支群に本横穴墓群の盟主墓的性格を持つものも認められた。しかしながら各小支群は5c後半ないし末頃より7c前半前後まで連続的に築造された安定的な支群であり、これは本横穴墓被葬者の性格を表す重要な要素である。

次に、第IIブロックを検討する。

O小支群(56～58号・81号)は、北側に形成される谷地形の先端に位置し、4基の横穴墓が5c後半～7c中頃まで築造、追葬されている。築造順位は58号→56号→57号→81号で、このうち6c中頃の56号、6c後半の57号から馬具片が出土している。

P小支群(59～62号)は、O小支群の南側に位置し、4基の横穴墓が5c末～7c前半まで築造、追葬されている。専有墓域は若干狭い。築造順位は62号→60号→61号→58号で、このうち7c初～前半の59号から直刀が出土している。

Q小支群(63～65号)は、P小支群の南側に位置し、3基の横穴墓が5c後半～7c前半まで築造、追葬されている。専有墓域は狭い。築造順位は64号→63号→65号で、このうち63号と65号の間に若干の時間的ヒアタスが認められる。

R小支群(66～68号)は、Q小支群の南側に位置し、3基の横穴墓が5c末～7c前半まで築造、追葬されている。専有墓域は狭い。築造順位は68号→66号→67号で、66号と67号間に若干のヒアタスが認められる。このうち5c末の68号に多数の玉類が、6c末～7c初頭の67号から馬具が出土している。

S小支群(69～72号)は、R小支群の南側に位置し、4基の横穴墓が5c後半～7c前半まで築造、追葬されている。築造順位は72号→70号→69号→71号である。

T小支群(73号～75号)は、S小支群の南側に若干空間を持って3基の横穴墓が形成されており、専有墓域は狭い。築造順位は75号→73号→74号である。

U小支群(76号、77号)は、T小支群の南側に位置し、2基の横穴墓が5c後半～6c前半まで築造、追葬されている。築造順位は77号→76号の順と考えられる。なお、6c中頃以降の横穴墓は調査区外(斜面下方)に存在する可能性が大きい。

V小支群(78号、79号)は、U小支群の南側に位置し、2基の横穴墓がU小支群同様の状態で築造され、順位は79号→78号であろう。また、6c中頃以降のものについてもU小支群同様な状況であろう。

W小支群(81号)は、V小支群の東南側約20mの所に6c後半～7c初頭の81号が存在するのみである。調査区外に5c後半～6c中頃前後の横穴墓が存在する可能性が大きい。なお、V～W支群間が20mと広い空間が存在するところからこの間にも横穴小支群が形成されている可能性がある。

以上がIIブロックのグルーピングであるがここでは $9 + \alpha$ の小支群に分割できる。本ブロック支群の特徴として、各小支群の墓域専有領域が狭く、副葬品も直刀などを副葬した横穴墓が少ない。Iブロックの小支群に比べ劣勢のものが多い。

これらのことから上ノ原横穴墓群の特徴は、Iブロックで14小支群、IIブロックで $9 + \alpha$ 小支群、計 $22 + \alpha$ 小支群が形成されたことを確認した。さらに、これら小支群は5c後半～6c前半頃においては地形と墓域の専有状態からA小支群～H小支群までをa支群、I支群のみをb支群、J小支群～N小支群までをc支群、O～S小支群までをd支群、T小支群～U小支群までをe支群としてとらえることもできる。このように墓域の専有形態から小支群が数個まとまった大支群を形成されていることが理解される。この大支群はさらに6c後半～7c前

半において、各横穴墓の墓道より出土した土器の接合関係（付図3中段参照）からa群→α群、b群とc群のL小支群までがβ群、c群のM小支群～d群までがγ支群というように大支群間の再編成が認められる。

以上のことをまとめると次のようになる。

① 横穴墓は、築造当初よりある程度区画された墓域内に築造される。この墓域領有空間にも広・狭が認められ、特に副葬品も武器を多量に持つI小支群35号横穴墓の専有領域は広い。

② 小支群の形成は、I小支群1基、E小支群2基、B小支群7基、N小支群8基（U～W小支群については構成数不明）を除き、3～5基で構成される。また、それぞれの小支群は5c後半～末に造墓が開始され、7c前半までに追葬および埋葬に伴わない祭祀儀礼を終る。ただし、例外的にN小支群では8c前半、Q小支群では7c中頃まで築造あるいは追葬が行われている。

③ 小支群を構成する各横穴墓は、時間的前後関係にある。つまり、5c後半前後から7c前半前後までの約150年間に3～5基前後の横穴墓が累代墓状に形成されている。

④ これら小支群は、上ノ原Ⅰ～Ⅲ期古段階（5c後半～6c中頃前後）には空間的な状況より5大支群に纏まるが、上ノ原Ⅳ～Ⅴ期（6c後半～7c前半）には、祭祀儀礼を通じて大支群の再編が行われ、少なくとも3大支群が形成されている。

以上、本横穴墓群の構成単位の析出を試みた結果、5c後半～6c前半には、墓域の領有空間の大小によって優勢、劣勢の不均衡が生じており、この格差は後述するように各小支群の武器所有の差とも有機的な関係が認められる。さらに6c後半～7c前半には祭祀儀礼による新たな再編の動きを読みとることができよう。

(3)工具痕から見た横穴墓の掘削具について

村上久和

横穴墓の掘削は、墓道（前庭部）→羨道→玄室の順に行われるため、その工程が詳細に想定されるにもかかわらず、造墓技術を論述したものは少ない。これは、横穴墓が多くの場合、壁面が平滑に調整されるため工具痕が残らないことや、落盤等で旧状を留めてない場合が多いことによる。

このようななかで、橋口達也氏は、1975年福岡県稲築町のフシュウ山1号横穴墓の北壁面に残る2種類の工具痕の石膏型の作成を行い、その観察結果から手斧形鉄器で荒掘りした後、U字鋏で荒仕上げを行っていることを検証し、古墳あるいは横穴墓出土工具との対比を行った。その後、1978年に福岡県大任町狐塚横穴墓では、工具痕の実測図を作成し追証を行っている。

田嶋明人氏は、1976年石川県珠洲市の横穴墓において2種類のU字鋏とノミ状工具が使用され、それらが造墓の荒掘りと成形の段階で使い分けが行われていると指摘している。

さらに、花田勝広氏は、1988年前記二者の報告を総括した上で、近畿（河内）の未完成横穴墓の工具痕を詳細に検討し、工具痕の検証を行い横穴墓の諸段階をも明らかにした注目すべき研究を行っている。ここでは工具としては、手斧形鉄器、U字鋏、平ノミを使用し、玄室掘削は手斧を一時掘削具（荒掘り具）として用い原形を整えた後、二次掘削（調整具）のU字鋏によって凹凸部分の調整をするとの推定をしている。さらに工具痕の観察により1横穴の造墓にともなう工人は、2～3人との推定も行っている。

これら3者の研究以外に近藤哲雄氏等の報告がある。このように管見の限りでは、九州、山陰、近畿、北陸において、横穴掘削工具として手斧形鉄器、U字鋏、平ノミ等が用いられたことは明らかであり、手斧→U字鋏の順に使用されたと断定されている。

さて、本横穴墓群においても玄室内の天井及び側壁に工具痕の残された横穴墓が数例検出されたとともに、玄室内及び墓道において副葬品として数種類の工具の発見があった。これらをもとに横穴墓の築造過程を検討してみる。

第458・459図は、6世紀後半に造られた24号横穴墓の側壁に残っていた工具痕の拓影である。その形状から次の3種類が認められた。

I類：刃部痕が長方形を呈し、幅6cm前後、長さ8cm前後、深さ0.5cm前後を測る工具痕である。先端は隅丸の端面となっている。上部から下部へ連続する。

II類：刃部が円弧状を呈し、刃先幅10～12cm以上、長さ9cm前後、深さ0.6cmを測る工具痕である。断面は若干袋状にえぐりこんでいる。上部から下部へ連続する。

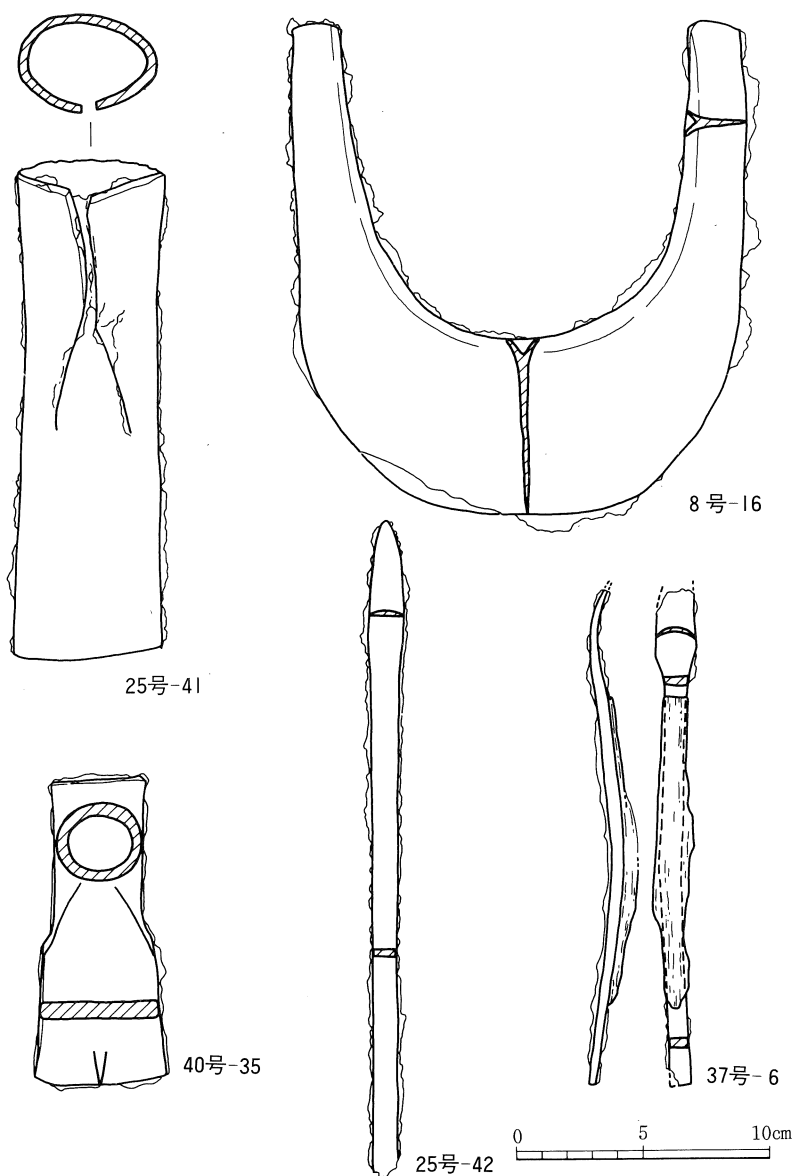
III類：刃部痕がコ字形あるいは隅丸長方形を呈し、刃部幅2cm前後、長さ10～20cm以上、深さ0.1cmを測る工具痕である。断面はややU字状をなす。上下、左右へ連続する。

次に、第459図に示したのは、同じく6世紀後半に造られた36号横穴墓の天井部に残っていた工具痕の拓影である。これには、上記3種類とは異なった工具痕が認められた。

IV類：刃部痕の形状はI類と同じであるが、刃部幅が5cm前後、長さ7cm前後、深さ0.3cm前後を測る工具痕である。上部から下部へ連続する。

以上本横穴墓においては、4種類の工具痕が認められた。これをもとに工具痕を推定してみると、I類は、刃先部が隅丸方形になる物である所から大型の鉄斧（手斧）痕と判断できる。また、IV類については刃部がI類と同様な形状を示しているが、刃幅が若干狭いことから小型の鉄斧（手斧）痕であろう。II類は刃部が円弧状となり、幅広の工具と考えられることからU字鋏痕と理解されよう。III類は刃幅が極端に狭いことや断面がU字状になることなどの特徴から鉋痕と考えられる。

次に、これら工具痕の切り合い関係から工具の使用順序及び使用箇所について検討してみる。まず第458図の24号横穴墓側壁部においてはU字鋏痕が大型手斧痕によってカットされた所が部分的に認められ、その両者を鉋痕がカットしている。このことから、U字鋏→手斧→鉋の順に使用されたことが分る。さらに第459図の天井部



第457図 上ノ原横穴墓群出土工具実測図

においては小型手斧痕および手斧痕が鉋痕によってカットされた部分が認められた。また他の横穴墓においても小型手斧痕が認められることから、この工具は天井部の整形に主に使用された物と考えられる。

これらのことから、玄室掘削時の工程はまず荒掘りをU字鋏で行った後、大型手斧で荒仕上げを行い、最後に凹凸部分の調整を行ったものと推定される。また、天井部の湾曲をつくるために小型手斧を使用したであろう。この結果は、前述の橋口、花田氏の荒掘り、荒仕上げの工程結果と逆転している。これは、横穴墓の立地する地質に応じた工具の選択結果とも考えられるが、今後の課題としたい。

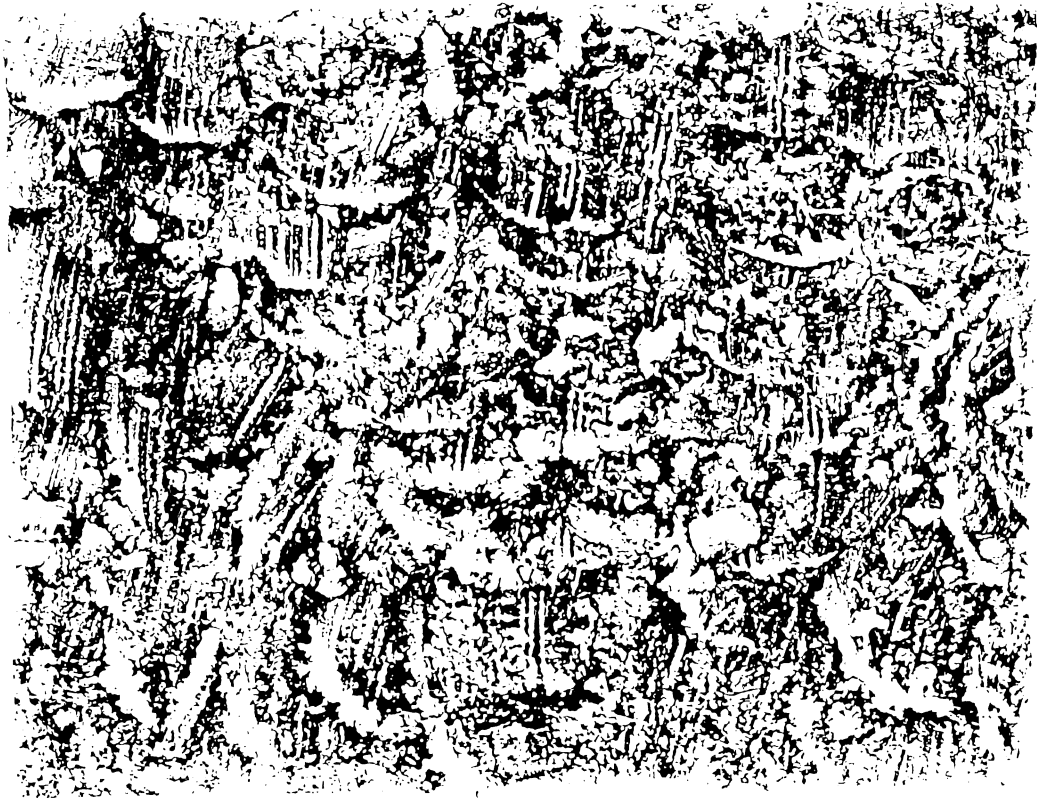
最後に、これら工具は全て横穴墓の副葬品として出土していることが本横穴墓群の特徴である(第457図参照)。これらの工具の幅と工具痕は、I類と25号-41が、II類と8号-16が、III類と25号-42が、IV類と40号-35が一致している。また、U字鋏、大型手斧、鉋は、上ノ原第I段階(5世紀後半)の横穴墓に副葬されており、特に5世紀中頃から出

現するU字鋏が岩盤の固い横穴墓築造の荒掘り工具として使用されたことが、その後の横穴墓の普及、発達に大きく寄与したものと考えられる。

- 註(1) 橋口 達也「横穴掘削工具について」『稲築公園内遺跡』1975年稲築町教育委員会
- (2) 橋口 達也「横穴掘削工具について」『狐塚古墳群Ⅱ』1978年大任町教育委員会
- (3) 田嶋 明人『法皇山横穴古墳群』1971年加賀市教育委員会
- (4) 花田 勝広『横穴墓の造墓技術』『ヒストリア』第120号1987年大阪歴史学会
- (5) 近藤 哲雄「横穴墓の築造工程」『大塚山横穴墓群』1987年鳥取県教育文化財団



天 井



側 壁

第458图 24号横穴墓玄室内工具痕拓影图



24号横穴墓側壁



36号横穴墓側壁

第459图 24·36号横穴墓玄室内工具痕拓影图

3. 遺物

(1) 装身具

(ア) 貝輪—古墳時代に於ける九州出土の貝輪—

吉 武 牧 子

古墳時代の遺跡より出土した貝輪は、南海産大型巻貝製のものが主体をなし一部に二枚貝製のものもみられる。ゴホウラ・イモガイ等の南海産大型巻貝製貝輪は、北部九州において弥生時代前期後半に出現し中期に盛行するが、後期以降その需要が減少する。しかしその系譜は金属製・石製釧に材質転換しながら古墳時代へと受け継がれ、5、6世紀には再び九州で流行する。一方二枚貝製貝輪は縄文時代の伝統を保つもので、古墳時代においては量的に非常に少なく、出土地域も限定される。

1. 南海産貝輪に関する諸説

これまで南海産大型巻貝製貝輪の研究は、主として弥生時代を中心に行われてきた。⁽¹⁾

三島格氏は九州と南島を中心に分布する南海産貝輪を集成し、総括的考察を行った。三島氏は九州出土の貝輪が北部の弥生文化中枢地域に集中する点を指摘し、ゴホウラ縦切り（この段階ではこの種の貝がゴホウラと査定されてはいなかった。）が男性に、イモガイ横切りが女性に装着される傾向にある点にも言及している。また南海産大型巻貝製貝輪が「大陸文化を吸収した地域」である北部九州で、二枚貝製貝輪が「縄文時代的な遺習ともみられる習俗を温存する地方色の強い地域」である西北九州で、それぞれ用いられていた点も指摘している。また別稿で橋口達也氏と共に南海産貝輪の形態分類を行い、出土地名表を作成した。⁽²⁾

高倉洋彰氏は弥生時代貝輪を二枚貝製（A類）、単殻類巻貝製及び広田型ゴホウラ製（B類）、ゴホウラ・イモガイ製（C類）の3種に分類し、それぞれの装着習俗についての分析を行った。それによるとC類貝輪において「ゴホウラ製腕輪は男性に、イモガイ製腕輪は原則として女性に装着された」と述べ、しかも男性の場合「右前腕装着が原則であった。」としている。そして「C類貝輪の右前腕への装着は装着者の右手の使用を不能とすることに最大の意義のあることを示している」との考えを示している。また甕棺墓地内における貝輪装着者（司祭者）と被副葬者（政治的統率者）とが当初一致せず中期中頃以降一致する点に着目し、「司祭者的性格を兼ねることによって政治的統率者の力は一層強力なものとなり、それが後期社会を通じて共同体を分解させていく大きな要員となっている。」と述べている。

木下尚子氏は九州の貝輪をⅠ、Ⅱ類に分類し、広田遺跡出土例とイモガイ縦型貝輪を除いてⅠ類を高倉氏のB類に、Ⅱ類をC類にほぼ対応させている。⁽⁴⁾そして「弥生時代前期頃Ⅰ類貝輪は、二枚貝製貝輪地域を媒体として九州にもたらされた可能性は極めて高い。」としながらも、「これらの地域が次第に弥生文化に吸収されていく過程で、他の二枚貝製貝輪とともに影をひそめる。」と述べている。その一方で「弥生文化に接触したⅡ類貝輪は製品よりむしろ素材が着目され、弥生社会に適合する貝輪が独自に生み出される。弥生社会に混入したⅡ類貝輪は、この中で変容を受ける。こうして入手された南海産貝類は弥生社会の要求のままに形を変化させながら需要を高める。しかし弥生中期中頃後半から後期にかけて貝輪に付随していた価値が変化するに至って、材質の転換が行われ、南海産貝輪の需要は一段落する」との見解を述べている。また別稿では、弥生時代の南海産貝輪の展開する地域を8つに分け、それぞれを《主体的地域Ⅰ》、《主体的地域Ⅱ》、《通過地域》、《波及地域》として性格づけを行った。⁽⁵⁾《主体的地域Ⅰ》は甕棺墓制の分布圏と重なり、「Ⅱ類貝輪的価値観を一貫して保持し貝輪装着数の増加という社会的要請に従い均一の形態変化をとげている点で、明確に特徴づけられる地域といえる。」と理解している。

橋口達也氏は貝輪装着者が体格的に恵まれ、また男性の右前腕装着がゴホウラの形態と男性右手の断面形態という自然上の制約もある点に注目した。⁽⁶⁾それにより貝輪装着者は「屈強な戦闘指導者であり、当初より司祭者的性格も兼ね備えていた」とみており、さらに「水田経営・土地開発・戦闘のなかでさらに強力となってきたこれ

ら指導者は、前期末頃共同体の一般成員から突出し、副葬品にみられる富をも集中する首長へと発展していった。」と考へ、高倉氏とは異なる見解に立っている。

一方古墳時代の貝輪については、これまで検討を加えられることが少なかった。

齊藤忠氏は古墳時代の貝輪と石釧を集成し、両者の類似性からその系譜について「貝釧と石釧とが同時期的に存在してゐる場合もある以上、必ずしも石器時代のものからの推移でなく、甕棺或いは高塚墳墓の時代のものから展開したと考へることも不自然ではないやうである。」と述べている。⁽⁷⁾

木村幾多郎氏は従来広田型として一括されていたゴホウラ製貝輪を、大友型と古墳時代にその出土が限られる繁根木型に細分し、各々を再検討した。繁根木型貝輪については「(一)年代的には、五世紀後半代と考えられる。(二)地域的には、有明海周辺に主要な分布を見る。(三)貝輪の性格としては、着裝埋葬されていたとするより、主に宝器的又は呪術的性格をもった副葬品として埋納されたと考えられる。(四)形態的には、外形約14×10～11×7cmで、殻頂部まで取り入れ、前溝方向への伸長が大きい。内孔径は約7×6cmで円形又は卵形をなす。大きさからいうと車輪石と類似した点がある。」とまとめている。

このように弥生時代に比べて古墳時代貝輪について総括的に扱った研究はなく、未だその分布、系譜については不明な部分が多い。本稿では新たに作成した出土地名表に基づき、古墳時代の貝輪について若干の検討を試みることにする。

2 貝輪の分類と分布

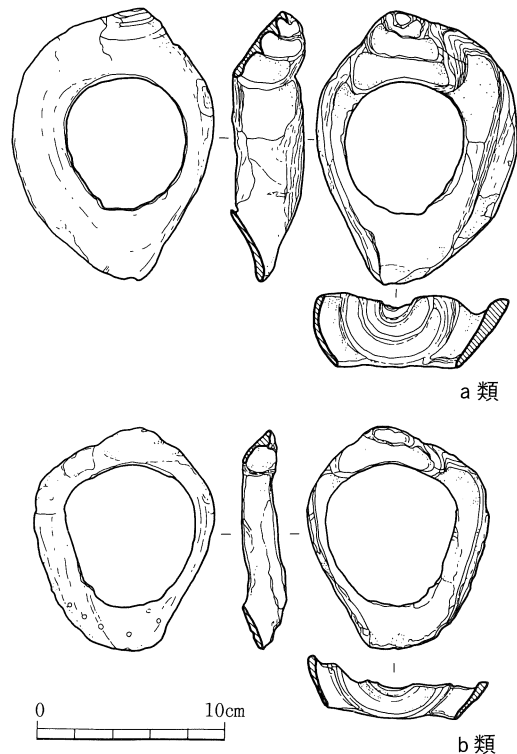
1) ゴホウラ製貝輪

ゴホウラ製貝輪は大きく広田型、金隈型、土井ヶ浜型、諸岡型、立岩型の5型式に分類され、広田型は更に大友型、繁根木型 a、b 類 (第460図) に細分される。⁽⁹⁾ 繁根木型は背面を広く利用した大型の縦型貝輪で、a 類は殻頂部まで完全に取入れたもの、b 類は螺塔の次体層、螺層の一部を取り入れたもので a 類より小振りである。出土する遺跡は古墳時代の九州に限られ、現在までの所ゴホウラ製貝輪が出土した11遺跡の内、10遺跡の貝輪が繁根木型である。その分布は第465図に示すように有明海周辺部、豊後海部地域、遠賀川水系・筑後川水系流域 (北部九州内陸部) にほぼ集中するが、南九州においても2遺跡からの出土が確認されている。福岡平野を中心とする地域や西北九州沿岸部など、弥生時代に貝輪の盛行する地域は空白地帯となっている。

ただし、竹並の古墳から出土したといわれる貝輪のみ金隈型であり、これは鍬形石の祖形と考えられている。しかし出土した古墳を特定できないなど資料としての正確性に欠けるため、今回は出土地名表に記すにとどめる。

2) イモガイ製貝輪

イモガイ製貝輪は縦型、横型の2型式に分類される。⁽¹⁰⁾ イモガイ横型貝輪は殻頂部を利用して平面形をほぼ正円に近い形態にしたもので、弥生時代中期中葉以降その数を増す。古墳時代の遺跡から発見されるのは横型のみであり、第465図に示した6地域すべてに分布しているが、ゴホウラ製貝輪と同様弥生時代に貝輪の集中する地域からの出土はない。



第460図 繁根木型貝輪実測図

(註8 木村幾太郎「所謂広田型貝輪の細分について」より転載)

3) その他の貝輪

ゴホウラ・イモガイ製以外の南海産貝製腕輪では、オオツタノハ製とみられるものが発見されている。オオツタノハ製貝輪は殻頂部を擦り落とした後、肋をよく残しているもの、全面を研磨するもの、放射状に研磨を施すものの3種類がある。霧島山麓周辺部の2遺跡からのみ出土しているが、はっきりと貝種の同定かなされたわけではなく、詳細については不明である。

二枚目製貝輪は豊後海部地域、霧島山麓周辺部の各1遺跡から出土している。これらは弥生時代に南海産大型巻貝製貝輪の流入していない地域であり、その意味では縄文時代の伝統を残しているとも考えられる。

3 地域別検討 (第461図参照)

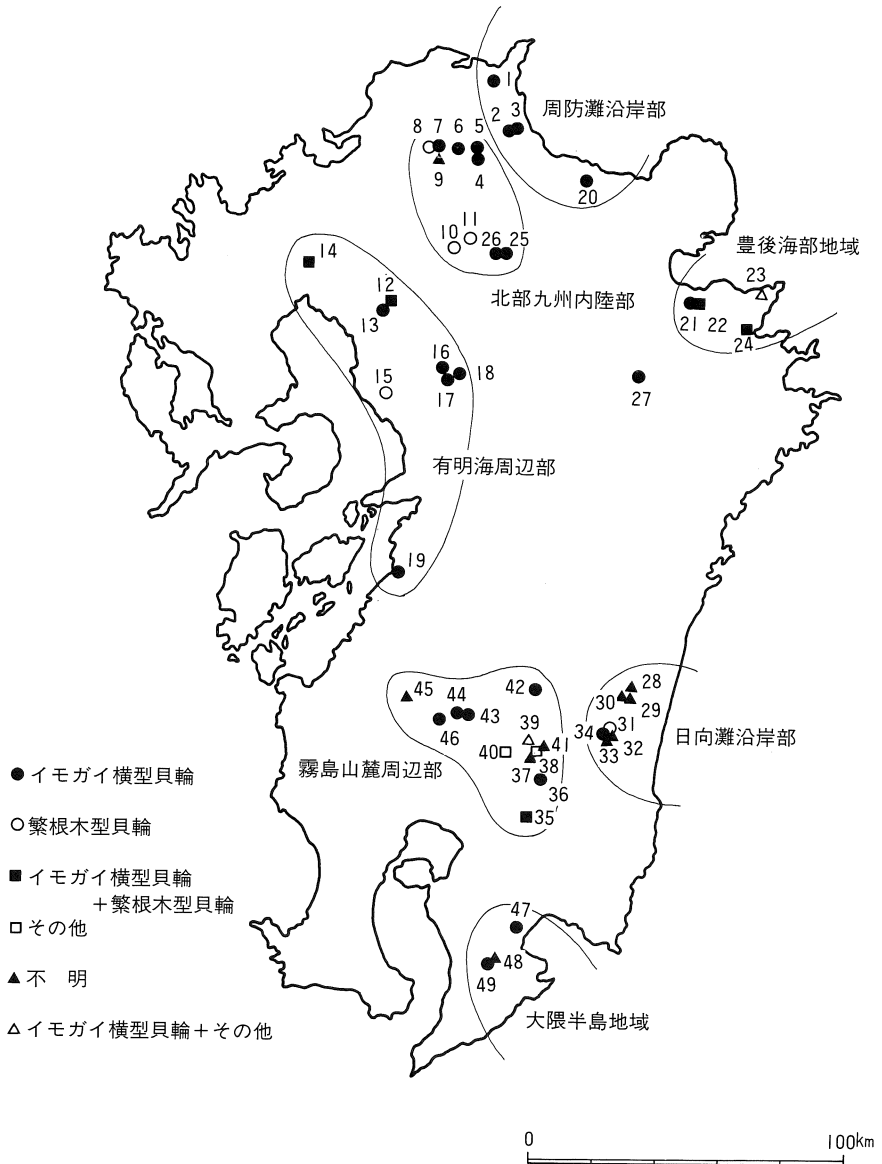
1) 周防灘沿岸部

この地域では、下津八丁目、馬ヶ岳、竹並、上ノ原の各横穴墓群からイモガイ横型貝輪が発見されている。竹並横穴墓群は、調査、報告されただけでも948基にも及び、更に破壊された横穴墓、未調査の横穴墓を含めると総数1000基を越える一大横穴墓群となる。貝輪が出土したのは6世紀中頃～7世紀初頭の6基である。上ノ原横穴墓群でも5基の横穴墓から貝輪が発見されており、62号を除いてほぼ竹並の年代と重なる。他の横穴墓も同様の年代におかれており、この時期の横穴墓被葬者とイモガイ横型貝輪との結び付きを伺うことができる。

2) 北部九州内陸部

この地域は更に遠賀川水系流域、筑後川水系流域の2つに分けられる。

遠賀川水系流域では、狐塚古墳群、轟尾横穴墓群、狐ヶ迫横穴群、岡ノ浦横穴、櫛山古墳、漆生古墳で貝輪の出土が知られている。4つの横穴墓群から出土したのはイモガイ横型貝輪であり、時期は6世紀中頃～7世紀前半である。櫛山古墳については従来横穴式石室または横穴墓とする2つの考え方があり、嶋田光一氏は最近櫛山古墳の再検討を行い、立地、形態、法量等からいわゆる初期横穴墓の可能性の強いことを指摘している¹³。本稿でもその意見に従いたい。出土した貝輪は繁根木型a類で、年代は6世紀前半代と考



第461図 古墳時代の貝輪分布図 (番号は出土地名表に対応)

えられている。

次に筑後川水系流域では、塚堂古墳、宝満宮境内石棺、草場第二遺跡、北友田横穴墓群から貝輪が出土している。塚堂古墳は前方部と後円部に各1基の石室を持つ前方後円墳である。貝輪は前方部の横穴墓式石室に埋葬された壮年男性人骨の右上腕付近で内側を上にして検出された。形態は繁根木型a類である。石室の構造と副葬品より5世紀後半に比定される。宝満宮境内石棺は、筑後川を挟んで塚堂古墳の対岸に位置する。出土した貝輪は、塚堂古墳の貝輪と同形同類のものとされているので繁根木型a類と考えられるが、詳細は不明である。北友田は6世紀後半の横穴墓群で、イモガイ横型貝輪が副葬されていた。

遠賀川水系流域、筑後川水系流域とも6世紀後半を中心とする時期の横穴墓からはイモガイ横型貝輪が出土しており、これは周防灘沿岸部の状況と同じである。一方繁根木型貝輪は、遠賀川水系流域では5世紀後半の古墳から出土しているが、筑後川水系流域では6世紀前半代の初期横穴墓から出土している。しかし、櫛山古墳は年代的にも副葬品の内容からも他の横穴墓とは様相が異なり、むしろ被葬者の性格としては塚堂等に近いと考えられる。

3) 有明海周辺部

この地域では名木野古墳、長谷横穴墓、関行丸古墳、繁根木古墳、湯の口横穴群、瀬戸口横穴墓群、西迫間横穴墓、田川内古墳から貝輪が出土している。

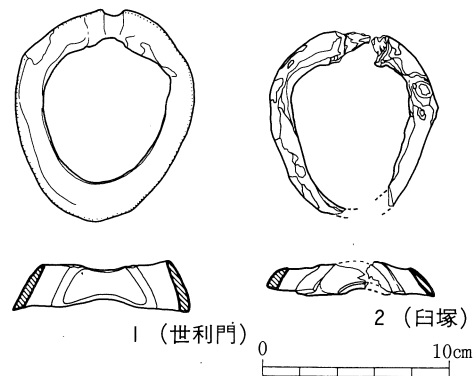
名木野古墳は調査報告された10基に消滅したものを加えると、本来13基の円墳が存在していたものと推定されている。6世紀中頃～後半の6号墳からはイモガイ横型貝輪が、5世紀後半の9号墳からは繁根木型a、b類貝輪2個が出土している。関行丸古墳は横穴式石室を持つ5世紀後半の前方後円墳で、繁根木型a類貝輪とイモガイ横型貝輪が発見されている。a類貝輪は出土位置より埋葬人骨の右手に装着されていた可能性がある。繁根木古墳は頂上に舟形石棺を持ち主体部として別に横穴式石室を持つ円墳である。貝輪は舟形石棺より検出され、形態は繁根木型a、b両類が認められる。時期は5世紀末である。3つの横穴墓群と田川内古墳からはイモガイ横型貝輪が発見されている。横穴墓の年代は6世紀後半を中心とするが、田川内古墳は6世紀前半～中頃と若干古い。

この地域でも、繁根木型貝輪は5世紀後半～末の高塚古墳から出土している。ただし、1つの古墳にa、b両類を伴う例は他地域にはみられない。またイモガイ横型貝輪はやはり6世紀後半前後の横穴墓に伴う場合が多いが、名木野などの古墳からも発見されている。

4) 豊後海部地域

この地域では高来山古墳、世利門古墳、白塚古墳、築山古墳で貝輪の出土が知られている。

高来山古墳は5世紀後半の横穴墓で、イモガイ横型と思われる貝輪が出土している。世利門古墳は5世紀中頃～後半の円墳である。主体部の石棺には初葬4、追葬4の計8体の人骨が埋葬されており、追葬人骨に伴う副葬品として繁根木型b類(第462図1)・イモガイ横型・イモガイ組合せ式貝輪が出土した。イモガイ横型貝輪は1958年の報告では鉄釧とされていたもので、1号人骨に伴うと考えられる。またb類貝輪は3号人骨に装着された状態で検出された。イモガイ組合せ式貝輪はイモガイの一部を長方形に切断し、四隅に小孔を開けそれを4個連鎖して輪となすもので、弥生時代には類例がある。3号または4号人骨に伴うと考えられる。築山古墳は2基の石棺(北棺・南棺)を持つ5世紀中頃の前方後円墳である。南棺には3体が埋葬されており、女性人骨の右腕にイモガイ横型貝輪が装着されていた。一方北棺の被葬者は壮年女性と推定されており、両腕に5個ずつの二枚貝製貝輪と右腕尺骨にイモガイ横型貝輪を装着していた。白塚古墳は後円部に大小2基の舟形石棺を持つ前方後円墳で、墳丘には短甲形埴輪の他に2基の



第462図 世利門・白塚古墳出土貝輪実測図
(江田豊、清原史代氏実測)

石製短甲がおかれている。大形棺の方から繁根木型 b 類貝輪（第462図 2）とイモガイ横型貝輪が出土した。時期は 5 世紀前半～中頃である。

世利門、臼塚から出土したゴホウラ製貝輪をここでは繁根木型 b 類に分類した。他の b 類貝輪に比べると左右対称で、周囲の加工も丁寧である。また臼塚出土の b 類貝輪に直弧文が施されている点も注目されるが、そのほかの基本的な形態に差はないと思われる。この地域のイモガイ横型貝輪は繁根木型貝輪と共伴する場合が多く、横穴墓から出土した例は高来山古墳のみである。年代的には 5 世紀前半～後半に比定されており、6 世紀後半前後の横穴墓から出土する他地域のものに比べると全体に年代が上がる。

5) 日向灘沿岸部

この地域では西都原110号墳、下三財月中、諏訪、大坪、稻荷馬場、高田原、市の瀬の各地下式横穴から貝輪が発見されている。

大坪地下式横穴からは繁根木型 a 類貝輪が出土している。副葬品も豊富で時期は 5 世紀末と考えられる。市の瀬地下式横穴では、1 号と 5 号からイモガイ横型貝輪が出土した。5 号には 2 体の人骨が埋葬されており、貝輪は 2 号人骨（壮年女性）の右腕に装着した状態で 3 個検出された。時期は 5 世紀後半～末である。

この地域で貝輪が出土したのは、西都原110号墳を除いてすべて地下式横穴墓である。しかし貝輪の形態や時期等不明なものが多い。年代のはっきりしている諏訪、大坪、市の瀬は共に 5 世紀後半～末に比定されており、6 世紀代に下るものはない。

6) 霧島山麓周辺

この地域では菓子野、原村上、仮屋尾、日守、大萩、旭台、立切、東二原、小木原、島内、瀬ノ上、馬場の各地下式横穴で貝輪が発見されている。

菓子野57-5号には3体の人骨が埋葬されており、1号人骨（熟年男性）の左前腕骨にイモガイ横型貝輪8個が、3号人骨（熟年男性）の右前腕骨に繁根木型 b 類貝輪がそれぞれ装着された状態で検出された。時期は 6 世紀前後である。その他の地下式横穴はイモガイ横型形貝輪を伴う場合が多く、装着状態で出土した例も 8 基ある。時期は島内7号が7世紀後半におかれている以外は、5 世紀後半～6 世紀前半の間に集中する。また日守2号と旭台9号からはオオツタノハ製と思われる貝輪、日守5、6号からは二枚貝製貝輪が出土している。日守地下式横穴は時期比定の決め手に欠けるが、6～7世紀の築造とみられている。

地下式横穴からは横穴墓と同様主としてイモガイ横型貝輪が出土する傾向にある。しかし、時的には 5 世紀後半～6 世紀前半におかれる場合が多く、横穴墓より年代が上がる。

7) 大隅半島地域

この地域では神領古墳群、横間古墳群、上ノ原地下式横穴群で貝輪が発見されている。

神領古墳群は前方後円墳4基、円墳9基、地下式横穴4基が知られており、1号地下式横穴からイモガイ横型貝輪が出土している。横間古墳群は円墳8基、地下式横穴11基より成っている。貝輪は9号地下式横穴墓の副葬品であるが、貝種等は不明である。上ノ原9号からもイモガイ横型貝輪が出土している。いずれの地下式横穴も時期は不明である。

4 古墳時代出土貝輪の性格と特色

古墳時代貝輪はほとんどが、ゴホウラ製繁根木型貝輪とイモガイ横型貝輪の二種類であることは前に見てきたとおりである。

繁根木型貝輪が主に分布するのは、先に地域別検討で述べたように 2) 北部九州内陸部、3) 有明海沿岸部、4) 豊後海部地域（以後便宜上 2）、3）、4）と略す。）であるが、それぞれ様相が異なる。まず 2) では 5 世紀後半の古墳から a 類のみが出土し、3) では 5 世紀後半～末の古墳において a 類のみ、または a、b 両類を伴う例が知られる。次に 4) では、5 世紀前半～後半の古墳から b 類のみが出土する。このようにみていくと 4) が最も古い時期から繁根木型貝輪を有していたことになり、その後 2)、3) に分布する段階で a 類貝輪が出現

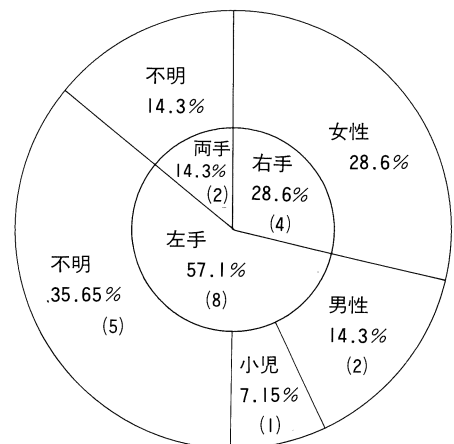
するという流れを想定できる。つまり地域的には4) → 2)・3)、形態的にはb類→a類という変遷を捉えられる。

ではなぜこの時期の九州に再びゴホウラ製貝輪が登場するのであろうか。木村幾多郎氏は、向野田古墳（熊本県宇土市）の車輪石埋納状況と塚堂古墳、関行丸古墳の貝輪出土状態の類似性、車輪石と繁根木型貝輪の形態的共通性等を上げ、「畿内勢力が九州地方に広く及んだ5世紀後半、車輪石の性格・イメージをゴホウラ製貝輪に求めたのではないか」と指摘している¹⁹。しかし、向野田古墳の年代は4世紀末～5世紀初であり、ゴホウラ製貝輪出土古墳との間に年代的空白が存在し、直接系譜を辿ることはできないとも述べている。今回、白塚古墳（5世紀前半～中頃）出土の貝輪を繁根木型b類とすることによって、この時間的空白を埋めることが可能になった。しかも白塚出土のb類貝輪には直弧文、イモガイ横型貝輪には碧玉製石釦を意識したとみられる櫛目文が施されており、宝器的色彩が強いことも伺われる。以上の点より、繁根木型貝輪の系譜を車輪石等の石製腕輪形宝器に求めるとすると、木村氏の考えを無理なく裏付けることが可能になった。

一方、イモガイ横型貝輪は古墳時代貝輪の分布するすべての地域から出土している。特に6世紀後半～7世紀前半の横穴墓と5世紀後半～6世紀前半の地下式横穴との結び付きは顕著である。前者は上ノ原Ⅲb～V期のいわゆる盛期横穴墓の時期、後者は上ノ原Ⅰ～Ⅲa期の初期横穴墓の時期に相当する。つまりイモガイ横型貝輪副葬という習俗を、時間的にみると地下式横穴被葬者→横穴墓被葬者、地理的にみると宮崎県・鹿児島県→有明海周辺部・北部九州内陸部・周防灘沿岸部という流れの上に捉えることができる。地下式横穴の盛行する地域においても6世紀後半～7世紀にかけて横穴墓が造られ始めるが、貝輪が副葬される例は現在までの所発見されていない。これは地下式横穴と横穴墓の被葬者の性格を考える上でも興味深い。

次にイモガイ横型貝輪の着装状況を見ると、比較的人骨の保存のよい地下式横穴で多くの例が観察できた。それをグラフに表したのが第463図である。性別まで判明しているのは6例で、これをみると女性はすべて右手に、男性は左手に装着していることがわかる。資料数が少ないためこれが全体的な傾向なのかどうかは今後類例を待って検討を加えたいが、これまで女性用とされていたイモガイ横型貝輪は、少なくとも古墳時代には性別に関係なく装着していたとみることができる。またこのように着装状態での検出例が多いということは、呪術的性格を有し宝器として埋納された繁根木型貝輪と異なり、イモガイ横型貝輪が主に装飾品として用いられていたことを示すとも考えられるのではないだろうか。

今回、立岩遺跡の報告書の中で三島格、橋口達也両氏が発表した南海産貝製腕輪の出土地名表を参考にしながら、その後の資料を加えることで古墳時代における貝輪の出土地名表を作成した。それに基づき古墳時代の貝輪についてその地域的、時期的、形態的特色等について考えてきた。しかし弥生時代に貝輪の盛行した地域が空白地帯になっている理由や、南海産貝伝播のルート等未だ未解明な部分も多く、これらを併せて検討していくことを今後の課題としたい。



第463図 イモガイ横型貝輪装着者の男女比

註

- 1 三島 格「弥生時代における南海産貝類使用の腕輪」『日本民族と南方文化』1968
- 2 三島 格・橋口達也「南海産貝類に関する考古学的考察と出土地名表」『立岩』1977
- 3 高倉洋彰「右手の不使用者」『九州歴史資料館研究論集』1 1975
- 4 木下尚子「弥生時代における南海産貝類の系譜」『国分直一博士古稀記念論集 考古編』1890
- 5 木下尚子「弥生時代における南海産貝類腕輪の生成と展開」『森貞二郎博士古稀記念文化論集』上巻 1982
- 6 橋口達也「腕輪・指輪」『弥生文化の研究』8 雄山閣1987
- 7 齊藤 忠「貝釧と石釧」『考古学雑誌』33-7 1943
- 8 木村幾太郎「所謂広田型貝輪の細分について」『史淵』117 1980
- 9 註2に同じ
- 10 小川敬養「豊前国仲津郡発見ノ腕輪」『東京人類学会雑誌』49 1890
- 11 註2に同じ
- 12 註6に同じ
- 13 嶋田光一「福岡県榎山古墳の再検討」『児嶋隆人先生喜寿記念論集 古文化論叢』1991
- 14 長崎県佐世保市宮の本遺跡
- 15 註8に同じ

文献 「古墳時代の九州出土貝輪地名表」の参考文献及び資料提供者

- 1 北九州市立考古博物館『北九州の横穴墓展』1987
- 2 三島 格・橋口達也「南海産貝類に関する考古学的考察と出土地名表」『立岩』1977
- 3 竹並遺跡調査委員会『竹並』1979
- 4 大任町教育委員会「狐塚古墳群」『大任町文化財調査報告書』1 1976
- 5 田川市教育委員会「轟尾横穴墓群」『田川市文化財調査報告書』5 1989
- 6 田川市教育委員会「狐ヶ迫横穴群」『田川市文化財調査報告書』1 1981
- 7 栗崎山古墳群学術調査団「岡ノ浦横穴」『栗崎山古墳群』1973
- 8 木村幾太郎「所謂広田型貝輪の細分について」『史淵』117 1980
- 9 齊藤 忠「貝釧と石釧」『考古学雑誌』33-7 1943
- 10 吉井町教育委員会「塚堂古墳」『吉井町文化財調査報告書』1 1982
- 11 註8に同じ
- 12 瀬高町教育委員会「名木野古墳群」『瀬高町文化財調査報告書』1 1977
- 13 註2に同じ
- 14 渡辺正気「佐賀市関行丸古墳」『佐賀県文化財調査報告書』7 1958
- 15 註8に同じ
- 16 山鹿市教育委員会「湯の口横穴群」(Ⅱ)『菊池川中流域古墳・横穴群総合調査報告書』3 1988
- 17 熊本県教育委員会「北上原古墳・瀬戸口横穴墓群」『熊本県文化財調査報告』104 1989
- 18 松本健郎「資料熊本県横穴地名表」『熊本史学』47 1976
- 19 熊本県教育委員会「熊本県装飾古墳総合調査報告書」『熊本県文化財調査報告』68 1984
- 20 本報告書
- 21 杉崎重臣「木ノ上・高来山の横穴古墳」『考古』1964
- 22 賀川光夫「五遺骸以上合葬の一例」『考古学雑誌』44-1 1958
- 23 大分県教育委員会「中ノ原・馬場古墳緊急発掘報告」『大分県文化財調査報告書』1 1968
- 24 大分県教育委員会「豊の国創世紀展」1987
- 25 大分県教育委員会「草場第二遺跡」『九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書』1 1989
- 26 註24に同じ
- 27 昭和55年大分県教育委員会調査
- 28 註9に同じ
- 29 都城市教育委員会「貝輪を出土する地下式横穴」『菓子野地下式横穴』『都城市文化財調査報告書』3 1983
- 30 宮崎県考古学会・鹿児島県考古学会「地下式横穴墓からみた古墳時代」資料 1986
- 31 宮崎県教育委員会『宮崎県文化財調査報告書』15 1970
- 32 註29に同じ
- 33 国富町教育委員会「地下式横穴墓玉類出土一覧表」『市の瀬地下式横穴墓群』『国富町文化財調査資料』4 1985
- 34 国富町教育委員会「市の瀬地下式横穴墓群」『国富町文化財調査資料』4 1985
- 35 都城市教育委員会「菓子野地下式横穴」『都城市文化財調査報告書』3 1983
- 36 宮崎県教育委員会『宮崎県文化財調査報告書』18 1976
- 宮崎県教育委員会『宮崎県文化財調査報告書』19 1976
- 高崎町教育委員会「原村上地下式横穴墓群」『高崎町文化財調査報告書』1 1987
- 37 註31に同じ
- 38 宮崎県教育委員会『宮崎県文化財調査報告書』22 1980
- 宮崎県教育委員会『宮崎県文化財調査報告書』23 1981
- 39 宮崎県教育委員会『宮崎県文化財調査報告書』5 1960
- 宮崎県教育委員会『宮崎県文化財調査報告書』27 1983
- 宮崎県教育委員会『大萩遺跡』(1) 1974
- 40 宮崎県教育委員会『宮崎県文化財調査報告書』19 1976
- 41 宮崎県教育委員会 谷口武範氏の御教示による
- 42 小林市教育委員会「東二原地下式横穴墓群」『小林市文化財調査報告書』2 1990
- 43 註31に同じ
- えびの市教育委員会「えびの市遺跡詳細分布調査報告書」『えびの市埋蔵文化財調査報告書』1 1985
- 44 宮崎県教育委員会『宮崎県文化財調査報告書』14 1969
- 宮崎県教育委員会『宮崎県文化財調査報告書』16 1972
- えびの市教育委員会「えびの市遺跡詳細分布調査報告書」『えびの市埋蔵文化財調査報告書』1 1985
- 45 註30に同じ
- 46 鹿児島県教育委員会 池畑耕一氏の御教示による
ジャパン通信社『月刊文化財発掘出土情報』7 1990 5.1~31
- 47 註30に同じ
- 48 註30に同じ
- 49 註30に同じ

第193表 古墳時代の九州出土具輪地名表

番号	遺跡名・所在地	具種			出土状態	着装状態		被葬者(着葬者)の 年齢・性別・人数	時期	遺跡の性格	その他の副葬品	備考	
		ゴホウラ	イモガイ			その他	左						右
			縦型	横型									
1	福岡県北九州市小倉北区 下到津八丁目横穴			1	玄室内			2体	6C後半 ~末	横穴墓	刀子		
2	福岡県行橋市 馬ヶ岳横穴墓			1					6C後半	横穴墓	須恵器		
3	福岡県行橋市 竹並古墳 竹並横穴墓群 G-13-1号 G-20-1号 G-94-3号 G-101号 H-11号 H-40号	5(金隈型)?		1 1 1 1 1				熟年女性2 若年1 成年男性1 小児1	6C末~ 7C初 6C後半 6C後半 6C中~ 後半 6C後半 6C後半		刀子、鉄鏃、玉類 須恵器、土師器 耳環 玉類 刀子、鉄鏃、貝片 須恵器 耳環		
4	福岡県田川市 狐塚古墳群 I-1b横穴墓			1				2体	6C中頃 ~後半	古墳群 横穴墓群	耳環、玉類、須恵器		
5	福岡県田川市 轟尾横穴墓群 B-2号			1	玄室内			壮年女性1 成年不明1	6C末~ 7C前半	横穴墓群	刀子、鞘金具、鐏 鉄斧、耳環、須恵器		
6	福岡県田川市 狐ヶ迫横穴群			2	玄室内				6C後半	横穴墓群	鉄鏃、刀装具、耳環		
7	福岡県飯塚市 岡ノ浦横穴1号			1	玄室内				6C中頃 ~後半	横穴墓群	鉄鏃、刀子柄、須恵器		
8	福岡県飯塚市 檀山古墳	1(繁根木型 a類)							6C前半	横穴墓	帯金具、鉄鏃、鉄刀 鉄鏃、鉄鏃、鉄斧 鉄鑿、刀子、馬具		
9	福岡県嘉穂郡稲葉町 漆生古墳			1(不明)	横穴式石 室内					円墳	鏡、耳環、玉類、鈴釧 刀身片		
10	福岡県浮羽郡吉井町 塚堂古墳	1(繁根木型 a類)						壮年男性1	5C後半	前方後円墳	甲冑、刀、鉾、鉄鏃 刀子、針金、馬具 仿製神獸鏡、白玉 滑石製有孔円板	右上腕付近より内 側を上にして検出	
11	福岡県朝倉郡杷木町 宝満宮境内石棺	1(繁根木型 a類)									胸甲、刀、劍、槍 珠文鏡		
12	福岡県山門郡瀬高町 名木野古墳 6号墳 9号墳			1 2(繁根木型 a、b類)	横穴式石 室内 横穴式石 室内			6体	6C中頃 ~後半 5C後半	円墳 円墳	鐏、斧、鋤先、馬具 耳環、管玉 鉄鏃、玉類		
13	福岡県山門郡瀬高町 長谷横穴墓 13号 20号			1 2					6C中頃 ~後半 6C中頃 ~後半	横穴墓群			

番号	遺跡名・所在地	貝種			出土状態	装着状態		被葬者(着葬者)の年齢・性別・人数	時期	遺跡の性格	その他の副葬品	備考	
		ゴホウラ	イモガイ			その他	左						右
			縦型	横型									
14	佐賀県佐賀市 関行丸古墳 第2 屍床 第3 屍床	1 (繁根木型 a 類)		1	横穴式石 室内				5 C 後半	前方後円墳	金銅製冠帽、珠文鏡 変形文鏡、刀子、鉄鏃 尖頭工具、鹿角柄、玉類		
15	熊本県玉名市 繁根木古墳	2 (繁根木型 a、b 類)			舟形石棺 内				5 C 後半 ~末	円墳	環頭大刀、直刀、剣		
16	熊本県山鹿市 湯の口横穴群 17-B 号			2	玄室内			1 体	6 C 後半	横穴墓	鉄鏃、刀子、馬具 耳環		
17	熊本県菊池郡七城町 瀬戸口横穴墓群 49号-b			1	玄室内			壮年 1、男性 1 女性 1	6 C 中葉 ~8 C 前 半	横穴墓			
18	熊本県菊池市 西迫間横穴墓			1 ?					6 C 末	横穴墓			
19	熊本県八代市 田川内古墳 1号墳			5	横穴式石 室内				6 C 前半 ~中頃	円墳	刀、剣、斧、蕨手刀子 玉類	着装？	
20	大分県下毛郡三光村 上ノ原横穴墓群 12号 22号 24号 62号 69号			2 2 1 1 1	玄室内 玄室内 玄室内 玄室内 玄室内			成人男性 1 + α 小児 1 成人男性 1	6 C 後半 ~7 C 初 6 C 後半 ~7 C 初 6 C 中葉 ~後半 5 C 末~ 6 C 中葉 6 C 末~ 7 C 前半	横穴墓	刀子、鉄鏃、耳環 須恵器 刀子、鉄鏃、耳環 銅釧、須恵器 刀、刀子、鏃、鉄鏃 馬具、玉類 刀子、鉄鏃、耳環 玉類、須恵器	(6 C 中葉~後 半)	
21	大分県大分市 高来山古墳			1 ?				壮年男性 1	5 C 後半	横穴墓	珠文鏡、鉄刀、鉄鏃 鉄矛		
22	大分県大分市 世利門古墳	1 (繁根木型 b 類)		1	1 (イモガイ 組合せ式)				5 C 中頃 ~後半	円墳	鉄鏃、櫛		
23	大分県北海部郡佐賀関 町 築山古墳 南棺 北棺			1 1	10 (二枚貝)	着装 着装	○ ○	女性 1、不明 2 壮年女性 1	5 C 中頃	前方後円墳	振文鏡、刀、剣 鏃、刀子、鋤先 鎌、鏃、毛抜形鉄器、釵、 棒状鉄器、小玉 管玉	二枚貝は両腕に 5 個ずつ、イモガイ は右腕に着装	
24	大分県臼杵市 白塚古墳	1 (繁根木型 b 類)		1					5 C 前半 ~中頃	前方後円墳	舶載双龍鏡、四獣鏡、鉄 矛 短甲形埴輪	ゴホウラ製貝輪に は直弧文、イモガ イ製貝輪には櫛目 文を施す	
25	大分県日田市 草場第二遺跡 97号石棺			1	着装？	○		小児 1	古墳前期	石棺墓	管玉		

番号	遺跡名・所在地	貝種			出土状態	装着状態		被葬者(着葬者)の 年齢・性別・人数	時期	遺跡の性格	その他の副葬品	備考	
		ゴホウラ	イモガイ			その他	左						右
			縦型	横型									
26	大分県日田市 北友田横穴墓群			1					6 C後半	横穴墓			
27	大分県竹田市 十一横穴			2	玄室内				6 C中頃 ～後半	横穴墓	ガラス玉		
28	宮崎県児湯郡妻町 西都原古墳群 110号墳			1 (不明)						円墳	刀、剣、鏃、刀子、斧、 鏡、銅釧		
29	宮崎県西都市 下三財月中地下式横穴 1号			不明						地下式横穴	鉄刀、鉄鏃、玉類		
30	宮崎県西都市 諏訪地下式横穴			6 (不明)					5 C末	地下式横穴			
31	宮崎県東諸方郡国富町 大坪地下式横穴	1 (繁根本型 a類)					2体		5 C末	地下式横穴	鉄刀、鉄剣、刀子、鏃 鉄斧、鋤先、獸形鏡		
32	宮崎県東諸方郡国富町 稲荷馬場地下式横穴			不明						地下式横穴	刀子、耳環、土師器 須恵器		
33	宮崎県東諸方郡国富町 高田原地下式横穴			不明						地下式横穴	玉類		
34	宮崎県東諸方郡国富町 市の瀬地下式横穴 1号 5号			2 ? 3	着装		1体 ○ 壮年女性1 熟年男性1		5 C後半 ～末	地下式横穴	玉類 鉄剣、鉄鏃、鞘尾装具 鉄斧、鋤先、銅鏡、朱玉、 鉄刀		
35	宮崎県都城市 菓子野地下式横穴 57-5号	1 (繁根本型 b類)		8	着装	○ ○	熟年女性1 熟年男性2		6 C前後	地下式横穴	鉄鏃	イモガイ製貝輪は 左手、ゴホウラ製 貝輪は右手に着装	
36	宮崎県北諸方郡高崎町 原村上地下式横穴 2号 4号 6号			12 1 8	着装 玄室内 着装	○ ○ ○	壮年女性2、 小児2 壮年男性1 壮年女性1、 壮年男性1 壮年女性1、 熟年男性1		5 C末～ 6 C初 5 C後葉 ～6 C前 葉	地下式横穴	鉄剣、鉄鏃、刀子、鉄釧 鉄剣 刀子		
37	宮崎県北諸方郡高崎町 仮屋尾地下式横穴 1号			1 (不明)			女1、男1			地下式横穴			
38	宮崎県西諸方郡高原町 日守地下式横穴 2 (54-2)号 5 (55-1)号 6 (55-2)号			1 (オオツタ ノハ?) 4 (二枚貝) 16 (二枚貝)	玄室内 着装 着装	○ ○	3体 壮年女性1、 小児1 熟年男性1 熟年女性1 壮年男性1		6～7 C	地下式横穴	剣、鉄鏃、刀子 剣、鉄鏃 刀子、鏃、鋤先		

番号	遺跡名・所在地	種類			出土状態	装着状態		被葬者(着葬者)の 年齢・性別・人数	時期	遺跡の性格	その他の副葬品	備考	
		ゴホウラ	イモガイ			その他	左						右
			縦型	横型									
39	宮崎県西諸方郡野尻町 大萩地下式横穴 34-1号 B-13号 C-8号			2 18	2 (不明)	着装 着装 着装	○ ○ ○	○	2体 1体 1体	5 C後半	地下式横穴		
	F-3号 F-10号			1 1		着装 着装	○ ○		女性1 不明 1 1体			鉄鏃、刀子、馬具 耳環、貝製品 刀子	
40	宮崎県西諸郡郡高原町 旭台地下式横穴 9号				8 (オオツタ ノハ?)	玄室内			壮年女性1 熟年女性1 熟年男性2 小児1		地下式横穴		
41	宮崎県西諸方郡高原町 立切地下式横穴群 38号 60号 64号				2 (不明) 5 (不明) 3 (不明)	着装 着装 着装	○ ○ ○		不明1、不明 4 子供(20才未 満)1 女性2、不明 1 子供1、子供 1 男性1、不明 2	5 C後半 ~6 C前 半	地下式横穴	剣、鏃、刀子 剣、鏃、刀子	
42	宮崎県小林市 東二原地下式横穴墓群 8号			4		着装	○		3体	5 C末~ 6 C前半	地下式横穴	鉄剣、鉄鏃、刀子 鉄釧	
43	宮崎県えびの市 小木原地下式横穴 101号			6		着装	○		3体		地下式横穴	鉄刀、鉄剣、鉄鏃、鉈	
44	宮崎県えびの市 島内地下式横穴 5 (43-2)号 7 (46-2)号			3 4		玄室内			1体 3~4体	7 C後半			
45	鹿児島県大口市 瀬ノ上地下式横穴 9号				1 (不明)						地下式横穴		
46	鹿児島県始良郡吉松町 馬場地下式横穴 1号墓		1		着装		○	成人女性2	6 C代		地下式横穴		
47	鹿児島県曾於郡大崎町 神領古墳群 1号地下式横穴			2							地下式横穴	内行花文鏡、剣 骨製弁	
48	鹿児島県肝付郡高山町 横間古墳群 9号地下式横穴				1 (不明)						地下式横穴	馬具	
49	鹿児島県肝付郡高山町 上ノ原地下式横穴群 9号			2					1体?		地下式横穴	蛇行剣、刀子 貝製ヘラ	

(イ) 銅釧—古墳時代に於ける九州出土の銅釧—

村上久和

本横穴群22、69、80号横穴墓より銅釧が各1点出土した。形態は22号のものが円環有刻型で全体に磨滅が激しく特に刻目はヤリ状のもので刻み込んだものかあるいは鑄出したものが磨滅したのかは定かでない。いずれにせよ長期間使用したものと考えられる。69、80号出土のものはやや太い針金状の銅線を円形に曲げて作ったものである。22号横穴墓では田川市セスドノ古墳と同様の陶質土器と考えられる蓋が出土しており、さらに形態は福岡県桂川間町二塚8—①号横穴墓出土のものと同径、刻目数とも同一であることなどから朝鮮半島製の可能性もある。

さて、金属製釧についての研究は近年、小高幸男氏によって全国的集成が行われ、その保有の意義等が検討された注目すべき論考がある。本稿も先論とおおまかには同一の見解であるが近年の官見の限りの集成を加え時期、分布、保有者の階層性等を検討してみる。

第194表 銅釧出土地名表 (北部九州)

No	遺跡名	所在地	墳形	埋葬施設	数量	形式	共伴遺物	時期	文献
1	岬ヶ原37号墳	福岡県大牟田市	円墳	横穴式石室	1	円環有刻型	勾玉、管玉、切子玉、ガラス玉、耳環、鉄鏃、須恵器	6C後半	『岬ヶ原古墳群』大牟田市教委1990
2	横隈井の浦1号墳	福岡県小郡市	円墳	横穴式石室	1	円環無刻型	管玉、耳環、鉄鏃、刀子、須恵器	7C前半～中頃	『横隈井の浦遺跡』小郡市教委1990
3	観音山古墳群中原I群-9号墳	福岡県那珂川町	円墳	横穴式石室	3	円環有刻型	勾玉、管玉、ガラス玉、直刀、鉄鏃、刀子、馬具、須恵器	6C中頃	『観音山古墳群Ⅲ』那珂川町教委1988
4	二塚8—①号横穴墓	福岡県桂川町		横穴墓	1	円環有刻型	霰玉、ガラス玉、耳環、須恵器	6C後半	『土師地区遺跡群Ⅷ』桂川町教委1989
5	井河1号墳	福岡県那珂川町	円墳	竪穴系横口式石室	2	鈴釧円環有刻型	勾玉、管玉、ガラス玉、直刀、鉄鏃、刀子、鉄剣、須恵器	5C後半～6C前半	『井河古墳群』那珂川町教委1983
6	東田8号墳	福岡県岡垣町	円墳	横穴式石室	1	円環有刻型	耳環、切子玉、ガラス玉、直刀、鉄鏃、刀子、鉄斧、須恵器	6C中頃～後半	『東田古墳群』岡垣町教委1977
7	花見1号墳	福岡県古賀町	円墳	割竹形木棺	2	円環無刻型	銅鈴、手鐲、鉄鏃、鉄斧、鉄刀、鉄剣	4C末～5C初	『花見遺跡』古賀町教委1984
8	村山田高江1号墳	福岡県宗像市	円墳	横穴式石室	1	円環無刻型	耳環、鉄鏃、刀子、ガラス玉、直刀	6C後半	『宗像埋蔵文化財発掘調査報告書』宗像市教委1989
9	坂元2号墳	福岡県前原町	円墳	竪穴系横口式石室	2	円環無刻型	銅鏡、鉄鏃、刀子、鉄鎌、管玉、ガラス玉、須恵器	5C末～7C中頃	『坂元古墳群』前原町教委1980
10	鋤崎古墳	福岡県福岡市	前方後円墳	初期横穴式石室	2	円環無刻型	銅鏡、鉄剣、櫛、勾玉、管玉、ガラス玉、滑石製白玉	4C末～5C初	『鋤崎古墳』福岡市教委1984
11	佐谷古墳	福岡県粕屋町	円墳	横穴式石室	1	円環無刻型	管玉、切子玉、耳環、ガラス玉、白玉、須恵器	6C後半	『佐谷・脇田山古墳調査報告』福岡県教委1974
12	宇美観音浦KSS号墳	福岡県宇美町	円墳	横穴式石室	1	円環無刻型	ガラス玉、耳環、鉄鏃、直刀鏝、須恵器	6C末	『宇美観音浦』宇美町教委1981
13	土佐井1号墳	福岡県大平村	円墳	横穴式石室	1	円環有刻型	耳環、勾玉、丸玉、須恵器	6C後半・7C後半	『土佐井地区遺跡』大平村教委1990
14	グラントヤ2号墳	大分県日田市	円墳	横穴式石室	1	円環無刻型	耳環、ガラス玉、切子玉、銅鏡、直刀、鉄鏃、馬具	6C後半	『グラントヤ古墳群』日田市教委1986
15	草場13号墓	大分県日田市	方形周溝墓	溝内	1	円環無刻型		4C末～5C初	『草場遺跡』大分県教委1989
16	七双子2号墳	大分県杵築市	円墳	横穴式石室	3	円環無刻型	耳環、管玉、ガラス玉、鉄剣、刀子、鉄鏃、鉄鎌、須恵器	6C中頃～後半	
17	七双子4号墳	〃	円墳	横穴式石室	破片3	円環無刻型	耳環、勾玉、管玉、霰玉、丸玉、直刀、鉄鏃、須恵器	6C後半	『七双子古墳群』大分県教委1962
18	上ノ原22号横穴墓	大分県中津市		横穴墓	1	円環有刻型	貝輪、耳環、鉄鏃、刀子、須恵器	6C後半	
19	同69号横穴墓	〃		〃	1	円環無刻型	耳環、刀子、鉄鏃、貝輪、須恵器	6C後半	
20	同80号横穴墓	〃		〃	1	円環無刻型	馬具、鉄斧、鉄鏃、刀子、耳環、勾玉、管玉、切子玉、ガラス玉	6C後半	
21	朝田11号墳2号主体	山口県山口市	円墳	横穴墓	1	円環無刻型(有管)	勾玉、ガラス玉、刀子、須恵器	6C前半	『朝田墳墓群Ⅵ』山口県教委1983
22	竹並古墳	福岡県行橋市							

まず、時期については福岡県鋤先古墳、同花見1号墳、大分県草場13号方形周溝墓の4世紀末～5世紀初頭のものを最古のものとする。形態は円環無刻型で鋤先古墳の着装状態の詳細は不明であるが、花見1号墳はその出土状態から着装状態で埋葬したとは考えられないのは指摘のとおりである。おそらく、石製腕飾類の代用品として普及したものであろう。次に5世紀後半～6世紀前半にかけて円環有刻型と同無刻型が共存する。この円環無刻型のものが前代より引き続くものか、この時期に新たに有刻型の影響により出現したものか明確でない。現在まで5世紀中頃前後の銅釧の出土は北部九州内では管見の限りでは無い。今後の検当課題である。さらに6世紀中頃から後半にかけては両型式とも出土し、特に6世紀後半には出土量がピークに達する。この中には明らかに半島製のものも見られる。これには、当期にもたらされたものかあるいは上ノ原22号横穴墓出土例のように5世紀後半前後にもたらされたものが伝世され、6世紀後半に副葬された可能性も強い。いずれにせよ6世紀後半に実用的な装飾品として北部九州にこの種の銅釧が普及したことを物語っている。

次に、分布の特徴としては北部九州周辺部に偏在する。貝輪鉄釧が汎九州的に認められるのに比べ限定的である。この一つの要因として、基本的には朝鮮半島製の有刻型銅釧が北部九州にファッションとして普及し、それを模倣して無刻型銅釧が有刻型銅釧を入手できない周辺地域で使用されたものと考えられる。

最後に保有者の階層性、性差を検討する。出土した古墳は鋤先古墳を除き全て中・小円墳および横穴墓である。さらに共伴遺物では小型仿製鏡が散見されたり、ほとんどの古墳で直刀、鉄剣が見られること、鉄鏃の副葬が多いことなどから在地小首長層（村落首長）をふくむ有力家父長層を中心にこの種の銅釧が装飾品の一つとして普及したことが窺われる。

註(1) 小高 幸男 「古墳出土釧の基礎的研究—金属製釧について—」『研究紀要Ⅲ』1989年君津市文化財センター

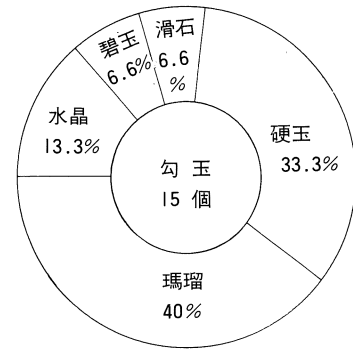
(ウ) 上ノ原横穴墓群出土の玉類

吉 武 牧 子

上ノ原横穴墓群では30基の横穴墓から、勾玉、管玉、切子玉、丸玉、ガラス小玉等の玉類が検出されている。以下これらの玉類について種類別に検討を加えていくことにする。

(1)勾玉

勾玉は9基の横穴墓から15個出土している。大きさは2.2~4.2cmであるが、2.5cm前後のものが大部分を占める。古墳時代前半までの勾玉は硬玉製のものが多く、他の素材が余り使われなかったのに対し、この時期になると多様な素材が使われ始める。特に瑪瑙製のものは古墳時代中期以降その数を増す。本横穴墓群からは、硬玉5、瑪瑙6、水晶2、碧玉1、滑石1と5種類の材質のものが発見されている(第464図)。形態をみると古式の勾玉のように頭部が丸く膨らみ、尾部にかけて細くなるといった優美なものではなく、全体の幅がほぼ同じものが多い。また、硬玉製勾玉はすべてC字形を呈するが、瑪瑙、水晶製勾玉はコ字形を呈する。一般的な流れからみると、勾玉の形態は時代が下がるにつれてC字形からコ字形に移行すると考えられている⁽¹⁾。素材との関係性をみると古い性質をとどめる硬玉製勾玉はC字形、後出する瑪瑙、水晶製勾玉はコ字形を呈しほぼこの流れに沿う形になっている。しかし、出土した横穴墓の年代との比較においては、前後関係を明確に把握することはできなかった。

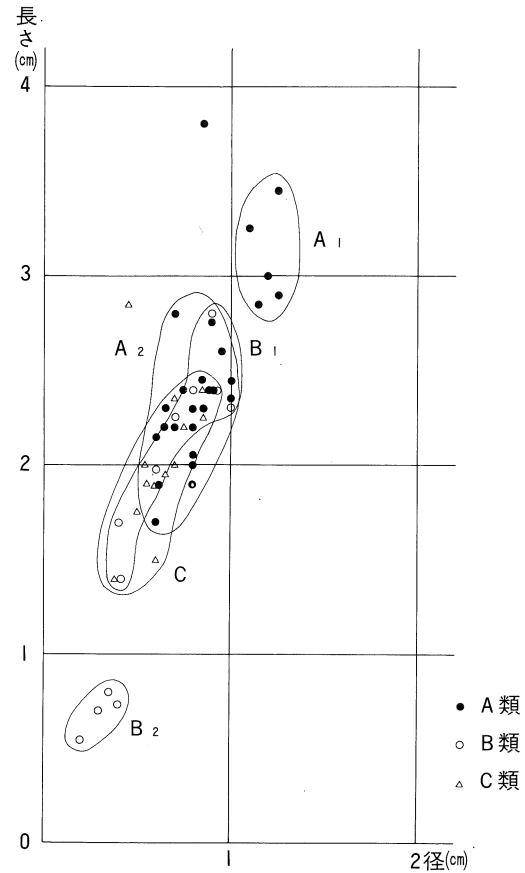


第464図 勾玉材質別構成比

(2)管玉

管玉は11基の横穴墓から61個出土している。この中で碧玉製管玉とみられるものは54個であった。これらを形態、色調、石質等によりA類、B類、C類に分類し、さらに5種類に細別した(第465図)。

- A 1類：長さ3.0cm前後、径1.2cm前後の大型品である。硬質で濃緑色を呈し、丁寧な仕上げ研磨が施されて、光沢がある。すべて片面穿孔である。
- A 2類：長さ1.7~2.8cm、径0.6~1.0cmの中型品である。A 1類と同様に硬質で濃緑色を呈し、丁寧な仕上げ研磨が施されて、光沢がある。ほとんど片面穿孔であるが、56号の1点のみ両面穿孔である。
- B 1類：長さ1.4~2.8cm、径0.4~1.0cmの中型品が中心で、やや小型のものも含まれる。硬質で灰緑色または青色を呈し、仕上げ研磨が施され光沢がある。8例中2例が両面穿孔である。
- B 2類：長さ0.7cm前後、径0.3cm前後の極小品である。比較的硬質で色調は淡緑、暗灰緑色と各々異なる。仕上げ研磨が施され光沢がある。57号から出土した1点のみ両面穿孔で、他は片面穿孔である。
- C 類：長さ2cm前後、径0.7cm前後の中型品が中心で、若干小型品も含まれる。軟質で淡緑~青緑色を呈し、大部分は風化し脆くなっている。13例中6例が両面穿孔、7例が片面穿孔である。

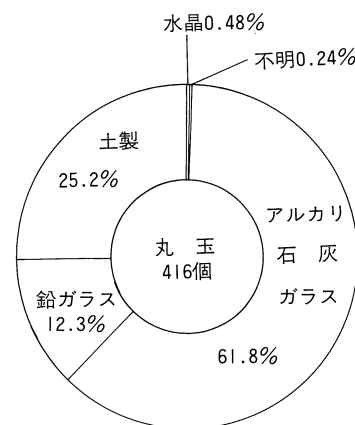


第465図 上ノ原横穴墓群出土管玉計測図

この中でA類は非常に良質な碧玉で、いわゆる出雲石と考えられる⁽²⁾。B類も比較的良質な碧玉であるが、A類に比べると質的にはやや劣る。C類は石質、色調等から緑色凝灰岩である可能性もあるが、ここでは一応碧玉の範疇に置いておく。一般に管玉は時代が下がるに連れて大型化する傾向が認められる⁽³⁾。よって編年的には、B2→C→B1→A2→A1の順に新しくなるとも考えられるが、横穴墓の年代から前後関係を指摘することはできず確実なことは言えない。ただB2類のような極小品は伝世品である可能性もある⁽⁴⁾。

(3)ガラス丸玉

ガラス丸玉は19基の横穴墓から検出されており、アルカリ石灰ガラス製(a類)と鉛ガラス製(b類)の2種類がある(第466図)。量的にはb類はa類の約5分の1である。a類には2通りの成形技法によってつくられたものが認められる。1つは巻き付け技法によるもので、この場合両端は表面張力によって丸くなり、内部の気泡は孔を中心とした渦巻状になっている。68号出土のガラス連玉はこの方法で作られたと考えられる。今1つは管切り技法によるもので、この場合の両端は平になり、内部の気泡は孔に平行に伸びている⁽⁵⁾。上ノ原から出土した丸玉は圧倒的に管切り技法によるものが多く、巻き付け技法によるものは少量混じる程度である。両者は同一の横穴墓から出土しており、成形技法の違いによる年代差はないものと考えられる。色調は数個の例外を除いてすべて藍である。

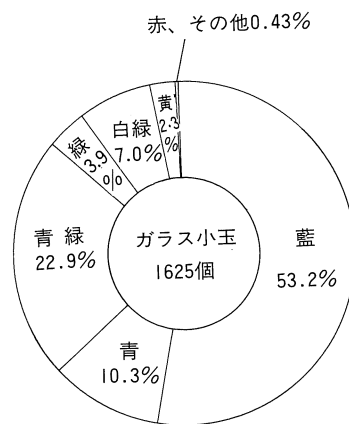


第466図 丸玉材質別構成比

鉛ガラスには弥生時代の系譜を引くものと、古墳時代後期になって出現するものの2種類がある。上ノ原例はもちろん後者の例である。鉛ガラス製丸玉は全体にアルカリ石灰ガラス製丸玉より大きく、重量感がある。また多くは表面が風化して白色化しているが、色調の判別できるものはすべて緑色を呈している。時期的には上ノ原IV a期(6世紀末)以降の盛期横穴墓からのみ出土しており、アルカリ石灰ガラス製丸玉より後出する。

(4)ガラス小玉

ガラス小玉は出土数数個の横穴墓から数百個のものまで量的にはばらつきがあるものの、30基中実に26基の横穴墓から検出されている。色調は藍、青、青緑、緑、白緑、黄、赤褐色と多岐に渡っており、ガラス丸玉がほとんど藍1色であるのとは対照的である。色彩別の割合を表したのが第467図である。これを見ると半分以上を占める藍色に青、青緑系系統を加えると約97%となり、黄色と赤褐色はわずか3%にも満たない⁽⁶⁾。黄色ガラス小玉のこのような傾向は他の古墳にも認められ、橋本博文氏によって検討が加えられている。それによると、同一古墳内のガラス小玉総数に占める黄色ガラス小玉の割合は5%以下が圧倒的に多く、その理由を全体の生産量が少なく貴重であったためと推測している。またその入手ルートについては、地域の首長→族長層という流れを想定している。これは首長墓クラス古墳の中に多量に黄色ガラス小玉を副葬している例がみられるためである。橋本氏は黄色ガラス小玉の割合が高い例として千葉金鈴塚古墳、大阪富木車塚古墳を上げているが、近年調査されその豊富な副葬品で話題になった奈良藤ノ木古墳からも大量に出土しており、注目される⁽⁷⁾。次に同様に出土数の少ない赤褐色ガラスは還元条件下で銅を加えることによって発色する機会が多い。これは藍色系統に比べてより高度な技術が必要であり、希少性の根拠となりうる⁽⁸⁾。



第467図 ガラス小玉色別構成比

(5)その他の玉類

本横穴墓群より出土した玉類の主なものは前述した4種類であるが、それ以外としては切子玉、滑石製白玉、土製練玉、平玉、ガラス管玉が確認されている。

切子玉は水晶製が18個、碧玉製が1個出土している。一般に切子玉は水晶の結晶体を利用して作られたため、水晶製のものが多く、碧玉製のものは極めて稀である。橋本氏が集成したものに本例を加えても14例に過ぎない(第195表)。上ノ原24号から出土した碧玉製切子玉は長径1.3cm、短径1.15cmであり、共伴する水晶製切子玉と同じ大きさである。使用石材はA類管玉と同じ良質の碧玉である。24号からはA類管玉も多数出土している。

滑石製白玉は5基の横穴墓で検出されたが、まとめて出土したのは20号(84個)のみである。直径6mm、厚さ2~3mm前後のものが大半を占めるが、厚さが1mmに満たないものも4分の1程度みられる。側面には明瞭な研磨痕があり、擦痕方向は上下面に対して直行している。上下面の研磨痕は明瞭ではない。白玉の製作工程については各種の方法が指摘されている。1つは現在の千葉県を中心とした地域の玉作遺跡においてみられる、八代・大和田技法と称するものである、これは荒割によって得られた偏平な板状品を切裁または切削して形割末製品を作り、その後穿孔→周縁研磨を行う方法である。また他には、板状の石材に溝を基盤目状に刻み分割する方法、管玉状の石棒を作り切断する方法等が推測されているが、未だ確証を得ていない⁽¹⁰⁾。しかし、20号横穴墓から出土した白玉はすべて直径が同じである点、厚さの非常に薄いものがある点、石質が均質である点等から、管玉状のものを切断した可能性が高いと考えられる。今後の製作跡調査の成果に期待したい。

第195表 碧玉製切子玉出土地名表(梶山古墳報告書〔註6〕より転載、一部補足)

番号	出土地	副葬品
1	茨城県鹿島郡大洋村梶山古墳	瑪瑙勾玉19、ガラス勾玉4、その他勾玉1、水晶切子玉26、碧玉管玉9、ガラス管玉1、琥珀棗玉3、水晶算盤玉1、白玉5、ガラス丸玉8、石製丸玉1、小玉類645、直刀10、把頭4、刀子1
2	栃木県芳賀郡芳賀町小貝村大字田野辺字駒塚	硬玉勾玉1、瑪瑙勾玉9、水晶切子玉10、碧玉管玉2、ガラス小玉一括、琥珀棗玉1、金環2
3	新潟県佐渡郡相川町鹿伏	水晶切子玉2、水晶蜜柑玉1、硬玉棗玉1、瑪瑙丸玉1、滑石白玉1、ガラス小玉1、ガラス丸玉7、金環9
4	石川県江沼郡分枝村字分枝	硬玉勾玉1、碧玉勾玉1
5	静岡県沼津市天神洞3号墳	瑪瑙勾玉6、水晶切子玉17、水晶算盤玉、碧玉管玉2、碧玉平玉4、ガラス小玉50、丸玉11、金環2
6	静岡県小笠郡城東村一ノ谷横穴	
7	和歌山県那賀郡田中村大字竹房590	碧玉管玉13、ガラス管玉2、瑪瑙丸玉1、水晶丸玉1、琥珀小玉2、ガラス小玉2連 銅環2、鉄鏃、須恵器・長頸埴・坏・埴、土師器・坏・埴
8	岡山県児島市塩生字高島	土製丸玉5、鉄鏃1
9	鳥取県日野郡日野上村宮内大字矢戸字名土山林	変形文鏡1、ガラス小玉28
10	鳥根県知夫郡黒木村大字美田字立石	瑪瑙勾玉4、碧玉勾玉1、水晶切子玉4、碧玉管玉1、ガラス玉4、須恵器平瓶 長頸壺・脚付長頸埴・埴・高坏・盃・坏身・蓋・埴瓶、刀、槍、鉄斧
11	福岡県浮羽郡福富村大字富永1450	水晶切子玉1、碧玉管玉6、ガラス小玉17、馬鍬1、刀2、鉄斧、鉄鏃、金銅製馬具 須恵器脚付埴2・埴・高坏・埴2・埴瓶
12	佐賀県三養基郡基山町大字上野上野古墳第1遺散	碧玉管玉14、水晶切子玉3、ガラス丸玉59
13	群馬県伊勢崎市権現山南面	水晶平玉1
14	大分県下毛郡三光村大字佐知~大字山上下ノ原横穴墓群	本報告書参照

土製練玉は10基の横穴墓から111個出土している。丸玉、管玉、連玉の3種類がみられるが、圧倒的に丸玉が多い。色調は表面が黒っぽく、断面は淡褐色である。おそらく細い棒状のものに粘土を巻き付けて成形したと推測される。時期的には上ノ原IV a期以降の盛期横穴墓が中心である。

平玉とは丸玉を両側面から押し潰したように偏平で、平らな面に平行して孔が穿たれているものをいう。一般に碧玉製、水晶製のことが多い。本横穴墓群では56号よりガラス製2、80号より碧玉製1の3点が出土している。ガラス製は透明な淡い水色で、表面に白っぽく気泡の痕がみられる。80号の平玉はA類管玉と同じ良質な碧玉で作られており、表面は丁寧な仕上げ研磨が施されている。

ガラス管玉は弥生時代に多くみられ、本横穴墓群からは27号1、56号1、68号2個が出土したのみである。27号のものは透明な緑色で形態的には管玉と考えられるが、本来の孔とは別に側面に1ヶ所孔が穿たれている。56号のものは不透明な淡青色を呈す中型品で、68号出土の管玉は藍色と緑色を呈し形態的にはB2類管玉に近い極小品である。ガラス管玉は石製のものをまねて作られたと考えられている。上ノ原出土のガラス管玉が中型もしくは極小品であることは、これらが古墳時代に作られたものではない可能性を示すとも考えられる。

(6)玉類の種類と横穴墓の年代

各横穴墓からどのような玉類が出土しているかは第196表に示した通りである。これより1つの横穴墓から何種類の玉が出土したかを調べて、A～L類の12パターンに分類した。ただし出土数の極端に少ないものは除いた。

まずA～Dは7、6種類の玉が同一横穴墓から出土するパターンで、Aが7種類、B～Dが6種類のバリエーションである。A～Dに共通する要素は勾玉、切子玉、丸玉、小玉であり、A～Cでは更に管玉も加わる。これらのパターンは上ノ原Ⅲb～Ⅳの盛期横穴墓においてみられる。E～Hは5、4種類のパターンで、E～Gが5種類、Hが4種類のバリエーションである。E～Hに共通する要素は管玉、丸玉、小玉である。E、G、Hは上ノ原Ⅲb～Ⅳの盛期、Fは上ノ原Ⅱの初期横穴墓においてみられる。I～Lは3、2種類のパターンで、I、Jが3種類、K、Lが2種類のバリエーションである。この4パターンにはすべてに共通する要素はなく、I～Kでは丸玉、J～Lでは小玉が共通要素となる。I、Kは上ノ原Ⅰ～Ⅲa期(初期)、Lは上ノ原Ⅰ～Ⅲb期(初期1、盛期2)となるが、

第196表 各横穴墓の出土玉類構成パターン

玉の種類 分類パターン	勾玉	管玉	切子玉	丸玉	小玉	滑石製 白玉	土製 練玉	その他	横穴墓番号
A	○	○	○	○	○	○	○		24
B	○	○	○	○	○		○		16 54 61
C	○	○	○	○	○			○	80
D	○		○	○	○		○	○	51
E	○	○	○	○	○				55
F	○	○		○	○			○	68
G		○		○	○		○	○	56
H		○		○	○		○		57
I	○	○		○					27
J				○	○		○		59
K				○	○				78
L					○	○			20 62 64

パターンLの2基の盛期横穴墓は初葬が各々Ⅲb、Ⅱ期であり、古い様相を呈する。

以上各パターンを分析すると、4種類以上の玉をもつパターンではF以外すべて盛期横穴墓である。逆に3種類以下のパターンでは初期の割合が高くなり、盛期も比較的古い時期のものが多い。つまり本横穴墓群においては古い時期の横穴墓に副葬される玉の種類は少なく、時期が新しくなると多種類の玉を副葬するようになる。

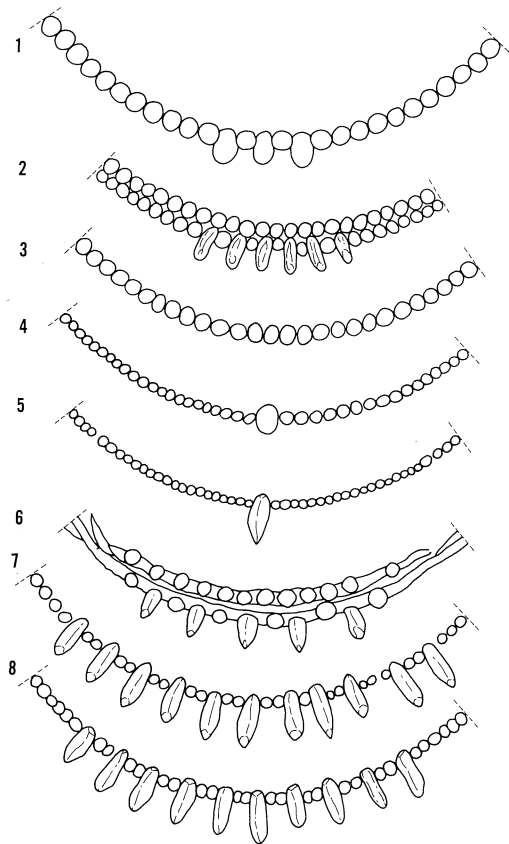
(7)玉類の組合せ

これまで玉類の組合せ研究は、人物埴輪に表現された頸飾り等を観察することによるものが多く、石塚久則氏、橋本博文氏によって分類がなされている。石塚氏は群馬塚廻り古墳群の資料を基に頸飾りを1～8類に分類し(第468図)、橋本氏はそれに類例を加えて『常陸梶山古墳』⁰⁴の中でa～qの17類に分類している(第469図)。各古墳の年代は塚廻り古墳群が6世紀第2四半期～第3四半期、梶山古墳は6世紀末葉～7世紀初頭、前葉に比定されている。本横穴墓群において比較的まとまった数の玉類の出土状態がわかっているのは6基である。以下橋本氏⁰³の分類を参考にしながら、1つの装身具を構成するグループと考える玉類の組合せを各横穴墓ごとに検討していきたい。

16号からは瑪瑙勾玉1 + 碧玉管玉3 + 水晶切子玉6 + ガラス玉58が、玄室左側奥壁寄りの3、4、5、(6)号人骨付近直径50cmの範囲に散布状態で出土した。復原調は34.5cmで頸飾りとしてはほぼ適当な長さである。こ

の組合せは橋本分類の i 類に切子玉を加えたものであり、玉類のみから性別は断定できないが、鉄鏃を伴うことから男性の可能性が高い。

24号ではA、B、C、Dの4群が検出されている。A群は瑪瑙勾玉1 + 碧玉管玉11 + ガラス丸玉2 + ガラス小玉1で、左側壁ぎわ中央付近より1連に連なったような状態で出土した。勾玉は43×13.5mmと大きく、A1類管玉との組合せはバランスがとれている。復原長は31.5cmで頸飾りと考えられるが、出土地点のわからないガラス小玉が加わると更に長くなる可能性もある。i類に分類でき、鉄刀と鉄鏃をもつ被葬者に伴うとみられる点からも、着装者は男性と推定される。B群は水晶勾玉1 + 碧玉管玉6で、右壁ぎわ奥壁寄りに1列に並んだ状態で出土した。復原長は14.5cmで頸飾りとしては短い。管玉を使用した手玉の例はこれまであまり知られておらず、やはり頸飾りと考えたい。分類はi類に最も近い。C群は碧玉管玉2 + 碧玉切子玉1 + 水晶切子玉1 + 滑石白玉13 + ガラス小玉5で、B群のやや北側で出土した。おそらく同一被葬者に伴うものであろう。2個の切子玉は素材は違うが、形も大きさもほぼ同じである。復原長は約16.7cmで頸飾りとしては短く、手玉とも考えられる。ただし出土地点不明のガラス小玉が加わる可能性もあり、長さの点からのみ特定はできない。ま



第468図 塚廻り古墳群出土人物埴輪頸飾り集成図
(報告書〔註13〕より転載)

類	表 現	埴輪の種類
a		女子・皮袋を捧げ持つ
b		女子・鈴籠を下げ倚坐する 巫女 女子・盛装
c		女子・褌をかけて響応する
d		女子・響応する巫女 女子・盛装 女子・
e		女子・ 女子・踊る
f		女子・柑を両手で捧げる
g		女子・両手を挙げる
h		女子・頭に壺をのせる 男子・大刀を下げる
i		男子・
j		男子・高い帽をかぶり 大刀を下げる
k		男子・太鼓打ち 男子・倚坐する
l		女子・倚坐し響応する巫女
m		女子・坏持ち
n		男子・跪坐する 男子・琴弾き 男子・挂甲武人
o		女子・大刀持ち 男子・衝角付青着用武人
p		女子・左手を挙げる 女子・袈裟衣
q		女子・坏持ち

第469図 人物埴輪頸飾り集成図
(梶山古墳報告書〔註6〕より転載、一部改変)

たこの組合せは橋本分類には当てはまるものがない。D群は土製丸玉17個で、右袖付近より固まった状態で出土した。m類に分類されるが、復原長11.2cmで頸飾りとしては短い。性別は橋本分類では群馬塚廻り3号墳の例より女子とされているが、男性埴輪にも多くの類例がみられる。この場合鉄鏃を伴う点を考慮に入れると、男性の可能性が高い。

27号からは硬玉勾玉1 + 碧玉勾玉1 + 碧玉管玉10 + ガラス丸玉9が、右側壁に沿って埋葬されていた3号人骨の頸部付近から出土した。明らかに頸飾りとして装着していたと考えられる。3号人骨は女性であり、橋本分類では勾玉を多用するものはすべて女性である点からも矛盾がない。

54号からはA、Bの2群が検出された。A群は鉛ガラス丸玉13で左袖付近より出土した。耳環2個を伴う点から耳玉の可能性もある。しかしこの他に19個の鉛ガラス丸玉が周辺から出土しており、全体を1つのグループと考えるとm類の頸飾りとも考えられる。B群は硬玉勾玉1 + 碧玉管玉8 + 水晶切子玉1でA群の東より検出された。復原長は約17cmで頸飾りとしては短い。ただし周辺から検出されたと思われる土製丸玉もしくはガラス小玉を足すと、適当な長さになる。橋本分類に当てはまるものはみられない。A、B群は同じ被葬者に伴うと推定される。

64号ではガラス小玉224以上 + 滑石白玉2が南隅付近から出土した。小玉の色は藍、青、青緑、緑、赤褐色とバラエティーに富む。復原長は48cmでm類の頸飾りと考えられる。4号人骨との関連が強い。

78号からはA、B、C3群が検出された。A群はガラス丸玉24で、玄室中央やや奥壁よりから出土した。復原長は16.6cmで手玉と考えられる。B群はガラス丸玉2 + ガラス小玉76でA群の南西約30cmの位置から出土した。復原長20.9cmで長さからみると手玉の可能性が高い。C群はガラス丸玉2 + ガラス小玉106で、A群の西約45cmの位置から出土した。復原長は27cmで分類上はkもしくはn類に近く、頸飾りと考えられる。おそらくA、B、C群は同一被葬者に伴うものであろう。k、n類は男性埴輪に表現されており、奥壁よりの出土位置からも着装者は初葬人骨である可能性が高く、従って男性と推定される。

以上、6基の横穴墓において玉類は12にグルーピングできた。そのうち同一被葬者のものと考えられるグループもあるため、着装者数は8と推定できる。副葬品、人骨等により性別をほぼ特定できたのは6で、橋本氏の分類と一致するのは24号 - A群 (i類=男)、64号 (m類=女)、78号 (k、n類=男)の3グループである。また勾玉の多用は女性に限られるという特色は、27号 (女性)の組合せと一致する。しかし橋本氏の類型ではまったく分類できない組合せもある。橋本氏は1性別、2職掌・身分の差により玉類の構成の異なる点を指摘している。上ノ原の例からこれらの特色がある程度普遍性をもつものと予想できるが、地域、時期による生産地、流通経路の違い、更には人々の好みの変化等によって玉類の構成は影響を受けたと考えられる。今後玉類を伴う人骨の分析、副葬品の構成によって着装者の性別、階層等を把握した上で、玉類の組合せを検討していく必要がある。

註

- (1) 樋口清之、永峯光一「装身具」『新版考古学講座』5 雄山閣 1970
- (2) 河村好光「玉生産の展開と流通」『岩波考古学講座 日本考古学』3 1986
- (3) 註2に同じ
- (4) 註2に同じ
- (5) 小田幸子「ガラス工」『新版考古学講座』9 雄山閣 1971
小瀬康行「管切り法によるガラス小玉の成形」『考古学雑誌』73-2 1987
- (6) 橋本博文他『常陸梶山古墳』大洋村教育委員会 1981
- (7) 奈良県立橿原考古学研究所『斑鳩藤ノ木古墳概報』吉川弘文館 1989
奈良県立橿原考古学研究所『藤ノ木古墳とその時代展』(財)NHK サービスセンター 1989
- (8) 山崎一雄「対馬と登呂から出土したガラス玉の科学的研究」『古文化財の科学』8 1954
富沢威「古代ガラスの化学」『続考古学のための化学10章』東京大学出版 1986
- (9) 原田淑人「玉類」『新版考古学講座』1 雄山閣
- (10) 寺村光晴『古代玉作形成史の研究』吉川弘文館 1980
置田雅昭「古墳時代手工業の一例」『国分直一博士古稀記念論集 考古編』1980
- (11) 寺村光晴『古代玉作形成史の研究』吉川弘文館 1980
- (12) 註2に同じ
- (13) 石塚久則他『塚廻り古墳群』群馬県教育委員会 1980
- (14) 註6に同じ
- (15) 伊藤雅文「古墳時代装身具の社会性について (覚書)」『網千善教先生華甲記念考古学論集』1988

第197表 上ノ原横穴墓群出土玉類一覧表

横穴 番号	横 穴 墓 時 期	絶 対 年 代	勾玉	管玉	切子玉	ガラス丸玉				そ の 他	そ の 他 の 副 葬 品			人 骨			備 考
						鉛	アルカ リ石灰	ガラス 小玉	滑石製 白玉		土製 丸玉	土器	鉄器	装身具			
2	IV古~IV新	6c後半 ~7c末								2		鉄鏃、刀子 馬具					
3	II(初葬) III古(最終埋葬)	5c末~6c初 6c前半				1	39+ α					鉄鏃、刀子		1	2	1	
16	III新(初葬) IV(追葬)	6c中葉 6c後半~7c 初	1	4	6	8	50+ α		1		広口壺、提瓶	鉄鏃、刀子 馬具	耳環				人骨は6体?で、男性が含まれる と思われるが、詳細不明
20	III古(初葬) IV新(最終埋葬)	6c後半 6c末~7c初					40+ α	84			高坏、提瓶	鉄鏃、刀子 不明鉄器	耳環				
21	I(初葬) II(追葬)	5c後半 5c末~6c初					21+ α					鉄剣、鉄鏃	鉄製装身具?	2	2		
24	III新(初葬) IV古(追葬)	6c中葉 6c後半	2	19	2	2	64+ α	13	20		埴蓋 長頸壺蓋	直刀、鉄鏃 小刀、刀子 馬具	貝輪				
27	I~II (初、追葬) III古(最終埋葬)	5c後半~6c 初 6c前半	2	9	8					赤茶丸玉 1 (ガラス?) ガラス管玉? 1	壺、土師埴 刀子	鉄鏃、石突 刀子		2	1		玉類は3号人骨に着装 1→2→3号の順に埋葬されて いるので、3号は最終埋葬
28	IV新(初葬) V(追葬)	6c末~7c初 7c前半			2		2				坏蓋身 平瓶 脚付平瓶、甕 破片	鉄鏃、刀子					
32	I(初葬) ?(追葬)	5c後半				4	α				高坏、土師埴、 甕片	直刀、刀子 斧					
40	III新~IV古 (初葬) IV古(追葬)	6c中葉~6c 後半 6c後半						1			埴瓶	直刀、鉄鏃 刀子	耳環				
48	II~III古	5c末~6c前 半						1				鉄鏃、刀子	不明鹿角製品	1			
49	IV古	6c後半		1							蓋	鉄鏃					
51	IV古~新	6c後半~7c 初	2		2	18	31		10	算盤玉 1		圭頭大刀 鉄鏃 刀子、鏢片					
54	IV古 IV新 VI	6c後半 6c末~7c初 7c中葉	1	8	1	32	3	115		55+ α	土製連玉 1	直刀、鉄鏃 刀子、鏢、斧					
55	V VII	7c前半 7c末~8c初	1	2	2	5+ α	10	128+ α			水晶丸玉 1 緑茶丸玉 1 (ガラス?)	平瓶		耳環			
56	III新	6c中葉		7		5	4		1	土製連玉 1 ガラス平玉 2		鉄鏃、馬具	耳環				
57	IV古	6c後半		1	7	4	51		1			鉄鏃、刀子 馬具	耳環				
59	V	7c前半				5	67		1	水晶丸玉 1 朱赤丸玉 1 (ガラス?)		直刀、刀子	耳環				
61	IV新~V	6c末~7c前 半	1	1	4	21	21+ α		13+ α	土製管玉 4		鉄鏃	耳環				
62	II(初葬) III新(最終埋葬)	5c末~6c初 6c中葉					183+ α	7				鉄鏃、刀子 (馬具)					
64	I(初葬) III古(追葬)	5c後半 6c前半					224+ α	2				鉄鏃、刀子		1	2		人骨は全部で4体だが、1体は 性別不明
66	III古	6c前半					27+ α										
67	IV新~V	6c末~7c前 半				2	5				坏蓋						
68	II	5c末~6c初	2	2		138	435+ α				ガラス連玉 3						
69	IV新~V (III新~IV古の 可能性あり)	6c末~7c前半 (6c中葉~後 半)			1		7				平瓶、高坏、 甕	鉄鏃、刀子	貝輪				
70	II	5c末~6c初					41		2			刀子					
71	IV新	6c末~7c初				1	9+ α				埴瓶、甕		耳環				
73	III古	6c前半				1	5										
78	I~II	5c後半~6c 初				32	209+ α										
80	IV新	6c末~7c初	3	2	2	7	20	56			碧玉製平玉 1						

(2) 鉄器

(ア) 刀装具の銀象嵌装飾文様について

吉田 寛

上ノ原横穴墓群の調査において、40号横穴墓および59号横穴墓の玄室内よりそれぞれ1振、計2振の銀象嵌装飾文様を持つ刀装具を備えた大刀が出土した。出土状況と共伴する須恵器から、前者は上ノ原Ⅳ期古段階（TK43併行）、後者は上ノ原Ⅴ期（TK209新段階併行）に位置付けられる。今回得られた遺物が、上ノ原横穴墓群出土遺物の中では優品の部類に属することや、この種の大刀が1遺跡の調査で複数出土し、それぞれが時期差を持って検出されていることに着目し、ここに検討の1項目を設けることにした。

古墳時代の大刀や刀装具に施される象嵌文様についての系統的な研究は、1940年の神林淳雄の論考⁽¹⁾に始まる。資料が制限された戦前に公表されたものであるが、象嵌文様が施される刀装具の分類や象嵌文様の系譜の追求など、その検討は多方面に渡っている。1978年には埼玉県稲荷山古墳出土の鉄剣より115文字からなる金象嵌文字が発見され⁽²⁾、これを契機としてX線透過装置が鉄製品の調査に使用されることが多くなった。そして、これに伴う象嵌文様を持つ遺物の発見も増加し、資料の蓄積もなされている。さらに近年では、電子顕微鏡などの精密機器を使用した象嵌の形状分析や理科学的分析にまで、検討の手が加えられつつある。

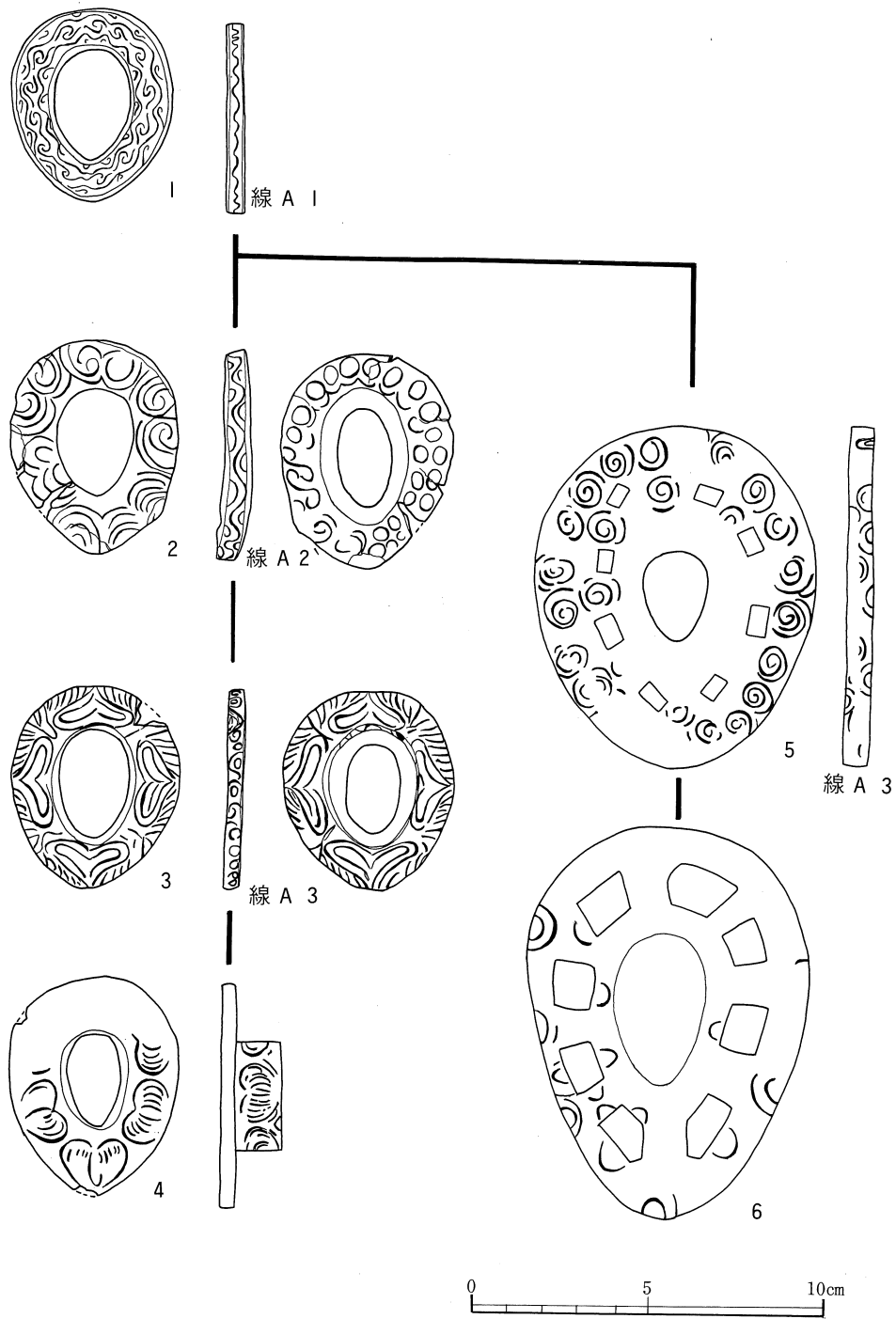
また1986年には西山要一が「古墳時代の象嵌—刀装具について—」⁽⁴⁾と題する論考を発表し、刀身や刀装具に施された象嵌文様を集大成した。本項目では、この西山の業績に従って、上ノ原横穴墓群出土の銀象嵌装飾文様付鏝の位置付けを行いたい。

まず最初に、上ノ原横穴墓群出土の銀象嵌装飾文様を持つ刀装具を備えた大刀の概略を記述しておきたい。40号横穴墓の出土例は、全長94.8cm、刀身幅3.6cmを測る直刀で、茎には1孔の目釘穴を有する。刀装具としては鏝、柄元金具を備え、鏝の縁部には銀象嵌の装飾文様を施す。鏝は倒卵形で6窓の透かしを有する。長径6.8cm、短径6.0cm、内孔は長径4.0cm、短径2.6cm、縁部の幅は0.6cmを測る。縁部に施された象嵌文様は、波状文を基本として、その上下の凹部に勾玉形文を加えたモチーフで構成される。勾玉形文は一方の端部を太く、一方の端部を細く流すように象嵌しており、表現法は精美である。共伴する須恵器は上ノ原第Ⅳ期古段階（TK43併行）で、6世紀後半に比定される。59号横穴墓の出土例は、全長69.2cm、刀身幅3.2cmを測る直刀で、茎には2孔の目釘穴を有する。刀装具としては鏝、鉏柄縁金具を備え、それぞれに銀象嵌の装飾文様を施す。鏝は倒卵形で、透かし孔を持たない無窓のものである。長径5.7cm、短径4.9cm、内孔は長径3.0cm、短径2.1cm、縁部の幅は0.5cmを測る。鏝の縁部と裏表には、銀象嵌による装飾文様を有する。縁部に施された象嵌文様は、二重半円文・半円文・S字状文・U字状文などが乱雑に組み合わせられる脱化したものである。この文様は、40号横穴墓出土例などに見られる縁文様から変化したものであろうことが推定される（後述）。表裏文様は、内孔に沿って巡らされる楕円形の圏線と4単位の二重心葉形文を基本とするモチーフで構成される。表・裏の文様モチーフは同一のものである。

鉏金具は、長径3.0cm、短径2.1cm、幅1.8cmを測り、外面には起伏の大きい波状文が施される。波状文の起点と終点が一一致しておらず、文様構成は精美とは言い難い。柄縁金具は、長径3.5cm、短径2.6cm、幅0.5cmを測り、外面には18単位の半円文を象嵌する。大刀に共伴する須恵器は上ノ原第Ⅴ期（TK209新段階併行）で、7世紀前半前後に比定される。

さて、40号と59号横穴墓出土の両資料を相互に比較すると、象嵌文様—特に鏝の縁部の装飾文様—に精粗の変化が読み取れ、さらにそれが共伴する須恵器から傍証されているように思える。鏝の縁部の象嵌文様に型式学的な変化が認められることは、既に西山が指摘している。そこで上ノ原横穴墓群出土資料に関連すると思われる鏝金具に施された象嵌文様を集成し、以下検討を加えたい。

西山による1986年の論考によると、鏝金具縁部の象嵌文様は愛知県木森1号墳や静岡県宇洞ヶ谷横穴出土例にみられる波状文から分岐して、以後3系列に変化する。ひとつは以下詳述する波状文の凹部の勾玉形文・半円文を加える文様のグループ、いまひとつは岐阜県宮の脇2号墳に見られるような両側直線間に勾玉形文を配列する文様のグループ、さらにいまひとつは鳥根県岡田山1号墳に見られる複合鋸歯文である。本項目ではそれぞれの



第470図 刀装具鐸の象嵌文様

1. 大森1号墳 2. 竹並G-121-1横穴墓 3. 上ノ原59号墓 4. 伝・伊勢 5. 東禅寺2号墳

文様をA類、B類、C類と仮称し、ここでは上ノ原横穴墓群出土資料に関連するA類の変化を追ってゆきたい。型式学的な観点から、集成した鍔金具の縁部文様A類の分類を行う(第470図)。A1類は木森1号墳例に見られるような波状文のみを施すもの。A2類は波状文の凹部に勾玉形文・半円文を加える文様を持つもので、40号横穴墓例はこれに属する。福岡県竹並遺跡G-121-1号横穴墓出土例の縁部文様はA2類に類似しているが、波状文の凹部の文様が半円文に硬化しており、後出的である。これをA2類とする。A3類は二重半円文の弧線部を上下に向かい合わせて配列するものである。この文様構成は、A2類の波状文が山・谷ごとに分離したものであることが指摘されている。上ノ原59号横穴墓例はこれに属する。この文様はさらに半円文の弧線部を上下に向かい合わせて配列するものに変化する。これをA4類とする。以上指摘した分類は、その文様構成の変化・脱化から、A1類→A2類→A2類・A3類→A4類の変化の方向が想定される。

次に、鍔金具の表裏文様の検討を行う(第470図)。鍔金具の表裏に施される象嵌文様もいくつかの種類に分類されるが、ここでは上ノ原59号横穴墓例に関連する文様の系列を指摘するに留める。上ノ原59号横穴墓例の表裏文様の原型と考えられるものは、木森1号噴出土例に見られる。木森1号墳例は内孔の近い部位から、波状文+連続S字状文+波状文+勾玉形文という構成をとる。竹並遺跡G-121-1号横穴墓例では、木森例の内側の波状文の山・谷の部位が一つの単位文様として認識され、渦状文2単位をブロックとする文様へと変化する。上ノ原59号横穴墓例では、この渦状文2単位がさらに二重心葉形文へと変化する。上ノ原例では4単位の二重心葉文を主文様として、その間を短い曲線文で充填している。上ノ原例よりさらに文様が脱化しているが、このような心葉形文を単位文様として採用するものは、栃木県飯塚2号噴出土例がある。東京国立博物館所蔵の伝群馬県内出土例では、心葉形文の間を充填する短曲線を消失し、加えて心葉形文自体もクローバー状に変化している。この系列の最終段階のものであろうと思われる。また、これとは別の変化の方向をたどるものがある。愛知県東禅寺2号墳例は木森1号墳例の文様と大きなヒアタスを認めるものの、木森例の波状文を省略して文様構成をとる。基本となる文様は渦状文である。栃木県トトコチ山古墳例では、これよりさらに文様が脱化し、二重半円文や半円文を主文様とするようになる。

以上、上ノ原59号横穴墓出土例に関連する鍔金具の表裏文様の変化の方向は、次のようにまとめられる。

木森1号→竹並G-121-1号→上ノ原59号・飯塚2号→伝群馬県内

(+) →東禅寺2号→トトコチ山

実例不足で、上記の文様の変遷を類型化することは今回差し控えたいが、基本的には文様が精美なものから脱化したものへと変化していることがうかがわれる。また、この変化は先に指摘した縁部文様の変化の方向とも軌を一にしている。

そこで、象嵌文様を持つ鍔金具の分類を類型可能な縁部文様の分類で代表させ、共伴須恵器との関連を検討する。A1類・A4類は須恵器との共伴は明らかでない。A2類は大分県下の例でいえば、上ノ原40号横穴墓とガランドヤ2号墳でTK43段階のものと共伴している。A2類の竹並G-121-1号横穴墓、A3類の上ノ原59号横穴墓ではTK217段階の須恵器と共伴する。依然として須恵器との共伴例が少ないものの、縁部文様の変化の方向は須恵器編年の成果とも矛盾せず、A1類→A2類→A2類・A3類→A4類の変化の想定が妥当であることを傍証している。

上ノ原横穴墓群出土の大刀の銀象嵌装飾文様について検討した。2振の大刀に施された象嵌文様は、集成した同時代の類例から想定される文様の変化の流れの中に無理なく位置付けられることが判明した。

最後に、銀象嵌装飾文様をもつ刀装具を備えた大刀の製作地とその性格を推定してみよう。縁部文様A1類を持つものは、その出土例が非常に少ないことや表裏の象嵌文様が非常に端正であることを考えて、列島外での製作である可能性を考慮しなければならない。列島内での作品であるとしても、例えば朝鮮半島からの渡来工人等が製作のかなりの部分で関与した初期の優品である可能性が大きい。縁部文様A2類・A3類を持つものは、類例がかなり多くなり、九州と関東に分布の中心を持つ。このような分布のあり方は、龍鳳環頭大刀などの装飾付大刀の分布と軌を一にする。このことは銀象嵌装飾文様をもつ刀装具を備えた大刀の製作地が畿内地方周辺に求

められ、これらに中央政権によって下賜、あるいは配布された可能性が大きいことを示している。縁部文様A 4類を持つものは、類例が少なく判断が難しいが、A 2類・A 3類と同様の解釈をしておきたい。

装飾付大刀については研究が進んでおり、それがヤマト政権内での特定の地位・職能の表徴としての意味を持つことが論証されている。さらに装飾付大刀どうしにも、例えば龍鳳環頭大刀・頭椎大刀→圭頭大刀→三累環頭大刀⁽⁵⁾というような階層性が認められることも指摘されている。つまり古墳時代後期のヤマト政権では特定の地位や職能に応じた大刀の配布システムが存在していたことが指摘され、銀象嵌装飾文様をもつ刀装具を備えた大刀で木装の柄頭を持つものもその底辺の部分を支えた文物としての位置付けが可能である。それはこの種の大刀が群集墳の横穴式石室や横穴墓より出土することからも裏付けられ、この種の大刀を手にした者は小地域の首長層ないしは家長層であったことが推定される。上ノ原横穴墓群の銀象嵌装飾文様を持つ刀装具を備えた大刀も例外でなく、この遺物が当時の中央政権との関わりを示す象徴的な意味を持つ遺物であることを示している。

上ノ原横穴墓群出土の銀象嵌装飾文様を持つ刀装具を備えた大刀から、この種の遺物の変遷とその性格を検討した。紙幅の関係より論じ残したことも多く、全般的な考察は別稿に譲りたい。⁽⁶⁾

註

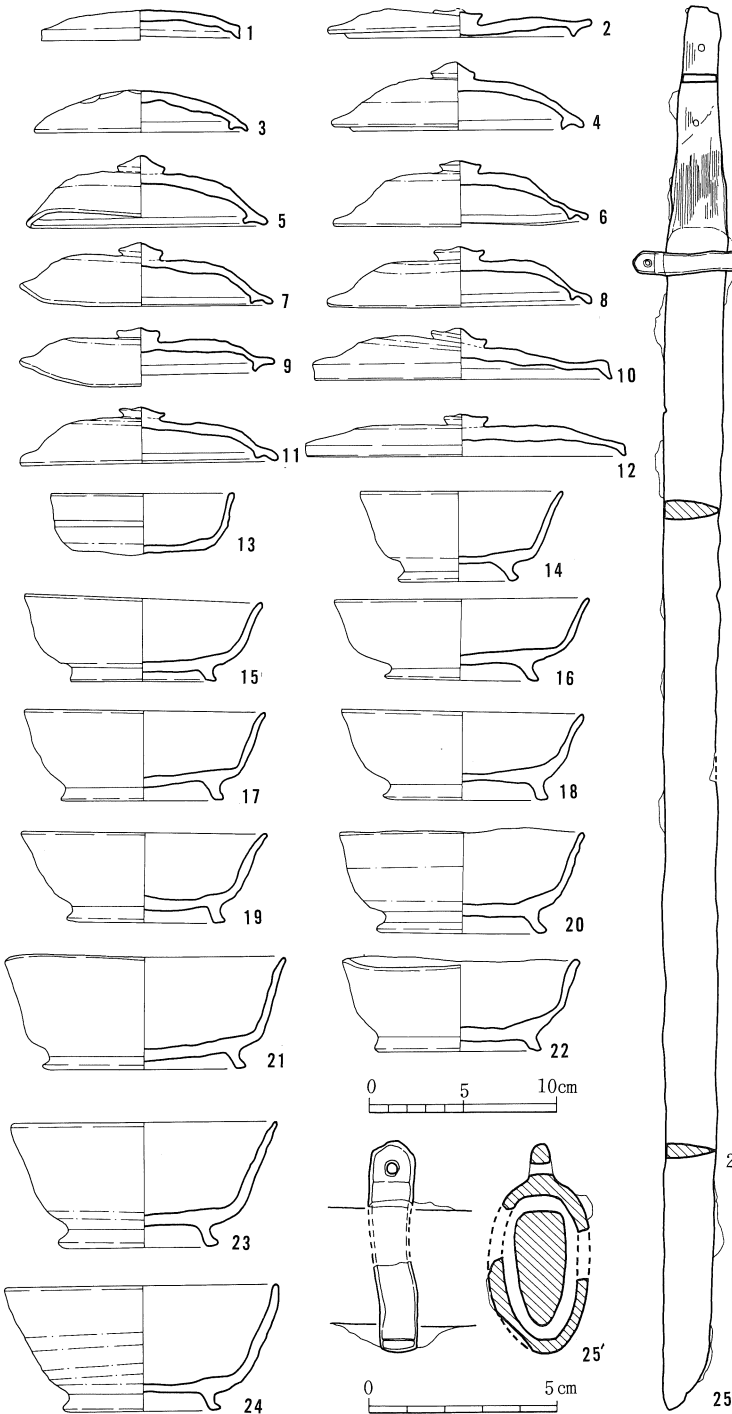
- (1) 神林淳雄「鉄製大刀と鉄鋼柄頭」『考古学雑誌』30-3 1940年
- (2) 埼玉県教育委員会『埼玉稲荷山古墳』1981年
- (3) 西山要一「X線CTなどを用いた象嵌資料の非破壊分析」『国立歴史民俗博物館研究報告』第26集 1990年
- (4) 西山要一「古墳時代の象嵌一刀装具について」『考古学雑誌』72-1 1986年
- (5) 新納泉「装飾付大刀と古墳時代後期の兵制」『考古学研究』第30巻第3号 1983年
穴沢味光・馬目順一「三累環刀試論」『古文化論叢』藤澤一夫先生古稀記念 1983年
穴沢味光・馬目順一「日本における龍鳳環頭大刀の製作と配布」『考古学ジャーナル』No.266 1986年
穴沢味光・馬目順一「足利市西宮町長林寺裏古墳（機神山22号墳）出土の双龍環頭大刀」『古代』第89号 1990年
- (6) 本項目で掲げた古墳の参考文献を掲げておく。
愛知県木森1号墳
増澤文武「腐食の著しい出土遺物と民俗文化財の保存処置」『月刊文化財』205号 1980年
西山要一「X線透過試験による古墳時代刀剣の調査—素環頭大刀と象嵌のある刀装具について—」
『出土遺物・民俗文化財へのX線透過試験の応用』元興寺文化財研究所 1981年
岐阜県宮の脇2号墳
岐阜県教育委員会・可児町教育委員会『宮ノ脇遺跡発掘調査報告書』1976年
鳥根県岡田山1号墳
松本岩雄ほか『出雲岡田山古墳』鳥根県教育委員会 1987年
福岡県竹並遺跡G-121-1号横穴墓
竹並遺跡調査会『竹並遺跡』(1979年)
横田義章「古墳時代の象嵌文様—九州の諸例紹介を中心に—」『九州歴史資料館研究論集』第10集 1985年
栃木県飯塚2号墳
秋山隆雄「市内古墳出土鉄製品の科学的分析—X線照射による象嵌の発見—」『小山市史研究』7 1985年
伝群馬県内出土例
東京国立博物館『東京国立博物館図版目録古墳遺物篇（関東Ⅱ）』1983年
西山（1986年）文献
愛知県東禅寺2号墳
杉崎章ほか「名古屋市守山区東禅寺2号墳」『東名高速道路関係遺跡第1次、第2次調査概報』愛知県教育委員会 1965年
松村冬樹「名古屋市守山区東禅寺2号墳出土の象嵌遺物について」『名古屋市博物館研究紀要』第5巻 1981年
西山（1986年）文献
栃木県トトコチ山古墳
佐野市史編纂委員会『佐野市石塚町トトコチ山古墳調査略報—第1次調査—』1972年
西山（1986年）文献

(イ) 51号横穴墓出土の圭頭大刀とその佩用金具について

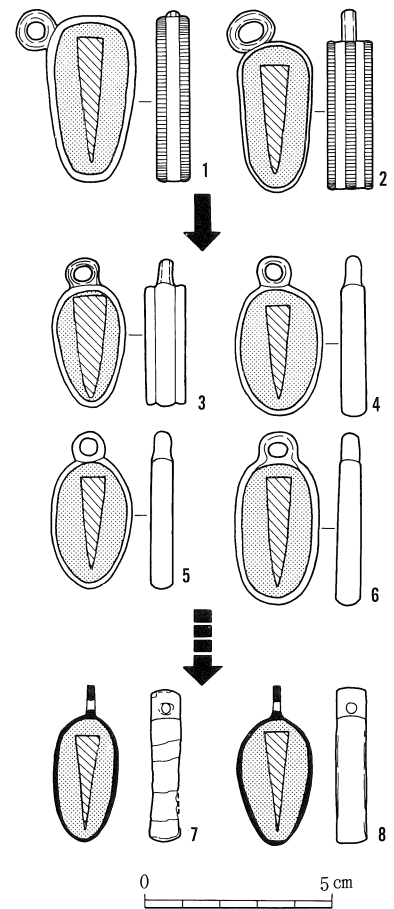
吉田 寛

51号横穴墓より圭頭大刀が出土している。大刀は全長69.7cm、刀身幅2.3cmを測り、茎には2孔の目釘穴を有する。刀装具としては金銅製の柄頭、鈕金具、2個1対の佩用金具を備える。共伴する須恵器は上ノ原IV新段階(TK209新段階併行)に属し、6世紀末から7世紀初頭前後に比定される。圭頭部は長さ6.1cm、最大幅4.3cmを測り、覆輪状金具を有する。柄頭は現状では刀身と遊離しているが、滝瀬芳之による木芯覆輪元留式柄頭に分類されるものと思われる。圭頭部表面にはタガネによる列点文で二重半円文を打ち出し、装飾文様としている。圭頭部表面に装飾文様を有するものとしては、千葉県金鈴塚古墳例・群馬県旧倉賀町出土例・群馬県藤岡市付近出土例などがある⁽²⁾、いずれも本例とは文様モチーフを異にする。滝瀬によれば装飾付大刀の需要増加に伴う量産化や柄頭部のバリエーションの多さなどから、圭頭大刀の製作地が畿内周辺に留まらず、地方に拠点を設けた可能性を指摘している。本例についても類例の少ない柄頭を有するものであることから、現状では製作地についての断定を避けておきたい。ただそれにしても、前項で検討

土例などがある⁽²⁾、いずれも本例とは文様モチーフを異にする。滝瀬によれば装飾付大刀の需要増加に伴う量産化や柄頭部のバリエーションの多さなどから、圭頭大刀の製作地が畿内周辺に留まらず、地方に拠点を設けた可能性を指摘している。本例についても類例の少ない柄頭を有するものであることから、現状では製作地についての断定を避けておきたい。ただそれにしても、前項で検討



第471図 福岡県柿原D地区8号墳出土遺物



第472図 佩用金具の変遷(新納1987を改変・加筆)
1・6 金鈴塚古墳 2・3 湯舟坂2号墳
4・5 文堂古墳 7・8 上ノ原51号横穴墓

した象嵌装飾文様を持つ刀装飾を備えた大刀と同様に、この遺物が中央政権と関わる何らかの表徴としての意義を持つことだけは想定しておきたい。

本例には、鞘の前後に2ヶ所の佩用金具（足金物）を有する。この佩用金具は「細長い金銅板を鞘にまわし背で重ね合わせて孔を穿つ形式⁽³⁾」のものである。類例の探索が不十分であるが、このような形式の佩用金具は九州島内においては上ノ原51号横穴墓の他、福岡県飯塚市岡ノ浦1号横穴墓・福岡県甘木市柿原8号墳で出土している。

7世紀になると、大刀の佩用法がいわゆる縦佩きから横佩きへと変化し、それに伴い佩用金具にも変化がみられる。新納泉は、龍鳳環頭大刀に付属する吊手付佩用金具の編年的検討を行っている（第472図参照）。新納は佩用金具の吊手孔の位置や製作技術の変化から、吊手孔が佩裏側に大きく片寄るものから真上に来るものへとという変遷を想定した。そして上ノ原51号横穴墓の圭頭大刀のそれを取り上げ、「通常の吊手孔付佩用金具が出現してからのもの⁽⁷⁾」とした。上ノ原例に共伴する須恵器の年代観からも、上記の想定が正しいことが傍証される。さらに近年公表された福岡県柿原8号墳出土例に共伴する須恵器は7世紀後半代に比定されるもので（第471図）、吊手孔付佩用金具の流行時期より遅れた段階に位置づけられるものである。以上の検討から、上ノ原51号横穴墓出土の佩用金具は吊手孔が責金具の真上につく最終段階の吊手孔付佩用金具より後段階に位置づけられる、いわば新形式の佩用金具であることが想定される。上ノ原例や柿原例より考えて、この形式の盛行時期は7世紀前半以降にあるものと予想されるが、類例不足により今後の資料増加を待ちたい。

- (1) 滝瀬芳之「円頭・圭頭・方頭大刀について」『日本古代文化研究』創刊号 1984年
- (2) いずれも註(1)文献挿図参照。
- (3) 新納泉「戊辰年銘大刀と装飾付大刀の編年」『考古学研究』第34巻第3号 1987年 62頁
- (4) 栗崎山古墳群学術調査団「付. 岡の浦横穴の調査」『栗崎山古墳群』 1973年 40～41頁
- (5) 小池史哲編『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告』19 甘木市所在柿原遺跡群の調査Ⅳ（D地区） 福岡県教育委員会 1990年 59～68頁
- (6) 町田章「環刀の系譜」『研究論集』Ⅲ 奈良国立文化財研究所学報第28冊 1976年
- (7) 註(3)文献63頁

(ウ) 鉄鏃の形式分類と出土状態について

渕野 玲子

I 鉄鏃の形式分類

当横穴墓群81基のうち、鉄鏃を出土したのは62基で、約670例を数える。そのうち鏃身部を残す鉄鏃は約500例である。ここではこの500例をその平面形態によって大きく6形式（A～F類）に分類し、さらにその中での細分を試みた（474図参照）。

1) A類

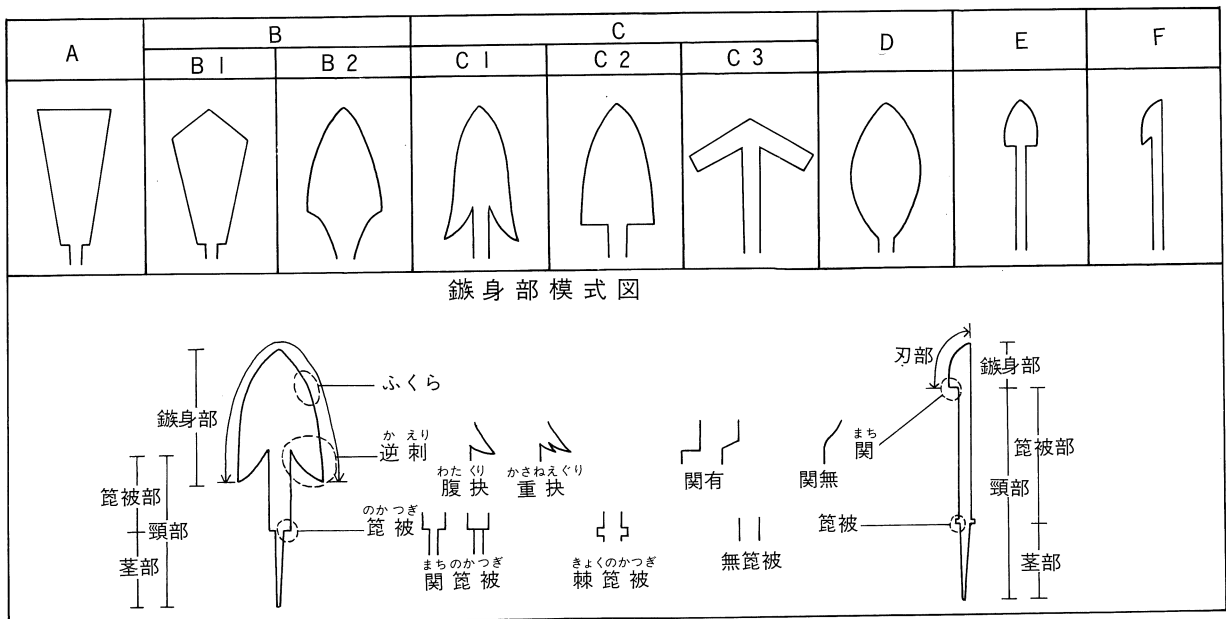
短頸で、鏃身上部が方頭形を呈し、その直線的な先端のみに刃部を有する。従来、方頭斧箭式と呼ばれたものである。5世紀後半～6世紀初頭の初期横穴墓では数例しか出土しなかった。完全な形で出土した34号墓の例をみると、筥被はほとんどなく、緩やかにすぼまって頸部へ移行している（1）。6世紀中葉以降A類は急増し、鉄鏃を出土した盛期横穴墓33基のうち21基で認められた。形態的にも変化がみられ、筥被がほとんどなく鏃身部から頸部へ直線的にすぼまるもの（3、4、5）以外に、直角あるいは斜めに細くなる関筥被を有するものが多くなる（6、7）。また、10mm程の狭い身幅で、鏃身部が長い長方形を呈するものもある（8、9）。

2) B類

短頸で、鏃身上部が圭頭形を呈し、その部分に刃部を有する。B類は大きく二つの形式に分類できる。B1類は最大幅が上部にあり刃部は短く、従来、圭頭斧箭式と言われたものである。B2類は、鏃身部の最大幅が中ほどより下位にあり、刃部が長くなる。ここでは、B1類の発展形として捉えた。

a) B1類

5世紀後半から6世紀前半にかけて多く出土し、鉄鏃を出土した初期横穴墓26基のうち16基で認められた。刃部が直角あるいは直角に近い鋭角をなし、最大幅の部位から頸部へ直線的にすぼみ、筥被をほとんどもたないものが主流である（10、11、12）。そのほかに、最大幅の部位から内湾しながら頸部へ至るもの（14）、鏃身部の最大幅が10数mmの細身のもの（18）、鏃身部の最大幅が10mm未満の菱形の鏃身部に長い頸部をもつもの（20）など、いくつかの系統がみられる。6世紀中葉以降、やや減少する。形態的には、刃部が鈍角をなし、相対的に刃部の長さがさらに短くなったものが現れる（16、17）。無筥被はほとんどなくなり、関筥被を有するものが主流である。



第473図 鉄鏃分類要素模式図（古野徳久論文を参照し作成）

	B					C			D	E	F
	A	B1	B2	C1	C2	C3					
I	1	10	22	31	44	50	70	52	56	70	
II	2	11	20	32	45	51	75	53	59	75	
IIIa		12	26	35			71		60	71	
IIIb		14		40					66		
IVa	3	16	27	36	46		73		61	73	
IVb	4	17	24	37	47	54	74	54	58	74	
V	5	18	25	38	48	55	77		62	77	
	6	19	28	39	49		78		64	78	
	7	21	29	41			80		67	80	
	8	23	30	42					68		

第474図 上ノ原横穴墓群出土鉄鍬編年表

b) B 2 類

初期横穴墓ではあまりみられない。17号墓出土のものは、ふくらが張り、五角形状を呈し、やや特殊である(26)。時代が下ると出土数が増加し、B 1 類と同率で出土する。形態的には、鍬身部が細身のもの(27)、鍬身部が幅広のもの(28)、鍬身部の最大幅が10mm未満の小型のもの(29、30)なども現れ、多様化している。

3) C 類

鍬身部の平面形態が三角形状を呈している。大きく三分類し、逆刺を有するものをC 1 類、逆刺を有さないものをC 2 類、従来、飛燕式と呼ばれたものに類するものをC 3 類とした。

a) C 1 類

鉄鍬を出土した初期横穴墓の半数で認められた。長三角形を呈し、逆刺は深くやや外に開くものが多く、無篋被のもの(33)、関篋被を有するもの(34)がある。また、無茎鍬(31)、重拵を持つもの(32)、長い頸部を有するもの(38)、小型もの(40、41)などもみられ、様々なバリエーションに富む。時代が下るとやや減少する。無篋被のものはみられなくなり、関篋被を有し、逆刺は浅くなる傾向にある。鍬身部の平面形態を見ると、三角形状のもの(36)と、ふくらを有して内湾して逆刺端に至る、いわゆる柳葉状のもの(39)がある。また、鍬身部が長身化し鍬身部幅が10mm未満の小型のもの(42、43)も現れている。

b) C 2 類

初期横穴墓では、5世紀後半の34、35号墓で1点ずつ見られるのみである。(44、45)。ふくらは張らず長三角形状を呈し、無篋被と関篋被がある。再び見られるのは6世紀中葉以降であるが、出土例は少ない。関篋被である(46)。

c) C 3 類

6世紀後半から7世紀初頭に比定される51号墓でのみ出土した。47は墓道から出土したもので、棘篋被を有している。48、49は羨道からの出土で、刃部は湾曲し、関篋被を有している。それぞれに形態的差があり、統一性がない。

4) D 類

ふくらを鍬身部の最大幅として、ふくらから頸部へ緩やかに内湾してゆく。出土例は少ないが形態的には多様である。たとえば、35号墓出土のものは非常に大形化された鍬で、篋被はなくそのまま頸部に至る(50、51)。また、25号墓出土のものはふくらから直線的に垂下する細長い鍬で、棘篋被を有する(52)。

第198表 鉄鍬出土横穴対称表

1	34号横穴墓	28	28号横穴墓	55	31号横穴墓
2	44号横穴墓	29	29号横穴墓	56	21号横穴墓
3	45号横穴墓	30	31号横穴墓	57	1号横穴墓
4	23号横穴墓	31	34号横穴墓	58	51号横穴墓
5	55号横穴墓	32	11号横穴墓	59	35号横穴墓
6	24号横穴墓	33	34号横穴墓	60	27号横穴墓
7	65号横穴墓	34	5号横穴墓	61	57号横穴墓
8	51号横穴墓	35	44号横穴墓	62	47号横穴墓
9	28号横穴墓	36	24号横穴墓	63	21号横穴墓
10	35号横穴墓	37	26号横穴墓	64	51号横穴墓
11	23号横穴墓	38	35号横穴墓	65	31号横穴墓
12	63号横穴墓	39	49号横穴墓	66	3号横穴墓
13	54号横穴墓	40	46号横穴墓	67	53号横穴墓
14	17号横穴墓	41	17号横穴墓	68	51号横穴墓
15	54号横穴墓	42	57号横穴墓	69	80号横穴墓
16	45号横穴墓	43	38号横穴墓	70	35号横穴墓
17	65号横穴墓	44	34号横穴墓	71	44号横穴墓
18	46号横穴墓	45	35号横穴墓	72	17号横穴墓
19	22号横穴墓	46	29号横穴墓	73	45号横穴墓
20	19号横穴墓	47	51号横穴墓	74	43号横穴墓
21	4号横穴墓	48	52号横穴墓	75	25号横穴墓
22	35号横穴墓	49	53号横穴墓	76	17号横穴墓
23	40号横穴墓	50	35号横穴墓	77	5号横穴墓
24	18号横穴墓	51	35号横穴墓	78	69号横穴墓
25	55号横穴墓	52	25号横穴墓	79	30号横穴墓
26	17号横穴墓	53	44号横穴墓	80	24号横穴墓
27	49号横穴墓	54	18号横穴墓	81	61号横穴墓

5) E 類

従来、鑿箭式とよばれたものである。長頸で、片丸造りである。5世紀後半から6世紀前半にかけての初期横穴墓では7基のみで出土したが、21、35号墓のように東で出土したところがあり、上述した鉄鍬群よりも量的には多い。形態的には多様である。比率的に多いのは長三角形状を呈し直角の関を持つもので(56)、鍬身部の先端が丸みを帯びるものと尖り気味のものがある。そのほかに、柳葉状を呈するもの(59)、関部が不明瞭で、頸部へ緩やかに移行するもの(63)などがある。また、3号墓から出土したものは鍬身部がより小形化し、正三角形状を呈している(66)。篋被部は関篋被と棘篋被がある。6世紀中葉以降急増し、鉄鍬を出土した盛期横穴墓33基のうち23基で出土し、量的にも全体の3分の1を占める。形態的には鍬身部がやや長身化する。また新しい系統として、関部が消失し鍬身部から篋被部へなだらかに移行するもの(68、69)がある。

6) F類

従来、片刃箭式とよばれたものである。長頸で鍔身部の片側にのみ刃部を有する。同じ長頸類のE類とは対照的に初期横穴墓に多く、鉄鍔を出土した26基のうち15基でみられ、量的には全体の60%を占める。形態的には逆刺を有するものが圧倒的に多い(70、71、72)が、直角あるいは鈍角の関部を有するもの(75、76)、ふくらがなく鍔身部先端からずっと関部へ伸びるもの(79)もある。6世紀以降は減少し、新しい形態も見られない。E類と同様に関篋被と棘篋被がある。

※本稿の鉄鍔分類については古野徳久「古墳時代鉄鍔の編年—北部九州を中心として—」(『九州考古学』九州考古学会 1989)の分類法に準拠して行った。

II 鉄鍔の出土状況

1) 玄室における鉄鍔の出土状況

当横穴墓の玄室における遺物出土状況を概観すると、崩落土や流入土、追葬時における二次移動によって、副葬時の状態を保存できなかった横穴墓も多い。しかし一方で、人骨保存が良好な横穴墓や個人墓など特に初期の横穴墓において、被葬者と副葬品との関係、副葬状態を明瞭に残している横穴墓もある。このように原位置を保つと考えられる状況にある鉄鍔を中心にみると、次のような様相を示している。

- ① 被葬者の脇に身体と平行して配置する。
- ② 被葬者の頭部付近、足元付近に配置する。
- ③ 数形式を1～数本ずつ副葬する。
- ④ 1形式を束状で副葬する。
- ⑤ 大刀、剣、あるいは刀子とセット関係にある。
- ⑥ 男性に副葬する。

①は基本的な配置で多くの横穴墓で見られる。鉄鍔の鍔身部を足の方に向けるのは、大刀、剣、あるいは刀子の切先を足の方に向けるのと同様である。

②は初期横穴墓28基のうち頭部付近に配置したものが3基(3、25、41号墓)、足元付近に配置したものが5基(8、23、34、35、46号墓)認められた。

③の形態組成は各横穴墓によって様々である。しかし、5世紀後半から6世紀前半までの初期横穴墓とそれ以降の盛期横穴墓で大別したとき、基本的な形態組成に相違がみられる。鉄鍔を出土した初期横穴墓26基のうち、B1、C1、F類をいずれか一つ以上組成に含む横穴墓は21基を数え、いずれか二つ以上含む場合も半数を越える。すなわち鍔身部が圭頭を成すものと逆刺を有するものを基本にしている。それに対して盛期横穴墓ではA、B、E類が基本組成となり、逆刺を有するものが後退していることがわかる。また多くの横穴墓では数形式を独自に組み合わせているが、中には同一類型のみを数点副葬したところもある(1、3、23、76号墓)。

④はE、F類などのような長頸類にみられ(21、22、25、30、35、41、44、76号横穴墓)、10本以上を束状にして矢具にいれ、身体脇に横たえたり、壁に立て置いたと思われる。特に②のような配置にみられる。

⑤⑥は大刀や剣が副葬されていた横穴墓で共通した状況で、大刀や剣は単独で副葬されることはなく、必ず刀子や鍔とともに副葬されている。その場合一方の脇に大刀や剣を、他方の脇に刀子や鍔を配置させている。また、大刀や剣を出土しない横穴墓では刀子と鍔がセット関係で、あるいは一方が単独で副葬されたところもある。

2) 墓道における鉄鍔の出土状況

初期横穴墓では全く検出されなかった。盛期横穴墓では38基のうち22基で出土した。量的には玄室と比較してかなり少なく、土器群の中に散見されることが多い。しかし、55号墓のように玄室からは全く出土せず、墓道でのみ検出されたところもある。また、51号墓では、鉄鍔群がまとまった束状で出土し、墓道で行われた祭祀行為に土器とともに使用されたと考えられる。

第199表 形式別に見た鉄鏃出土数

()内は墓道出土

時期	I					II					I ~ II								I ~ III古			II ~ III古		III古	III古	合計	
横穴形式	5	8	21	25	34	35	23	44	46	76	11	15	19	27	30	41	58	78	17	37	64	3	48	62	63	20	合計
A					1		1										1										3
B ₁	2	1	2			1	3	2	3				1	3		1			1	1	2		1	2	2		28
B ₂						2							1						1						1	5	
C ₁	1	1		2	3	3		3	1		1	1		5		1	1		2							25	
C ₂					1	1																				2	
C ₃																										0	
D				4		4		1																2		11	
E		1	10			16					1			1	3									3		35	
F	3			30	2	37		10	4	9	5	1	2		11	12	2	2	3							133	
合計	6	3	12	36	7	64	3	17	8	9	7	2	3	10	14	14	4	2	7	1	2	3	1	4	2	1	242

	III新	III新~IV古	III新~IV新	IV古				IV新				IV古~IV新								IV古	IV新~V					IV~V	IV新~V	V~V	合計					
	56	16	24	40	9	33	36	1	29	45	49	57	4	53	80	2	12	18	22	26	38	43	47	51	14	28	31	61	65	69	54	81	55	合計
A		5(+2)	2	1	2		1		1	2				1		2			2	2	2		3	5(+3)	1(+1)	3	4		1		1(+1)	1	(+3)	43(+9)
B ₁				1	1		1			3			1						1	2		1		1	1		1		2		2(+1)		18(+2)	
B ₂				1	1	2			3		1							1		4			(+1)		1	2				1		(+5)	18(+6)	
C ₁			4		5		1			1	1	1				2			1	1	4			(+1)									21(+1)	
C ₂							1(+1)		(+1)											2				(+1)									3(+3)	
C ₃																								3										3
D					1													1									1				1		4	
E	4	1	5	2	1		1	7	1	3		1	1	3	1(+2)	7	1		15	2			7	3(+2)	2(+1)		2		1	7(+2)		78(+7)		
F			2				5			1	1				1				13			2		5(+17)			1	1				34(+17)		
合計	4	6(+2)	13	5	11	2	10(+1)	7	5(+1)	10	2	3	2	4	2(+2)	11	1	2	32	13	6	3	10	17(+25)	4(+2)	4	10	1	3	2	11(+4)	2	(+8)	222(+45)

(エ) 金属製品の保存処理について

大分県立宇佐風土記ノ丘歴史民俗資料館 山田 拓 伸

上ノ原横穴墓群の発掘に伴い多量の金属製遺物が出土した。これらの遺物は長年土中であつたがために腐食が著しく、さらに出土という急激な環境の変化により一段と劣化が進行し剝落・崩壊の危機に瀕していた。この様な状況にある遺物に対して早急に保存科学的な処理を行い恒久保存を図る必要から、昭和57年度より保存修復を開始した。遺跡の性格等については別章に譲るとして、ここでは保存という観点から本遺跡より出土した金属製遺物について、保存処理方法等も交え以下述べてみることにする。

本遺跡より出土した金属性遺物には、刀、劍、刀子、馬具、鉄鏃、鉄斧等の鉄製品や耳環、銅釧、飾金具といった青銅製品がある。劣化のしかたとしては、青銅製品は表面が緑青で被われてしまっているものの地金は比較的残りが良く、それに比べ鉄製品は残りの良いものもあるが、多くが芯まで腐食が進行してしまっている。ここまです腐食が進行したものの内部は、非常にポーラスで指で触っても簡単にバラバラと崩れてしまう状態である。丁度、饅頭のアンコの部分がスポンジ状で、側の部分が堅い鉄分と考えたらよい。鉄鏃のように比較的小型の遺物に多くみられ、刀や劍なども量としては少ないがこの様な状態のものも存在する。また、これらは鉄製品のうちの半分以上を占める。なぜこの様になるのか理由は解らないが、おそらく埋蔵中の環境に関係しているものと思われる。それは、各横穴墓より一括して出土した多種類の鉄製品が、横穴墓ごとにその様な傾向を示していたり、

いなかったりしていることから窺える。鉄製品では表面を被っている錆によっても腐食の進行に違いがある。錆の発生は、空気（酸素）、水（水分）、金属中の不純物の三つの要素が同時に作用することで起こる。このうちの一つが欠けても錆の発生は起きないと云われている。水は地下水から、不純物は遺物自体が本来持っており、また周りの土が遺物の表面に付着することでも常時供給される。一方、空気は地面より浸透しない限り供給は難しい。埋蔵位置が地面から深く、しかも堅く締まった土であればなおさらである。反対に浅い場合、空気の供給は土中の小動物や植物などの活動により比較的楽に供給される。また、石室、石棺、横穴など土中に空間を持ったものは死体が腐る時に空間中の酸素を消費し、残った酸素が錆の発生を促すのである。

金属製出土遺物のうち鉄製品の保存処理方法は、まず表面のクリーニングを行い、記録（記録カード作成、写真撮影、X線透過写真撮影など）をとる。十分乾燥させた後、脱塩処理（水酸化リチウム）を行う。脱塩処理が終わったら次に錆取りを行い、更に十分乾燥させ減圧下で樹脂含浸（アクリル系のパラロイドNAD-10）を行う。樹脂含浸は乾燥を交え2～3回繰り返す。次に、折れたり、欠いたりしている部分をエポキシ系の樹脂で接着・接合、充填した後、表面にアクリル系の樹脂を塗布して仕上げる。最後に再び記録をとって保存処理を終わる。青銅製品の保存処理方法は、表面クリーニングの後記録をとり表面の緑青（緑青の中でも白緑色の塩化第一銅を主に）を取る。耳環類や飾金具の中には表面に鍍金を施してあるものがあり、この場合はできるだけ緑青を取り除き鍍金面を出す。鍍金は薄く、しかも柔らかいので竹串して押し剥がすように少しずつ取り除く。また、耳環類の中には金や銀の箔を捺してあるものもあり環の端の部分に箔を折りたたんで見えているのが見える。箔はやや厚みがあるものの、やはり鍍金の時と同様の方法で緑青を取り除く。この後、ベンゾトリアゾール液に浸し錆の安定化を図る。次に、接着・接合を行い、その後遺物によっては表面に樹脂（アクリル系のパラロイドB-72）を塗布する。最後に再び記録をとり処理を終わる。このようにして保存処理を行った点数は、500点を下らないだろう。

59号墓、38号墓の大刀の保存処理に際しX線透過写真撮影を行ったが、この時象嵌が見つかった。県下の出土遺物中ではこれで4例目である。59号墓の大刀は鐔の両面、縁及び鐔を両側から絞めている金具に金線（？）を嵌めこんでいる。また、38号墓の大刀には鐔の縁にのみ銀線を嵌めている。なお、象嵌の文様については別章に譲る。象嵌の研ぎだしは、X線透過写真と見比べながら実体顕微鏡下で行った。象嵌の表面は厚い錆で被われていたが、実際に研ぎだしてみると錆と象嵌は接着しておらず、研いで錆が徐々に薄くなる過程で錆取りの振動により剥がれるように取れてしまう。

保存処理を行った鉄製品のうち再び錆が発生するものがある。原因として、錆の発生には先述の三要素が必要で、この内の不純物の除去は不可能であることから、保管中に水分を与えたことと鉄製品の表面への樹脂塗布に問題があったと考えられる。樹脂を塗布するのは、鉄製品と空気との接触を断つ目的がある。しかし、ミクロ的に表面を見ると樹脂の塗布膜にピンボールがあり、そこに結露が生じることで錆が発生する。仕上げの樹脂塗布は数回重ね塗りを行うが、それでもピンボールの存在は避けられない。そのためにも、処理後の保管には十分乾燥させた状態を保つように心掛けねばならない。また、定期的に遺物の状態をチェックすることも重要である。その他、鉄製品には埋蔵中遺物表面に安定化した錆ができているものがある。この状態の遺物は出土後も劣化が非常に起きにくい特徴がある。錆は堅く緻密で、場合によっては表面が平滑である。遺物表面に付着した土と溶出した鉄分が一緒になって、遺物表面に安定化した錆の被膜をつくり空気を断っているのである。したがって、この錆を取ってしまうと安定が破れ別の錆が発生する。この安定化した錆の被膜の方が樹脂の被膜より丈夫で、しかもそれ自体劣化しにくくピンボールの心配もない。しかし、この状態がいつまでも続くはずはなく、またどのくらい持つのかも解っていない。

(3) 土器

(ア) 須恵器・土師器の編年

吉田 寛

本項目では、上ノ原横穴墓群より得られた土器資料の編年的検討を目的とする。

上ノ原横穴墓群では配列埋置状態・一括埋置状態にある、複数の土器からなる良好な一括資料が多数得られている。これらの一括資料を構成する土器は、様々な祭祀行為の終了後同時に埋納されたものであるから、編年研究の上にも重要な資料となり得る。そこで編年の方法としては、先ず横穴墓群から得られた一括資料を重視し、基本的にはこれらの一括資料の枠組を崩さぬようにして、これらを型式学的な観点から順次配列する。その後、既に研究がほぼ完了している生産地(窯)⁽¹⁾での編年成果を参照し、編年案を修正、編年表を作成した。個々の土器を配列する過程をいちいち記すことは、いたずらに紙数を費やすのみであり、また冗長に過ぎるため、ここでは編年表という形で筆者の検討結果のみを示したいと思う。一括資料それぞれの内容や個々の土器の共伴関係等は、報告編に詳細に示されているはずであり、それに譲る。また有意な時間差を有すると思われる時期区分上での単位の呼称に就いては、編集方針に従い『上ノ原横穴墓群Ⅰ』で示された村上久和のそれを援用する。

須恵器(付図4参照)

設定した時間軸に従って、代表的な器種それぞれについて、時間的な変化の様相を解説する。

坏蓋・坏身・坑 上ノ原Ⅰ段階(TK23・Ⅰ—4併行)の坏蓋は口径12.5~13cm前後、坏身は口径11cm前後で、田辺昭三によるTK23型式、あるいは中村浩によるⅠ型式4段階(以下Ⅰ—4などと略称)併行期のものと同一である(付図4—1~8)。ただし、5号横穴墓一括資料や8号横穴墓玄室内出土資料に見られる蓋坏の中には、体部断面が箱形を呈し、口縁立ち上がりが高いという古い様相を持つものがあり(1~2)、これら自身はTK208あるいはⅠ—3まで遡りうるかもしれない。しかし、これら古い様相を呈する資料も単独では一括資料をなすことはなく、時間的に有意な一群とみなすには資料不足である。上ノ原Ⅱ段階(TK47・Ⅰ—5併行)のものは、蓋・身とも口径10cm前後で、最も小型となる(9~12)。田辺TK47、中村Ⅰ—5併行期のものと同一である。ただ、この段階に比定される純粋なものは39号横穴墓玄室内と68号前庭部一括資料に限られ、上ノ原横穴墓群においては有意な時期幅を持つものかどうかはわからない。上ノ原Ⅲa段階(MT15・Ⅱ—1併行)の坏蓋は口径13~15cm前後、坏身は口径13~14cm前後と大型のもので(13~20)、田辺MT15、中村Ⅱ—1併行期のものと同一である。上ノ原Ⅲb段階(TK10・Ⅱ—2併行)の坏蓋は口径13~14cm前後、坏身は口径13~14cm前後を測るが、前段階のものよりは小型化するものが多い(21~24)。田辺TK10、中村Ⅱ—2併行期のものと同一である。上ノ原Ⅳa段階(TK43・Ⅱ—3併行)の坏蓋は口径13~14cm前後、坏身は口径12~13cm前後を測る。蓋・身とも天井部と口縁部を区切る段や口縁端部の稜など、古式とされる特徴を消失するか、もしくは痕跡的なものとなる(25~32)。この段階に比定されるもののうち24号横穴墓墓道A群一括資料はやや古相を呈し、前段階との過渡的な様相を示すものかもしれない。この段階に位置づけられる資料のほとんどは、田辺TK43、中村Ⅱ—3併行期のものと同一である。豊前地方の資料では福岡県山田3号窯跡⁽³⁾の時期と併行する。上ノ原Ⅳb段階(TK209・Ⅱ—4併行)のものは蓋・身とも口径12cm前後を測るが、前段階のものより小型化する(33~40)。この段階に位置づけられる資料のほとんどは、田辺TK209、中村Ⅱ—4併行期のものと同一である。豊前伊藤田窯跡群⁽⁴⁾の資料では大分県瓦ヶ迫窯跡の時期と併行する。生産地(窯)では明確に差異がとらえられる上ノ原Ⅳa・b段階の各小期も、横穴墓や古墳などのような消費の場ではその差異が不明瞭になり、上ノ原横穴墓群における一括資料の検討からも両小期は漸移的に移行していることがうかがわれる。なお、この段階までの蓋坏の天井部や底部調整は回転ヘラ削りを施すことを通常とする。上ノ原Ⅴ段階(Ⅱ—5併行)のものは蓋・身とも口径11~12cm前後を測る。この段階から天井部や底部をヘラ切り未調整にするものが現れ、一括資料の中では回転ヘラ削りを施すものと共伴する(41~48)。中村編年Ⅱ—5併行期と思われ、伊藤田窯跡群では草場窯跡⁽⁵⁾の資料に類似したものがある。坏蓋で回転ヘラ削りを施すものとヘラ切り未調整のものは、豊前地方においては窯跡のみならず、横穴墓や古墳等の消費地でも明確な前後関係としてとらえることができる。上ノ原横穴墓群の一括資料

において両者が共伴している状況、言い換えればヘラ切り未調整の蓋坏のみで構成される一括資料が存在しない状況は興味深い。これは上ノ原横穴墓群が基本的には前段階の上ノ原Ⅳ段階までで新規の横穴墓の造営を終了し、上ノ原Ⅴ段階（Ⅱ—5併行）以降は土器の使用が追葬か墓道祭祀の行為に留まることと関係しているものと思われる。ただ回転ヘラ削りを施す蓋坏とヘラ切り未調整の蓋坏との交替のあり方は、地域によって差異があることも指摘されており⁽⁶⁾、上ノ原横穴墓群における当該時期の須恵器の様相については今後更なる検討も必要であろう。埴については、65号横穴墓に注目すべき資料がある⁽⁶²⁾。この種の埴は福岡県北九州市天観寺山窯跡群で生産されており、当窯跡群を中心とした九州北部に分布の目立つものである。上ノ原横穴墓群出土の当該資料もその特徴を同じにするもので、生産地を容易に推測できる1例である。上ノ原Ⅵ段階（TK217・Ⅱ—6～Ⅲ—1併行）では口径10～11cmを測る埴があり、蓋には宝珠形、ボタン形あるいは乳頭形のツマミを有する。良好な一括資料は54号横穴墓墓道で検出されている（49～52）が、例は少ない。上ノ原Ⅵ段階以降に比定される良好な一括資料に、55号横穴墓墓道出土資料がある。埴は高台を有し、口縁部は外反する。蓋はかえりを既に消失している（53～61）。器形の特徴より7世紀末から8世紀前半に比定できるものであろう。

高坏 有蓋と無蓋の二者がある。上ノ原Ⅰ段階（TK23・Ⅰ—4併行）の無蓋高坏（63～64）の口縁部は広く外反し、脚部はハの字形に開く。坏の体部下半には、痕跡的な耳を持つものがある。有蓋高坏（65～67）の坏部は当該段階の坏身の形態と類似しており、脚部はハの字状に開く。上ノ原Ⅱ段階（TK47・Ⅰ—5併行）には高坏の資料はないが、前述の通り上ノ原Ⅰ～Ⅱ段階は漸移的な移行を示すので、先に記述した高坏の一部が当該段階まで下る可能性が残る。上ノ原Ⅲa段階（MT15・Ⅱ—1併行）には無蓋高坏の資料があり、長脚一段透かしの脚部を持つものを特徴とする（68～69）。ただし、編年表で掲げた11号横穴墓と20号横穴墓の資料では、脚部の特徴から後者が後出の要素を持っており、20号横穴墓の一括資料は共伴する坏などとともにTK10型式併行期に下げるのが妥当かもしれない。上ノ原Ⅲb段階（TK10・Ⅱ—2併行）には、16号横穴墓墓道の一括資料中に有蓋高坏の資料が見られる（70～71）。上ノ原Ⅳ段階になると高坏の資料が増加し、新形式の出現もある。無蓋高坏には非常に細長い脚部に一段透かしを入れるもの（76）・長脚二段透かしを有するもの（77）・透かしを消失し、脚部がやや短くなるもの（79～84）などが存在する。これら三者は、順に新しい傾向を持つものである。その他、低脚高坏（82・89）がある。有蓋高坏もバリエーションが多い。24号横穴墓墓道A群一括資料に見られるものは（73・75）、前段階の有蓋高坏の系譜上に位置づけられるものである。その他には、長脚二段透かしの脚部を有するもの（81・86）・透かしを消失し、脚部中央に二条の沈線を有するもの（87）・脚部の透かし、沈線を消失するもの（88）等がある。これら三者も、順に新しい傾向を持つものである。上ノ原Ⅳa段階（TK43・Ⅱ—3併行）上ノ原Ⅳb段階（TK209・Ⅱ—4併行）の境界線は漸移的なもので、高坏においても明確な区分はできない。ただ、上ノ原Ⅳa段階（TK43・Ⅱ—3併行）では透かしを有する高坏が主体を占め、上ノ原Ⅳb段階（TK209・Ⅱ—4併行）では透かしを消失する高坏が主体を占める傾向がある。ただし、これもあくまで傾向に留まり、長脚二段透かしの高坏は上ノ原Ⅴ段階（Ⅱ—5併行）以降も存続し、透かしのない高坏と共存する。上ノ原Ⅴ段階（Ⅱ—5併行）には良好な資料はないが、59号横穴墓から低脚高坏（90）が得られている。

臙 上ノ原Ⅰ段階（TK23・Ⅰ—4併行）では、35号横穴墓玄室内と64号横穴墓前庭部で資料が得られている（91・92）。上ノ原Ⅱ段階（TK47・Ⅰ—5併行）では、68号横穴墓前庭部一括資料中に臙があり、その器形は当該段階の特徴をよく備えている（93）。上ノ原Ⅲ段階以降になると時期が新しくなるほど臙は口縁部が拡張し、大きく開くようになる。上ノ原Ⅲa段階（MT15・Ⅱ—1併行）に位置づけた20号横穴墓例（94）は、前述の通りこの一括資料自体が当該段階でも新しい傾向を持っており、次段階に下る可能性もある。逆に、上ノ原Ⅳa段階（TK43・Ⅱ—3併行）として掲げた45号横穴墓例（95）は、口縁部が短く前段階まで遡る可能性のあるものである。上ノ原Ⅳ段階の臙口縁部は拡張してきており（96～98）、さらにこの傾向は上ノ原Ⅴ段階（Ⅱ—5併行）のもの（101・102）まで継続する。なお、小型品（99・100）は上ノ原Ⅳ段階の時期に存在する。

短頸壺 短頸壺については、時間差を反映する有意な属性を取り出して型式学的な傾向を指摘することが困難である。編年表では一括資料を構成する他の器種、あるいは共伴遺物を参考にして、その資料が属する段階を決

定している。上ノ原横穴墓群では、上ノ原Ⅲ a 段階（MT 15・Ⅱ—1 併行）から上ノ原Ⅴ段階（Ⅱ—5 併行）までの資料が存在する（103～117）。

埴瓶 埴瓶の型式変化については、口縁部に面を持ち端部を上方に拡張させるものから面を消失し単純な口縁部を持つものへの変化が看取される。なお、よく言われる胴部取手が環状から鍵状、ボタン状へと変化し、ついに消失するという変化の方向は、この口縁部の変化の方向と対応せず、時間的に有効な属性とは思われない。16号横穴墓玄室内資料（118）は単独出土であるが、上ノ原Ⅲ b 段階（TK10・Ⅱ—2 併行）に位置づけた。口縁部に面を持ち、端部をやや上方に拡張し、胴部には鍵状の取手を持つなど当該段階の特徴をよく備えている。上ノ原Ⅳ a 段階（TK43・Ⅱ—3 併行）に位置づけた45号横穴墓出土品（124）は口縁部形態がやや古相を呈し、前段階まで遡る可能性を持つ。単純口縁の埴瓶は当該段階から存在するが、主体となるのは上ノ原Ⅴ段階（Ⅱ—5 併行）の時期で、面を持つ口縁部を有する埴瓶と漸移的に交替する。なお、小型品は上ノ原Ⅳ段階の時期に存在する。

平瓶・横瓶 平瓶・横瓶（131～143）については、明確な型式変化をたどることが難しい。ただし、上ノ原横穴墓群で得られた平瓶では時期が新しくなるにつれて口縁部が直立する傾向があるが（131～134）、一般的なものであるかどうかはわからない。上ノ原Ⅳ段階・上ノ原Ⅴ段階（Ⅱ—5 併行）・上ノ原Ⅴ段階以降の資料が存在する。また、小型品は上ノ原Ⅳ段階の時期に存在する（129～130）。

二重口縁壺 35号横穴墓より、二重口縁を持つ須恵器大型壺が検出されている（144）。出土状態より、同横穴墓出土の大型器台（156）とセットをなすものと思われる。関川尚功によると、この種の二重口縁壺は陶邑生産品中に類例を見い出すことができず、分布は大和地域に集中するという。時期はTK73 型式期を中心に、TK208 型式期以前に比定されている。ただし、上ノ原横穴墓群の当該資料は関川論文に掲げられたTK208 型式期のものより口縁端部の形状や肩の張り等が新相を呈しており、上ノ原Ⅰ段階（TK23・Ⅰ—4 併行）に位置づけて大過のないところであろう。

器台 上ノ原Ⅰ段階（TK23・Ⅰ—4 併行）と上ノ原Ⅲ a 段階（MT15・Ⅱ—1 併行）に資料がある。前者は35号横穴墓より検出されたもので、高橋徹・小林昭彦による分類の器台AⅣ式に相当する。後者は20号横穴墓より検出されたもので（157）、欠損部分が多く全形復元に誤差を生じている可能性があるが、高橋・小林分類の器台BⅤ式に相当する。

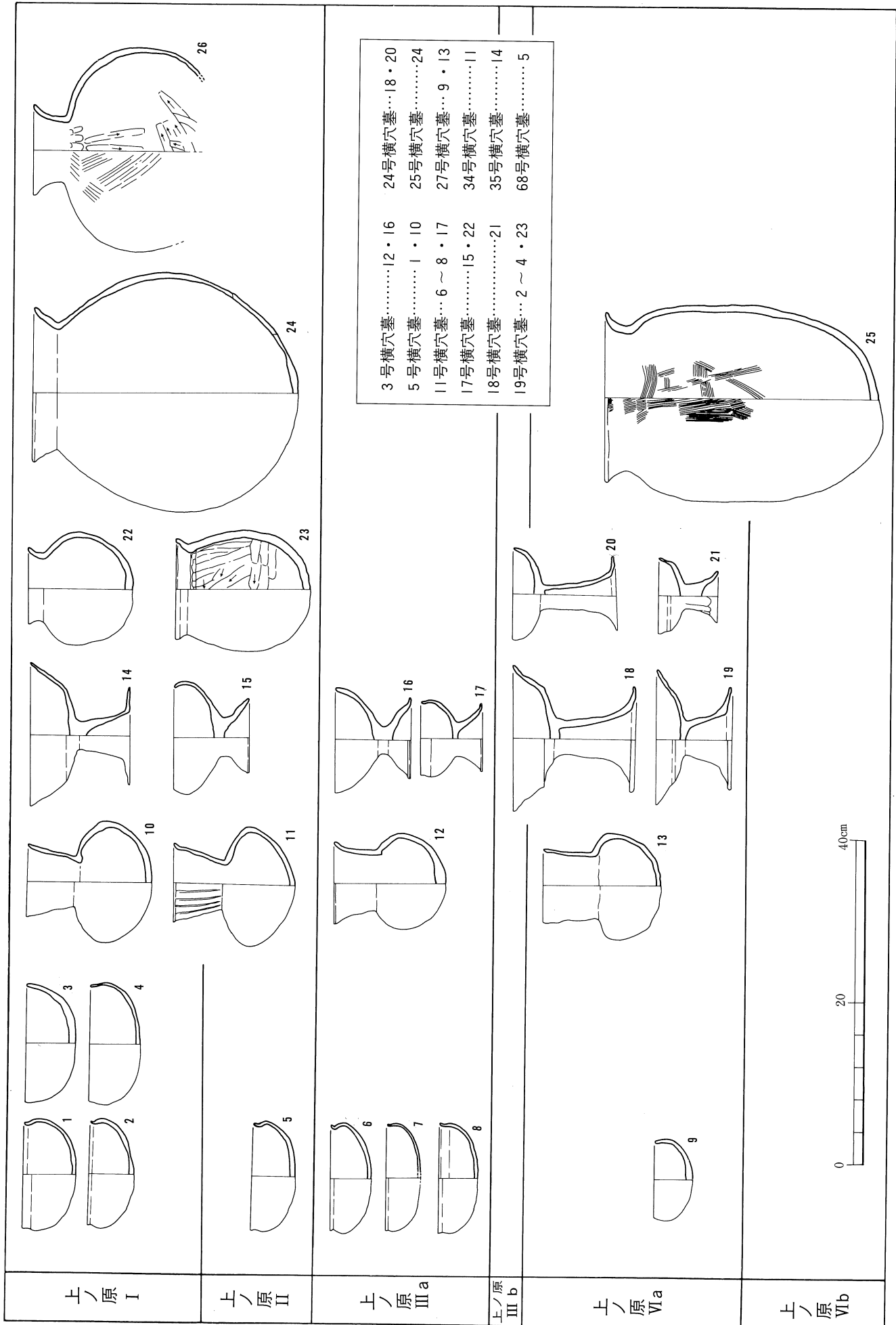
甕 甕については、その器形と口縁部文様にバリエーションが多く、型式学的な傾向をとらえ難い。特に上ノ原Ⅳ段階には、口縁部形態や文様にも非常にバリエーションが多くなる傾向がある。

その他 8号横穴墓より須恵器長頸壺が出土している（139）。頸部が直線的にのびるなど、陶邑窯跡群のTK23 型式のものよりはやや新相の傾向を持つものではあるが、出土状況から上ノ原Ⅰ段階（TK23・Ⅰ—4 併行）に位置づけられる。その他、上ノ原Ⅰ段階（TK23・Ⅰ—4 併行）に比定される資料に64号横穴墓前庭部一括資料内の鉢（140）がある。上ノ原Ⅳ段階には須恵器資料が充実しており、器種もバリエーションが多い（146～159）。158は有蓋台付壺であり、共伴資料より当該段階に位置づけた。この器種は県内では大分市飛山1号横穴墓、日田市法恩寺4号墳、宇佐市鶴見古墳、宇佐市桐ヶ迫2号墳等で出土しており、これらは概ねMT15 型式からTK10 型式相当のものである。上ノ原69号横穴墓出土例は共存する他の須恵器から類推してこの段階に比定したが、あるいはもう少し遡るものであるかもしれない。159は台付子持ち壺であり、上ノ原12号横穴墓墓道から検出された。山田邦和の分類に従えば、Ⅱ後期の装飾付壺Ⅲ—3類に相当する。特殊な器種であるためそれ自体で詳細な編年を行うことは困難であるが、おおまかな時期幅の中では氏の分類と合致するものである。

土師器（第475図参照）

土師器は須恵器ほど微細な時期的変化を反映しないものであるが、共伴する須恵器を参考にして編年的位置の検討を行った。また一部の資料は、土師器自体の型式変化や他遺跡での共伴資料を参考にした。

坏 底部は丸底で、口縁端部を短く外反させるもの（1・2・5～8）と端部を内湾あるいは直立させるもの（3・4）の2種類がある。なかには丁寧なミガキを施した精製品も存在する。これら2種の坏は上ノ原Ⅰ段階



第475図 上ノ原横穴墓群出土土師器編年表

(TK23・I-4 併行) から上ノ原Ⅲ a 段階 (MT15・II-1 併行) まで存続し、上ノ原Ⅲ a 段階 (MT15・II-1 併行) では器高がやや浅くなる傾向があるものの、基本的には形態は大きく変化しない。逆に言えば、この種の土師器のみで構成された一括資料は、厳密には上ノ原 I 段階 (TK23・I-4 併行) から上ノ原Ⅲ a 段階 (MT15・II-1 併行) までの時期幅の中で考えるべきもので、詳細な時期を決定することはできない。以上の検討は、例えば福岡県北九州市周辺での個別研究の成果とも一致するものである。

長頸壺 上ノ原横穴墓群出土資料からは、頸部がしまり口縁部が外半気味に立ち上がるものから頸部が広がり口縁部が直立するものへと変化する傾向がうかがわれる (10~13)。上ノ原 I 段階 (TK23・I-4 併行) ・上ノ原Ⅲ a 段階 (MT15・II-1 併行) ・上ノ原Ⅳ a 段階 (TK43・II-3 併行) に属する資料が存在し、特に上ノ原 I 段階 (TK23・I-4 併行) のものは口縁部にタテ方向の丁寧な磨きを施すなどの精製品が多い。

高坏 上ノ原 I 段階 (TK23・I-4 併行) ・上ノ原Ⅲ a 段階 (MT15・II-1 併行) ・上ノ原Ⅳ a 段階 (TK43・II-3 併行) に属する資料が存在する (14~21)。器形もバリエーションが多く、一概には型式学的な傾向をとらえ難い。14は35号横穴墓テラス状遺構 (36号横穴墓墓道周辺) から出土した資料である。土師器のみで構成される一括資料中に存在するもので、本来は詳細な時期を決定し難いものである。ただ、やや外反する口縁部に深い坏部を持ち大きく屈曲し接地する脚部を有する器形の特徴は、例えば北部九州地域の編年を参考にすれば、今光Ⅶ期あるいは御床松原Ⅵ a 期に限定されるものであり、当該資料の時間的な位置を物語るものである。

甕 25号横穴墓テラス状遺構周溝内と81号横穴墓玄室内より、資料が得られている。共伴する須恵器より前者は上ノ原 I 段階 (TK23・I-4 併行)、後者は上ノ原Ⅳ b 段階 (TK209・II-4 併行) に比定される。古墳時代中期から後期にかけて、ある種の甕は長胴化する傾向が指摘されており、上記の資料も時期的に矛盾するものではない。特に25号横穴墓テラス状遺構周溝内出土例は、下毛郡三光村佐知遺跡や大分市植田市遺跡での住居跡一括資料のものとも類似しており、時期的な特徴をよく示している。また北九州市域での検討の成果とも矛盾するものではない。

以上、上ノ原横穴墓群出土土器について概観した。横穴墓のような消費地遺跡の場合、一括資料を構成する土器各々に新古の様相がうかがえ、時期的な段階の境界線が不明瞭となることがある。上ノ原横穴墓群の場合もその例に漏れず、一括資料を順次配列してゆくと個々の型式の消長は漸移的に移行しているのが実態である。このような状況の中で、設定したそれぞれの段階の実年代の推定は大まかなものにならざるを得ないが、その根拠を添えて下表にまとめておく。

		田辺	中村	上ノ原	実年代とその根拠	
高橋・小林 I II III	村上・吉田 山田窯 瓦ヶ迫窯 草場窯 城山窯	TK 73	I-1		471年 稻荷山鉄剣	5 c 後半
		TK 216 (ON 46)	I-2			5 c 末~6 c 初頭
		TK 208	I-3			6 c 前半
		TK 23	I-4	上ノ原 I		6 c 中葉
		TK 47	I-5	上ノ原 II		6 c 後半
		MT 15	II-1	上ノ原 III 古		6 c 末~7 c 初
		TK 10	II-2	上ノ原 III 新		7 c 前半前後
		(MT 85)				7 c 中葉
		TK 43	II-3	上ノ原 IV 古		6 c 後半
		TK 209 (+)	II-4	上ノ原 IV 新		587年 飛鳥寺下層
	II-5	上ノ原 V	646年 難波宮下層			
	II-6	上ノ原 VI	660年 飛鳥水落遺跡			
	III-1					

第200表 上ノ原横穴墓群出土土器編年対称表 (実年代とその根拠)

(イ) 特殊な土器について

吉田 寛

ここでは2点の土器の紹介を行いたい。対象とする資料は22号横穴墓玄室内出土の陶質土器蓋と45号横穴墓玄室内出土の土師器器台である。

陶質土器蓋

22号横穴墓玄室内北側中央付近より出土している。口径5.2cm、器高4.3cmを測り、口縁部には深いかえりを有する。天井部には粘土紐を貼り付けたつまみを持つ。調整は全体をナデ仕上げしており、焼成は良好、色調は青灰色を呈する。これらの器形の特徴は、日本列島内で製作された須恵器の中に類例を見出すことができず、この資料が朝鮮半島製の陶質土器ではないかとの予測を生じさせる。22号横穴墓の玄室および墓道からは、上ノ原Ⅳ～Ⅴ段階（田辺 TK43～TK217・中村Ⅱ—3～Ⅱ—5）に比定される須恵器が検出されており、当該資料が横穴墓に埋納された時期は、6世紀後半から7世紀前半前後の時間幅の中にある。

当該資料の類例を朝鮮半島内で出土した陶質土器の中に探索したが、残念ながら現段階では類品を見出すことができない。ただし、列島内出土の陶質土器と推定されている資料の中には類例がある。福岡県田川市セストノ古墳出土資料がそれで、陶質土器蓋付小壺である。蓋は口径3.8cm、器高2.9cmを測り、上ノ原22号横穴墓出土資料よりひとまわり小型であるが、器形の特徴やつまみの形態は共通する。蓋付小壺は横矧板鋌留短甲などとともに玄室南東隅に片付けられた状態で出土しており、セストノ古墳の副葬遺物の中でも早い段階に位置付けられる。蓋付小壺の年代は、横矧板鋌留短甲のそれを参考にすれば5世紀から6世紀初頭に比定される。

さて、セストノ古墳と上ノ原22号横穴墓の資料を相互に比較する時、ひとつの問題が出てくる。それは器形の特徴が共通するにもかかわらず、出土状態から前者が5世紀末～6世紀初頭、後者が6世紀後半～7世紀前半に比定されており、両者の年代に齟齬を生じていることである。この問題を解決するには、以下の2つの解釈が成立すると考える。

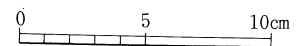
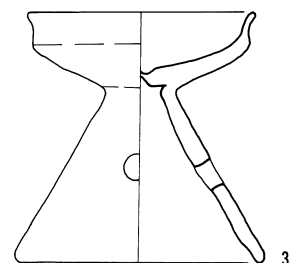
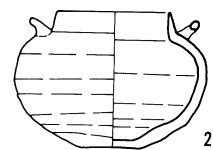
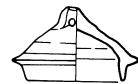
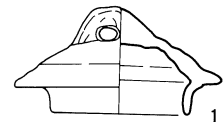
ひとつは、蓋付小壺は特殊な小型品であるため、時間差が土器の形態上にそれほど反映されないとする考え方である。いまひとつは、上ノ原22号横穴墓出土例もセストノ古墳出土例と同様に5世紀末前後に製作されたが、当時宝器として珍重されたため、一定期間伝世し、しかる後に横穴墓に埋納されたとする考え方である。セストノ古墳での当該資料のあり方や22号横穴墓には他にも朝鮮半島製と考えられる銅釧が出土していることより、後者の可能性が高いと考えるが、なにぶん朝鮮半島での類例に乏しい現状では、最終的な結論は保留すべきであろう。

土師器小型器台

45号横穴墓玄室内より出土している。口径9.1cm、底径10cm、器高9.9cmを測る。調整はナデを主体としており、焼成は良好、色調は赤褐色を呈する。口縁部と脚部の一部を欠損する。45号横穴墓の玄室および墓道からは、上ノ原Ⅳa段階（田辺 TK43・中村Ⅱ—3）に位置付けられる須恵器が出土しており、当該資料が横穴墓に埋納された時期は、6世紀後半に比定される。

さて、この資料の器形の特徴は、一見して布留式の小型器台そのものであり、調整・焼成・色調等もそれと矛盾しない。製作年代は4世紀代に比定されるもので、驚くべきことに6世紀後半以降に横穴墓に埋納されたものである。確認しておくが、当該資料は玄室敷石上に密着した状態で出土しており、その出土状態からは後世の流入や玄室天井部からの崩落土中に混入したものでは決していない。

当該資料が横穴墓玄室内に副葬されるに至る経過は不明とするしかないが、現状では土師器の小型器台が4世紀から6世紀後半代まで伝世するとは考え難い。従って、古墳時代後期の人々がなんらかの理由で古墳時代前期の包含層を発掘し、偶然得た小



第476図 特殊な土器実測図

型器台をその後副葬するなどという特異な状況を考えない限り、当該資料が副葬される経過を説明することは困難であろう。

註

- (1) 生産地(窯)における須恵器編年に関しては、陶邑窯跡群および伊藤田窯跡群での編年成果を参照した。以下の文献参照。
田辺昭三『陶邑古窯址群』Ⅰ 平安学園 1966年
田辺昭三『須恵器大成』 講談社 1978年
中村浩『和泉陶邑窯の研究』 柏書房 1981年
小林昭彦・高橋徹「豊前地方における須恵器」『考古学ジャーナル』No300 ニューサイエンス社 1987年
村上久和・吉田寛・宮本工「豊前における初期瓦の一樣相」『古文化談叢』第18集 1987年
- (2) 村上久和「本報告における古墳時代後期土器の編年」『上ノ原横穴墓群Ⅰ』大分県教育委員会 1989年 12・13頁
- (3) 森田勉・高橋章ほか「山田窯跡」『垂水廃寺』所収 新吉富村教育委員会 1978年
- (4) 小林昭彦ほか『上ノ原横穴墓群Ⅲ・伊藤田古窯群Ⅱ』 大分県教育委員会 1984年
- (5) 小林昭彦ほか『伊藤田窯跡群Ⅲ』 大分県教育委員会 1985年
- (6) 山田邦和「飛鳥・白鳳時代須恵器研究の展望」『古代文化』第40巻第6号 1988年 38頁
高橋徹・小林昭彦「九州須恵器研究の課題—岩戸山古墳出土須恵器の再検討—」『古代文化』第42巻 第4号 1990年 33頁
- (7) 小田富士雄ほか『天観寺山窯跡群』 北九州市埋蔵文化財調査会 1977年
- (8) 関川尚功「奈良県下出土の初期須恵器」『考古学論功』 榎原考古学研究所紀要第10冊 1984年
- (9) 註(6)高橋・小林文献。
- (10) 当該期須恵器長頸壺の型式学的検討については、下記の論文参照。
中村浩「山城・穀塚古墳出土須恵器について—東京国立博物館収蔵資料の再検討—」『MUSEUM』No431 1987年
- (11) 県内出土の有蓋台付壺については、出土遺跡も含め小林昭彦氏からの詳細な御教示を得た。
渋谷忠章・真野和夫『飛山』 大分県教育委員会 1973年
鏡山猛・小田富士雄・賀川光夫『大分県日田市法恩寺古墳』 日田市教育委員会 1959年
小田富士雄「古代の日田」『九州文化史研究所紀要』第15号 1970年
小田富士雄ほか『鶴見古墳』 宇佐市教育委員会 1975年
- (12) 山田邦和「装飾付須恵器の分類と編年」『古代文化』第41巻第8号 1989年
- (13) 柴尾俊介「北九州市域出土の土師器に関する覚書(1)—6、7世紀代の坏を中心として—」
『研究紀要』第3号 財団法人北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室 1989年
- (14) 佐々木隆彦編『今光遺跡・地余遺跡』 東急不動産株式会社 1980年
- (15) 井上裕弘ほか『御床松原遺跡』 志摩町文化財調査報告書第3集 福岡県志摩町教育委員会 1983年
- (16) 坂本嘉弘氏の御教示による。坂本嘉弘『佐知遺跡』 三光村教育委員会 1990年
- (17) 吉田寛『植田市遺跡Ⅱ』 大分県教育委員会 1989年
- (18) 宇野慎敏「曾根地方における古墳時代後期の土師器について(その1)—甕小考—」『研究紀要』第3号 財団法人北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室 1989年
宇野氏の分類に従えば、25号横穴墓例はⅠ式、81号横穴墓例はⅤ式に相当する。
- (19) 佐田茂ほか『セスドノ古墳』 田川市文化財調査報告書第3集 1984年 21頁
報告書では「朝鮮半島伽耶地方からもたらされたもの」としている。
- (20) 小高幸男「古墳出土釧の基礎的研究—金属製釧について—」『君津都市文化財センター研究紀要Ⅲ』財団法人君津都市文化財センター 1989年 参照。

(ウ) 土器のヘラ記号について

清原史代・村上久和

上ノ原横穴墓群の81基の横穴墓からは多量の須恵器、土師器が出土した。その中で特に須恵器にはヘラ記号が施されたものが多量にみられる。ヘラ記号を有す須恵器は窯跡、古墳、住居跡等からの出土例が知られるが、これまでまとまった形で報告されたものは少ない。またヘラ記号自体についても様々な論議がなされているが、未だはっきりした結論がでていない。当横穴墓群の須恵器はヘラ記号を考える上で使用場所（古墳）からの立場で、ある程度まとまったものとして考えられる。

1 上ノ原横穴墓群出土ヘラ記号の種類

当横穴墓群では完形品で1251個体の須恵器、土師器が出土した。そのうちヘラ記号を施したものの合計は212個体に及び、その割合は全体の16.9%を占める。以下ヘラ記号を有す須恵器が出土した横穴墓ごとに、個々の記号の報告を再度行う。ただし『上ノ原横穴墓群Ⅰ、Ⅱ』にヘラ記号として拓本が掲載されているが、本文で説明のないものは筆者がヘラ記号と判断しなかったものである。また小破片で器種が不明のものも数にいれなかった。

(1) 2号横穴墓

ヘラ記号が施された器種は坏身である。ヘラ記号は「X」で、平らな原体で薄く刻まれている。（『上ノ原横穴墓群Ⅰ』以下『Ⅰ』と略す。第17図）。墓道から出土した。

(2) 4号横穴墓

ヘラ記号が施された器種は坏蓋、坏身、大甕である。3点とも「X」である。坏蓋、坏身のヘラ記号は同じ原体で施されたのに対し、大甕の方はそれよりも太い原体で施しているようである（『Ⅰ』第29図）。また坏蓋、坏身はヘラ記号の書体、色調、胎土、焼成等が類似しているため、セットとして扱われた可能性が強く、出土状況よりセットとして出土した。大甕も墓道より出土した。

(3) 5号横穴墓

ヘラ記号が施された器種は坏身で、「母」のヘラ記号が施されている。ヘラ記号の原体は細い（『Ⅰ』第33図）。この須恵器は前庭部内の掘り込みより出土した。

(4) 8号横穴墓

ヘラ記号が施された器種は坏身である。ヘラ記号は「V」で、原体は細い（『Ⅰ』第53図）。この須恵器は玄室内より出土した。

(5) 9号横穴墓

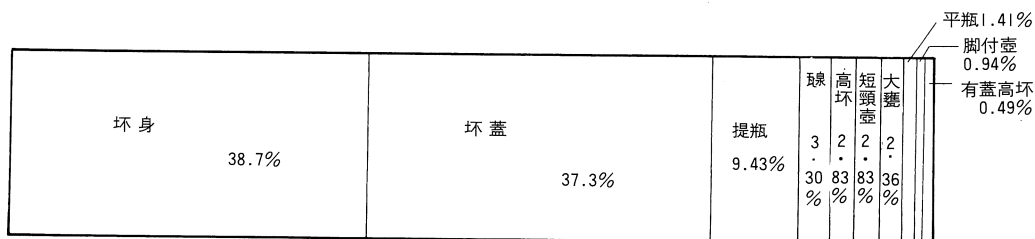
ヘラ記号が施された器種は坏身、埴瓶である。ヘラ記号は坏身に「一」、埴瓶に「II」で原体は埴瓶の方が太い（『Ⅰ』第57図）。またこれら2点は破片が散乱した状態で出土した。

(6) 12号横穴墓

ヘラ記号が施された器種は坏蓋、埴瓶である。ヘラ記号は坏蓋の内面に「III」、埴瓶に「X」が施され、原体は細く埴瓶の方が薄い（『Ⅰ』第70図、補図450図）。これら2点は墓道より出土した。

(7) 14号横穴墓

ヘラ記号が施された器種は坏蓋2点、短頸壺1点、埴瓶1点である。ヘラ記号は坏蓋、短頸壺に「卍」、もう



第477図 ヘラ記号土器の器種別割合

1点の坏蓋に「0」、埴瓶に「X」が施されている。ヘラ記号の原体については4点とも太さがそれぞれ違うものと思われる（『I』第79図）。これらの須恵器は墓道から破片が散乱した状態で出土した。

(8) 16号横穴墓

ヘラ記号が施された器種は坏身2点、壺1点である。ヘラ記号は坏身に「∧」「X」が、壺に「X」が施され、原体はそれぞれ太さが違う。特に坏身の「X」は細い（『I』第91図）。坏身2点は墓道の入口付近において、ヘラ記号のない坏と共にややまとまった状態で出土した。壺は墓道のほぼ全体に渡り破片が散乱した状態で出土した。

(9) 20号横穴墓

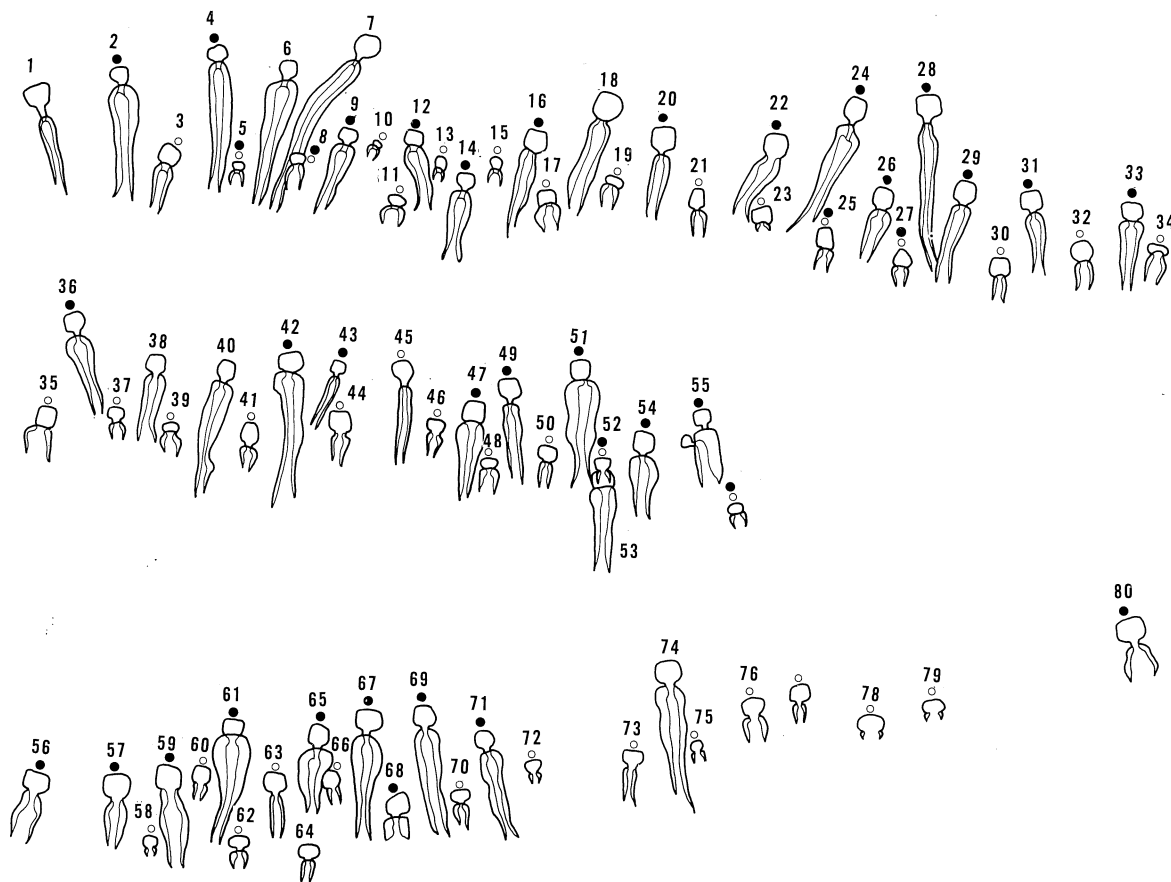
ヘラ記号が施された器種は坏蓋、埴瓶、短頸壺の3点である。ヘラ記号は3点とも「II」であるが、原体はそれぞれ太さが違う（『I』第111図）。これらの須恵器は墓道より出土した。

(10) 22号横穴墓

ヘラ記号が施された器種は坏蓋4点、坏身2点、大甕1点である。ヘラ記号は坏蓋に「I」「U」「∧」「卍」が施され、坏身に「I」「U」、大甕に「III」が施されている。ヘラ記号の原体は坏身（『I』第135図、第128図—8）を除いては類似している。また坏蓋、坏身に施された「U」は原体はもとより色調、胎土、焼成、手法の特徴が似ていることから、セットとして焼成された可能性が強い。これらは墓道より破片が散乱した状態で出土した。

(11) 24号横穴墓

ヘラ記号が施された器種は坏蓋、坏身の2点である。ヘラ記号は2点とも「X」で、原体は坏蓋の方が太い（『I』第145図）。これら2点は色調、胎土、焼成、手法の特徴が類似している。また出土状況は、どちらも墓道より破片の状態でややまとまって出土した。



○ 初期横穴墓
● ヘラ記号の出土した横穴墓

第478図 ヘラ記号土器出土横穴墓分布図

(12) 25号横穴墓

ヘラ記号が施された器種は坏身1点で、記号は「㊦」である。これはテラス状遺構内の供献土器群の1点であった。

(13) 26号横穴墓

ヘラ記号が施された器種は坏蓋4点、坏身7点、甗1点である。

(14) 27号横穴墓

ヘラ記号が施された器種は坏蓋2点、坏身1点で、ヘラ記号は3点とも「Ⅱ」である。原体は3点とも一致する（『Ⅰ』第171図）。これら3点はテラスより、ほぼ原形をとどめまとまって出土した。

(15) 28号横穴墓

ヘラ記号が施された器種は坏蓋1点で、ヘラ記号は「Ⅱ」である。これは玄門付近より出土した。

(16) 29号横穴墓

ヘラ記号が施された器種は坏蓋1点、坏身2点、甗1点である。ヘラ記号は「Ⅰ」が坏蓋、坏身、甗に、「X」が坏身に施されている。これらの原体は、「Ⅰ」は3点とも類似しているが、「X」は「Ⅰ」よりも細い（『Ⅰ』第182図）。以上は墓道より破片や完形品が散乱した状態で出土した。

(17) 31号横穴墓

ヘラ記号が施された器種は坏蓋2点、高坏1点である。ヘラ記号は「Ⅰ」が坏蓋に、「Ⅲ」が高坏に施されている。ヘラ記号の原体は坏蓋の「Ⅰ」は2点とも細く、同一である可能性が高い（『Ⅰ』第194図）。これらは墓道より破片が散乱した状態で出土した。

(18) 33号横穴墓

ヘラ記号が施された器種は坏蓋1点、坏身2点、甗1点、脚坏壺1点である。ヘラ記号は「Ⅰ」が脚付壺、「X」が坏蓋、坏身、「Ⅲ」が坏身、甗に施されている。「X」の原体は同一の可能性が高い。また「Ⅲ」は原体筆跡が全く違うものと思われる。これらは坏蓋、坏身はほぼ完形品で、脚坏壺、甗は破片でそれぞれ墓道より出土した。

(19) 36号横穴墓

ヘラ記号が施された器種は坏蓋5点、坏身2点、埴瓶1点である。ヘラ記号は「U」が坏蓋、「V」が坏蓋、埴瓶に、「X」が坏身、「Ⅲ」が坏蓋、坏身に施されている。ヘラ記号の原体は「Ⅲ」については太さはそう変わらないが、3点とも筆跡が全く違う。その他は全体的に似たような太さであり、筆跡は判断し難い（補図第450図）。これらは埴瓶が玄室内より出土し、その他は墓道より破片が散乱した状態で出土した。

(20) 42号横穴墓

ヘラ記号が施された器種は短頸壺1点である。ヘラ記号は破片であるため「Ⅰ」としか判断できないが、他の記号である可能性もある。これは墓道より出土した。

(21) 43号横穴墓

ヘラ記号が施された器種は坏蓋3点、坏身6点、埴瓶2点、高坏1点、短頸壺1点である。このうち坏身1点のみ外面に「U」、内面に平行タタキの上から「Ⅲ」と2ヶ所にヘラ記号を有する。この他「X」が坏蓋、埴瓶、「Ⅱ」が短頸壺、「ㄗ」が高坏、「Ⅲ」が坏身、「#」が坏蓋、埴瓶、「ㄐ」が坏蓋1、坏身4に施されている。原体は埴瓶に施された「X」「#」が類似している。またこれら2点は色調、胎土、焼成、技法の特色も類似している。「ㄐ」に関しては坏身1点のみ内面に施され、他の4点は外面に施されている。ヘラ記号の位置は天井部中央よりやや端である。内面の原体のみ太く、外面のものは類似している。以上は破片が散乱した状態で出土した。

(22) 47号横穴墓

ヘラ記号が施された器種は坏蓋10点、坏身10点、甗1点、埴瓶1点、大甕1点、脚坏壺1点である。ヘラ記号は「Ⅰ」坏蓋1に、「Ⅱ」が坏身1、1に、「U」が坏蓋1、坏身1にそれぞれ施されている。「U」を有する坏蓋と身は、蓋の口縁端部と身の受け部にまたがるように自然釉の斑点がある。そのためこれら2点は焼成時

は確実にセットであったことがわかる。またヘラ記号の原体も非常に類似している。次に「V」は坏蓋1、坏身2に、「0」は坏蓋2に施されている。「0」の原体は類似している。「M」は坏蓋1、坏身4、「M」は坏蓋1に施されている。これら6点の記号はいずれも同一の原体である可能性が強い。「X」は坏蓋2、坏身1、埴瓶1に施されている。「✕」は脚付壺1点である。以上は墓道より破片が散乱した状態で出土した。

(23) 49号横穴墓

ヘラ記号が施された器種は坏蓋1、坏身1、埴瓶2である。ヘラ記号は「V」が坏蓋、坏身に1点ずつ、「X」が埴瓶2点に施されている。「V」の記号に関しては原体、筆跡が類似している。以上は墓道より破片として出土した。

(24) 51号横穴墓

ヘラ記号が施された器種は坏蓋1、坏身4、埴瓶2、高坏1、甗1である。ヘラ記号は「V」が埴瓶1、「II」が坏身、高坏、甗にそれぞれ1点ずつ、「X」が坏蓋1、坏身2に、「M」は坏身1、「卍」は坏蓋1、「𠄎」は埴瓶1に施されている。また高坏の「II」と埴瓶の「𠄎」は頸部の2ヶ所に向かい合うように施されている。これらは墓道より破片で出土した。

(25) 53号横穴墓

ヘラ記号が施された器種は平瓶、埴瓶それぞれ1点ずつで、記号は「III」「II」である。これら2点は墓道より出土した。

(26) 54号横穴墓

ヘラ記号が施された器種は坏蓋21点、坏身18点、埴瓶2点である。ヘラ記号は「V」が坏蓋、坏身に12点ずつ、「V」が坏蓋4、坏身3に、「X」が坏蓋2、坏身1、「III」が坏蓋3、坏身2、「I」と「I」が埴瓶に1点ずつ施されている。以上は墓道より破片または完形品のセットとして出土している。またヘラ記号の原体は、セットの坏については同じと考えられる（第317～318図）。

(27) 55号横穴墓

ヘラ記号が施された器種は高坏2、甗1、短頸壺1である。ヘラ記号は高坏2「II」、短頸壺に「III」、甗に「V」がそれぞれ1点ずつ施されている。以上は高坏（第322図10）を除いてはほぼ完形品で墓道より出土した。

(28) 56号横穴墓

ヘラ記号が施された器種は坏蓋1点で、「X」である。これは墓道から出土した。

(29) 57号横穴墓

ヘラ記号が施された器種は坏蓋、坏身それぞれ1点ずつで、記号は2点とも「卍」である。また原体、筆跡とも非常に類似している。これら2点は墓道よりセットとして出土した。

(30) 59号横穴墓

ヘラ記号が施された器種は坏蓋2、坏身3、埴瓶1である。ヘラ記号は「V」が坏蓋、坏身にそれぞれ1点ずつ、「卍」が坏身に1、「X」が坏蓋、坏身、埴瓶にそれぞれ1点ずつ施されている。ヘラ記号の原体については「V」と「卍」、「X」が類似している。これらは埴瓶が墓道より破片として出土した以外は、ほぼ完形品でまとまって出土した。また「V」はセットとして出土した。

(31) 61号横穴墓

ヘラ記号が施された器種は坏蓋2、坏身2である。ヘラ記号は「X」が坏身1、「III」が坏蓋2、坏身1に施されている。以上は墓道より出土した。また第355図17と20はセットの可能性があるが、ヘラ記号は一致していない。

(32) 65号横穴墓

ヘラ記号が施された器種は大甕1点で、ヘラ記号は「X」である。これは墓道より完形品で出土した。

(33) 67号横穴墓

ヘラ記号が施された器種は坏蓋5、坏身3、有蓋高坏1、甗1、平瓶1、埴瓶1、短頸壺1である。ヘラ記号

は「V」が坏蓋、坏身に1点ずつ、「V」が坏蓋1、「𠄎」が坏蓋2、坏身1、埴瓶1、「Ⅲ」が埴瓶1、「𠄎」が有蓋高坏1、「X」が坏蓋1、坏身1、短頸瓶1、「Ⅲ」が1、短頸壺1に施されている。短頸壺は1個体中の外面頸部と底部に「Ⅲ」「X」が施され、原体、筆跡は同一と思われる。第383図8～19の5点は墓道より破片が散乱した状態で出土した。第383図1A～4Bの8点はポケット状遺構と呼ばれるものの中からほぼ完形に近い状態で出土した。これら8点のヘラ記号は4Aを除いては原体が類似している。

(34) 68号横穴墓

ヘラ記号が施された器種は坏身1点で、記号は「X」である。これは羨門より完形品で出土した。

(35) 69号横穴墓

ヘラ記号が施された器種は坏身2点、埴瓶1点である。ヘラ記号は坏身に「𠄎」「X」、埴瓶に「Ⅲ」が施されている。以上は墓道より破片で出土した。

(36) 71号横穴墓

ヘラ記号が施された器種は埴瓶1点で、ヘラ記号「Ⅲ」が外面頸部に向かい合うように付されている。原体、筆跡は同一のものと思われる。これは玄室内より完形品で出土した。

(37) 80号横穴墓

ヘラ記号が施された器種は坏蓋5、坏身4、高坏1、埴瓶1、土師器の甕1である。ヘラ記号は「I」が坏蓋1、「V」が坏蓋2、坏身1、「Ⅱ」が坏身2、高坏1、「#」が坏蓋1、「Ⅱ」が坏蓋1、坏身1、「V」が埴瓶1に施されている。埴瓶には口頸部外面の「V」に向かい合うようにもう1つヘラ記号が付されているが、大半が欠損しているため全体は不明である。土師器の甕は「✳」が施されている。以上は墓道より破片の状態で出土した。原体は「Ⅱ」、「#」が類似している。またこれら3点のヘラ記号の位置は、いずれも天井部（底部）内面である。

(38) 81号横穴墓

ヘラ記号が施された器種は坏身1、平瓶1である。ヘラ記号は坏身に「Ⅲ」、平瓶に「Ⅳ」が施されている。これら2点は墓道よりほぼ完形品で出土した。

以上述べたことをまとめた表が、第201表である。当横穴墓群81基中、ヘラ記号を有す土器が出土したのは38基である。以下ヘラ記号の種類、出土状況等を整理し若干の考察を試みることにする。

2 ヘラ記号の分析

ヘラ記号は全部で27種類認められた。その中で最も出土数の多い記号は「V」の46個体で、以下順に「X」の42個体、「Ⅱ」の24個体である。次に各横穴墓から出土したヘラ記号のうちで最も多い記号は「X」の23基、次いで「Ⅱ」の15基、「V」の14基の順となる（第202表）。「X」「Ⅱ」は各横穴墓に平均して認められるが、「V」はその53.3%が54号から集中して出土している。

出土土器数全体に対するヘラ記号の割合は16.9%であった。またⅠ期の横穴墓においてその割合の高いものを順に3基上げると、54号が66.1%、67号が52.0%、47号が40.7%となる（第203表）。

次にヘラ記号の付された土器を横穴墓の時期と関連付けて考えることにする。当横穴墓群においてヘラ記号を有す土器をもつ38基は、ほとんどが墓道の長い6C中頃以降の横穴墓である。ただし、5号、8号、25号、27号、68号は5C後半～6C初頭の横穴墓であった。これら5基の時期については、27号出土の3点の須恵器が6世紀初頭に比定される他は、すべて5世紀後半に位置付けられるものと思われる。

また出土状況は、初期横穴墓においては玄室、前庭部、テラス状遺構、羨門よりほぼ完形に近い状態で確認された。これに対し盛期横穴墓においては玄室より出土したものが数点ある他は、すべて墓道より出土した。墓道出土のものはその出土状況を3つに分類できた。①. 破片が散乱した状態で出土する場合、②. ほぼ完形品の一括遺物として出土する場合、③. 墓道の壁面に設けられたピット状の掘り込みないしはポケット状遺構よりほぼ完形品で出土する場合である。最も多いのは①のケースで、ヘラ記号を付す土器が2、3のケースでのみ出土することはなく、必ず①+②もしくは①+③といったケースをとる。

その中で注目される横穴墓は、26号、47号、54号、67号である。26号では墓道とピット状掘り込みからセットの坏が出土しているが、ヘラ記号は全く一致しない。47号ではほとんどが破片が散乱した状態で検出されたが、ヘラ記号を有す坏、壘は一部まとまって出土した。セット関係にあるもののヘラ記号がすべて一致するわけではなく、異なるものもある。しかしながら、54号においては、10セットの内1セットを除く全てのヘラ記号が一致した。異なるヘラ記号をもつ1組もその記号は「V」と「U」であまり差がなく、原体も類似している。この10セットは色調、胎土、焼成、技法等が酷似しているため、同一窯で焼かれた可能性が強い。次に67号であるが、ここでは墓道より破片の状態出土したものと、ポケット状遺構より一括して出土したものに分けられる。墓道出土のものに関しては、セット関係は認められなかった。ポケット状遺構からはヘラ記号をもつ須恵器が8点出土しており、出土状況よりそのうちの2組の坏がセット関係であることが確認された。いずれも身と蓋でヘラ記号は異なるが、一方は蓋に「V」、身に「U」と付され、他方はその逆である。また原体も類似している。

3 まとめ

本横穴墓群からは前述したように212個体のヘラ記号を刻す土器（総土器の16.9%）が出土した。

ヘラ記号の研究については大きく二つの研究の流れがある。1は大川清氏に代表される同一窯跡の出土品中に数種の記号があることからヘラ記号は「製作にしたがう工人達の仕訳とか識別に利点が存することからなされたものであろう」と考えている。2は久永春男氏⁽²⁾に代表される「使用者＝注文の側の必要にもとづいたもの」として、「使用者が自己の占有物であることを示すため、または一定の用途に占属する器物であることを示すために、生産者にあらかじめ依頼した記号」だと考えている。本遺跡は久永見解を検討する良好な資料である。以下、気づいた点を記す。

まず第1に坏蓋・身にヘラ記号の大半が認められる事実は窯跡においても同様であるが以外と提瓶にもヘラ記号が認められることである（第477図参照）。この提瓶は上ノ原横穴墓においてはその出土状態から被葬者の頭部横に埋置する場合が多く、この場合は使用者（被葬者）が自己の占有物であるためにヘラ記号を依頼した可能性が高い。また、54号横穴墓では坏蓋・身10セット全てが「U」のヘラ記号を記している点も使用者側に何らかの必要があったと考えられる。しかしながら大部分のものは同一横穴（墓道・前庭部・玄室・テラス状遺構）から数種類のヘラ記号が使用されているのが現状であり、久永氏の考えを前端的に肯定することはできない。第2にヘラ記号の種類は27種と窯跡出土資料に比べ多種である。これは後述の三辻論文にあるように須恵器の供給地が陶邑、宗像（遠賀川）、伊藤田窯跡と広域より持ち込まれた現象によるものであろうか。今後、竹並、前田山横穴墓群等の大規模群集墳との資料比較が望まれる。第3に坏蓋・身の内面にヘラ記号を刻したものが以外に多い。この種のヘラ記号は福岡県飯塚市井手ヶ浦窯跡⁽³⁾、中津市伊藤田瓦ヶ迫窯⁽⁴⁾に認められる。特に伊藤田窯跡からの供給は三辻論文を含め確実である。しかしながらこの内面ヘラ記号のルーツについては今後の重要な課題となろう。

註(1) 大川 清「栃木県益子町栗生滝ノ入窯址調査概報」『古代』19・20合併号 1956年

(2) 久永 春男「記号状刻文について」『刈谷市の古窯』1958年

(3) 嶋田 光一『井手ヶ浦窯跡』飯塚市教育委員会1985年

(4) 大分県文化課、小林昭彦氏御教示

第201表 ヘラ記号土器出土横穴墓一覧(1)

	2号	4号	5号	8号	9号	12号	14号	16号	20号	22号	24号	25号	26号	27号	28号	29号	31号	33号	36号	42号
I					1				3	2			2			3	2	1		1
∪								1		2			2						2	
U							1													
II						1								3	1				3	
V																			2	
X	1	3				1	1	2			2		3			1		2	1	
ㄥ			1																	
ㄣ												1								
ㄩ																				
ㄷ																				
III										1							1	2		
ノ										1			2							
井													1							
ㄱ																				
ㄴ					1															
ㄷ																				
井							2			1										
井																				
井																				
井													1							
井																				
井													1							
井																				
井													1							
記号の種類計	1	1	1	1	2	2	3	2	1	5	1	1	5	1	1	2	2	3	4	1
内面・外面ヘラ記号の割合①																				
内面	1				1	1							1	3				2	1	
外面		3	1	1	2	1	3	3	3	7	2	1	11		1	4	3	3	7	1
ヘラ記号の種類 ヘラ記号の総数	1/1	1/3	1/1	1/1	2/2	2/2	3/4	2/3	1/3	5/7	1/2	1/1	7/12	1/3	1/1	2/4	2/3	3/5	4/8	1/1

ヘラ記号土器出土横穴墓一覧(2)

	43号	47号	49号	51号	53号	54号	55号	56号	57号	59号	61号	65号	67号	68号	69号	71号	80号	81号	横穴にわたる合計
I		1															1		10
V	1	2	2	1		24	1			2			2				3		13
U																			1
II	1	2		3	1	1	2			1			3				2		13
V		3				7							1				1		5
X	2	4	2	3		3		1		2	1	1	3	1	1				22
㊦																			1
㊧																			1
㊨		5		1															2
㊩		2																	1
㊪																			1
㊫	1																		1
III	1	3			1	5	1				3		1			1	3	1	13
㊬	5												1						4
㊭	2									1									3
㊮		1																	1
㊯						1													1
㊰																			1
㊱		1															1		2
㊲													2		1				2
㊳				1					2										4
㊴				1															1
㊵																	1		1
㊶																			1
㊷															1				1
㊸																			1
記号の種類計	7	10	2	6	2	6	3	1	1	4	2	1	7	1	3	1	7	2	
内面・外面ヘラ記号の割合②																			
内面	1	13	2	3		5		1		1			4		1		3		44
外面	12	11	2	7	2	36	4		2	5	4	1	9	1	2	1	9	2	167
ヘラ記号の種類 ヘラ記号の総数	7/13	10/24	2/4	6/10	2/2	6/41	3/4	1/1	1/2	4/6	2/4	1/1	7/13	1/1	3/3	1/1	7/12	2/2	

第202表 器種別にみた各ヘラ記号の数

	坏蓋	坏身	有蓋高坏	高坏	甗	平瓶	埴瓶	大甕	壺	短頸壺	脚付壺	計
I	8	4			1		1			2	1	17
V	21	23			1		1					46
U	1											1
II	9	6		3	2		3			1		24
V	7	4					2					13
X	12	18			1		7	2	1	1		42
㊦		1										1
㊧		1										1
㊨	1	5										6
㊩	2											2
㊪		1										1
㊫				1								1
III	6	9		2	1	2	1	2		1		24
㊬	3	5	1									9
㊭	2	1					1					4
㊮	1											1
㊯							1					1
㊰								1 (土師器)			1	2
IIII					1		1					2
㊱	4	1								1		6
㊲							1					1
㊳	1											1
㊴						1						1
㊵	1											1
㊶		1										1
㊷		1										1
計	79	81	1	6	7	3	20	5	1	6	2	211

第203表 横穴墓におけるへら記号土器出土数（器種別）

	2号	4号	5号	8号	9号	12号	14号	16号	20号	22号	24号	25号	26号	27号	28号	29号	31号	33号	36号	小計	
坏 蓋		1(0)				1(6)	2(9)		1(4)	4(20)	1(2)		4(20)	2(10)	1(3)	1(07)	2(8)	1(17)	5(15)	25	
坏 身	1(8)	1(2)	1(1)	1(4)	1(2)			2(11)		2(24)	1(3)	1(4)	7(25)	1(11)		2(13)		2(17)	2(16)	25	
有蓋高坏																				0	
高 坏																	1(1)			1	
甗													1(2)			1(4)		1(1)		3	
平 瓶																				0	
提 瓶					1(3)	1(2)	1(4)		1(1)										1(4)	5	
大 甗		1(3)								1(3)										2	
壺							1(1)													1	
短頸壺							1(1)		1(1)											2	
脚付壺																		1		1	
計	1	3	1	1	2	2	4	3	3	7	2	1	12	3	1	4	3	5	8	68	
横穴出土土器の総数	19	37	6	14	11	45	47	40	48	78	40	9	74	32	24	54	31	51	61		
へら記号土器の割合	5.3%	8.1%	16.7%	7.1%	18.2%	4.4%	8.5%	7.5%	6.3%	9.0%	5%	11.1%	16.2%	9.4%	4.2%	7.4%	9.7%	9.8%	14.8%		
42号																					
坏 蓋		3(0)	10(4)	1(4)	2(3)		21(24)		1(1)	1(2)	2(7)	2(6)		5(8)				5(2)		79	
坏 身		6(15)	10(15)	1(4)	4(8)		18(25)			1(2)	3(2)	2(5)		3(6)	1(2)	2(7)		4(13)	1(3)	81	
有蓋高坏														1(2)						1	
高 坏		1(1)						2(16)										1(4)		6	
甗								1(3)						1(1)						7	
平 瓶						1(2)								1(1)						3	
提 瓶		2(9)	1(4)	2(3)	2(2)	1(1)	2(2)				1(1)			1(3)		1(1)	1(3)	1(3)	1(2)	20	
大 甗			1(2)										1(3)					1(2)	(土師器)	5	
壺																				1	
短頸壺 (ミナチヤウ)		1(1)						1(2)						1(1)						6	
脚付壺																				2	
計	1	13	24	4	10	2	41	4	1	2	6	4	1	13	1	3	1	12	2	212	
横穴出土土器の総数	31	49	59	16	38	11	62	58	1	7	39	27	11	25	5	24	8	44	17	1252	
へら記号土器の割合	3.2%	26.5%	40.7%	25%	26.3%	18.2%	66.1%	6.9%	100%	28.6%	15.4%	14.8%	9.1%	52.0%	20.0%	12.5%	12.5%	27.3%	11.8%	16.9%	

1) はじめに

土器の考古学は1) 編年、2) 伝播・流通の両面の研究を経て完成する。土器編年は主として土器の型式分類によって行われるので、考古学者によって遂行される。他方、土器の伝播、流通の研究には胎土分析が有効であり、ここに自然科学者が関与することになる。とくに、この十数年間にコンピュータを備えた、きわめて安定性の良い分析装置が普及し、このような研究を可能にした。とはいうものの、胎土分析によって直ちに土器の産地を推定できるかということ、そうは簡単にはいかない。まず、各地の土器に元素の含有量からみて地域差があるかどうか、あるとすれば、どういう元素が地域差を有効に表示するのか、また、その原因は何かといった基礎研究を行わなければならないのである。さらに、その上に、如何にして産地を推定するかということも重要な問題である。これらの問題を解決してはじめて、古墳出土土器の元素分析のデータから、その産地が推定できる訳である。ここに至るまでには、全国各地の窯跡出土の多数の須恵器片の分析が必要であり、長期間にわたる分析作業が求められる。現在、筆者のところ、日本全域の数多くの窯跡出土須恵器の分析データが出されており、既に、須恵器の産地推定法の骨格は出来上がっている。そして、この方法を使って、各地で須恵器の伝播・流通の研究を試験的に進めている現状である。

今回、上ノ原横穴墓群から出土した500点を越える土器試料が分析された。これは数が多い点では異例のことである。これまでは一つの古墳群、遺跡群から出土した土器片はせいぜい20～30点程度分析されたに過ぎない。さらに、今回は須恵器のみならず、同時に出土した土師器片も多数分析されており、この点でも異例である。これらの点で本報告は考古学側に一つのインパクトを与えるものと思われる。

また、上ノ原横穴墓群の須恵器の産地を推定するにあたり、新たに基礎データとして福岡県築上郡の山田東窯、および、宗像窯群のうちの稲元黒巡窯、日焼原2号窯、須恵須賀浦窯出土の須恵器を分析したので、併わせて報告する。

2) 分析法

試料はすべてミニグラインダーで表面を研磨し、付着物を除去して胎土をとり出し、タングステンカーバイド製乳鉢で100～200メッシュ程度に粉碎された。粉碎することの意味は試料を均質化することである。さらに、粉末試料は塩化ビニール製リングを枠にして、10～15トンの圧力を加えてプレスし、内径2cm、厚さ3～5mmのコイン状の錠剤試料を作成した。このような測定用試料を調整するのは蛍光X線分析の測定は相対測定であるので、標準試料を含めて、全試料の検出器に対する幾何学的条件を一定にするためである。

蛍光X線の測定には2次ターゲット方式のエネルギー分散型蛍光X線分析装置が使用された。通常、Tiを2次ターゲットにして真空中でK、Caを、また、Moを2次ターゲットにして空気中でFe、Rb、Srを測定した。勿論、バックグラウンドを差引いて正味のカウンタ数として各ピークの面積を計算した。この作業はすべて、装置に付属しているコンピュータが行った。

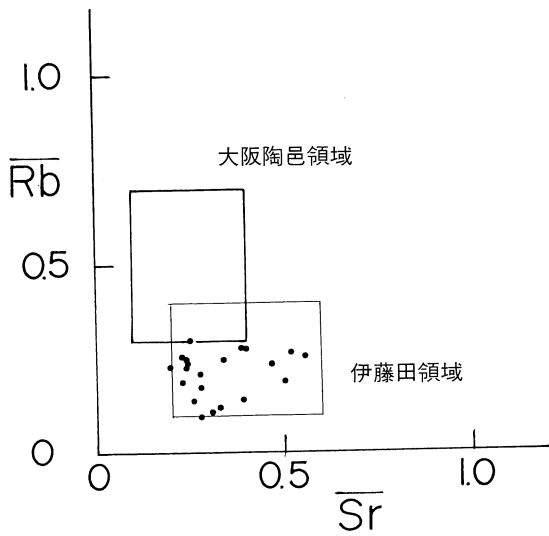
標準試料としては岩石標準試料JG-1を使用した。したがって、分析値はすべて、JG-1による標準化値で表示した。

窯間の相互識別や上ノ原横穴墓群から出土した須恵器の産地推定にはマハラノビスの汎距離が使用された。また、土師器の分類にはクラスター分析を行った。これらの作業はすべて、パソコンで行われた。

3) 分析結果

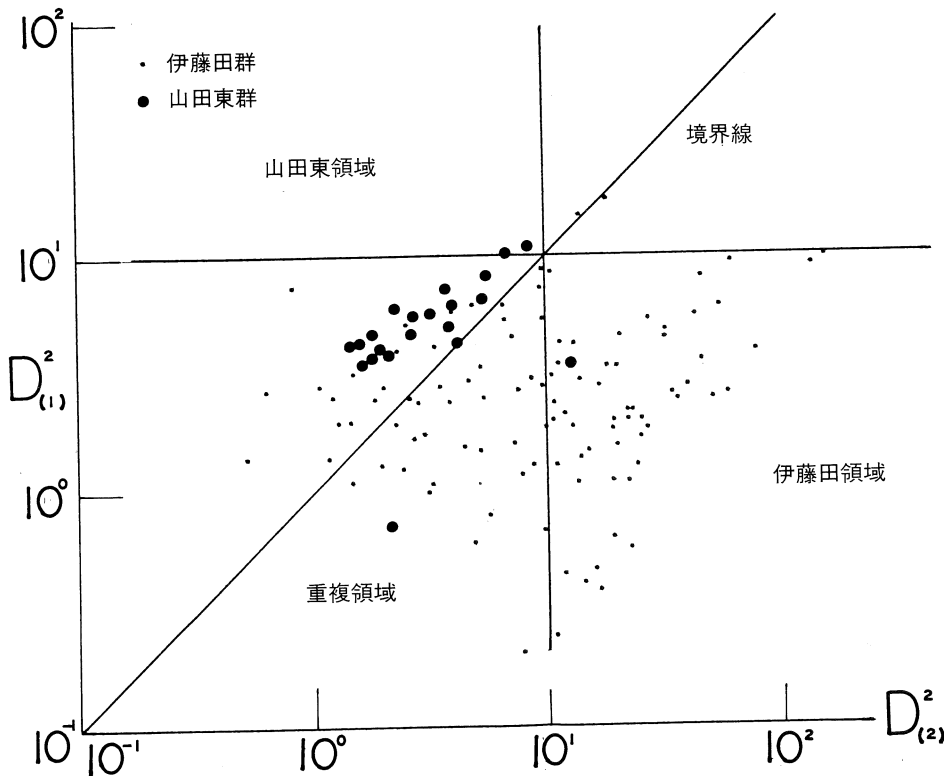
はじめに、基礎データとして窯跡出土須恵器の分析結果について説明する。

第483図には地元の山田東窯の須恵器のRb-Sr分布図を示す。Rb-Sr分布図は各地の須恵器の地域差を表示する上に有効であることが示されている。第479図には比較のため、伊藤田群の数十点のサンプルを包含するよう



第479図 山田東窯出土須恵器のRb-Sr分布図

とがわかる。このように、母集団 (X) のサンプルの95%以上が $D_{(X)}^2 \leq 10$ の領域に分布することが全国各地の窯跡出土須恵器の分析データから判明した。この結果を窯間の相互識別に活用するのである。この2群間判別図では両群の化学特性が類似してくると、両群のサンプルは次第に接近して分布し、遂には、 $D_{(1)}^2 \leq 10$ 、 $D_{(2)}^2 \leq 10$ の領域に重複して分布するようになる。それでこの領域を重複領域という。両群の過半数のサンプルがこの領域に分布すると、両群の相互識別は困難になる。第480図より、伊藤田群のサンプルの半数近くは伊藤田領域 [$D_{(1)}^2 \leq 10$ 、 $D_{(2)}^2 > 10$] に分布するものの、残り半数と山田東群のほとんどすべてのサンプルは重複領域に分布することがわかる。このことは山田東群の須恵器はK、Ca、Rb、Sr 因子からみて、伊藤田群の須恵器と類似しており、伊藤田群として一括できることを示している。しかし、このことは山田東群の化学特性が伊藤田群内の他の窯の特性とぴったり一致するかという必ずしもそうではなく、第484図からもわかるように、伊藤田群の中でも山田東群の須恵器は偏在して分布していることがわかる。つまり、伊藤田群内でも各窯間では若干の小地域

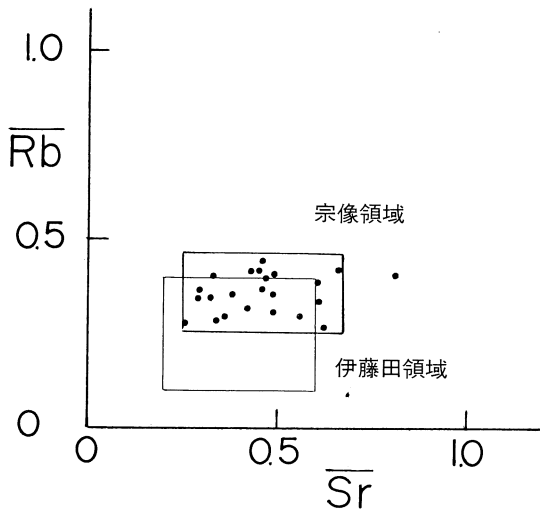


第480図 伊藤田群と山田東窯の相互識別 (K、Ca、Rb、Sr因子使用)

にして伊藤田領域を示してある。勿論、この領域は定性的な意味しかもたないが、山田東窯の須恵器胎土が伊藤田群のものと同質か、それとも異質かを簡単に知る上にはきわめて有効である。第480図より、山田東窯の須恵器はほとんどすべて、伊藤田領域内に分布し、伊藤田群として一括できる可能性があることを示唆している。この点をより定量的に示したのが第480図である。両軸にとった $D_{(1)}^2$ 、 $D_{(2)}^2$ はそれぞれ、伊藤田群、山田東群の重心からのマハラノビスの汎距離の二乗である。マハラノビスの汎距離とは母集団の重心から標準偏差の何倍分、離れているかを示す統計学上の距離のことである。普通、重心から正、負両側の値をとり得るので、計算処理上の煩雑さを避けるため、二乗して負符合を消去して使用する。第484図をみると、伊藤田群のサンプルは2点を除いてすべて、 $D_{(1)}^2 \leq 10$ の領域に分布し、また、山田東群のサンプルも1点を除いてすべて、 $D_{(2)}^2 \leq 10$ の領域に分布していること

差があるのである。このようなことは全国各地の窯群内で認められている。しかし、現在、この小地域差を問題にせず、このような場合、一括して群を形成させて産地推定に活用しているのが現状である。したがって、上ノ原横穴墓群の須恵器の産地推定でも、伊藤田群へ帰属できるかどうかを考えることにした。

第481図には宗像窯群の須恵器のRb-Sr分布図を示す。比較のため、伊藤田領域もしめしてある。一部に重複する領域があるが相互識別の可能性もあることがわかる。このことはより定量的には、第



第481図 宗像群の須恵器のRb-Sr分布図

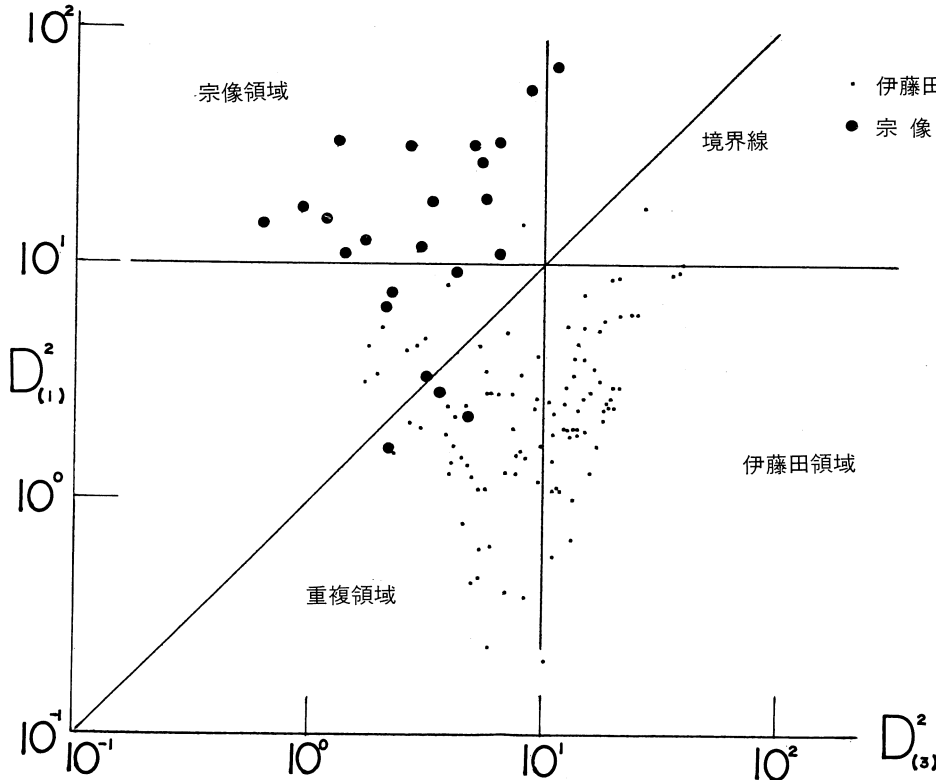
482図の2群間判別分析図で確認される。第482図には伊藤田群と宗像群との相互識別の結果を示す。 $D_{(1)}^2$ 、 $D_{(3)}^2$ はそれぞれ、伊藤田群、宗像群からのマハラノビスの汎距離である。第481図より予想されるように、宗像群のサンプルの一部は重複領域に分布するものの、大部分のサンプルは伊藤田群から分離しており、両群の相互識別は可能であることを示している。

次に、6世紀代の須恵器に関連して大阪陶邑群との相互識別の可能性について述べる。伊藤田群と大阪陶邑群とは完全に相互識別できることは既に報告してある⁽²⁾。ここでは宗像群と大阪陶邑群との相互識別について述べる。第483図に両群の相互識別の結果を示す。両群のサンプルの1点ずつが重複領域に分布しているものの、他のサンプルはすべて、それぞれ、大阪陶邑領域 [$D_{(0)}^2 \leq 10$ 、 $D_{(3)}^2 > 10$]、宗像領域 [$D_{(3)}^2 \leq 10$ 、 $D_{(0)}^2 > 10$] に分布し、両群の相互識別はほぼ完全であることがわかる。

以上の結果に基づいて、上ノ原横穴墓群の須恵器の産地推定として、地元、伊藤田群、近接地域の窯群である宗像群、それに、大阪陶邑群への帰属の可能性を検討した。

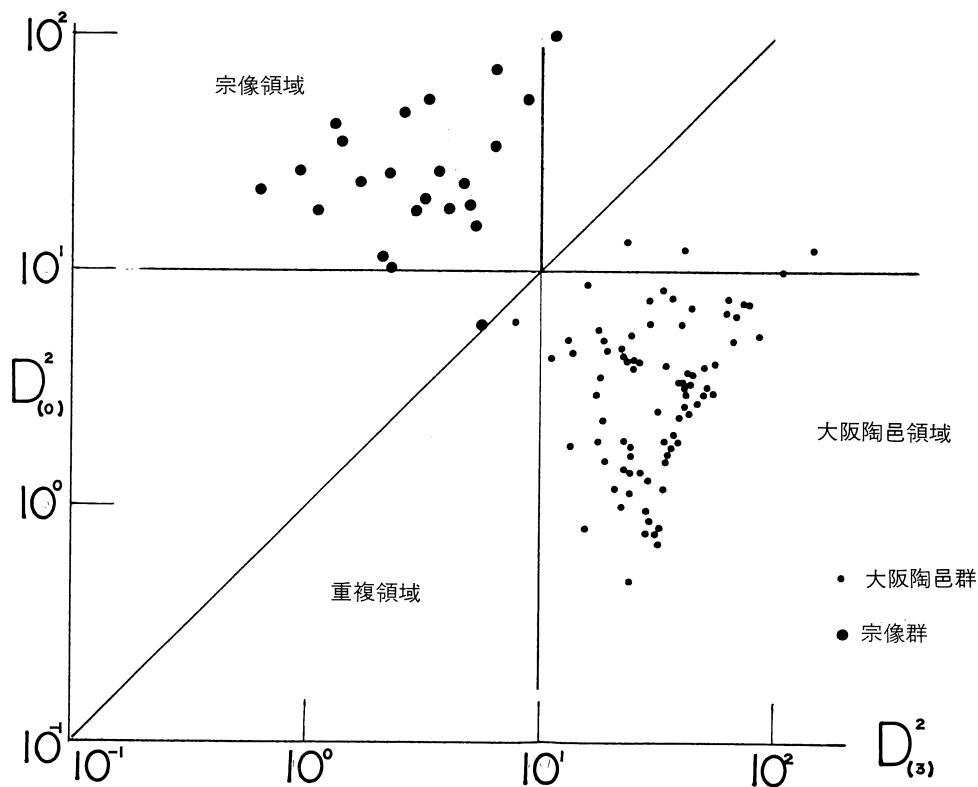
まず、全試料の分析値を表1に示す。最左欄には番号で1から546までの試料番号を付してある。これらの中でNo212、No213は下郡遺跡、No214は宝剣山古墳から出土した須恵器であり、他はすべて、上ノ原横穴墓群出土の須恵器と土師器である。なお、土師器についてはクラスター分析を行うため、改めて、クラスター番号を1から82まで付した。各試料の器形も記載してある。

次に、須恵器についてはK、Ca、Rb、Srの4因子を使って、それぞれ、伊藤田群、宗像群、大阪陶邑群からのマハラノビスの汎距離の二乗を計算した。そして、 $D_{(X)}^2 \leq 10$ を各母集団(X)への帰属条件として産地を推定することにした。(X)とはそれぞれ、伊藤田群、宗像群、大阪陶邑群である。そして、いずれの母集団に対しても、 $D_{(X)}^2 \leq 10$ を満足しないときには産地不明とした。こうして産地推定された結果は第204表にまとめられている。こ

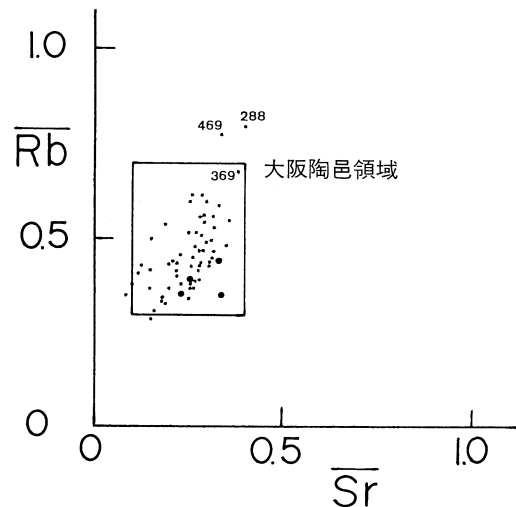
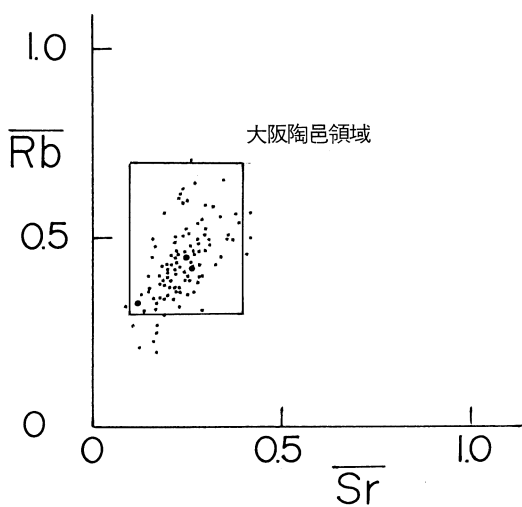


第482図 伊藤田群と宗像群の相互識別(K、Ca、Rb、Sr因子使用)

ここで、産地推定された結果を確認するため、Rb-Sr分布図を作成した。第484・485図には大阪陶邑群産と推定された試料のRb-Sr分布図を示す。試料番号1~265までを第484図に、また、試料番号266以後を第485図にプロットしてある。これらの図には大阪陶邑領域も示してある。ほとんどの試料は大阪陶邑領域によく対応していることがわかる。なお、第485図で大阪陶邑領域の右上にずれて分布するNo369、469、288の3点は朝鮮半島産の陶質土器である可能性をもつ。また、第484図で大阪陶邑領域の左下にず



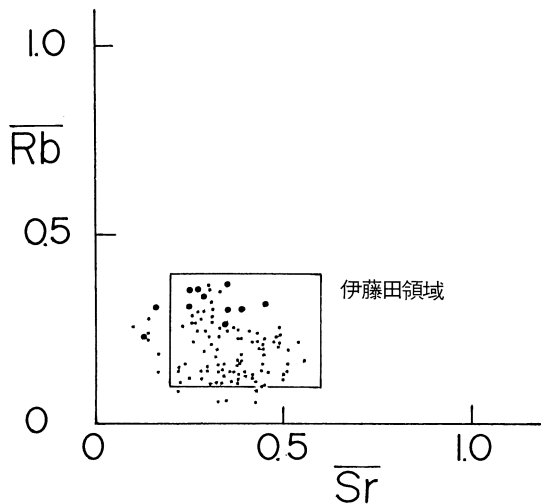
第483図 大阪陶邑群と宗像群の相互識別 (K、Ca、Rb、Sr因子使用)



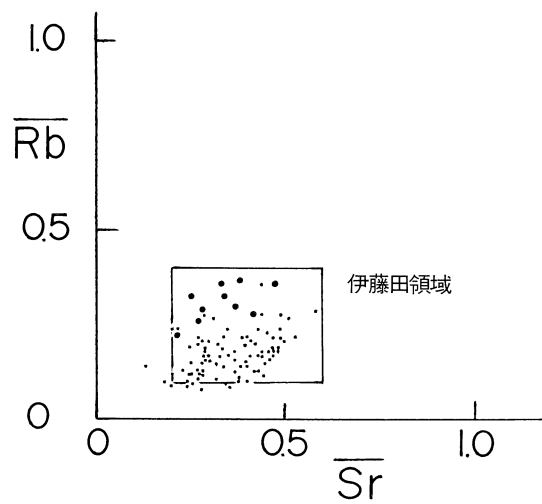
第484図 大阪陶邑群産と推定されたもののRb-Sr分布図(1) 第485図 大阪陶邑群産と推定されたもののRb-Sr分布図(2)

れて分布する数点の試料も大阪陶邑群産ではない可能性をもつが、その場合は産地不明となる。表2で伊藤田群産と推定されたものは第486図(試料番号1~265)と第487図(試料番号266以後)にプロットしてある。ここでも、ほとんどのサンプルが伊藤田領域によく対応していることがわかる。これらの図で点ではなく、●印で示したのは大阪陶邑群産、宗像群産の可能性も併せもつものである。第492図には宗像群産と推定されたもののRb-Sr分布図を示す。この図でも、●印で示したものは大阪陶邑群産、伊藤田群産の可能性も併せもつ試料である。しかし、単独で宗像群産と推定されたものが20点ほどもあり、宗像窯群からの搬入があったことはほぼ確実になった。

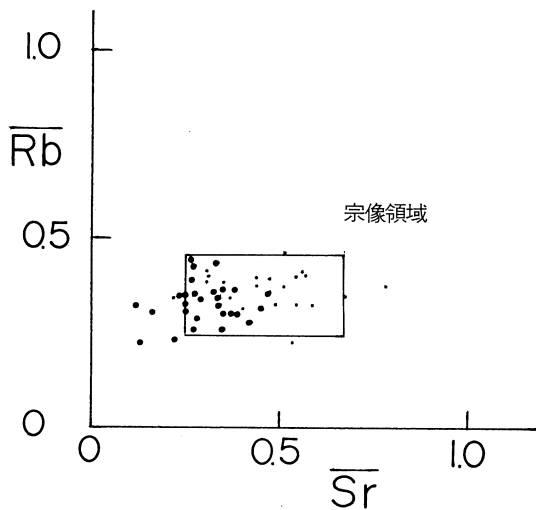
以上の結果をみると、伊藤田群産と推定されたものが最も多いが、地元の須恵器供給源として当然と言えよう。その反面、大阪陶邑群産と推定された試料も意外に多いことにも驚くであろう。多くのものは前記、3母集団に帰属させることができたが、他方、これら3母集団には帰属しない試料もあった。これら産地不明の試料のRb-



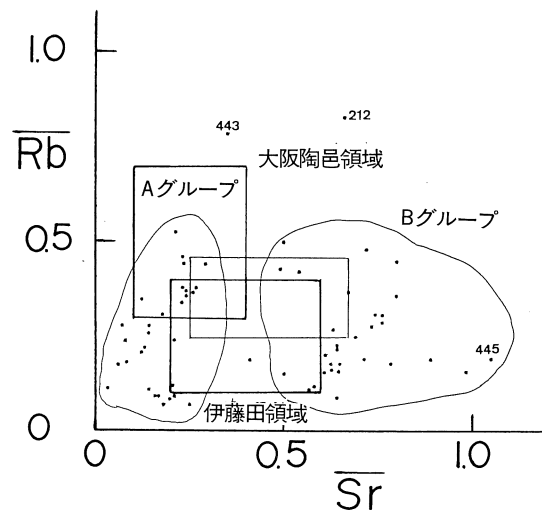
第486図 伊藤田群産と推定されたもののRb-Sr分布図(1)



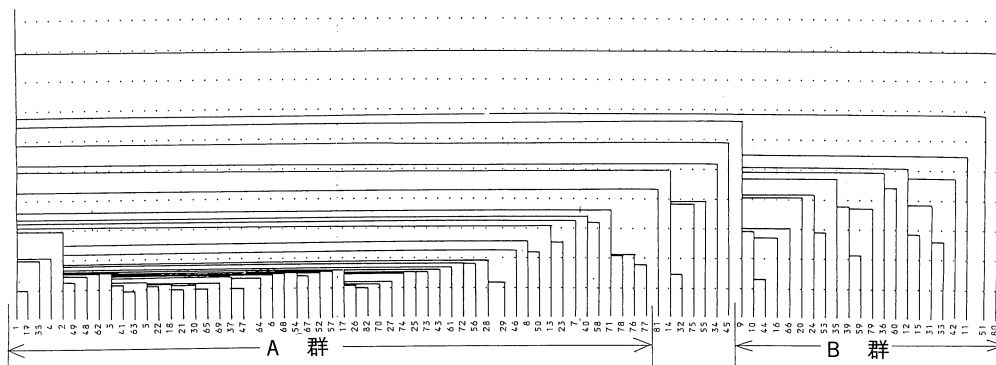
第487図 伊藤田群産と推定されたもののRb-Sr分布図(2)



第488図 宗像群産と推定されたもののRb-Sr分布図

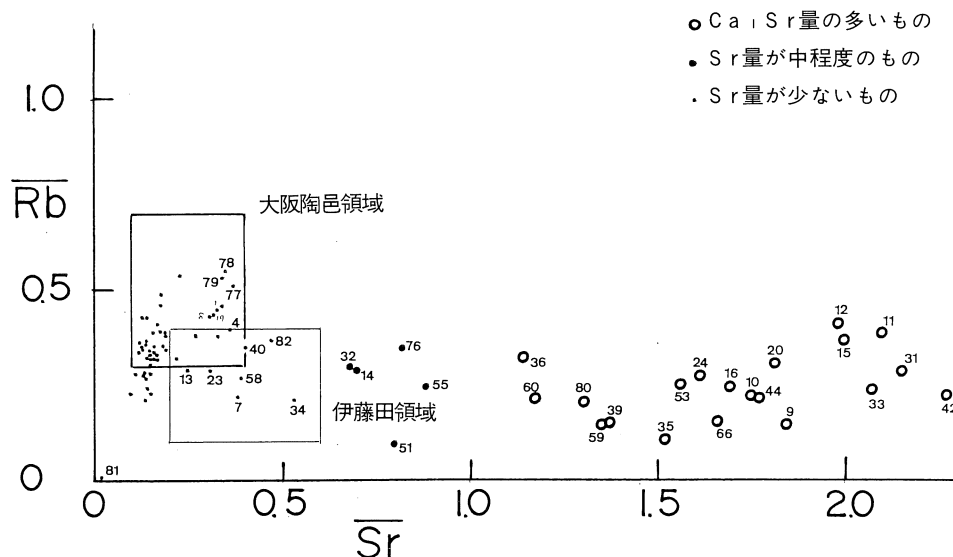


第489図 産地不明となったもののRb-Sr分布図



第490図 土師器のクラスター分析 (K、Ca、Rb、Sr因子使用)

Sr 分布図を第489図に示す。ここでは比較のため、前記、3母集団の分布領域をも示してある。ここで注意すべき点は産地不明のものの中には Sr 量の少ないAグループと、Sr 量が多いBグループがあることである。このうちAグループの中に大阪陶器群産の可能性をもつものがあり、逆に、Bグループの中に伊藤田群産の可能性をもつものが含まれている。なお、No443、212の2点は朝鮮半島産の陶質土器である可能性をもち、右下欄外にずれて分布したNo445は在地産の須恵器である可能性がある。とはこのものの、産地不明のもの多くは未対応の窯のものと思われる。



第491図 土師器のRb-Sr分布図

以上のようにして、上ノ原横穴墓群の須恵器の供給源は主として、地元伊藤田群、近接地域の宗像群、そして、初期須恵器の最大の供給源である大阪陶邑群の3群であることが明らかになった。

次に、こうして産地推定された須恵器を器形ごとに分類し、産地によって特異的な器形があるかどうかを探ってみることにした。その結果を第206表にまとめてある。有蓋高坏、埴、埴、埴は伊藤田群より大阪陶邑群からの搬入品が多く、逆に、高坏、坏、横瓶、埴瓶、平瓶、壺類は伊藤田群産のものが多い傾向があることがわかる。とくに、器台、平瓶は大阪陶邑群からの搬入品は一つもない点、また、壺類では短頸壺よりも長頸壺の方が大阪陶邑群からの搬入品が多い点などが興味深い。甕類も大阪陶邑群からの搬入品が意外に多く、同時に、産地不明となったものに甕類が意外に多い点も注目される。

さらに、第207表には産地推定された須恵器を古墳ごとに分けた結果を示してある。1号墳には大阪陶邑産と推定されたものが6点あり、伊藤田群、宗像群産と推定されたものが1点もない。産地不明の1点も大阪陶邑産の可能性のあるものである。その他、18、25、30、40、41、45、62、65号横穴墓、などには大阪陶邑産のみが検出されている。逆に、伊藤田群産のものも多く、大阪陶邑産が検出されなかったのは47、49、51、53、54、55、57、61、69、71、73、80、81号横穴墓などであり、この他に大阪陶邑産が若干含まれるが、伊藤田群産が多かったのは4、20、22、24、33、43号横穴墓であった。このように各産地の須恵器は古墳によっては偏って分布していることも注目すべき点である。

最後に、土師器の分析結果について説明する。土師器には生産地である窯跡が残っていない。したがって、須恵器のように産地を推定する訳にはいかない。そのために、須恵器で有効に地域差を表示したK、Ca、Rb、Srの4因子を使ってクラスター分析を行い、分類できるかどうかを調べてみた。これら4因子の生データを使って最短距離法で類似度を計算し、得られたデンドログラムを第490図に示す。問題は類似度にギャップが生じた個所のうち、どこで区切って分類するかという点である。その判断の助けにするため、Rb-Sr分布図を描いてみた。第491図に示す。そうすると、土師器もSr量の多いものと少ないものに2分されることがわかる。Sr量が多いものにはCa量も多く、逆に、Sr量が少ないものにはCa量も少ないことは第204表から確かめられる。そこで、デンドログラムのNo77とNo81の間のギャップ、および、No45とNo9の間のギャップで区切ってみると、No1～No77まではCa、Sr量の少ないA群となり、No9～No51まではCa、Sr量の多いB群となる。両群の間に挟まれたNo81～No45は中程度のCa、Sr量を含む。これまでの研究から、一般に同じ地域の中で土師器の胎土は須恵器の胎土と異なる場合が多い。つまり、土師器は須恵器と同じ粘土を素材にしていない場合が多いのである。したがって、窯跡出土須恵器の分析データは直接、土師器の産地推定に使えない場合の方が多いのである。どちらかというと、土師器の胎土は弥生土器の胎土に似ている場合の方が多いのである。Rb-Sr分布図を比較すると、B群の土師器は大分県の弥生土器の分布位置によく対応する。したがって、B群の土師器は在地産の土師器である可能

性が高いと筆者は考えている。他方、A群の土師器に対応する胎土をもつ弥生土器は大分県下には検出されていない。したがって、A群土師器は外部地域からの搬入品である可能性を濃厚にもつ。そして、この型の胎土をもつ土師器、弥生土器は畿内に見つけられており。A群は畿内からの搬入品である可能性を十分もつと筆者は考えている。

4) 参考文献

- 1) 三辻利一『古代土器の産地推定法』ニューサイエンス社 1983
- 2) 『大分県史、先史篇Ⅱ』P 477～482 1989
- 3) 小柳和宏、三辻利一「大野川流域における土器の移動——弥生土器胎土の蛍光X線分析」『おおいた考古』 2 P 23～48 1989

第204表 土器の分析値

試料番号	クラス番号	横穴番号	器種		器形		K	Ca	Fe	Rb	Sr
1		1号横穴	須恵器	1号-4	有蓋高坏	蓋	0.361	0.031	2.97	0.422	0.198
2		〃	〃	-5	〃	身	0.416	0.068	2.37	0.533	0.251
3		〃	〃	-7	埴		0.389	0.123	2.12	0.503	0.357
4		〃	〃	-8	〃		0.402	0.117	2.23	0.507	0.359
5		〃	〃	-9	甗		0.376	0.059	2.35	0.488	0.217
6		〃	〃	-10	〃		0.327	0.053	3.21	0.340	0.194
7		〃	〃	-11	横瓶		0.234	0.022	2.74	0.261	0.141
8		2号横穴	〃	2号-9	坏蓋		0.288	0.027	2.06	0.375	0.184
9		〃	〃	-14	長頸壺		0.225	0.162	2.40	0.250	0.352
10		3号横穴	〃		坏身		0.451	0.079	2.13	0.504	0.279
11		〃	〃	3号-9	甗		0.189	0.018	3.07	0.258	0.097
12		4号横穴	〃		甗		0.488	0.096	2.70	0.497	0.277
13		〃	〃		坏身		0.179	0.099	4.03	0.231	0.131
14		〃	〃		〃		0.317	0.041	2.35	0.426	0.214
15		〃	〃	4号-35	甗		0.496	0.167	2.86	0.512	0.419
16		〃	〃	-28	〃		0.230	0.217	2.19	0.350	0.334
17		〃	〃	-31	〃		0.206	0.332	2.85	0.240	0.494
18		〃	〃	-19	高坏		0.216	0.039	2.73	0.314	0.164
19		〃	〃	-5	坏蓋		0.235	0.175	2.27	0.361	0.300
20		〃	〃	-3	〃		0.467	0.123	2.61	0.495	0.314
21		5号横穴	〃	5号-6	有蓋高坏	身	0.293	0.014	2.10	0.271	0.109
22		7号横穴	〃		坏身		0.385	0.097	2.26	0.395	0.291
23		〃	〃	7号-14	高坏脚		0.182	0.166	1.79	0.251	0.271
24		〃	〃	-38	甗		0.369	0.075	1.99	0.433	0.203
25		〃	〃	-3A	坏蓋		0.110	0.166	3.45	0.111	0.383
26	1	8号横穴	土師器	8号-5	碗		0.456	0.098	2.31	0.447	0.330
27	2	〃	〃		〃		0.342	0.069	6.03	0.213	0.139
28		9号横穴	須恵器		有蓋高坏	蓋	0.123	0.162	2.32	0.140	0.303
29		〃	〃	9号-7	坏蓋		0.410	0.122	3.28	0.434	0.325
30		11号横穴	〃	11号-1	甗		0.337	0.027	2.01	0.412	0.198
31		12号横穴	〃		壺		0.221	0.015	3.64	0.279	0.070
32		〃	〃	12号-37	横瓶		0.161	0.260	3.13	0.165	0.611
33		〃	〃	-27	甗		0.109	0.161	2.77	0.108	0.325
34		〃	〃		坏蓋		0.227	0.027	2.83	0.212	0.123
35		14号横穴	〃		坏身		0.318	0.074	2.92	0.364	0.217
36		16号横穴	〃	16号-7	短頸壺		0.183	0.152	2.06	0.247	0.288
37		〃	〃	-28	長頸壺		0.201	0.237	2.21	0.256	0.372
38		〃	〃	-25	坏身		0.178	0.010	3.41	0.178	0.064
39		〃	〃	-11	坏蓋		0.436	0.074	2.12	0.468	0.222
40		〃	〃	-24B	坏身		0.096	0.009	3.56	0.108	0.028
41		〃	〃	-26	横瓶		0.144	0.199	2.79	0.156	0.330
42	3	17号横穴	土師器	17号-1	碗		0.391	0.056	5.79	0.322	0.144
43		18号横穴	須恵器	18号-4	有蓋高坏		0.385	0.050	1.91	0.617	0.227
44		〃	〃	-11	脚付長頸壺		0.335	0.048	3.52	0.315	0.226
45		〃	〃		坏		0.380	0.082	2.74	0.433	0.278
46		〃	〃	-28	甗		0.358	0.040	2.04	0.509	0.223
47	4	19号横穴	土師器	19号-1	碗		0.554	0.105	3.15	0.399	0.362

試料番号	クラス番号	横穴番号	器種		器形	K	Ca	Fe	Rb	Sr
48		20号横穴	須恵器	20号-2 A	坏蓋	0.341	0.064	3.01	0.400	0.201
49		〃	〃	-3 B	坏身	0.139	0.242	2.89	0.140	0.402
50		〃	〃	-5 A	坏蓋	0.096	0.133	2.78	0.121	0.252
51		〃	〃	-9 A	〃	0.314	0.026	2.12	0.482	0.165
52		〃	〃	-17	高坏	0.242	0.140	2.27	0.291	0.255
53		〃	〃	-20	壺	0.180	0.128	2.31	0.273	0.255
54		〃	〃	-26 B	有蓋高坏	0.107	0.183	4.13	0.115	0.280
55		〃	〃	-25 A	〃	0.112	0.176	3.34	0.138	0.327
56		21号横穴	〃	21号-6	坏蓋	0.245	0.014	2.28	0.326	0.118
57	5	〃	土師器		壺	0.368	0.049	5.59	0.356	0.141
58		22号横穴	須恵器	22号-12	提瓶	0.168	0.270	3.77	0.199	0.453
59		〃	〃	-14	甕	0.184	0.161	2.43	0.273	0.307
60		〃	〃	-15	横瓶	0.196	0.141	3.09	0.314	0.248
61		〃	〃	-16	坏蓋	0.108	0.215	3.72	0.116	0.334
62		〃	〃	-34	坏身	0.108	0.169	4.29	0.105	0.364
63		〃	〃	-64	提瓶	0.166	0.323	2.96	0.170	0.562
64		〃	〃	22号-62	高坏	0.280	0.024	2.71	0.337	0.186
65		〃	〃	-72	甕	0.448	0.079	1.46	0.652	0.269
66		〃	〃		坏身	0.091	0.106	4.31	0.110	0.141
67		23号横穴	〃	23号-1	壺	0.348	0.071	5.17	0.367	0.154
68		24号横穴	〃	24号-1	有蓋高坏	0.221	0.150	2.27	0.330	0.311
69		〃	〃	-5	坏身	0.263	0.021	3.03	0.320	0.083
70		〃	〃	-6	高坏	0.386	0.074	4.56	0.343	0.163
71		〃	〃	-10	坏蓋	0.159	0.170	2.88	0.209	0.448
72		〃	〃	-12	坏身	0.164	0.158	3.04	0.203	0.445
73		〃	〃	-27	甕	0.195	0.238	2.30	0.252	0.412
74		〃	〃	-32	平瓶	0.156	0.283	2.48	0.198	0.510
75		25号横穴	〃	25号-1	杯蓋	0.239	0.051	4.24	0.223	0.132
76		〃	〃	-3	〃	0.316	0.031	4.01	0.269	0.172
77		〃	不明		不明	0.283	0.029	3.91	0.254	0.170
78		〃	須恵器	-7	壺	0.457	0.084	1.08	0.360	0.271
79		26号横穴	〃		壺	0.442	0.092	2.69	0.310	0.293
80		〃	〃		杯身	0.097	0.238	4.16	0.097	0.443
81	6	〃	〃	26号-64	前庭部土器内の土塊	0.311	0.049	5.39	0.335	0.124
82		〃	須恵器	-64	甕	0.242	0.168	2.17	0.370	0.300
83	7	〃	〃	-45	提瓶	0.179	0.224	2.47	0.222	0.380
84		〃	〃	-27	坏蓋	0.298	0.051	2.97	0.345	0.196
85		〃	〃	-65	甕	0.198	0.202	2.88	0.225	0.453
86		〃	〃	-62	〃	0.415	0.145	1.97	0.565	0.384
87		27号横穴	〃	27号-3 B	坏身	0.414	0.124	3.61	0.474	0.279
88		〃	〃	-16	高坏	0.386	0.130	2.66	0.446	0.340
89		〃	〃	-17	甕	0.396	0.155	2.08	0.376	0.509
90		28号横穴	〃	28号-17	坏蓋	0.177	0.279	2.42	0.205	0.489
91		29号横穴	〃	29号-10	〃	0.369	0.165	3.36	0.451	0.222
92		〃	〃	-14	〃	0.338	0.057	1.64	0.439	0.223
93		〃	〃	-20	〃	0.225	0.162	2.14	0.310	0.309
94		〃	〃	-33	有蓋高坏	0.299	0.063	2.39	0.371	0.231
95		〃	〃	-38	〃	0.458	0.115	1.78	0.591	0.316

試料番号	クラス番号	横穴番号	器種		器形		K	Ca	Fe	Rb	Sr
96		29号横穴	須恵器	29号-40	有蓋高坏	身	0.334	0.062	2.53	0.369	0.221
97		〃	〃	-42	〃	〃	0.138	0.096	2.68	0.194	0.171
98		〃	〃	-44	高坏		0.259	0.160	2.59	0.303	0.286
99		〃	〃	-46	横瓶		0.318	0.262	2.66	0.318	0.447
100		30号横穴	〃	表採	坏身		0.327	0.046	3.15	0.405	0.217
101		〃	〃	30号-10	甗		0.276	0.015	2.06	0.367	0.153
102		〃	〃	-8	坏蓋		0.339	0.100	3.02	0.435	0.260
103		31号横穴	〃	31号-6	〃		0.330	0.047	3.93	0.447	0.164
104		〃	〃	-7	〃		0.233	0.031	3.11	0.328	0.144
105		〃	〃	-15	坏身		0.161	0.240	2.24	0.223	0.542
106		〃	〃	-25	甗		0.354	0.142	2.30	0.472	0.297
107		〃	〃	-38	甗		0.182	0.263	2.70	0.176	0.625
108		〃	〃	表採	提瓶		0.424	0.120	1.98	0.555	0.342
109		32号横穴	〃	32号-1	甗		0.345	0.073	2.85	0.430	0.228
110		〃	〃	-2	甗口縁		0.248	0.026	2.26	0.330	0.169
111		〃	〃	-5	高坏		0.280	0.048	2.29	0.340	0.213
112		33号横穴	〃	33号-5	坏蓋		0.104	0.073	2.89	0.139	0.168
113		〃	〃	-11	〃		0.195	0.132	2.57	0.301	0.265
114		〃	〃	-14	〃		0.199	0.133	4.08	0.265	0.255
115		〃	〃	-32	坏身		0.377	0.092	3.45	0.397	0.254
116		〃	〃	-38	高坏脚		0.101	0.095	3.09	0.112	0.225
117		〃	〃	-39	高坏		0.441	0.063	1.99	0.595	0.237
118		〃	〃	-43	台付壺		0.241	0.034	3.29	0.283	0.142
119		〃	〃	-46	提瓶		0.408	0.242	1.69	0.466	0.507
120		〃	〃	-56	甗		0.198	0.201	2.81	0.229	0.375
121		〃	〃	表採	坏身		0.158	0.176	2.70	0.165	0.390
122		36号横穴	〃	36号-1	坏蓋		0.162	0.183	2.17	0.198	0.325
123		〃	〃	-3	埴		0.328	0.097	4.98	0.234	0.162
124		〃	〃	-14	高坏		0.238	0.414	4.32	0.156	0.977
125		〃	〃	-35	甗		0.220	0.100	1.96	0.278	0.279
126		〃	〃	-43	坏蓋		0.396	0.082	2.92	0.510	0.239
127		〃	〃	-45	〃		0.285	0.019	2.77	0.317	0.135
128		36号横穴	〃	36号-51	坏身		0.348	0.086	2.38	0.469	0.273
129		〃	〃	-56	甗		0.152	0.182	4.07	0.182	0.323
130		38号横穴	〃	38号-7	坏蓋		0.147	0.190	3.41	0.164	0.445
131		〃	〃	-14	短頸壺		0.288	0.069	3.62	0.295	0.191
132		〃	〃	表採	高坏		0.133	0.206	3.45	0.142	0.359
133		39号横穴	〃	39号-2	坏蓋		0.360	0.075	3.31	0.404	0.289
134		〃	〃	表採	坏		0.352	0.054	3.82	0.388	0.211
135		〃	土師器	表採	土師器		0.265	0.329	4.73	0.214	1.06
136		40号横穴	須恵器	40号-15	坏蓋		0.420	0.078	2.05	0.709	0.259
137		〃	〃	-17	坏身		0.273	0.052	2.14	0.380	0.189
138		〃	〃	-29	高坏		0.410	0.079	2.33	0.641	0.238
139		〃	〃	-30	横瓶		0.149	0.323	2.52	0.158	0.545
140		41号横穴	〃	41号-4	坏蓋		0.386	0.038	2.74	0.495	0.161
141		〃	〃	表採	埴		0.386	0.077	5.65	0.329	0.168
142		〃	〃	-3	坏蓋		0.359	0.070	2.90	0.354	0.247
143		42号横穴	〃	42号-1	〃		0.109	0.157	2.40	0.121	0.381

試料番号	クラス番号	横穴番号	器種		器形		K	Ca	Fe	Rb	Sr
144		42号横穴	須恵器	42号-10	坏身		0.229	0.361	3.14	0.280	0.731
145		〃	〃	- 8	〃		0.123	0.171	2.38	0.131	0.399
146		〃	〃	-12	〃		0.116	0.209	2.66	0.120	0.417
147		〃	〃	-21	柑		0.456	0.125	2.57	0.503	0.370
148		〃	〃	-38	甕		0.429	0.073	3.12	0.538	0.279
149		43号横穴	〃	43号- 1	坏蓋		0.186	0.184	2.38	0.260	0.330
150		〃	〃	- 8	坏身		0.129	0.121	2.03	0.160	0.235
151		〃	〃	-28	脚付壺		0.080	0.128	1.84	0.058	0.329
152		〃	〃	-43	高坏		0.145	0.079	2.56	0.150	0.215
153		〃	〃	-44	堤瓶		0.103	0.119	2.27	0.148	0.304
154		〃	〃	-45	甕		0.091	0.263	2.07	0.092	0.635
155		〃	〃	-46	〃		0.393	0.116	2.02	0.525	0.299
156		44号横穴	〃	44号- 2	〃		0.294	0.043	4.13	0.202	0.171
157		45号横穴	〃	45号- 4	坏身		0.501	0.116	2.49	0.505	0.297
158		〃	〃	- 5	臬		0.417	0.082	2.77	0.423	0.224
159		〃	〃	-10	甕		0.384	0.233	1.82	0.403	0.471
160		47号横穴	〃	47号-48	甕		0.127	0.206	2.61	0.142	0.462
161		〃	〃	-40	坏身		0.070	0.216	3.15	0.061	0.428
162		〃	〃	-44	甕		0.125	0.194	3.21	0.129	0.422
163		〃	〃	-29	坏蓋		0.180	0.178	3.56	0.208	0.312
164		49号横穴	〃	49号- 4	〃		0.160	0.128	2.55	0.265	0.230
165		〃	〃	- 8	坏身		0.243	0.120	1.83	0.344	0.291
166		〃	〃	-13	甕		0.115	0.118	2.21	0.154	0.219
167		51号横穴	〃	51号-45	〃		0.162	0.263	2.19	0.221	0.490
168		〃	〃	-24	臬		0.103	0.214	2.79	0.113	0.428
169		〃	〃	-15	坏身		0.214	0.172	2.46	0.301	0.348
170		〃	〃	- 9	横瓶		0.186	0.330	2.44	0.273	0.627
171		53号横穴	〃	53号- 9	甕		0.180	0.194	3.13	0.181	0.388
172		〃	〃	-10	〃		0.216	0.209	2.62	0.238	0.429
173		54号横穴	〃	54号-44	〃		0.159	0.283	2.51	0.203	0.613
174		〃	〃	-42	堤瓶		0.186	0.213	1.98	0.243	0.491
175		〃	〃	- 7	坏身		0.144	0.131	2.32	0.156	0.344
176		55号横穴	〃	55号- 9	坏蓋		0.109	0.203	3.42	0.116	0.341
177		〃	〃	-22	高坏		0.119	0.205	2.71	0.127	0.500
178		〃	〃	-45	甕		0.179	0.256	2.79	0.175	0.779
179		57号横穴	〃	57号- 2	〃		0.144	0.177	2.93	0.170	3.78
180		59号横穴	〃	59号-29	臬		0.104	0.184	3.37	0.064	0.347
181		〃	〃	-34	甕		0.269	0.206	2.27	0.231	0.527
182		〃	〃	-35	〃		0.183	0.049	1.90	0.527	0.209
183		〃	〃	-36	〃		0.279	0.035	1.91	0.395	0.152
184		61号横穴	〃	61号- 7	高坏		0.533	0.186	2.51	0.415	0.535
185		〃	〃	-24	脚付壺		0.333	0.199	2.02	0.376	0.435
186		〃	〃	-26	甕		0.190	0.169	2.32	0.284	0.312
187		〃	〃	-29	〃		0.123	0.179	3.68	0.112	0.306
188		〃	〃	-30	〃		0.241	0.295	2.13	0.233	0.638
189		62号横穴	〃	62号- 7	坏蓋		0.478	0.053	3.30	0.574	0.192
190		〃	〃	-10	坏身		0.484	0.068	2.98	0.609	0.228
191		64号横穴	〃	- 6	臬		0.434	0.065	2.31	0.476	0.259
192		〃	〃	64号-13	甕		0.289	0.223	1.84	0.307	0.738

第205表 須恵器の産地推定

	試料番号	器 形		伊藤田群から	宗像群から	大阪陶邑群から	推定産地
1号横穴	1	有蓋高坏	蓋	25	18	3.6	大阪陶邑
〃	2	〃	身	32	22	1.4	〃
〃	3	埴		24	13	5.4	〃
〃	4	〃		27	13	4.9	〃
〃	5	甗		24	16	2.3	〃
〃	6	〃		21	16	4.9	〃
〃	7	横瓶		12	14	12	不明
2号横穴	8	坏	蓋	14	9.7	7.6	大阪陶邑
〃	9	長頸壺		1.7	4.7	30	伊藤田
3号横穴	10	坏	身	42	24	1.4	大阪陶邑
〃	11	甗		10	11	17	伊藤田
4号横穴	12	甗		57	33	1.3	大阪陶邑
〃	13	坏	身	8.4	9.6	24	伊藤田, 宗像
〃	14	〃		17	11	5.8	大阪陶邑
〃	15	甗		53	19	5.4	〃
〃	16	〃		10	16	35	伊藤田
〃	17	〃		3.8	26	76	〃
〃	18	高坏		9.5	6.9	14	宗像, 伊藤田
〃	19	坏	蓋	10	12	26	伊藤田
〃	20	〃	〃	44	21	0.8	大阪陶邑
5号横穴	21	有蓋高坏	身	29	30	7.6	〃
7号横穴	22	坏	身	29	14	4.1	〃
〃	23	高坏	脚	3.5	9.5	34	伊藤田
〃	24	甗		21	12	2.1	大阪陶邑
〃	25	坏	蓋	5.8	25	65	伊藤田
9号横穴	28	有蓋高坏	蓋	4.0	20	50	〃
〃	29	坏	蓋	30	12	3.4	大阪陶邑
11号横穴	30	甗		21	14	4.8	〃
12号横穴	31	壺		13	12	13	不明
〃	32	横瓶		14	26	103	〃
〃	33	甗		5.4	25	57	伊藤田
〃	34	坏	蓋	18	23	13	不明
14号横穴	35	〃	身	14	8.0	5.4	大阪陶邑
16号横穴	36	短頸壺		2.4	8.2	32	伊藤田
〃	37	長頸壺		1.5	13	46	〃
〃	38	坏	身	16	25	18	不明
〃	39	〃	蓋	40	25	0.8	大阪陶邑
〃	40	〃	身	19	30	31	不明
〃	41	横瓶		2.8	19	52	伊藤田
18号横穴	43	有蓋高坏		54	47	5.7	大阪陶邑
〃	44	脚付長頸壺		31	23	7.1	〃
〃	45	坏		24	12	3.2	〃
〃	46	甗		28	21	4.1	〃
20号横穴	48	坏	蓋	17	11	3.5	〃
〃	49	〃	身	3.9	25	68	伊藤田
〃	50	〃	蓋	7.0	23	50	〃

	試料番号	器 形		伊藤田群から	宗像群から	大阪陶邑群から	推定産地
20号横穴	51	坏	蓋	27	19	7.0	大阪陶邑
〃	52	高坏		2.6	3.3	19	伊藤田
〃	53	壺		6.0	8.5	29	〃
〃	54	有蓋高坏	身	6.9	26	56	〃
〃	55	〃	蓋	4.8	22	57	〃
21号横穴	56	坏	〃	12	10	10	宗像, 大阪陶邑
22号横穴	58	埴瓶		3.1	22	69	伊藤田
〃	59	甕		4.9	10	34	〃
〃	60	横瓶		10	10	27	伊藤田, 宗像
〃	61	坏	蓋	6.4	29	65	伊藤田
〃	62	〃	身	5.7	26	63	〃
〃	63	埴瓶		7.7	32	97	〃
〃	64	高坏		13	11	8.8	大阪陶邑
〃	65	甕		53	48	3.1	〃
〃	66	坏	身	13	25	43	不明
23号横穴	67	埴		23	16	3.5	大阪陶邑
24号横穴	68	有蓋高坏		7.0	7.9	26	伊藤田
24号横穴	69	坏	身	15	13	9.8	大阪陶邑
〃	70	高坏		45	33	2.5	〃
〃	71	坏	蓋	5.9	14	60	伊藤田
〃	72	〃	身	5.9	13	58	〃
〃	73	臚		2.0	14	51	〃
〃	74	平瓶		6.8	28	83	〃
25号横穴	75	坏	蓋	17	20	12	不明
〃	76	〃	〃	38	34	7.6	大阪陶邑
〃	77	不明		27	27	9.6	〃
〃	78	壺		90	56	6.1	〃
26号横穴	79	埴		103	65	9.7	〃
〃	80	坏	身	8.2	35	87	伊藤田
〃	82	甕		10	11	24	〃
〃	84	坏	蓋	13	9.4	6.7	大阪陶邑
〃	85	甕		3.2	9.8	53	伊藤田
〃	86	〃		33	23	5.1	大阪陶邑
27号横穴	87	坏	身	25	12	1.1	〃
〃	88	高坏		21	7.0	5.1	〃
〃	89	甕		47	9.6	30	宗像
28号横穴	90	坏	蓋	3.6	22	73	伊藤田
29号横穴	91	〃	〃	14	7.8	9.0	大阪陶邑
〃	92	〃	〃	18	11	4.1	〃
〃	93	〃	〃	3.4	5.7	26	伊藤田
〃	94	有蓋高坏	蓋	11	6.5	7.5	大阪陶邑
〃	95	〃	身	39	28	0.9	〃
〃	96	〃	〃	18	12	4.6	〃
〃	97	〃	〃	7.4	13	31	伊藤田
〃	98	高坏		2.3	2.4	19	〃
〃	99	横瓶		7.0	2.0	32	〃
30号横穴	100	坏	身	17	10	5.0	大阪陶邑

	試料番号	器 形		伊藤田群から	宗像群から	大阪陶邑群から	推定産地
30号横穴	101	甗		14	10	8.3	大阪陶邑
〃	102	坏	蓋	14	7.1	4.9	〃
31号横穴	103	坏	蓋	20	13	4.9	大阪陶邑
〃	104	〃	〃	11	7.5	12	宗像
〃	105	〃	身	10	24	81	伊藤田
〃	106	甗		16	9.4	6.4	大阪陶邑
〃	107	甗		16	22	101	不明
〃	108	堤瓶		32	21	2.5	大阪陶邑
32号横穴	109	甗		17	9.4	3.6	〃
〃	110	〃	口縁	10	8.1	11	不明
〃	111	高坏		11	7.6	9.0	大阪陶邑
33号横穴	112	坏	蓋	8.7	19	36	伊藤田
〃	113	〃	〃	7.4	8.5	27	〃
〃	114	〃	〃	2.7	5.9	26	〃
〃	115	坏	身	25	13	2.6	大阪陶邑
〃	116	高坏	脚	7.1	23	43	伊藤田
〃	117	〃		42	34	2.2	大阪陶邑
〃	118	脚付直口壺		10	11	11	伊藤田
〃	119	堤瓶		22	4.6	20	宗像
〃	120	甗		0.4	9.1	42	伊藤田
〃	121	坏	身	2.9	15	53	〃
36号横穴	122	〃	蓋	1.6	13	44	〃
〃	123	埴		49	41	6.8	大阪陶邑
〃	124	高坏		77	46	223	不明
〃	125	甗		3.4	4.2	21	伊藤田
〃	126	坏	蓋	26	17	1.5	大阪陶邑
〃	127	〃	〃	17	16	7.4	〃
〃	128	〃	身	19	11	4.6	〃
〃	129	甗		2.0	15	46	伊藤田
38号横穴	130	坏	蓋	4.7	18	65	〃
〃	131	短頸壺		15	12	7.9	大阪陶邑
〃	132	高坏		3.4	22	59	伊藤田
39号横穴	133	坏	蓋	22	11	5.8	大阪陶邑
〃	134	〃		23	15	3.4	〃
40号横穴	136	坏	蓋	83	80	8.0	〃
〃	137	〃	身	12	7.1	8.9	〃
〃	138	高坏		55	50	5.4	〃
〃	139	横瓶		15	39	121	不明
41号横穴	140	坏	蓋	28	21	3.3	大阪陶邑
〃	141	埴		50	37	2.7	〃
〃	142	坏	蓋	30	18	4.8	〃
42号横穴	143	〃	蓋	5.6	23	64	伊藤田
〃	144	〃	身	23	35	116	不明
〃	145	〃	〃	4.9	22	64	伊藤田
〃	146	〃	〃	5.5	27	72	〃
〃	147	埴		41	17	3.8	大阪陶邑

	試料番号	器 形		伊藤田群から	宗像群から	大阪陶邑群から	推定産地
42号横穴	148	甕		35	23	1.6	〃
43号横穴	149	坏	蓋	3.0	11	38	伊藤田
〃	150	〃	身	4.7	16	39	〃
〃	151	脚付壺		10	34	65	〃
〃	152	高坏		6.2	18	31	〃
〃	153	堤瓶		5.7	19	51	〃
〃	154	甕		22	46	137	不明
〃	155	〃		25	17	2.7	大阪陶邑
44号横穴	156	〃		49	48	10	〃
45号横穴	157	坏	身	60	32	1.1	〃
〃	158	臚		38	23	0.9	〃
〃	159	甕		18	0.8	20	宗像
47号横穴	160	〃		6.2	24	76	伊藤田
〃	161	坏	身	11	41	91	不明
〃	162	甕		5.1	23	69	伊藤田
〃	163	坏	蓋	0.9	11	38	〃
49号横穴	164	〃	〃	10	12	32	〃
〃	165	〃	身	6.4	4.7	18	伊藤田 or 宗像
〃	166	甕		6.4	18	41	伊藤田
51号横穴	167	〃		6.8	25	74	〃
〃	168	臚		6.8	30	79	〃
〃	169	坏	身	3.8	7.5	32	伊藤田 or 宗像
〃	170	横瓶		19	41	100	不明
53号横穴	171	甕		2.2	13	48	伊藤田
〃	172	〃		1.8	7.6	45	〃
54号横穴	173	〃		14	31	103	不明
〃	174	堤瓶		6.2	14	62	伊藤田
〃	175	坏	身	3.7	16	47	〃
55号横穴	176	〃	蓋	5.6	27	64	伊藤田
〃	177	高坏		9.4	27	87	〃
〃	178	甕		44	31	156	不明
57号横穴	179	〃		2.6	16	54	伊藤田
59号横穴	180	臚		9.6	34	65	〃
〃	181	甕		20	8.1	54	宗像
〃	182	〃		118	88	30	不明
〃	183	〃		15	9.5	8.2	大阪陶邑
61号横穴	184	高坏		129	45	28	不明
〃	185	脚付壺		10	0.4	21	宗像
〃	186	甕		5.5	10	34	伊藤田
〃	187	〃		5.5	24	53	〃
〃	188	〃		15	14	87	不明
62号横穴	189	坏	蓋	48	38	3.5	大阪陶邑
〃	190	〃	身	49	39	2.7	〃
64号横穴	191	臚		40	24	1.9	〃
〃	192	甕		47	11	105	不明

第206表 産地推定された須恵器の器形による分類

	大阪陶邑群	伊藤田群	宗像群	不明
有蓋高坏	7	5	0	0
高坏	17	25	9	6
坏	70	84	18	22
器台	0	2	0	0
埴	4	2	0	0
直口壺	0	2	0	0
埴	4	1	0	1
臙	15	12	1	3
横瓶	2	7	3	7
埴瓶	3	8	2	8
平瓶	0	2	2	1
壺	3	5	2	2
長頸壺	7	5	1	0
短頸壺	3	5	1	0
甕	27	37	8	18

第207表 産地推定された須恵器の横穴墓ごとの分類

	大阪陶邑群	伊藤田群	宗像群	不明
1号横穴	6	0	0	1
2 〃	1	1	0	0
3 〃	1	1	0	0
4 〃	4	5	2	0
5 〃	1	0	0	0
7 〃	2	2	0	0
9 〃	1	1	0	0
11 〃	1	0	0	0
12 〃	0	1	0	3
14 〃	1	0	0	0
16 〃	1	3	0	2
18 〃	4	0	0	0
20 〃	2	6	0	0
21 〃	1	0	1	0
22 〃	2	6	1	1
23 〃	1	0	0	0
24 〃	2	5	0	0
25 〃	3	0	0	1
26 〃	3	3	0	0
27 〃	2	0	1	0
28 〃	0	1	0	1
29 〃	5	4	0	0
30 〃	3	0	0	0
31 〃	3	1	1	1
32 〃	2	0	0	1
33 〃	2	7	1	0
36 〃	4	3	0	1
38 〃	1	2	0	0
39 〃	2	0	0	0
40 〃	3	0	0	1
41 〃	3	0	0	0
42 〃	2	3	0	1
43 〃	1	5	0	1
44 〃	1	0	0	0
45 〃	2	0	1	0
47 〃	0	3	0	1
49 〃	0	3	1	0
51 〃	0	3	1	1
53 〃	0	2	0	0
54 〃	0	2	0	1
55 〃	0	2	0	1
57 〃	0	1	0	0
59 〃	1	1	1	1
61 〃	0	2	1	2
62 〃	2	0	0	0
64 〃	1	0	0	1

(4) 自然遺物

(ア) 炭化植物の同定について

大阪市立大学理学部名誉教授 粉川 昭平

3個体があるが、48号横穴墓の右膝蓋骨上のものをⅠ、頭骨の横のものをⅡ、中津市幣旗邸古墳の直刀上にあつたものをⅢとする。Ⅰは内部を見ることはできないが、軟X線で透視しても、ウリ科の種子らしきものはみる事はできなかった。Ⅱ・Ⅲにも種子らしきものは全くみられない。又ヒョウタン等の果実に期待される果梗（果実の柄）及び果梗がとれたとすれば果梗痕、又底部の花柱痕などすべて観察できなかった。

Ⅱの表面を、走査型電子顕微鏡で観察した結果、細胞様の構造がみられるが、真に細胞なりや否やはさらに現生種と比較する必要がある。

また、ⅡやⅢの内部には、黒色の菌類ではないかと思われる粒状物質が付着している。又、Ⅱの内部には黒色短円柱状の物質が多数付着している。これは一見昆虫類の糞のようにみえるがさらに検討を要する。

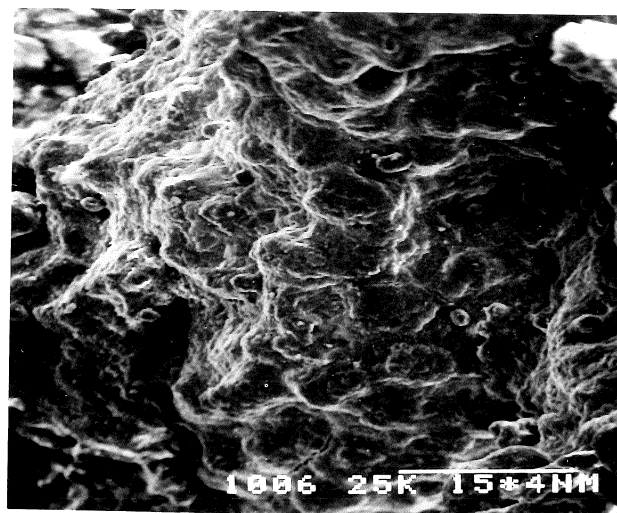
さらに蛍光X線分析によって成分分析を試みたところ、表面部には、Fe、Mg、Al、Si、Caなどが検出されたが、これは付着している泥土の鉱物によるので意味がないと思われる。ただし、内部はCaのみが検出されたが、これが何を意味するのか検討中である。

おなじく52号横穴墓の墓道に埋置された須恵器甕中より出土した丸薬状物質について観察した。

19個の不規則亜球型の炭化物で表面には黄褐色の土を被る。大は直径1cm程度のものから、小は0.4cm程度のものまで、大きさはさまざまである。甕の中には、この物質とほんのわずかの土が流入してただけであり、また、甕は火を受けた痕は全くないと調査者の諸見であった。

1個の内部をみたが、全く種子や果実を思わせる構造はみられなかった。2個はやや楕円形で、一方がやや平面であり、マメ科の子葉の1枚を思わせる点もあったが、マメ科に特徴的な幼根などは全くみられず、とてもマメ類とは同定できない。

以上、現段階では4つの標本の正体はよく解からず、さらに検討をつづけたい。



第492図 炭化物表皮電子顕微鏡写真

1. 樹種同定の結果の概要

上ノ原横穴墓群から出土した炭化材のうち14点の試料の組織・構造を観察し樹種同定を行ったが、後述するような理由から、組織・構造の観察は困難を極め、必ずしも満足のいく結果は得られなかった。しかし、ここでの主な目的は、古代の葬送儀礼を明らかにする上で、播火に同一樹種の木材を使用したのか、あるいは付近に生育している樹木を任意に利用したのか否かを検討するための基礎資料を提供することにある。この点に関しては大方の目的を果たせたと考える。

さて、観察結果を下表に示している。14点の試料のうち、2点が針葉樹、12点が広葉樹材であった。さらに、12点の広葉樹材のうち、9点が少なくとも3樹種を含む環孔材（国産材では大部分が落葉樹）、1点が散孔材（国産材ではほとんどが常緑樹）であって、残りの2点は試料の断面が小さく、環孔材か散孔材あるいはその他の材（放射孔材、紋様孔材など）かを断定できなかった。すなわち、14点の試料は単一の樹種ではなく、少なくとも5樹種から構成されていて、針葉樹から広葉樹まで、さらには広葉樹でも常緑樹から落葉樹にまでおよんでいた。

属名あるいは種名が明らかになった12点の試料は、①イヌマキ属（イヌマキカナギ）、②イタジイ、③コナラ類（クヌギ、アベマキ、ミズナラ、コナラなど）、④ウルシ属（ヌルデ、ヤマウルシ、ヤマハゼなど）、⑤ハイノキ属（ハイノキ、クロキ、タンナサワフタギなど）から成り立っていた。このような属の樹種は、現在の九州では最もふつうな植物で、いたるところの丘陵に広く分布している。したがって、5～6世紀においても、古代人の身近に繁茂していたと推定される。以上のことを考え合わせて、木材の用途と古代の葬送儀礼とを関連づけて検討するならば、播火に際して特定の樹種が使われたとは考えにくい。むしろ、燃えやすい樹種と燃えにくい樹種などの選別はなされたかもしれないが、付近に生育している樹木を無作為に近い状態で利用していたことを示唆している。

樹種同定の結果

試料番号	樹種名	備考
9号	樹種不明	広葉樹材
53号	樹種不明	針葉樹材 写真1
28号	イタジイ	広葉樹環孔材 写真2
29号	イタジイ	広葉樹環孔材 写真3
33号	イヌマキ属	針葉樹材 写真4
36号	樹種不明	広葉樹材
43号	コナラ類	広葉樹環孔材 写真5
54号	樹種不明	広葉樹環孔材 写真6
55号	コナラ類	広葉樹環孔材 写真7
57号	コナラ類	広葉樹環孔材 写真8
59号	コナラ類	広葉樹環孔材 写真9
65号	ウルシ属	広葉樹環孔材 写真10
67号	ハイノキ属	広葉樹散孔材 写真11
69号	ウルシ属	広葉樹環孔材 写真12

2. 炭化材の組織・構造

ふつう、木材の観察は、木口面、まさめ面および板目面のプレパラートを作り、生物顕微鏡を用いてなされるが、今回の炭化材は、横穴墓の墓道において播火した際に生じたもので、消炭状を示し脆弱であったため、プレパラートの製作は困難であった。そこで、実体顕微鏡と走査型電子顕微鏡を用いて、直接試料を観察せざるを得なかった。しかも、健全な木材が燃焼して炭化するとき、その微視的な（顕微鏡的なレベルの）構造がどの程度どのように変化するのかが明らかにされていないのが現状である。このような理由から、樹種同定は困難を極めた。顕微鏡で観察された炭化材の構造について明らかになったことだけをごく簡単に以下に述べる。

1) 試料番号 9号横穴墓

試料中に道管が認められるので、広葉樹であることがわかるが、試料が微量なために、樹種同定はもちろん、環孔材か散孔材、あるいはその他の広葉樹材かさえ明らかにできなかった。

2) 試料番号 53号横穴墓 (写真1)

針葉樹である。樹脂道なし。樹脂細胞あり。仮道管にらせん肥厚なし。放射仮道管なし。放射組織は主に4～5細胞高で、分野壁孔はトウヒ型かスギ型ないしはヒノキ型である。年輪界は明瞭で、晩材ははっきりしている。以上のことからある程度樹種を絞ることはできるが、特定の属あるいは種に限定できなかった。なお、試料番号33号横穴墓と同一樹種である可能性は否定できない。

3) 試料番号 28号横穴墓 (写真2)

広葉樹環孔材である。放射組織は単列で、高さは1mm以内である。孔圏部の道管は接線方向に疎に配列し、道管全体としての配列は放射方向に向かう傾向を示す。また、道管中にはチロースが認められる。このことから、イタジイ *Castanopsis cuspidata* var. *sieboldii* と同定した。

4) 試料番号 29号横穴墓 (写真3)

写真では見にくいですが、広葉樹環孔材である。孔圏部の道管は接線方向に疎に分布している。放射組織は単列で、高さは1mm以内である。この種の構造を持つ樹種は限られており、28号横穴墓同様にイタジイと同定した。

5) 試料番号 33号横穴墓 (写真4)

針葉樹である。年輪界はやや不明瞭で、樹脂道なし。樹脂細胞あり。樹脂細胞の隔壁に数珠状肥厚なし。放射仮道管は認められない。仮道管にらせん肥厚なし。分野壁孔はトウヒ型かスギ型あるいはヒノキ型である。樹脂細胞は年輪内で均一に分布している。このことからイヌマキ属 *Podocarpus* と同定した。九州には、イヌマキとナギの2つの樹種が分布する。

6) 試料番号 36号横穴墓

道管が存在するので、広葉樹である。しかし、試料が微量なために、環孔材か散孔材あるいはその他の広葉樹材かは不明。

7) 試料番号 43号横穴墓 (写真5)

広葉樹環孔材である。幅の広い放射組織が存在する。道管内にチロースあり。これらのことと所蔵の永久プレパラートとの対比からコナラ属 *Quercus* のコナラ亜属（コナラ類）と同定した。九州のコナラ類には、クヌギ、アベマキ、ミズナラ、コナラ、ウバメガシ、カシワ、ナラガシワがある。

8) 試料番号 59号横穴墓 (写真6)

広葉樹である。木口面において直径の大きい道管と小さい道管がみられることから、環孔材と推定される。試料の断面が小さい上に試料に不規則な亀裂が入っているため、特定の属や種に限定できなかった。

9) 試料番号 55号横穴墓 (写真7)

この試料は木炭同様の硬度があり、写真には木口の断面を示している。14点の試料の中で木材組織が最も良好に保たれている。広葉樹環孔材で、幅の広い放射が認められる。このような構造を持つ樹種は限られていて、国産材ではツブラジイとコナラ類である。ツブラジイでは孔圏部の道管は接線方向に疎に分布しているため、この試料をコナラ類と同定した。

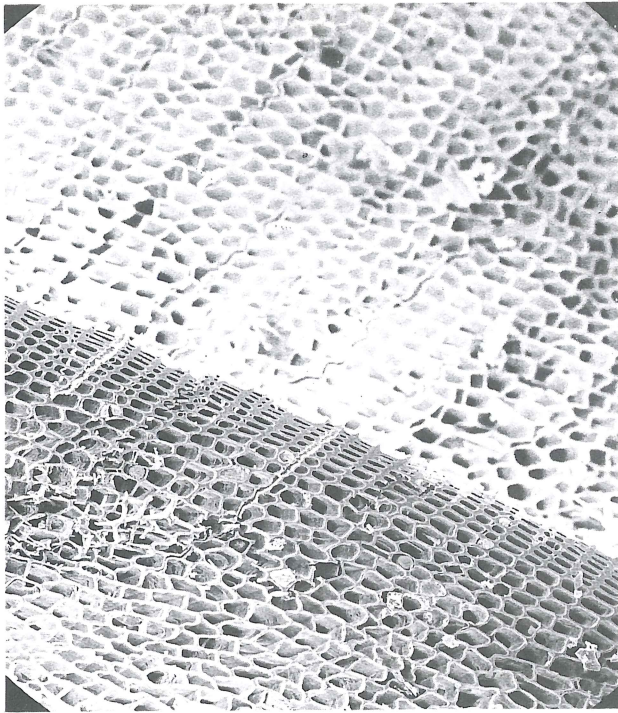


写真1 53号横穴墓

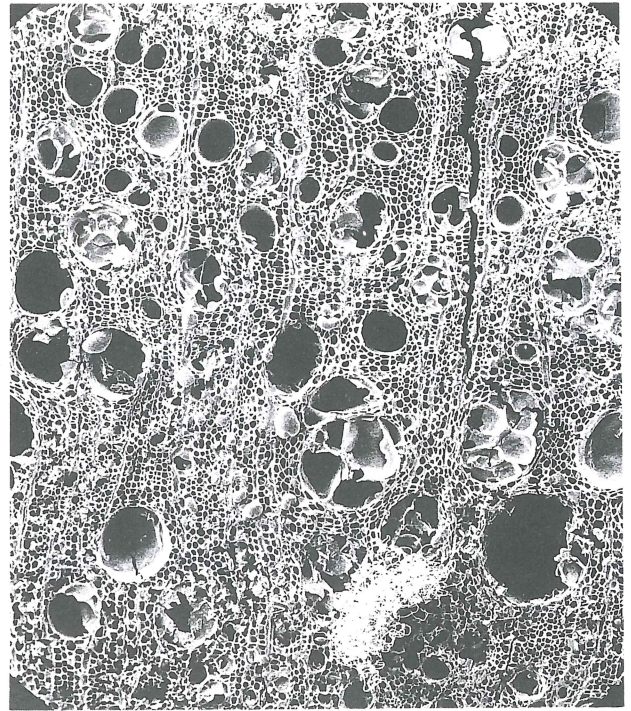


写真2 28号横穴墓

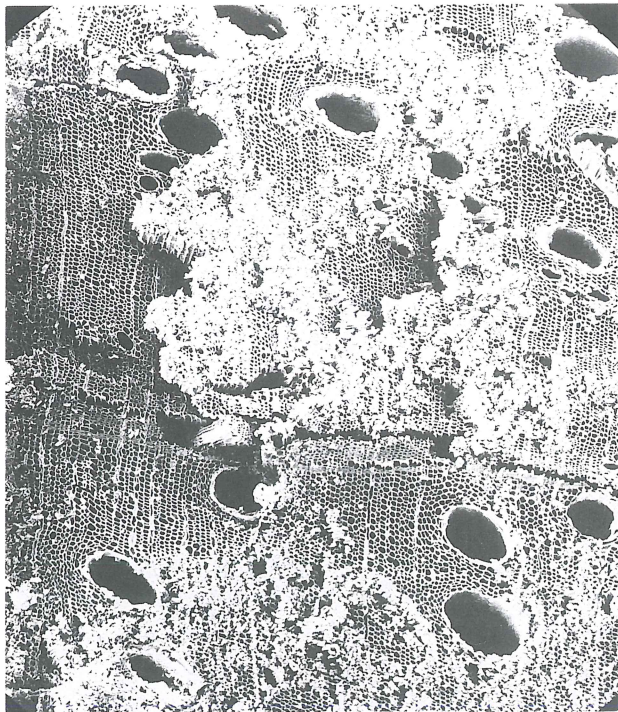


写真3 29号横穴墓

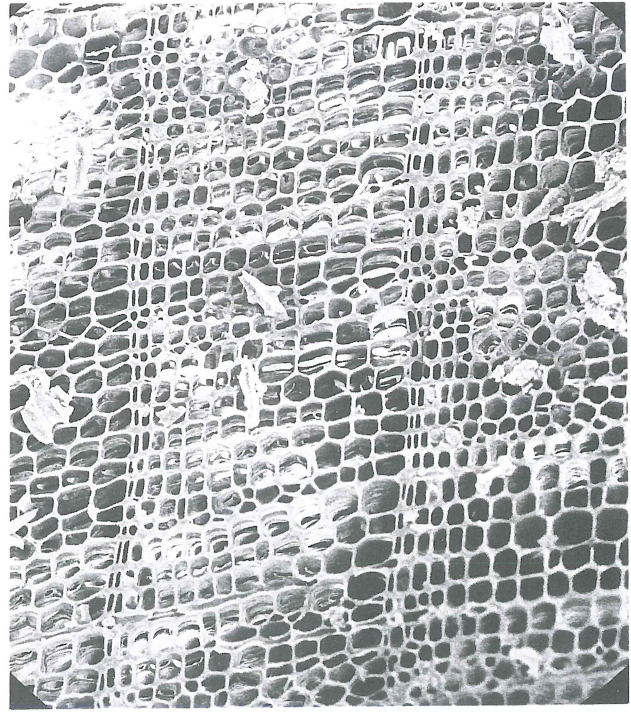


写真4 33号横穴墓

第493图 炭化材顕微鏡写真(1)

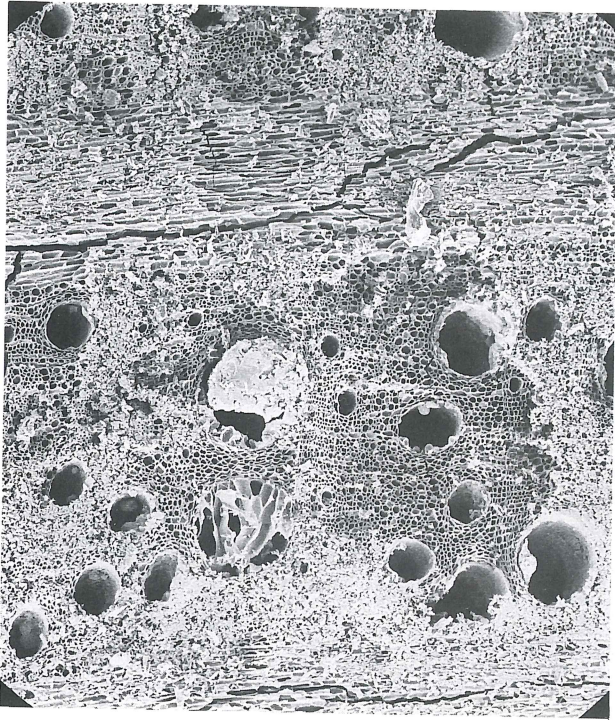


写真5 43号横穴墓

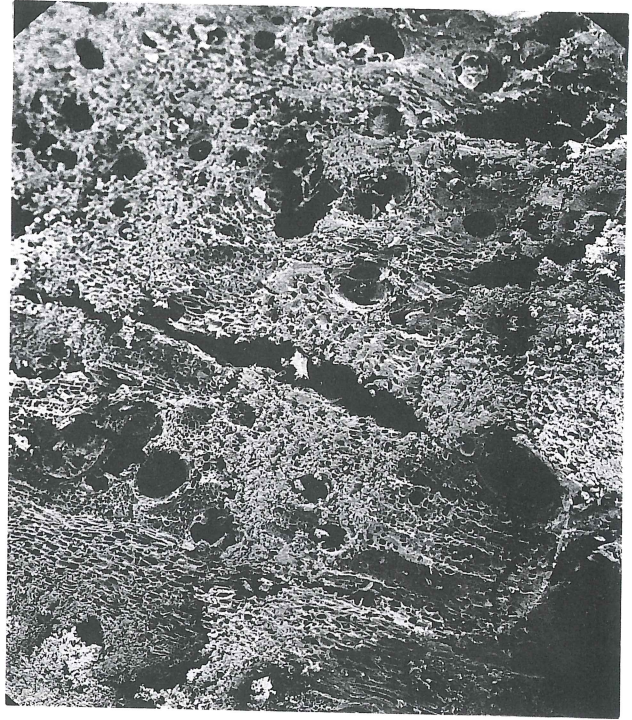


写真6 54号横穴墓

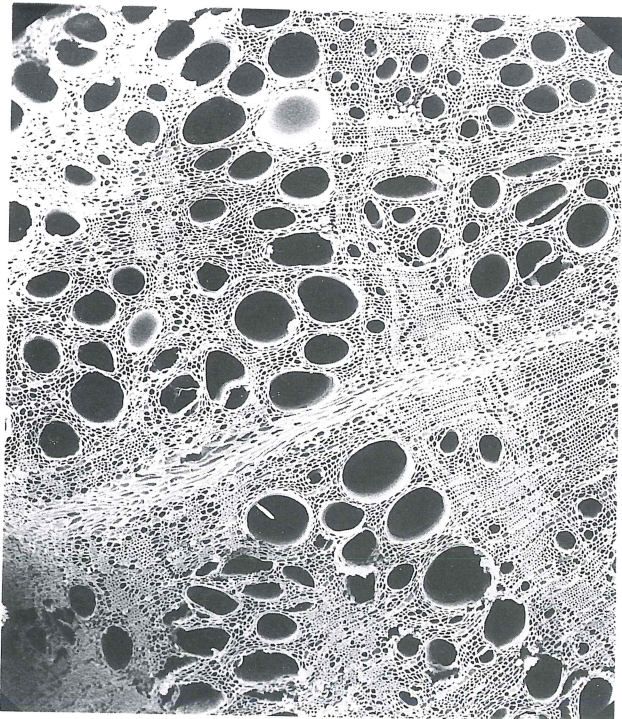


写真7 53号横穴墓

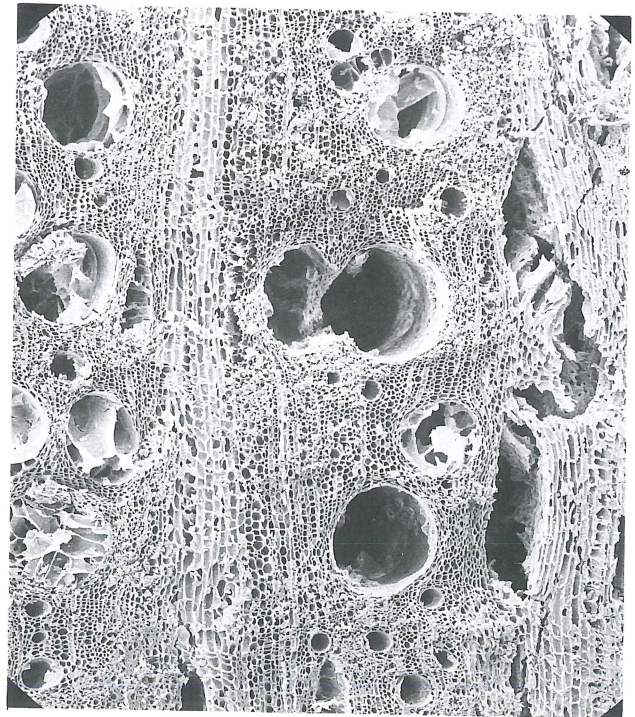


写真8 57号横穴墓

第494图 炭化材顕微鏡写真(2)

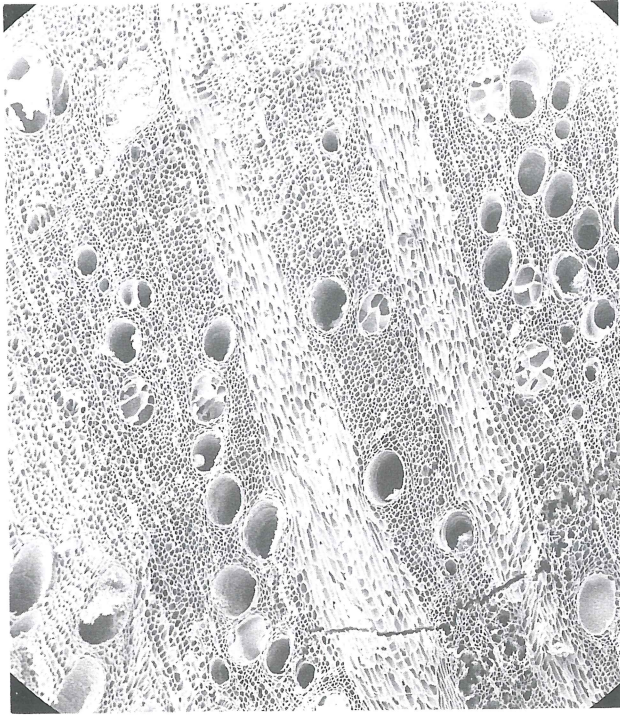


写真9 59号横穴墓

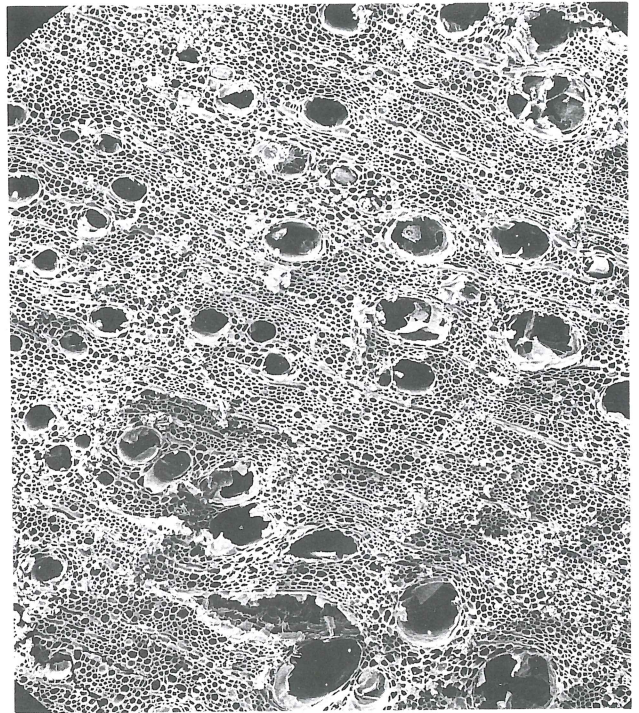


写真10 63号横穴墓

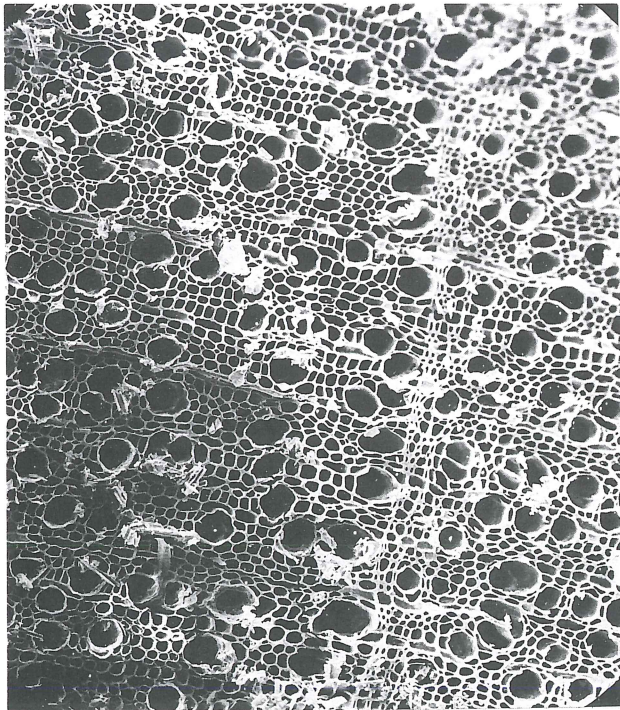


写真11 67号横穴墓

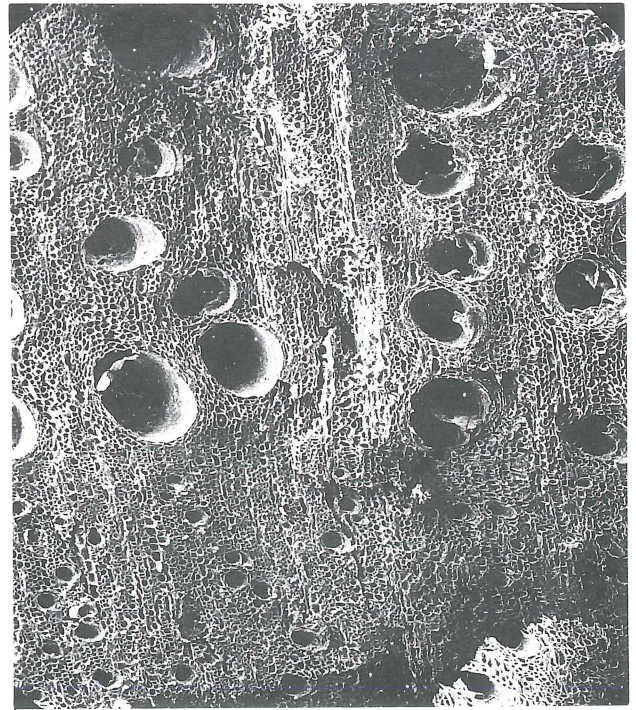


写真12 69号横穴墓

第495图 炭化材顕微鏡写真(3)

10) 試料番号 57号横穴墓 (写真8)

広葉樹環孔材である。幅の広い放射組織がある。道管内にはチロースが存在する。ツブラジイの広放射組織は、一般に狭く出現頻度も小さいので、この試料をコナラ類と同定した。

11) 試料番号 57号横穴墓 (写真9)

広葉樹環孔材である。道管内にはチロースが見られる。写真では中央に広放射組織が2本走っている。コナラ類と同定した。なお、コナラ属と同定した43、55、57、59号は同一樹種であるか否かはわからない。

12) 試料番号 65号横穴墓 (写真10)

早材から晩材にむけて道管の直径が徐々に減少する半環孔材的な広葉樹である。放射組織は2～3細胞幅で、高さは1mm以内である。広放射組織はない。所蔵の永久プレパラートとの対比からウルシ属 *Rhus* と同定した。ウルシ属には、ヌルデ、ハゼノキ、ヤマウルシ、ウルシ、ヤマハゼ、ツタウルシがあるが、ハゼノキとウルシは外来樹種、ツタウルシはつる性であるので、この試料はヌルデ、ヤマウルシ、ヤマハゼのうちの1つと推定される。

13) 試料番号 67号横穴墓 (写真11)

直径の小さい道管が多数存在する広葉樹環孔材である。年輪が認められ、道管には階段せん孔がある。放射組織は1～2細胞幅で、異性Ⅰ型かⅡ型である。所蔵の永久プレパラートと対比して、ハイノキ属 *Symplocos* と同定した。ハイノキ属には、タンナサワフタギ、サワフタギ、クロミノサワフタギ、シロバイ、ハイノキ、クロバイ、ミミズバイ、クロキなどの樹種がある。

14) 試料番号 69号横穴墓 (写真12)

早材から晩材に向けて道管の直径が徐々に減少する半環孔材的な性格を持った広葉樹環孔材である。放射組織は2～3細胞幅で、高さは1mm以内である。広放射組織・チロースは見当たらない。所蔵の永久プレパラートとの対比から、ウルシ属と同定した。65号横穴墓と同一樹種の可能性は否定できない。

4. 人骨

(1)上ノ原横穴墓群出土の古墳時代人骨について

九州大学医学部解剖学第二講座 土肥 直美

1. はじめに

大分県の北部に位置する中津市上ノ原横穴墓群から、古墳時代人骨50体余りが出土した。古墳時代は古代国家が形成されていった時期であると同時に、現代日本人の原型とも言うべき身体形質が形成されていった時期である。弥生文化とともに大陸からもたらされた渡来系の遺伝子は弥生時代・古墳時代を通して拡散していった。したがって、古墳人の形質を調べることは、日本人の形成過程を知る上で非常に重要な意味を持っている。北部九州地方は弥生時代以来、形質的にはいわゆる渡来人的な特徴を有する人々が多く住んでおり、一方、大分県の山間部等では縄文人的な特徴を色濃く保有する人々が住んでいたことが知られている（永井，1985）。中津市は地理的にこれらの地方の中間に位置しており、形質的にどの様な変異を示すか興味深いところである。また、古墳人骨としては比較的まとまった個体数が得られており、古墳時代の社会構造を知る上でも貴重な資料であると思われる。人骨の保存状態が良好とは言えず、特に女性人骨について十分な分析ができなかったのは残念であるが、以下に、上ノ原横穴墓群出土古墳人骨について形質人類学的な検討を行ってみたい。

第208表 上ノ原横穴墓群出土人骨一覧

横穴墓 番号	被葬者の構成				計
	男性	女性	不明	未成人	
3	1	2		1	4
5	1				1
6			2		2
7	1				1
9			1		1
10				1	1
11	2	2			4
12	1			1	2
16	1				1
17	1	1		1	3
19	1	1			2
21	2	2			4
22	1				1
24					不明
25	1	1		1	3
27	2	1			3
29	1		1		2
30	2	1		1	4
31	1				1
35	6			1	7
36					不明
40					不明
48	1				1
50	1				1
52	1				1
54			1		1
63	1			2	3
64	1	3			4
計	30	14	5	9	58

2. 資料

1) 出土人骨

出土人骨一覧を第208表に示す。発掘された81基中28基の横穴墓から人骨が出土した。検出された人骨は、単体で埋葬されていたものから35号横穴墓のように7体が識別できたものまで、合計58体に及んだ。しかし、保存状態は全体的に悪く、特に四肢骨については、その形質を知ることができた個体はわずかであった。

2) 比較資料

出土人骨の分析に際して用いた比較資料は、以下の文献より引用した。

a) 頭蓋骨計測値の比較

縄文人骨：津雲貝塚（清野・宮本，1925）
 弥生人骨：土井ヶ浜（金関他，1960）、金隈（中橋他，1985）、西北九州（内藤，1971）
 古墳人骨：西瀬戸内・北豊前・豊後・筑前（Doi & Tanaka，1987）、南九州（内藤，1985）

北豊前・豊後古墳人の個体ごとの計測値（九州大学医学部解剖学第2講座編，1988）

中世人骨：吉母浜（中橋・永井，1985）

b) 顔面平坦度の比較

縄文人骨：関東縄文（Yamaguchi，1980）
 弥生人骨：土井ヶ浜（Doi & Tanaka，1987）
 古墳人骨：北豊前・豊後（Doi & Tanaka，1987）
 現代人骨：現代日本（Yamaguchi，1973）

c) 頭蓋非計測的形質の比較

- 縄文人骨：東日本縄文 (Dodo, 1986)
- 弥生人骨：土井ヶ浜 (百々・石田, 1988)
- 古墳人骨：関東東北 (Yamaguchi, 1985)
- 現代人骨：現代日本 (Dodo & Ishida, 1987; Dodo, 1975)

d) 四肢骨計測値および身長と比較

- 縄文人骨：津雲貝塚 (浦野・平井, 1928 a、b)、吉胡貝塚 (石沢, 1931)
- 弥生人骨：土井ヶ浜 (財津, 1956)、西北九州 (内藤, 1971)、金隈 (中橋他, 1985)
- 中世人骨：吉母浜 (中橋・永井, 1985)
- 現代人骨：九州現代 (阿部, 1955：鑄鍋, 1955：専頭, 1957)

3. 出土人骨の性・年齢構成

一般に、古墳に葬られている人たちは、特別な限られた階級に属する人たちであったと考えられている。したがって古墳から出土した人骨の構成は、当時そこに生活していた人々の集団構造をそのまま反映するものではない。しかし、逆に社会的な選択を経た人々であるが故に、当時の社会を知る上で重要な情報を持っていると考えることもできる。保存状態等の問題はあがあるが、上ノ原横穴墓群からは古墳時代の一つの遺跡としては比較的まとまった人骨が得られており、その構成はある程度の情報を与え得るものとする。そこで、出土人骨の性構成および年齢構成について少し検討を行ってみたい。

上ノ原横穴墓群から出土した人骨の性構成は第208、209表に示すとおり、男性30体に対し女性14体で圧倒的に男性が多い。女性人骨は男性人骨に比べると遺存しにくい可能性もあるが、それにしてもこの差は大きいように思われる。戦争等によって一時的に性比のバランスが崩れることは考えられるが、その場合も女性が少ないことは不自然であり、男性の社会的な優位性を反映すると考えた方が自然であろう。

次に、年齢構成をみると、第209表に示すように熟年の死亡者が最も多い。先史・古代人の死亡年齢の構成については、小林 (1979) が縄文人について、中橋他 (1985) が金隈弥生人について、それぞれ分析を行っているが、上ノ原古墳人の死亡年齢構成は基本的にはこれらの結果と矛盾するものではない。しかし、弥生人の未成人のピークが乳幼児期にみられるのに対して、上ノ原ではこれらの人骨の出土が非常に少ない点は注意を要するであろう。その結果、未成人骨の占める割合 (16.4%) も金隈弥生人 (27.2%) に比べると小さい。乳幼児死亡率が古墳時代だけ特に低かったとは考えられないので、古墳に埋葬される未成人が特に限られていたと理解すべき

第209表 出土人骨の性・年齢構成

	上ノ原横穴墓群				竹並遺跡				金隈遺跡			
	男性	女性	不明	計	男性	女性	不明	計	男性	女性	不明	計
乳児 (0~1)				0								
幼児 (2~5)			1	1			6	6			6	6
小児 (6~11)			6	6			16	16			5	5
若年 (12~19)			2	2	3	3	9	15			2	2
不明 (~19)											2	2
未成人計	0	0	9	9	3	3	31	37	0	0	37	37
成年 (20~39)	6	8		14	45	26		71	19	14	2	35
熟年 (40~59)	17	5		22	21	22	1	44	19	26	1	46
老年 (60~)				0	1	2		3		4		4
成人 (20~)	7	1	2	10	24	8	17	49	4	2	8	14
成人計	30	14	3	47	91	58	18	167	42	46	11	99
不明			2	2								
総計	30	14	14	58	94	61	49	204	42	46	48	136

第210表 上ノ原頭蓋計測値、示数

(単位: mm)

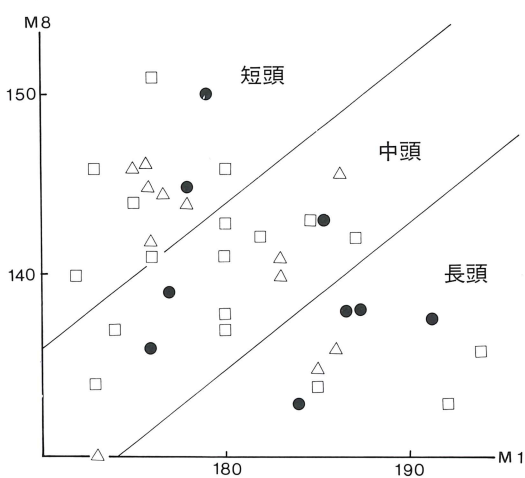
	N	Mean	男 性		Min.	N	Mean	女 性		Max.	Min.
			S. D.	Max.				S. D.	Max.		
1 頭蓋最大長	9	182.8	5.2	192	176	4	178.3	4.8	186	173	
5 基底長	8	100.9	4.1	108	95	2	94.5	-	97	92	
8 頭蓋最大幅	9	139.9	4.9	150	133	2	134.5	-	138	131	
9 最小前頭幅	9	94.2	4.2	101	88	2	89.0	-	91	87	
11 両耳幅	6	127.7	2.9	132	123	1	124.0	-	-	-	
17 Ba-Br 高	7	136.0	2.6	141	133	2	131.5	-	138	125	
23 水平周	6	520.5	10.6	533	506	1	510.0	-	-	-	
24 横弧長	5	316.6	6.5	328	310	4	296.0	10.4	310	286	
25 正中矢状弧長	7	376.0	10.0	387	357	3	363.0	8.5	375	357	
26 前頭弧長	8	124.0	3.3	130	118	4	125.8	2.7	130	123	
27 頭頂弧長	7	131.0	5.5	140	122	4	129.8	7.5	140	120	
28 後頭弧長	7	121.1	5.4	132	114	3	111.0	5.0	118	107	
29 前頭弦長	8	112.3	6.6	129	106	4	110.3	1.9	112	107	
30 頭頂弦長	8	119.1	5.4	126	108	4	116.5	5.9	125	110	
31 後頭弦長	7	100.4	4.6	109	94	3	92.0	2.2	95	90	
40 顔長	5	97.4	6.4	104	86	1	93.0	-	-	-	
45 頬骨弓幅	4	137.8	3.0	142	134	2	126.5	-	131	122	
46 中顔幅	7	103.9	4.6	112	98	3	96.3	2.9	100	93	
47 顔高	2	117.5	-	119	116	1	112.0	-	-	-	
48 上顔高	6	69.2	4.1	74	62	4	62.0	1.9	64	59	
51 眼窩幅(r)	5	41.6	0.8	43	41	1	39.0	-	-	-	
(1)	6	41.2	1.1	43	40	1	41.0	-	-	-	
52 眼窩高(r)	5	32.0	2.2	35	29	1	32.0	-	-	-	
(1)	7	32.4	2.1	35	28	1	33.0	-	-	-	
54 鼻幅	7	27.0	1.6	29	25	2	25.5	-	28	23	
55 鼻高	7	49.7	2.1	53	47	4	44.5	0.5	45	44	
65 下顎頭間幅	3	137.7	11.0	153	128	0	-	-	-	-	
66 下顎角幅	5	109.8	4.3	115	102	0	-	-	-	-	
68(1)下顎骨長	4	102.8	2.8	105	98	1	103.0	1.0	13	11	
69 オトガイ高	6	31.7	2.7	36	28	3	30.3	0.5	31	30	
69(3)下顎体厚(r)	8	14.4	1.1	16	13	4	12.0	1.0	13	11	
(1)	8	14.1	1.3	16	13	3	12.0	1.6	14	10	
70 a 下顎枝高(r)	3	55.3	4.5	61	50	0	-	-	-	-	
(1)	3	55.0	4.5	60	49	0	-	-	-	-	
71 a 下顎枝幅(r)	6	35.8	4.0	41	30	1	37.0	-	-	-	
(1)	5	35.2	3.5	39	31	0	-	-	-	-	
72 全側面角	4	87.5	4.7	92	80	1	83.0	-	-	-	
73 鼻側面角	4	91.3	3.9	95	85	1	89.0	-	-	-	
74 齒槽側面角	4	70.0	3.9	76	66	1	63.0	-	-	-	
8/1 頭長幅示数	9	76.6	4.0	83.8	71.4	2	76.7	-	79.8	73.6	
17/1 頭長高示数	7	74.2	1.8	76.1	71.2	2	74.3	-	78.4	70.2	
17/8 頭幅高示数	7	96.0	3.5	100.0	90.7	1	95.4	-	-	-	
48/45 上顔示数(K)	4	51.2	2.5	54.4	47.9	2	49.9	-	52.5	47.3	
48/46 上顔示数(V)	6	66.2	5.3	72.5	56.9	3	64.1	4.0	68.8	59.0	
52/51 眼窩示数(r)	5	76.7	5.6	83.9	70.7	1	82.1	-	-	-	
(1)	6	78.5	4.7	82.5	70.0	1	80.5	-	-	-	
54/55 鼻示数	7	54.4	4.2	60.4	49.0	2	57.3	-	62.2	52.3	

第211表 頭蓋主要計測値の比較 (男性)

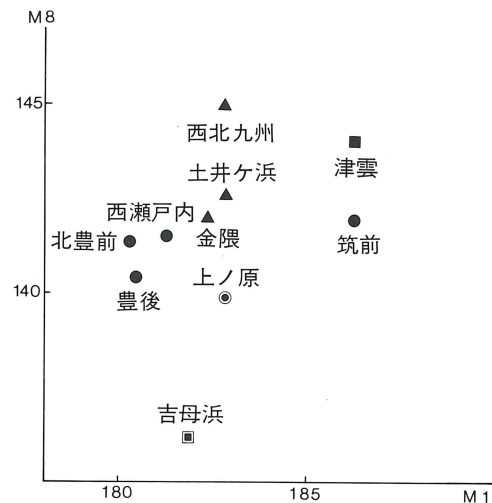
(単位: mm)

	上ノ原		北豊前古墳 ¹⁾		豊後古墳 ²⁾		土井ヶ浜弥生 ³⁾		西北九州弥生 ⁴⁾	
	N	Mean	N	Mean	N	Mean	N	Mean	N	Mean
1 頭蓋最大長	9	182.8	18	180.2	13	180.4	52	182.8	21	182.81
8 頭蓋最大幅	9	139.9	21	141.4	16	140.4	54	142.6	20	144.95
17 Ba-Br 高	7	136.0	13	135.2	12	132.6	43	134.7	15	134.60
45 頬骨弓幅	4	137.8	11	136.9	10	138.5	27	139.4	12	138.42
46 中 顔 幅	7	103.9	18	104.6	16	101.8	37	103.4	17	105.00
47 顔 高	2	117.5	7	124.7	11	118.3	36	123.4	14	117.07
48 上 顔 高	6	69.2	16	72.9	17	69.4	35	72.4	17	68.06
51 眼窩幅 (r)	6	41.2	17	42.6	13	42.8	38	42.7	15	43.07
52 眼窩高 (r)	7	32.4	17	34.2	13	33.0	40	34.2	15	32.80
54 鼻 幅	7	27.0	16	25.9	16	26.8	38	27.1	16	27.72
55 鼻 高	7	49.7	16	50.5	18	49.7	39	53.1	16	51.00
8/1 頭長幅示数	9	76.6	18	78.0	13	78.0	48	78.1	20	79.17
17/1 頭長高示数	7	74.2	11	74.5	11	73.4	42	73.7	15	74.15
17/8 頭幅高示数	7	96.0	13	96.0	12	95.0	43	94.3	14	93.11
48/45 上顔示数 (K)	4	51.2	10	54.0	10	49.7	21	51.9	12	49.31
48/46 上顔示数 (V)	6	66.2	16	69.5	16	68.2	31	70.0	17	64.84
52/51 眼窩示数 (r)	6	78.5	17	80.4	13	77.1	38	80.1	15	76.18
54/55 鼻 示 数	7	54.4	15	51.5	16	54.2	37	51.0	16	54.41

1) 2) Doi & Tanaka (1987) 3) 金関他 (1960) 4) 内藤 (1971)



第496図 頭蓋最大長 (M1)、最大幅 (M8)
●上ノ原古墳人 □豊前北部古墳人 △豊後古墳人

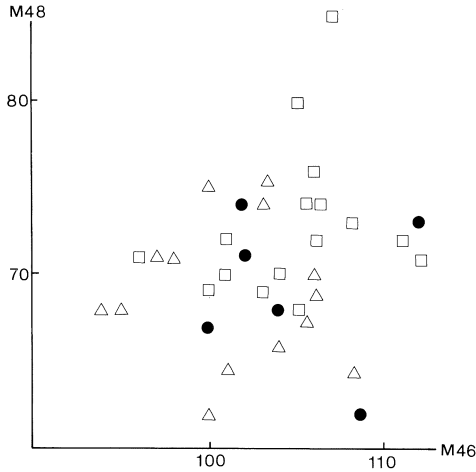


第497図 頭蓋最大長 (M1)、最大幅 (M8) の比較
●古墳人 △弥生人 ◆中世人

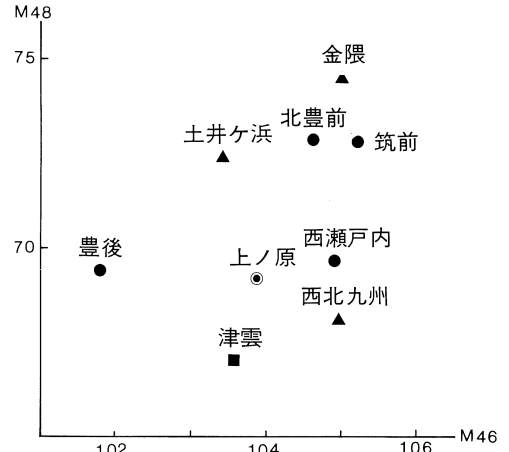
であろう。これらの未成人がどのような人々であったかも興味深いところである。

参考のために、中津市に近い行橋市竹並遺跡出土の人骨 (永井・木村, 1979) について、同様の集計を行ってみた (第209表)。竹並遺跡の横穴墓群は時期的には上ノ原よりやや新しい時期に属しており、人骨のほとんどは古墳時代後期のものである。性構成をみると上ノ原ほどではないがやはり女性が少なく、年齢構成でも未成人の占める割合 (18.1%) が小さい傾向を示している。

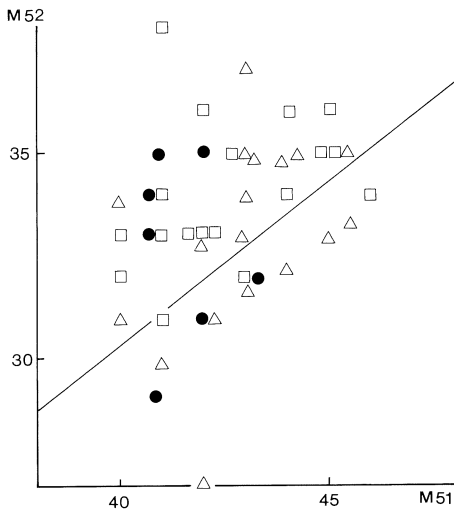
以上のように、古墳に葬られた人々が、いわゆる集団墓地から出土する人骨群のように、当時そこに生活していた人々の集団構造をそのまま反映するものではないということが、出土人骨の構成からも十分にうかがえる。上ノ原古墳人の性・年齢構成は横穴墓の被葬者像と関連して興味深い。



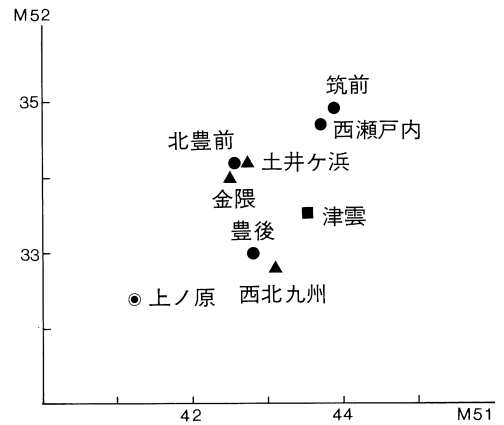
第498図 上顔高 (M48)、中顔幅 (M46)
●上ノ原古墳人 □豊前北部古墳人 △豊後古墳人



第499図 上顔高 (M48) と中顔幅 (M46) の比較
●古墳人 □弥生人 △縄文人



第500図 眼窩幅 (M51)、眼窩高 (M52)
●上ノ原古墳人 □豊前北部古墳人 △豊後古墳人



第501図 眼窩幅 (M51) と眼窩高 (M52) の比較
●古墳人 □弥生人 △縄文人

4. 計測および観察の結果

1) 頭蓋骨計測値

a) 脳頭蓋

上ノ原古墳人の主要頭蓋計測値および比較群の値を第210、211表に示す。女性については出土個体数そのものが少なかった上に、保存状態も悪く、十分な計測はできなかった。そこで、ここでは男性についてのみ検討を行うことにする。

第496図は上ノ原古墳人の頭型の分布を周辺地域の古墳人とともに示している。豊前北部の古墳人は中頭型に多く分布し、豊後地方の古墳人はどちらからという短頭型に多く分布している。上ノ原では短頭型が2体、中頭型が3体であったのに対して、長頭型に属する個体が4体で最も多い。次に、平均値について周辺の古墳人および代表的な縄文人・弥生人・中世人の計測値と比較を行ってみた(第497図)。上ノ原は中世吉母浜人ほどではないが、やや長頭に傾いている。

頭型は時代とともに変化していくことが知られている。すなわち、古代から中世にかけては長頭化の現象がみ

第212表 上ノ原顔面平坦度

(単位: mm)

	N	男		性		Min.	N	女		Min.
		Mean	S. D.	Max.	Max.			Mean	Max.	
Frontal chord	6	101.0	3.3	105.0	95.0	2	96.0	101.0	91.0	
subtense	6	15.2	1.5	16.4	12.0	2	16.5	17.7	15.3	
index	6	15.0	1.3	16.1	12.6	2	17.2	17.5	16.8	
Simotic chord	5	8.8	2.1	12.8	6.8	2	8.6	10.0	7.2	
subtense	5	2.5	0.1	2.7	2.3	2	2.4	2.5	2.3	
index	5	29.8	5.5	36.8	20.3	2	28.5	31.9	25.0	
Zygomaxillary chord	5	105.4	3.9	111.0	101.0	1	100.0	-	-	
subtense	5	22.3	3.0	26.5	19.6	1	25.2	-	-	
index	5	21.2	2.8	25.0	18.2	1	25.2	-	-	

られ、それ以後は短頭化の方向に変わり、短頭化現象は現代まで続いているということが鈴木（1963）の研究によって明らかにされた。しかし、具体的な原因やその過程については内婚率（池田，1982）や咀嚼器官の退化との関係（山口，1986）等、いくつかの仮説が掲示されているが、今日まで十分な説明が得られているわけではない。資料数は少ないが、上ノ原古墳人の例は長頭化の過程を知る上で貴重な示唆を含むものかも知れない。

b) 顔面頭蓋

第498図は顔面部の形を知る指標である上顔高と中顔幅の関係を示している。渡来系の遺伝子によってもたらされた形質として、顔面の高径が高く面長であるという特徴が知られているが（金関，1976）、豊前北部の古墳人は顔の幅も大きな値をとるが、高さも高く面長な個体が多い。ところが豊後古墳人はどちらも小さい値をとり、どちらかという寸詰まりの顔をした個体が多いようである。上ノ原古墳人はその中間のあたりに分布している。また、平均値について周辺の集団と比較してみると、第499図に示すように、縄文人や西北九州弥生人の近くに位置している。

次に眼窩の特徴をみてみると（第500図）、豊前北部の古墳人は眼窩の高さが高い方に多く分布しており、豊後地方の古墳人はそれに比べるとやや低い方に分布している。上ノ原古墳人はどちらかという豊後古墳人の分布範囲と重なるようである。周辺の集団との比較では（第501図）、上ノ原古墳人集団は眼窩の高さ・幅ともに小さい特徴を持つことが分かる。また、鼻部の示数も大きく、鼻の幅が広がったようである。

c) 顔面平坦度

計測の結果を第212、213表に示す。顔の形と同様に顔面の平坦度も系統関係を知るための有効な指標である。すなわち、渡来系形質の特徴として、顔面が平坦でいわゆるのっぺりした顔をしていることが知られている（金関，1976）。第502図は前頭骨 (frontal) と鼻骨 (simotic) の平坦度を周辺の集団のものとともに二次元の散布図として示したものである。上ノ原古墳人は豊後古墳人に近い。

2) 頭蓋非計測的形質

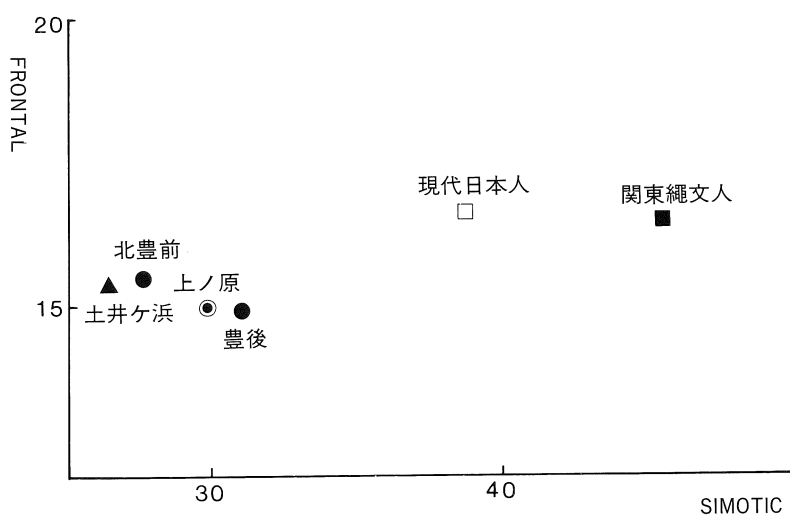
観察結果を比較資料とともに第214表に示す。観察数が少ないので、この結果が上ノ原古墳人全体の出現頻度を反映していない可能性はあるが、他の集団と比べると、インカ骨、横洞溝左優位、頭頂切痕骨、前頭縫合、外耳道骨腫の頻度が高い。非計測的形質は遺伝性が強く、その出現は血縁関係に支配される場合が多い。したがって、横穴墓のように被葬者が何等かの家族で構成されているような場合は、その出現頻度は系統よりも血縁性を反映すると考えられる。参考までに、複数の個体が埋葬されていた横穴墓における非計測的形質の共有関係を第215表に示した。11号横穴墓（男性2体、女性2体）では横洞溝左優位が3体（1体は観察不能）に、前頭縫合が3体（残りの1体にも痕跡あり）に、下顎隆起が男性2体に共有されており、被葬者の血縁関係を強く支持している。21号横穴墓（男性2体、女性2体）では外耳道骨腫が全個体に、2体に下顎隆起が共有されている。25号横穴墓（男性1体、女性1体、小児1体）では男性と小児にインカ骨と下顎隆起が共有されており、これらの被葬者の血縁関係を強く支持している。また、27号横穴墓（男性2体、女性1体）では男性1体と女性にラムダ

第213表 顔面平坦度の比較 (男性)

(単位: mm)

	上ノ原		北豊前古墳 ¹⁾		豊後古墳 ²⁾		土井ヶ浜弥生 ³⁾		関東縄文 ⁴⁾	
	N	Mean	N	Mean	N	Mean	N	Mean	N	Mean
Frontal chord	6	101.0	20	98.2	13	98.3	32	100.9	28	99.6
subtense	6	15.2	20	15.3	13	14.6	32	15.6	28	16.4
index	6	15.0	20	15.5	13	14.9	32	15.4	28	16.5
Simotic chord	5	8.8	18	8.0	12	7.9	30	8.4	16	10.2
subtense	5	2.5	18	2.2	12	2.4	30	2.3	16	4.6
index	5	29.8	18	27.8	12	30.5	30	26.7	16	45.5
Zygomaxillary chord	5	105.4	14	104.6	9	100.7	21	105.4	11	102.8
subtense	5	22.3	14	23.6	9	21.8	21	21.1	11	22.9
index	5	21.2	14	22.5	9	21.7	21	20.1	11	22.2

1) 2) 3) Doi & Tanaka (1987) 4) Yamaguchi (1980)



第502図 顔面平坦度の比較
●古墳人 ▲弥生人 ■縄文人 □現代人

小骨が共有され、30号横穴墓 (男性2体、女性1体、若年1体) では男性2体に横洞溝左優位が共有されていた。

3) 四肢骨計測値および身長

四肢骨の保存は非常に悪く、計測値が得られた個体が少ない。平均値が得られたのは男性の上腕骨、大腿骨、脛骨、腓骨だけである (第216、218、220、222表)

a) 上腕骨

上ノ原古墳人の計測結果を第216表に、他集団との比較を第217表に示す。最大長が得られた個体は1体だけであったが、他と比べると最も小さい値を示している。幅径・周径は津雲縄文人の値に近く、かなり頑丈であったと推定される。しかし、上腕骨中央部の断面形を示す骨

体断面示数は土井ヶ浜弥生人に近く、津雲縄文人のような扁平傾向は認められない。

b) 大腿骨

計測の結果と他集団との比較を第218、219表に示す。計測できた個体数が少ないが、上ノ原古墳人の大腿骨は長径が小さい傾向を示している。幅径・周径は現代人に比べると大きく、土井ヶ浜弥生人や津雲縄文人の値に近い。骨体中央部の断面示数は土井ヶ浜弥生人の値に近いが、縄文人に多くみられる大腿骨の柱状傾向が5体にみられた。

c) 脛骨

計測の結果と他集団との比較を第220、221表に示す。上腕骨や大腿骨と同様に脛骨も長径が短く、幅径・周径は比較的大きく全体としてがっしりした骨格であったと推定される。縄文人に多い扁平脛骨が2例に認められた。

d) 身長

7例の男性について推定身長を求めることができた。そのうち6例は大腿骨の最大長から、1例については脛骨の最大長からピアソンの式を用いて推定した。女性の身長は四肢骨の保存が悪く、推定することができなかった。上ノ原古墳人の推定身長は全体に低く、160cmを超える個体は1例だけであった (第223、224表)。また、比較集団の中でも最も低く、縄文人や西北九州弥生人に近い。

第214表 頭蓋非計測的形質の出現頻度 (skull incidences)

	上ノ原古墳		関東東北古墳 ¹⁾		土井ヶ浜弥生 ²⁾		東日本縄文 ³⁾		日本現代 ⁴⁾	
	n	p	n	p	n	p	n	p	n	p
1 ラムダ小骨	18	0.111	73	0.068	128	0.180	84	0.060	174	0.040
2 インカ骨	20	0.200	84	0.071					128	0.031*
3 横後頭縫合 (10mm~)	14	0.214	55	0.024	133	0.165	70	0.329	176	0.159
4 横洞溝左優位	23	0.261	77	0.065	123	0.171	67	0.134	153	0.170
5 舌下神経管二分	14	0.143	55	0.200	90	0.144	45	0.333	180	0.144
6 頸静脈孔二分	9	0.000	39	0.077	68	0.176	20	0.050	222	0.122
7 顎前結節	10	0.000	48	0.000	76	0.105	46	0.087	178	0.090
8 アステリオン骨	11	0.273	45	0.333	116	0.241	59	0.119	172	0.116
9 後頭乳突縫合骨	11	0.364	40	0.375	91	0.440	39	0.128	179	0.173
10 翼 棘 孔	3	0.000	46	0.022	91	0.022	33	0.030	179	0.028
11 鼓室骨裂孔	20	0.150	65	0.231	127	0.213	70	0.243	179	0.358
12 頭頂切痕骨 (5mm~)	11	0.545	36	0.167	109	0.349	45	0.311	172	0.360
13 前頭縫合	21	0.190	99	0.000	126	0.079	84	0.131	180	0.089
14 眼窩上孔	16	0.375	57	0.509	96	0.531	71	0.155	180	0.550
15 内側口蓋管骨橋	13	0.000	51	0.078	84	0.048	46	0.130	177	0.079
16 床状突起間骨橋	4	0.250			24	0.010	4	0.063	177	0.045
17 下顎隆起	16	0.438	48	0.167	100	0.450	66	0.439	177	0.282
18 顎舌骨筋神経管	7	0.000	21	0.095	94	0.096	60	0.233	177	0.062
19 外耳道骨腫	21	0.333	67	0.030			74	0.176	176	0.023
20 眼窩上神経溝	13	0.154	53	0.245	97	0.165	56	0.143	177	0.311

1) Yamaguchi (1985) 2) Dodo & Ishida (1988) 3), 4) Dodo & Ishida (1987)

*Dodo(1975) (sexes are pooled)

第215表 非計測的形質の共有関係

+ 有 - 無 / 不明

11号横穴墓人骨				
	1号(♂)	2号(♂)	3号(♀)	4号(♀)
横洞溝左優位	+	+	/	+
後頭乳突縫合骨	-	+	/	+
前 頭 縫 合	±	+	+	+
眼 窩 上 孔	/	+	+	+
下 顎 隆 起	+	+	/	-
21号横穴墓人骨				
	1号(♂)	2号(♂)	3号(♀)	4号(♀)
下 顎 隆 起	+	-	-	+
外耳道骨腫	+	+	+	+
25号横穴墓人骨				
	1号(♂)	2号(?)	3号(♀)	
インカ骨	+	+	/	
眼窩上孔	+	-	+	
下顎隆起	+	+	/	
27号横穴墓人骨				
	1号(♂)	2号(♂)	3号(♀)	
ラムダ小骨	-	+	+	
翼 上 骨	+	+	/	
30号横穴墓人骨				
	1号(♂)	2号(?)	3号(♀)	4号(♂)
横洞溝左優位	+	-	/	+

第216表 上ノ原上腕骨計測値、示数

(単位：mm)

	N	Mean	男		性	
			S.D.	Max.	Min.	
1 最大長 (r)	1	282.0	-	-	-	-
(1)	-	-	-	-	-	-
5 骨体中央最大径 (r)	5	23.4	1.7	26	21	
(1)	5	23.2	1.5	25	22	
6 骨体中央最小径 (r)	5	17.6	1.0	19	16	
(1)	5	18.0	1.7	21	16	
7 骨体最小周 (r)	7	63.4	3.6	71	60	
(1)	6	64.3	4.5	71	59	
7a 骨体周 (r)	5	67.8	3.8	75	64	
(1)	5	68.0	4.6	75	64	
6/5 骨体断面示数 (r)	5	75.6	7.1	85.7	66.7	
(1)	5	77.6	4.8	84.0	72.0	
7/1 長厚示数 (r)	1	23.4	-	-	-	-
(1)	-	-	-	-	-	-

第217表 上腕骨計測値の比較 (男性・左)

(単位：mm)

	上ノ原		土井ヶ浜弥生 ¹⁾		津雲繩文 ²⁾		九州現代 ³⁾	
	N	Mean	N	Mean	N	Mean	N	Mean
1 最大長	1	282.0	15	299.4	15	283.3	106	295.3
5 中央最大径	5	23.2	53	22.6	20	23.7	106	21.9
6 中央最小径	5	18.0	54	17.2	20	17.7	106	16.9
7 最小周	6	64.3	53	64.5	21	64.7	106	61.8
7a 中央周	5	68.0				68.8	106	63.7
6/5 骨体断面示数	5	77.6	53	77.4	20	74.6	106	79.1
7/1 長厚示数	1	23.4	17	21.3	15	23.0	106	20.9

1) 財津 (1956) 2) 清野・平井 (1928 a) 3) 専頭 (1957)

第218表 上ノ原大腿骨計測値、示数

(単位：mm)

	N	男					女				
		Mean	S.D.	Max.	Min.	N	Mean	S.D.	Max.	Min.	
1 最大長 (r)	4	412.3	10.3	429	401	0	-	-	-	-	
(1)	4	408.0	4.1	413	403	0	-	-	-	-	
2 生理長 (r)	4	406.5	10.2	423	395	0	-	-	-	-	
(1)	2	406.5	1.5	408	405	0	-	-	-	-	
6 骨体中央矢状径 (r)	11	28.9	1.6	32	27	4	24.0	0.7	25	23	
(1)	13	28.8	1.7	32	26	2	25.0	-	25	25	
7 骨体中央横径 (r)	12	26.7	0.8	28	25	4	24.0	1.2	26	23	
(1)	13	26.8	1.0	28	25	2	27.5	-	29	26	
8 骨体中央周 (r)	11	87.0	3.8	94	80	4	75.0	3.0	78	72	
(1)	12	86.9	3.8	94	80	2	80.5	-	83	78	
9 骨体上横径 (r)	8	31.9	1.7	35	30	1	29.0	-	-	-	
(1)	13	30.8	4.1	37	21	1	34.0	-	-	-	
10 骨体上矢状径 (r)	8	25.1	1.8	29	23	1	21.0	-	-	-	
(1)	13	26.0	1.8	30	24	1	22.0	-	-	-	
8/2 長厚示数 (r)	3	20.5	1.3	22.0	18.9	0	-	-	-	-	
(1)	2	20.4		20.7	20.1	0	-	-	-	-	
6/7 骨体中央断面示数 (r)	11	108.7	7.2	119.2	96.4	4	100.2	4.9	104.3	92.3	
(1)	13	107.8	6.1	118.5	96.4	2	91.2	-	96.2	86.2	
10/9 上骨体断面示数 (r)	8	79.0	5.9	90.6	71.4	1	72.4	-	-	-	
(1)	13	83.2	11.8	111.5	64.9	1	64.7	-	-	-	

第219表 大腿骨計測値の比較 (男性・左)

(単位: mm)

	上ノ原		土井ヶ浜 ¹⁾ 弥生		津雲 ²⁾ 縄文		九州 ³⁾ 現代	
	N	Mean	N	Mean	N	Mean	N	Mean
1 最大長	4	408.0	15	438.3	11	415.2	59	406.5
2 自然位長	2	406.5	15	428.7	11	411.3	59	403.2
6 骨体中央矢状径	13	28.8	53	28.6	20	28.9	59	26.5
7 骨体中央横径	13	26.8	53	26.6	20	25.5	59	25.6
8 骨体中央周径	12	86.9	54	87.4	20	86.6	59	82.4
9 骨体上横径	13	30.8	51	32.9	19	30.4	59	29.4
10 骨体上矢状径	13	26.0	51	25.8	19	24.8	59	24.3
8/2 長厚示数	2	20.4	15	20.5	11	21.1	59	20.4
6/7 骨体中央断面示数	13	107.8	53	107.7	20	113.2	58	103.8
10/9 上骨体断面示数	13	83.2	51	79.4	19	81.7	58	82.8

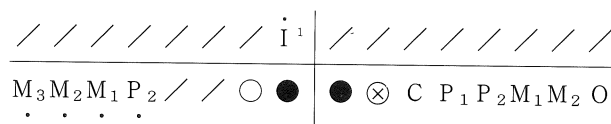
1) 財津 (1956) 2) 清野・平井 (1928 b) 3) 阿部 (1955)

4) 風習的抜歯の痕跡

上ノ原横穴墓群出土人骨のうち、11号横穴墓1号人骨、30号横穴墓4号人骨、48号横穴墓人骨に風習的抜歯と思われる所見が認められた。これらはいずれも男性である。なお、一部についてはすでに報告しているが(土肥・田中, 1988)、ここで改めて上ノ原古墳人の抜歯について検討を行うことにする。

a) 所見

11号横穴墓1号人骨 (熟年・男性)

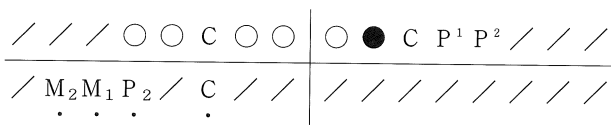


● 抜歯痕 ○ 歯槽開放 ⊗ 歯槽閉鎖不完全 ・ 遊離歯 / 破損不明

下顎中切歯2本が失われている。左下顎犬歯は近心側へ傾斜している。抜歯痕頂部はやや鋭い稜線をなし、空隙は12~13mmである。咬耗度はすべて Broca の2度であった。

下顎切歯については、上顎切歯と同様に打撲などの外傷が原因で脱落する場合がある。また、歯疾患によって失われる可能性も否定できない。しかし、外傷や疾患による切歯の脱落は比較的少ないという指摘もあることから(大多和, 1983)、本人骨も風習による抜歯の可能性が大きいと考える。

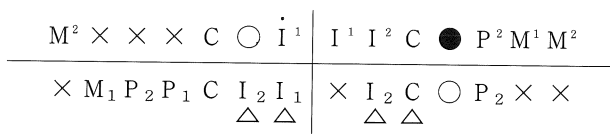
30号横穴墓4号人骨 (熟年・男性)



● 抜歯痕 ○ 歯槽開放 ・ 遊離歯 / 破損不明

左上顎側切歯が抜去されている。左上顎中切歯は死後失われているが、開放した歯槽はこの歯がやや遠心側に傾斜していたことを示している。また、左上顎犬歯はかなり強く近心側に傾斜している。下顎は遺存しないが、歯周病等の所見はみられないので、風習的抜歯の可能性が強いと考える。

48号横穴墓人骨 (熟年・男性)



● 抜歯痕 ○ 歯槽開放 × 歯槽閉鎖 △ 歯根のみ

第220表 上ノ原脛骨計測値, 示数

(単位: mm)

			N	Mean	男		性	
					S.D.	Max.	Min.	
1 全	長 (r)		3	323.0	3.3	327	319	
		(1)	2	327.5	—	330	325	
1a 最 大	長 (r)		4	330.0	3.6	335	325	
		(1)	2	335.5	—	337	334	
8 中 央 最 大	径 (r)		5	29.6	1.4	31	28	
		(1)	5	29.2	1.2	31	28	
8a 栄 養 孔 位 最 大	径 (r)		7	34.1	2.2	37	30	
		(1)	4	34.0	1.0	35	33	
9 中 央 横	径 (r)		5	21.4	1.0	23	20	
		(1)	5	20.8	1.0	22	20	
9a 栄 養 孔 位 横	径 (r)		7	23.3	1.3	25	21	
		(1)	4	22.5	2.3	25	19	
10 中 央	周 (r)		5	81.2	4.0	88	77	
		(1)	4	80.8	1.9	83	78	
10a 栄 養 孔 位	周 (r)		7	90.1	3.1	95	84	
		(1)	4	91.5	0.9	93	91	
10b 最 小	周 (r)		6	73.3	2.1	76	70	
		(1)	7	75.1	2.0	78	71	
9/8 骨 体 中 央 断 面 示 数	(r)		5	72.4	4.5	78.6	66.7	
		(1)	5	71.3	3.8	75.9	64.5	
9a/8a 栄 養 孔 位 断 面 示 数	(r)		6	69.0	3.9	75.8	62.9	
		(1)	4	66.4	7.7	75.8	54.3	
10b/1 長 厚 示 数	(r)		3	22.5	0.3	22.9	22.3	
		(1)	2	22.8	—	23.1	22.4	

第221表 脛骨計測値の比較 (男性・左)

(単位: mm)

		上ノ原		土井ヶ浜 ¹⁾ 弥生		津 雲 ²⁾ 縄 文		九 州 ³⁾ 現 代	
		N	Mean	N	Mean	N	Mean	N	Mean
1 全	長	2	327.5	9	351.0	10	337.0	61	320.3
1a 最 大	長	2	335.5	9	356.6	10	343.0	60	326.9
8 中 央 最 大	径	5	29.2	50	29.6	21	31.7	61	27.8
8a 栄 養 孔 位 最 大	径	4	34.0	45	34.4	19	34.7	60	30.6
9 中 央 横	径	5	20.8	50	21.2	21	19.7	61	21.1
9a 栄 養 孔 位 横	径	4	22.5	52	24.0	19	21.5	61	23.7
10 骨 体	周	4	80.8	50	81.4	20	82.5	62	78.4
10a 栄 養 孔 位	周	4	91.5	45	93.2	19	90.7	61	88.9
10b 最 小	周	7	75.1	44	74.8	17	75.6	60	71.3
9/8 中 央 断 面 示 数		5	71.3	50	70.9	21	62.4	61	76.1
9a/8a 栄 養 孔 位 断 面 示 数		4	66.4	45	69.5	19	62.0	60	77.5
10b/1 長 厚 示 数		2	22.8	10	20.8	10	22.9	60	22.4

1) 財津 (1956) 2) 清野・平井 (1928b) 3) 鑄鍋 (1955)

左上顎第1小白歯が抜去されている。左上顎犬歯は遠心側へ傾斜し、第2小白歯は近心側へ傾斜している。咬耗度は Broca の2~3度で、一部歯髓腔の開放しているものもある。歯周病も認められる。

上顎第1小白歯の抜去は、古墳人では比較的好くみられる抜歯の形式である。本人骨には歯周病の所見があり、歯疾患による脱落の可能性も否定できないが、対咬歯牙の咬耗度は左上顎第1小白歯がかなり以前に抜去されて

第222表 上ノ原腓骨計測値, 示数

(単位: mm)

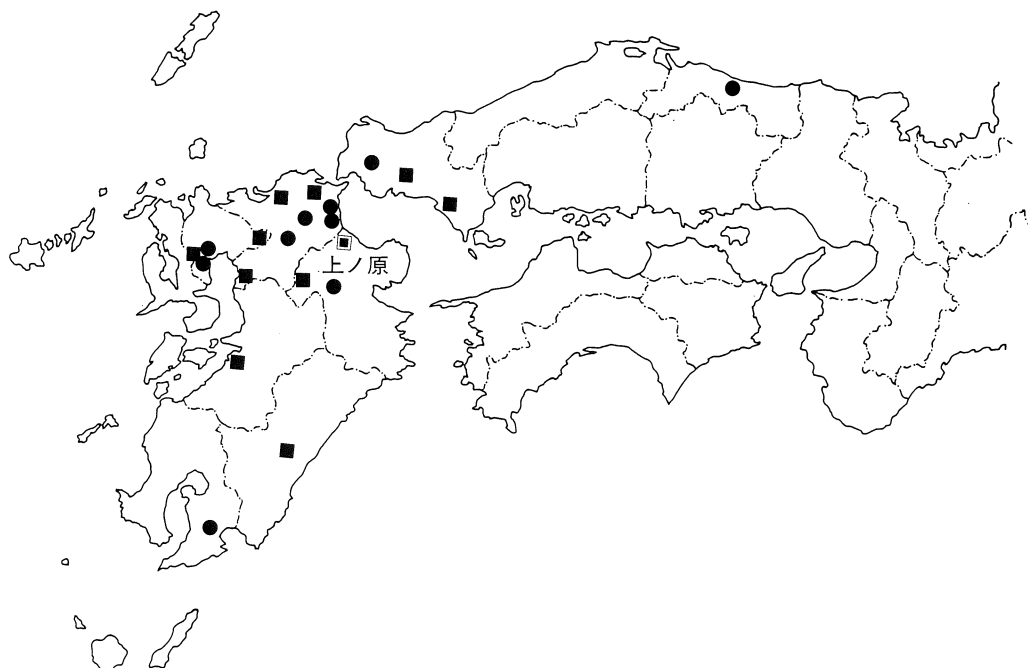
	N	Mean	性		Min.	Max.
			男	女		
			S.D.			
2 骨 体 中 央 最 大 径 (r)	3	16.7	1.25		15	18
(1)	2	16.0	—		14	18
3 骨 体 中 央 最 小 径 (r)	3	10.7	0.47		10	11
(1)	2	10.5	—		10	11
4 骨 体 中 央 周 (r)	3	44.0	1.63		42	46
(1)	2	43.5	—		42	45
4a 最 小 周 (r)	3	37.7	4.71		31	41
(1)	3	37.0	4.55		31	42
3/2 骨 体 断 面 示 数 (r)	3	64.5	7.23		55.6	73.3
(1)	2	67.1	—		55.6	78.6

第223表 上ノ原古墳人推定身長 (単位: cm)

人骨番号	推定身長
5	159.0
9	157.4
12	158.0
48	157.1
50	158.6
52	158.0
63-1	162.0
平均	158.6
N	7
S.D.	1.5

第224表 推定身長の比較 (単位: cm)

	n	mean
上ノ原 (古墳)	7	158.6
土井ヶ浜 (弥生)	18	162.8
金隈 (弥生)	17	162.7
西北九州 (弥生)	16	158.8
津雲 (縄文)	13	159.9
吉胡 (縄文)	22	158.9
吉母 (中世)	18	159.7



第503図 西日本における古墳時代抜歯人骨の分布 (土肥・田中、1988より改編)

■男性 ●女性

第225表 上ノ原および他の古墳人にみられた抜歯型式

歯種	型	式	男性	女性	上ノ原	
上顎	第一小臼歯				48号横穴墓 人骨	
			P1	1		1
			P1	0		3
			P1	1		0
上顎	側切歯				30号横穴墓 4号人骨	
			I1 I1	1		0
			I2	3		1
			I2	0		2
下顎	中切歯				11号横穴墓 1号人骨	
			I1	0		3
			I1	1		0
			I1	0		0
下顎	犬歯				11号横穴墓 1号人骨	
			C	0		1
			C	0		1
			C	0		1
下顎	切歯				11号横穴墓 1号人骨	
			I2 I1 I1 I2	1		0
			? ? ? ?	2		0
			I1 I1 ? ?	1		0
下顎	歯				11号横穴墓 1号人骨	
			I2	1		0

いたことを示唆しており、風習的抜歯の可能性が強いと考える。

b) 抜歯形式および他報告例との比較

縄文後半期に盛行した抜歯風習は弥生時代に次第に衰退し、弥生時代の終結とともに廃絶されたと考えられていた(渡辺, 1966; 春成, 1973; 池田, 1981)。しかし、福岡県行橋市前田山遺跡出土の弥生終末期の人骨に明かな風習的抜歯が認められ(土肥他, 1987)、また古墳時代の人骨にもかなりの風習的抜歯が存在することが指摘され(鈴木, 1962; 宮川, 1974; 森本・小片, 1983; 土肥・田中, 1988)、地域によっては古墳時代

まで抜歯風習が存続していたことがわかってきた。上ノ原古墳人にみられた抜歯痕は貴重な追加例である。

第225表は、上ノ原古墳人にみられた抜歯形式を他の古墳人の調査結果(土肥・田中, 1988)とともに示している。上ノ原でみられた抜歯形式は古墳時代では最も多くみられるものであり、この地方に抜歯風習が遺存していた可能性を強く支持するものであった。第503図はこれまでに報告された古墳時代の抜歯人骨出土遺跡をまとめたものである。いずれも中小古墳の被葬者で副葬品も乏しい。詳細については土肥・田中(1988)を参照されたい。また、古墳時代の抜歯の意義についても土肥・田中(1988)に詳述しているように、「家長」の死に対する服喪、さらには「家長権」の継承に伴う「相続」儀礼としての意義が最も妥当であるように思われる。

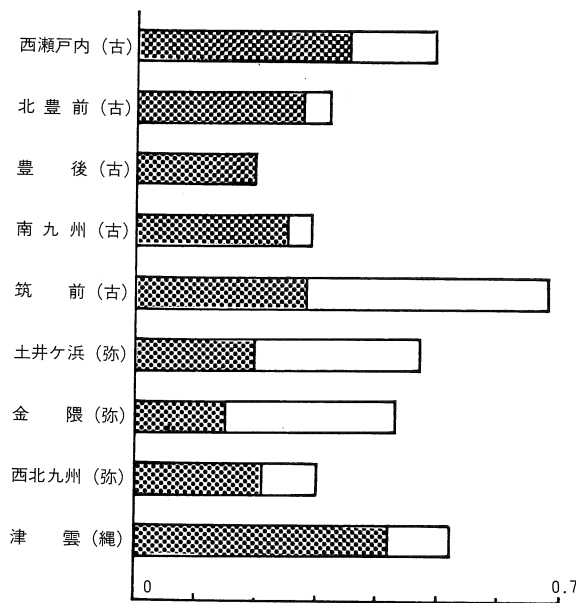
5. 渡来系形質の拡散の問題

古墳時代の人骨は全国各地から広く出土しており、偏った分布を示す他時代の人骨に比べると、地域変化を調べる上では絶好の資料である。また、実際に古墳人頭蓋計測値の地域差を調べることによって、弥生時代の開始期に北部九州地方にもたらされた渡来系の形質が、次第に周辺地域へ拡散していったという混血の過程が明らかになり、また、その拡散は同心円状に自然に広がっていったのではなく、近畿地方へというはっきりした方向性

第226表 頭蓋計測値9項目に基づくペンローズの距離(男性)

	上ノ原古墳	西瀬戸内古墳	北豊前古墳	豊後古墳	南九州古墳	筑前古墳	土井ヶ浜弥生	金隈弥生	西北九州弥生	津雲縄文
上ノ原		0.347	0.275	0.198	0.254	0.279	0.197	0.154	0.210	0.416
西瀬戸内	0.490		0.168	0.104	0.268	0.123	0.109	0.226	0.220	0.471
北豊前	0.316	0.200		0.157	0.488	0.063	0.101	0.055	0.360	0.560
豊後	0.199	0.224	0.186		0.221	0.145	0.103	0.123	0.121	0.251
南九州	0.289	0.304	0.489	0.252		0.402	0.370	0.471	0.092	0.217
筑前	0.683	0.189	0.302	0.511	0.602		0.117	0.148	0.334	0.441
土井ヶ浜	0.473	0.117	0.191	0.293	0.448	0.153		0.060	0.223	0.512
金隈	0.425	0.233	0.124	0.309	0.546	0.186	0.060		0.326	0.546
西北九州	0.296	0.227	0.369	0.190	0.103	0.450	0.253	0.354		0.252
津雲	0.521	0.474	0.575	0.337	0.236	0.538	0.532	0.565	0.253	

mean distances



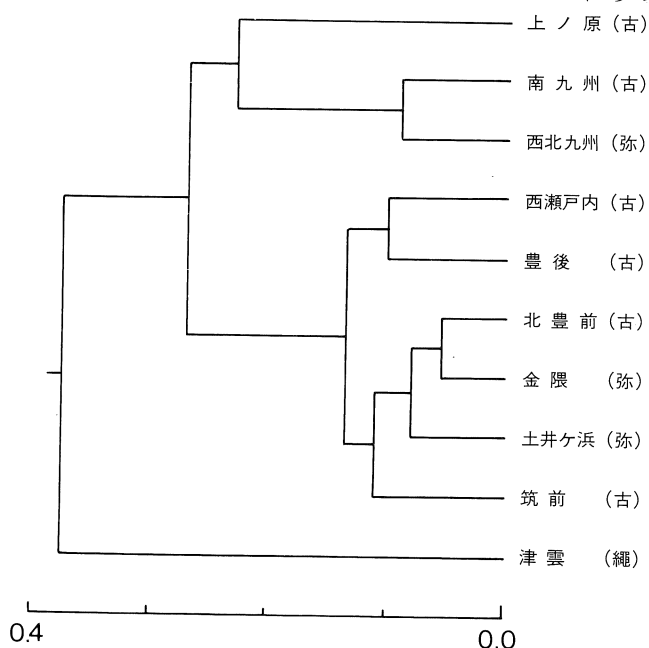
第504図 上ノ原古墳人と各集団とのペンロースmean distances (男性)
(頭蓋計値9項目による)
網かけの部分はshape distances, 白い部分はsize distances

を持つことも分かってきた (Doi & Tanaka, 1987)。上ノ原横穴墓群のある中津市は、地理的には北部九州から東回りで豊後・南九州へと向かう拡散ルートの途中に位置している。また、渡来系の特徴を持つ古墳人が多い豊前北部地方にも近い。したがって、上ノ原集団にどの程度の渡来系形質の浸透がみられるのかは、弥生時代以降の社会構造を知る上で非常に重要であると思われる。

上ノ原人骨の計測結果は、いくつかの項目で豊後古墳人や西北九州弥生人の持つ特徴に近いことを示した。しかし、骨の計測値のように多数の遺伝子が関与し表現型

が連続的に変化する量的形質を比較する場合、集団相互の関係を多次元的かつ総合的に捉える必要がある。そこで、系統的な特徴を調べるためによく使われる、頭蓋計測値9項目 (M1, M8, M17, M45, M48, M51, M52, M55) を用いて多次元解析を試みた。集団間の生物学的な距離を示す指標としてはペンロースの距離 (Penrose, 1954) を用いた (第226表)。第504図は上ノ原古墳人から各集団への距離を示している (平均距離 = 形態距離 + 大きさ距離)。

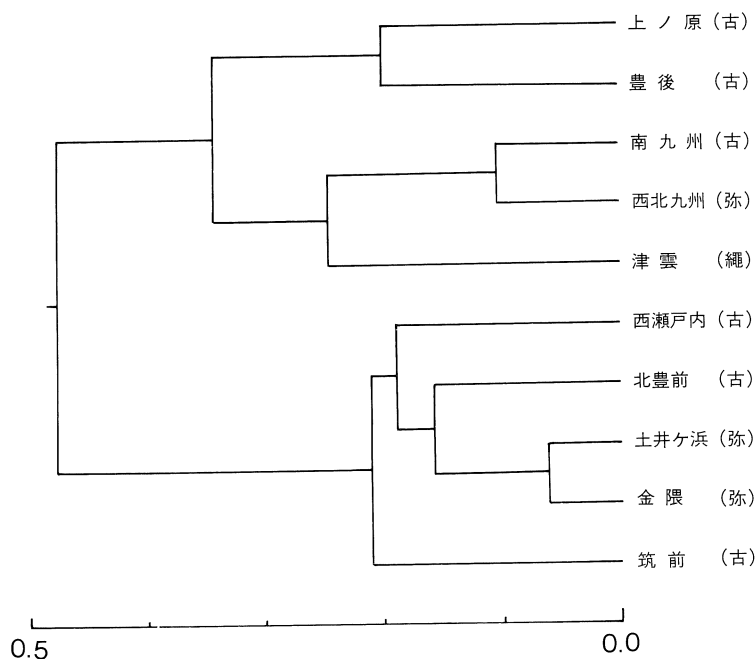
上ノ原古墳人は形態的には金隈・土井ヶ浜の弥生人や豊後古墳人に近いが、他の集団とも極端な差はみられないようである。最も遠いのは津雲縄文人である。しかし、大きさでは金隈・土井ヶ浜の弥生人とは差があり、筑前古墳人との差も大きい。全体的に最も近いのは豊後古墳人である。これらの結果をみると、上ノ原古墳人は金隈や土井ヶ浜の渡来系弥生人に近いようでもあり、また西北九州弥生人や豊後古墳人のように在来の特徴を持つ集団にも近そうである。次に、集団相互の関係をj知るためにこれらの距離関係をもとにしてクラスター分析を行っ



第505図 頭蓋計測値9項目のペンロース形態距離に基づくクラスター分析

てみた。第505図は形態距離について、第506図は平均距離についての分析結果である。どちらも渡来系の集団は同一クラスターを形成している。上ノ原古墳人は在来の縄文人的特徴を持つ集団とともにクラスターを形成するようである。

以上の結果を総合すると、上ノ原古墳人の形質は、どちらかといえば在来の縄文人的特徴に近いが、頭蓋骨の形態については渡来系の弥生人にも似ており、全体としては地理的な位置関係を反映していると言える。しかし、近接する豊前北部の古墳人が渡来系の特徴を色濃く保有しているのに比べると、かなりの落差があるようである。したがって、上ノ原古



第506図 頭蓋計測値9項目のペンローズ平均距離に基づくクラスター分析

墳人集団が渡来人の直接の子孫であるとは考えにくい。上ノ原古墳人集団の中にも渡来系の遺伝子は拡散してきているが、その規模は小さく、おそらく隣接集団との婚姻等を通して豊前北部地方から徐々に浸透してきたと考えたほうが良いように思われる。

6. まとめ

大分県中津市上ノ原横穴墓群から58体におよぶ古墳時代人骨が出土した。人骨の保存状態は良好とは言えないが、男性については比較的まとまった個体数が得られて

おり、形質的な特徴をある程度うかがうことができた。形質人類学的調査の結果は以下のとおりである。

- 1) 出土人骨の構成は、男性30体、女性14体、不明14体で男性の割合が高い。また、未成人の占める割合は16.4%で非常に低かった。これは古墳に葬られる人々が社会的に選択された限られた人たちであったことを反映するものであろう。
- 2) 頭蓋骨の計測の結果、頭型はやや長頭型に傾いた中頭型に属し、上顔高や眼窩高が低く、どちらかというと在来の縄文人的な特徴を持つ個体が多いことが分かった。
- 3) 四肢骨は長径が短く、幅径・周径が比較的大きい傾向を示した。
- 4) ピアソンの式を用いて求めた男性の平均推定身長は158.6cmで、比較群の中では最も低かった。
- 5) 頭蓋非計測的形質の観察の結果、同一横穴墓内の人骨間に遺伝的関係を示すと思われる興味深い共有関係が認められた。
- 6) 風習的抜歯の可能性を示す所見が3体の男性人骨に認められた。

謝辞

稿を終えるに当たり、人骨調査の機会を与えて下さった大分県教育委員会の皆様に心からの謝意を表します。特に、村上久和氏には調査時から調査後の段階に至るまで、多大の御助言・御援助を賜った。また、研究室での人骨調査においては、永井昌文先生をはじめとする教室のスタッフに貴重な御助言や御指導をいただいた。記して謝意を表します。

参考文献

(本文について)

土肥直美・田中良之・永井昌文, 1987: 前田山遺跡出土人骨の調査. 『前田山遺跡』, 行橋市文化財調査報告書19, 行橋市教育委員会: 203-216.

Doi, N. and Y. Tanaka, 1987: A geographical cline in metrical characteristics of Kofun skulls from western Japan. *J. Anthropol.*

- Soc. Nippon, 95(3):325-342.
- 土肥直美・田中良之, 1988: 古墳時代の抜歯風習. 『日本民族・文化の生成』, 六興出版, 東京, 197-215.
- 春成秀爾, 1973: 抜歯の意義, 考古学研究, 20(2): 25-48.
- 池田次郎, 1981: 日本の抜歯風習. 小片 保編 人類学講座 5, 日本人 I, 雄山閣, 東京, 243-260.
- 池田次郎, 1982: 『日本人の起源』, 講談社現代新書, 東京, 75-84.
- 小林和正, 1979: 人口人類学. 小林和正編 人類学講座 2, 人口, 雄山閣, 東京, 63-129.
- 金関丈夫, 1976: 日本民族の起源. 法政大学出版局, 東京, 24-43.
- 宮川 渉, 1974: 於古墳出土歯牙について. 『馬見丘陵における古墳の調査』, 奈良県史跡名勝天然記念物調査報告書29: 150-156.
- 森本岩太郎・小片丘彦, 1983: 森台古墳群第19号噴出土人骨について. 『千葉県山武町森台古墳群の調査』, 青山学院大学森台遺跡発掘調査団: 164-171.
- 永井昌文・木村幾太郎, 1979: 横穴墓一覽 (出土人骨). 竹並遺跡調査会編 『竹並遺跡』, 東出版, 東京, 464-467.
- 永井昌文, 1985: III. 北部九州・山口地方. (シンポジウム: 国家成立前後の日本人—古墳時代人を中心に—). 季刊人類学, 16(3): 47-57.
- 中橋孝博・土肥直美・永井昌文, 1985: 金隈遺跡出土の弥生時代人骨. 史跡 『金隈遺跡』, 福岡市教育委員会, : 43-145.
- 大多和利明, 1983: 広田弥生人の所謂風習的抜歯, 特にその抜歯痕の検討. 九州歯科学会雑誌, 37(3): 588-600.
- Penrose, L.S., 1954: Distance, size and shape. Ann. Eugen. London 18:337-343.
- 鈴木 尚, 1962: 内谷組合式石棺内出土の人骨. 『石井 徳島県文化財調査報告書 5』: 111-115.
- 鈴木 尚, 1963: 『日本人の骨』, 岩波新書, 東京, 82-107.
- 渡辺 誠, 1966: 縄文文化における抜歯風習の研究, 古代学, 21(4): 173-201.
- 山口 敏, 1986: 『日本人の顔と身体』, PHP 研究所, 東京, 151-162.
- (比較資料について)
- 〈縄文人〉
- Dodo, Y., 1986: Metrical and non-metrical analyses of Jomon crania from eastern Japan. In : Akazawa, T. and C.M. Aikens ed. Prehistoric Hunter-Gatherers in Japan. Univ. Tokyo Press, Tokyo, 137-161.
- 石沢命達, 1931: 吉胡貝塚人骨の人類学的研究, 第3部, 下肢骨の研究, 人類誌, 46.
- 清野謙次・宮本博人, 1925: 津雲貝塚人骨の人類学的研究 第2部 頭蓋骨, 人類誌41.
- 清野謙次・平井 隆, 1928 a : 津雲貝塚人骨の人類学的研究 第3部 上肢骨の研究. 人類誌, 43, 第3附録
- 清野謙次・平井 隆, 1928 b : 津雲貝塚人骨の人類学的研究 第4部 下肢骨の研究, 人類誌, 43, 第4附録
- Yamaguchi, B., 1980: A study on the facial flatness of the Jomon crania. Bull. Natn. Sci. Mus., Tokyo. Ser. D, 6:21-28.
- 〈弥生人〉
- 百々幸雄・石田 肇, 1988: 頭骨の形態小変異の出現型からみた土井ヶ浜弥生人. 『日本民族・文化の生成』, 六興出版, 東京, 127-142.
- Doi, N. and Y. Tanaka, 1987: A geographical cline in metrical characteristics of Kofun skulls from western Japan. J. Anthrop. Soc. Nippon, 95(3): 325-343.
- 金関丈夫・永井昌文・佐野 一, 1960: 山口県豊浦郡豊北町土井ヶ浜遺跡出土弥生式時代人頭骨について. 人類学研究, 7 (Suppl.): 1-35.
- 内藤芳篤, 1971: 西北九州出土の弥生時代人骨. 人類誌, 79(3): 236-248.
- 中橋孝博・土肥直美・永井昌文, 1985: 金隈遺跡出土の弥生時代人骨. 史跡 『金隈遺跡』, 福岡市教育委員会: 43-145.
- 財津博之, 1956: 山口県土井ヶ浜弥生前期人骨の四肢長骨に就いて. 人類学研究, 3: 320-349.
- 〈古墳人〉
- Doi, N. and T. Tanaka, 1987: A geographical cline in metrical characteristics of Kofun skulls from western Japan. J. Anthrop.

J. Anthropol. Soc. Nippon, 95(3):325-343.

内藤芳篤, 1985: II. 南九州及びその離島. (シンポジウム: 国家成立前後の日本人-古墳時代人骨を中心にして-). 季刊人類学, 16(3): 34-47.

Yamaguchi, B., 1985: The incidence of minor non-metric cranial variants in the protohistoric human remains from eastern Japan. Bull. Natn. Sci. Mus., Tokyo, Ser. D. 11:13-24.

九州大学医学部解剖学第2講座編, 1988: 『日本民族・文化の生成』 2. 古人骨資料集成, 六興出版, 東京.

〈中世人〉

中橋孝博・永井昌文, 1985: 山口県吉母浜遺跡出土人骨. 『吉母浜遺跡』, 下関市教育委員会

〈現代人〉

阿部英世, 1955: 現代九州人大腿骨の人類学的研究. 人類学研究, 2: 121-166.

Dodo, Y., 1975: Non-metric traits in the Japanese crania of the Edo period. Bull. Natn. Sci. Mus., Tokyo, Ser. D, 1: 41-54.

Dodo, Y. and H. Ishida, 1987: Incidence of nonmetric cranial variants in several population samples from east Asia and north America. J. Anthropol. Soc. Nippon, 95(2): 161-177.

鑄鍋時登, 1955: 九州人下腿骨の研究. 人類学研究, 2: 1-41.

専頭時義, 1957: 現代九州日本人上腕骨の人類学的研究. 人類学研究, 4: 1-29.

Yamaguchi, B., 1973: Facial flatness measurements of the Ainu and Japanese crania. Bull. Natn. Sci. Mus., Tokyo, 16: 161-171.

(2)上ノ原横穴墓群出土人骨の $\delta^{13}\text{C}$ 測定による食性分析

埼玉大学教養部 小池 裕子・町田 明広

1. はじめに

出土人骨のコラーゲンをを用いた炭素安定同位対比 $\delta^{13}\text{C}$ による食性分析は、動物のタンパク質が食物をとおして摂取されたアミノ酸などの有機物を材料にして生成されるため、その個体のタンパク質の $\delta^{13}\text{C}$ 値は食物中のタンパク質の $\delta^{13}\text{C}$ 値に近似することを応用している。一方食糧資源の源である一時生産者の $\delta^{13}\text{C}$ は陸上植物や水産物の間で大きな差をもつのが特徴で、C3植物(代表値 -26.5‰)・C4植物(-13.5‰)・海洋一時生産者(-19.5‰)とそれぞれ特有の値を示す。さらに蛋白質を食物中のアミノ酸から合成する動物の場合には、食物連鎖につながる捕食動物を経るにつれ、その動物の蛋白質の $\delta^{13}\text{C}$ 値は約 $+1\text{‰}$ ずつ増加する。したがって人骨コラーゲンの $\delta^{13}\text{C}$ 測定値から食物の平均 $\delta^{13}\text{C}$ 値を推定するには、栄養段階による $+1\text{‰}$ の差とコラーゲン(ゼラチン)による $+3.5\text{‰}$ の差を合わせた $+4.5$ を補正值として算定する。

大分県上ノ原横穴墓群では、古墳時代中～後期に属する横穴墓から30体をこえる人骨が発見され、九州大学医学部解剖学教室において保管研究されてきた(永井, 1988)。今回はこれらの人骨のうち保存状態の良い10体について、骨片2～3gを分析試料として譲り受け、コラーゲンを抽出して $\delta^{13}\text{C}$ 値を測定した。また比較試料として同教室保管の古墳時代人骨もあわせて測定した。今回分析した古墳時代人骨は古墳時代前期に属する草場第二・寺島・谷口・岩屋遺跡、古墳時代中期に属する宇土・老司・寺山・下山・城遺跡、古墳時代後期に属する竹並・十一横穴・法恩寺の各遺跡から出土した人骨である。

これらの古墳時代の人骨の測定結果を、すでに測定してある近隣に位置する山鹿貝塚(縄文時代晩期)、土井ヶ浜遺跡(弥生時代前～中期)、中の浜遺跡(弥生時代前～中期)、金隈遺跡(弥生時代前～中期)および天福寺遺跡(江戸時代)出土人骨の $\delta^{13}\text{C}$ 測定値と比較し、安定同位体比法から推定されたこれらの古墳時代人の食性に関する特性を考察したい。

2. $\delta^{13}\text{C}$ 分析法

出土人骨資料から骨破片2～3gを分析試料として提供受け、土壌や毛根などを取り除きながら1mm以下に粉碎した。0.2N HCl溶液を加え、脱灰液が着色しなくなるまで人骨を脱灰し、得られたコラーゲン蛋白を凍結乾燥し保管した。

$\delta^{13}\text{C}$ の測定には、コラーゲン8mgを酸化第二銅(線状)約1gを加え真空封入し、 520°C で約2時間燃焼し CO_2 ガスとした。この CO_2 ガスを真空ライン中で精製し、名古屋大学理学部地球科学教室のVarian MAT CH7型同位体質量分析機で測定した。

3. 分析人骨

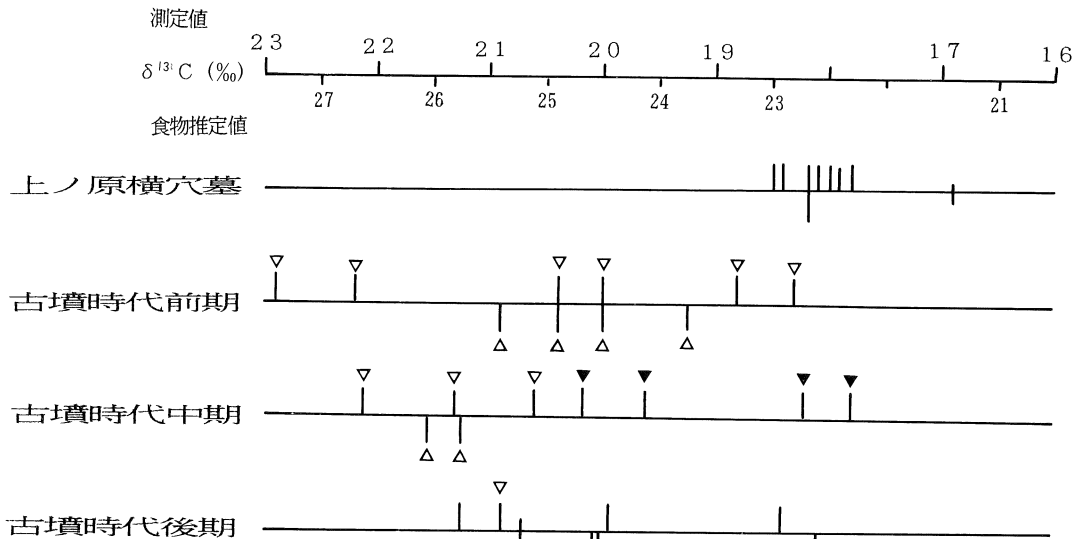
本遺跡の10体および古墳時代人骨比較試料30体を第227表に示す。分析人骨に関する年齢・性・推定身長などの人類学的情報は前出の資料(永井, 1988)から引用し、埋葬形式・伴出遺物などの考古学的情報は大分県文化課からご教示を受けた。上ノ原横穴墓人骨のコラーゲン収量は未測定であるが、他の遺跡の人骨ではコラーゲン蛋白の収量は30～200mgで、収率(コラーゲン蛋白mg/人骨g)は0.5-8.6と、試料により大きな差があった。これは人骨の保存状態によるものと考えられる。

4. 上ノ原横穴墓群出土人骨の $\delta^{13}\text{C}$ 値

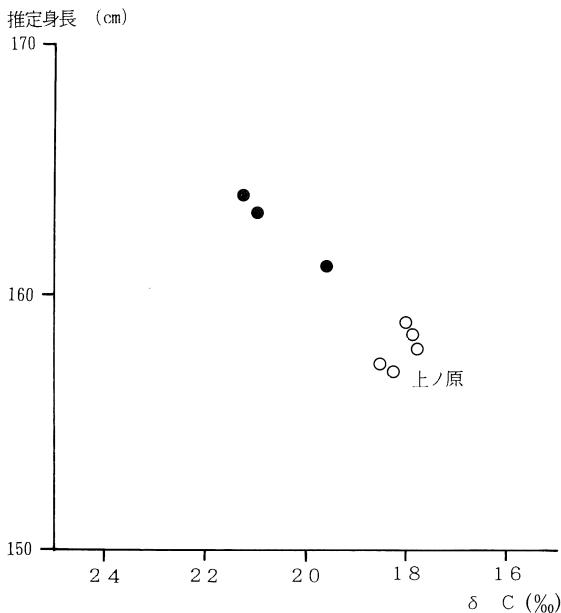
本遺跡の10体のコラーゲンの $\delta^{13}\text{C}$ 値をみると、 -16.9‰ ～ -18.5‰ の範囲に分布し、全数の平均は -18.8‰ 、標準偏差は $\pm 0.6\text{‰}$ であった。 $\delta^{13}\text{C}$ 平均値の -18.8‰ は食物推定値に換算すると -23.3‰ となり、やや陸上食の強い値であった。また標準偏差が $\pm 0.6\text{‰}$ であったことは、この遺跡における個体間の $\delta^{13}\text{C}$ 値の変異が小さかつ

第227表 上ノ原横穴墓群およびその他の古墳時代遺跡出土人骨のコラーゲン収量と $\delta^{13}\text{C}$ 値

遺跡	分析番号	人骨番号	性	年齢	コラーゲン収量・収率	身長	$\delta^{13}\text{C}$ (食物値)	時代	埋葬形式	副葬品
上ノ原	849	12-2	男性	成人		158.0	-17.8(-22.3)	6 C前半	横穴墓C型	
	850	9	男性?			157.4	-18.5(-23.0)	6 C後半	横穴墓B型	鉄鏃
	851	5	男性	成人		159.0	-18.0(-22.5)	5 C後半	横穴墓A型	鉄鏃・刀
	853	25-1	男性	熟年		—	-18.2(-22.7)	5 C後半	横穴墓A型	鉄鏃・鉄剣
	854	25-2	?	子供		—	-16.9(-21.4)	5 C末	横穴墓C型	
	855	25-3	女性	成年		—	-18.2(-22.7)	5 C末~6 C初頭	横穴墓C型	
	856	52	男性	成年		—	-17.9(-22.4)	5 C後半	横穴墓C型	鉄鏃
	857	50	男性	熟年		158.6	-17.9(-22.4)	5 C後半	横穴墓C型	
	858	48	男性	熟年		157.1	-18.4(-22.9)	5 C後半	横穴墓C型	鹿角製品
859	27	男性	成年		—	-18.1(-22.6)	6 C前半	横穴墓C型	須恵器	
草場第2	1818	8-2	女性	成年	75.1 1.1	—	-20.0(-22.3)	古墳時代前期	方形周溝墓 192号石棺	玉類
	1819	8-3	男性	熟年	225.1 2.3	—	-20.0(-23.0)	〃	〃	〃 鉄鏃・刀
	1823	32-2	女性?	成年	60.7 1.5	—	-20.4(-22.5)	古墳時代前期	〃	鉄片・櫛
	1824	32-3	男性	成年	57.1 1.1	—	-22.1(-22.7)	〃	〃51号石棺	鉄鏃
	1825	35	男性	成年	49.1 1.4	—	-22.7(-21.4)	古墳時代前期	〃	鉄鏃・剣
竹並	1828	G-10-3	女性	熟年	107.8 2.8	—	-19.9(-22.7)	7 C中頃	横穴墓C型	
	1830	G-48	男性	熟年	101.4 1.6	164.1	-21.3(-22.4)	6 C中頃	〃	
	1831	G-70-2	不明	成人	108.0 2.8	—	-20.7(-22.4)	6 C末	〃	
十一横穴	1839	1-G	女性	成人	104.0 1.4	—	-20.1(-22.9)	6 C後半~末	横穴墓C型	
	1840	1-H	女性	成人	206.5 5.7	—	-19.9(-22.6)	〃	〃	
	1841	1-K	男性	成年	92.1 2.4	—	-18.4(-22.3)	〃	〃	鉄剣・
	1842	1-L	女性	成年	224.8 8.7	—	-18.2(-23.0)	〃	〃	
宇土	1843	1-1	男性	成年	99.4 2.0	163.5	-22.1(-22.5)	5 C後半~末	小円墳?石棺	鉄製品・玉類
	1844	1-2	女性	成~熟年	37.7 1.1	—	-21.5(-22.7)	〃	〃	〃
	1847	2-2	女性	成年	122.0 2.8	141.9	-21.3(-22.7)	古墳時代中期	小円墳?石棺	鉄製品・玉類
オゴモリ	1851	C2-B	不明	不明	39.5 1.1	—	-21.1(-22.4)	?	方形周溝墓 石棺	鉄製品・玉類
寺山	1852	A-1	女性	老年	66.3 1.9	—	-21.0(-22.4)	古墳時代前期	小円墳石棺	剣・土師器・鉄鋤
	1853	A-2	男性	熟~老年	238.6 5.6	—	-18.8(-22.9)	〃	〃	〃
	1855	A-4	不明	小児	74.9 2.2	—	-19.3(-22.6)	〃	〃	〃
老司	1856	2-12	男性	成~熟年	188.0 7.8	—	-20.1(-22.3)	5 C初頭	前方後円墳石室	鏡・剣・鉄鏃他
	1858	4-2	男性	成年	152.6 5.1	161.2	-19.6(-23.0)	〃	前方後円墳石室	装身具・農具他
寺山	1862	1-2	男性	熟年	75.9 2.1	—	-20.6(-21.4)	古墳時代中期	円墳?	剣・刀子・櫛他
	1863	2	男性	成~熟年	109.3 2.6	—	-21.3(-22.7)	〃	〃	〃
下山	1865		女性	老年	135.3 6.2	—	-17.9(-22.4)	5 C前半	前方後円墳石室	刀・剣・刀子他
城	1866		男性	成年	51.8 1.4	—	-18.2(-22.4)	5 C中頃	前方後円墳石室	剣・玉類・鉄鏃他
谷口	1867		男性	成年	130.4 4.2	—	-20.4(-22.9)	4 C末~5 C初頭	前方後円墳石室	剣・管玉
長井浜	1868		女性	成年	66.7 1.9	—	-23.3(-22.6)	弥生末~古墳前期	?	不明
法恩寺	1870		不明	不明	32.4 0.6	—	-20.8(-22.9)	古墳時代後期	円墳	鏡・玉類・鉄鏃他
岩屋	1871		男性	成年	62.4 2.5	—	-18.4(-22.6)	古墳時代前期	?	不明



第507図 上ノ原出土人骨およびその他の古墳時代遺跡出土人骨の $\delta^{13}\text{C}$ 値の分布
 (上段が男性、下段が女性、中間は小児) ▽は前方後円墳、▼は円墳、無印は横穴墓出土人骨



第508図 上ノ原横穴墓群とその他の古墳時代遺跡男性人骨の $\delta^{13}\text{C}$ 値の分布 (○は上ノ原横穴墓群出土人骨)

たことを示した。上ノ原の人骨はともに横穴墓に埋葬されており、副葬品にはかなりの違いがみられたが、 $\delta^{13}\text{C}$ 値を指標にした食性から推定すると、個人差を生ずるような食性の差は認められなかった。

分析人骨の大半は男性個体で、女性は1体のみであった。その $\delta^{13}\text{C}$ 値は-18.2‰で、男性個体の $\delta^{13}\text{C}$ 値の範囲に入り、特に顕著な性差は認められなかった。

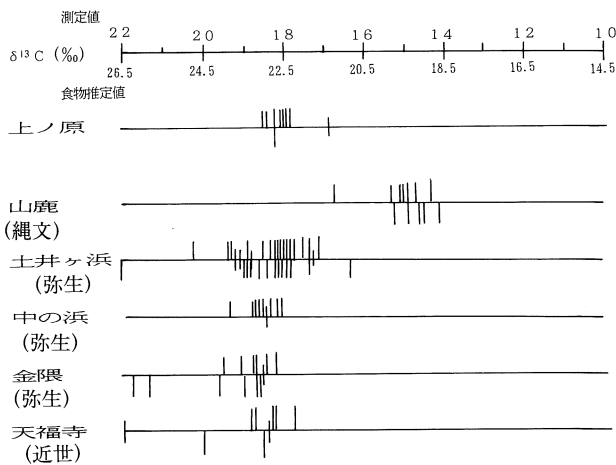
5. 古墳時代人骨の $\delta^{13}\text{C}$ 値との比較

本遺跡の $\delta^{13}\text{C}$ 値を同時期の人骨の $\delta^{13}\text{C}$ 値と比較した(第507図)。古墳時代前期に属する草場第二遺跡出土人骨の $\delta^{13}\text{C}$ 値は-21.0‰、古墳時代中期の宇土遺跡の人骨の $\delta^{13}\text{C}$ 平均値は-22.0‰、古墳時代後期の竹並・十一横穴遺跡の人骨の $\delta^{13}\text{C}$ 平均値はそれぞれ-20.6と-19.1‰であった。これらの遺跡の $\delta^{13}\text{C}$ 平均値を上ノ原人骨の平均値と比べてみると、上ノ原人骨は古墳時代

人骨の中で、より大きな値をとることが示された。

また分析された古墳時代人骨のうち、海岸部に位置するのは老司・下山・城・谷口・長井浜の各古墳である。そのうち老司・下山・城古墳出土人骨は同じ古墳時代中期の人骨に比べより大きな値をとり、水産系食物の摂取量が若干増加したことを示唆した。

第507図ではこれらの各出土人骨に関して、前方後円墳、円墳、横穴墓など古墳様式や副葬品から推定された社会的階級を表示して、 $\delta^{13}\text{C}$ 値との比較を試みた。前方後円墳から出土した人骨の $\delta^{13}\text{C}$ 測定値(<>印)はともに海岸部に位置することも関連したためか、より大きな値をとる傾向を示した。大円墳・小円墳から出土した人骨の $\delta^{13}\text{C}$ 値(<>印)は、総じてそれ以外の人骨にくらべより負に傾く、つまり陸上食糧に多く依存することを示した。分析された人骨が古墳時代であることを勘案すると、このような強い負の $\delta^{13}\text{C}$ 値は米食の比率が高かったことを示すものと考えられる。



第509図 上ノ原横穴墓群出土人骨および近隣遺跡出土人骨の $\delta^{13}\text{C}$ 値の分布

より負の $\delta^{13}\text{C}$ 値をとる相関性を示したことは興味深い。

6. 西日本北部における $\delta^{13}\text{C}$ 値の時代変化

これらの古墳時代の人骨の $\delta^{13}\text{C}$ 値を、西日本北部の各時代の人骨と比較した(第509図)。縄文時代晩期に属する山鹿貝塚出土人骨の $\delta^{13}\text{C}$ 平均値は -14.9‰ 、(食物推定値 -19.4‰)で、水産系食物に比較的多く依存していた値を示している。水稻農耕が導入された以降の時代では、弥生時代前～中期に属する土井ヶ浜遺跡・中の浜遺跡・金隈遺跡の $\delta^{13}\text{C}$ 平均値はそれぞれ -18.3‰ (食物推定値 -22.8‰)、 -18.7‰ (-23.3‰)、 -19.2‰ (-23.7‰)で類似した値を示した。江戸時代人の天福寺人骨の $\delta^{13}\text{C}$ 測定値も同様の -19.0‰ (-23.5‰)であった。山鹿貝塚人を除くこれらの弥生時代以降の人々は、上ノ原遺跡人と同様に陸上食糧に多く依存することを示した。

〈参考文献〉

- 小池裕子・Brian, Chisholm (1988)炭素安定同位体比法による日本産哺乳動物の食性分析法の検討。埼玉大学紀要, 6: 107-115.
- Chisholm, Brian, 小池裕子・中井信之(1988)炭素安定同位体比法による古食性の研究。考古学と自然科学, 20: 7-16.
- 小池裕子(1990)浦和市円生寺人骨中のコラーゲンを用いた炭素・窒素安定同位体比測定による食性分析。浦和市長郷土博物館研究調査報告書, 17: 5-7.
- 小池裕子・左古直美(1991)都立上野高等学校遺跡上野寛永寺護国院墓地から出土した人骨の $\delta^{13}\text{C}$ ・ $\delta^{15}\text{N}$ 測定による食性分析。「都立上野高等学校遺跡発掘報告書」

上ノ原を含め横穴墓から出土した人骨の $\delta^{13}\text{C}$ 測定値は、全体により大きな値をとる傾向を示した。このことは米食の比率が比較的低かったことを示唆するものと考えられるが、それをおぎなうものとして、海産物か、あるいはヒエ・アワ・キビなどの4植物の両者の可能性が考えられる。今後N15法によって動物と植物と割合を推定しながらこの点を検討していきたい。

これらの各遺跡出土人骨のうち身長が推定されている男性人骨について、身長推定値と $\delta^{13}\text{C}$ 値を比較した(第508図)。上ノ原遺跡の男性人骨は比較的身長が低く、かつ $\delta^{13}\text{C}$ 値が重いことから、他の遺跡人骨とは異なるところに分布する結果となった。全体的な傾向として身長が比較的高い人骨が、

5. 総括

(1)上ノ原横穴墓群被葬者の親族関係

九州大学文学部九州文化史研究施設比較考古学部門 田中 良之

1. はじめに

事実報告の項に明らかなように、上ノ原横穴墓群からは情報量豊かな埋葬の事例が数多く得られている。そして、それらの情報は横穴墓の時期や形態の特徴、人骨の年齢・性別にとどまるものではなく、埋葬順位、追葬間隔をも含むものであった。

筆者らは、かつてこれらの情報に基づき、27号（仮34号）横穴墓の被葬者に考古学・形質人類学的分析を行い、被葬者間の血縁関係を推定して、横穴墓被葬者の親族関係について論じた。そして、その内容は、横穴墓に埋葬されたのが男性の家長とその子たちで、いずれも配偶者を伴わないというものであった（田中他1985）。しかし、旧稿でも強調したとおり、1例のみでは血縁者と推定された関係が「他人のそら似」である可能性を排除しきれものではなく、それ故にいくつもの事例を重ねた上で、埋葬にあたっての基本原則を抽出する必要がある。小稿は、旧稿の足らざるを補いつつ、上ノ原横穴墓群全体に対する分析結果を示し、この横穴墓群における埋葬システムを総合的に検討したものである。

2. 分析対象と方法

人骨の保存状態の関係から、分析に使用したのは主として11号・21号・25号・27号・30号・63号の各横穴墓とその被葬者であるが、他の横穴墓及び出土人骨も必要に応じて適宜使用した。なお、横穴墓及び出土遺物の時期や、人骨の性・年齢・歯冠計測値とその他の形質については、本報告書における各報告書の記載にしたがった。

小稿で用いる方法は、考古学的手続きに基づいて、各横穴墓被葬者について考えるいくつかの親族関係をモデル化し、それを人骨のもつ遺伝的情報によって検証するものである。すなわち、埋葬順位、副葬遺物、人骨の二次的移動などの情報と、人骨の性別・死亡推定年齢などから、被葬者たちの生前における世代構成を復元し、考えるいくつかの親族関係モデルを作成する。

次に、藤田の方法（藤田1949）によって計測した被葬者の歯冠計測値（近遠心径・頬舌径）を酒井らによる現代日本人の値（酒井他1971）を用いて基準化して、Qモード相関係数を算出する。そして、計算結果から血縁者と推定される個体間の関係に基づいて、最も妥当な親族関係モデルを選択する。さらに、これら個々の横穴墓におけるモデルを総合して、上ノ原横穴墓群における基本モデルを抽出するわけである。なお、モデルの検証にあたっては頭蓋非計測的小変異を併用する。

これらの方法の詳細については別稿（田中他1985、土肥他1986、田中・土肥1989、田中1990b）を参照していただきたい。また、これらの考察に加え、上記の方法によって得られた基本モデルに基づいて、被葬者の世代的連続と横穴墓の時期的連続との関係を検討し、横穴墓の小群の意味と横穴墓群全体の構造についても言及したい。

3. 世代構成の復元

世代構成の復元にあたっては、埋葬順位、被葬者の性・年齢、原位置か片付けかという埋葬の状態、前庭部土層の観察所見、副葬遺物の年代観等の情報が必要である。しかし、それらの内容は本報告書の各項目に詳しく記載されているため、この項では各々の記載内容をふまえて論じることとし、重複を避けたい。したがって、それらの詳細については、各々の記載を参照されたい。ただ、人骨の片付けと密接に関わる靱帯・軟骨等の軟部組織の腐朽に要する時間と、前庭部埋土における風化土層（黒色土層）の形成に要する時間は、世代構成の復元にあたっては重要な意味をもつ。まず、人体の軟部組織の腐朽に要する時間は、環境や部位によっても異なるためいちがいにはいい難いが、一般に土中においては靱帯・軟骨が腐朽してしまうまでに5年ほどかかるとされている（古畑1964）。本例のような横穴墓の場合は、土中に埋もれず、また礫床上で水はけもよいことから、腐朽には

より時間がかかるものと考えられる。参照例として近・現代における改葬の事例をあげると、奄美大島においては埋葬して7日目よりも前に改葬するとまだ完全に肉が骨を離れていない場合があり、14～15年目のものは完全に白骨化していた例がある（長田1974）。また、愛知県東賀茂郡では3～7年目に改葬を行うが、頭骨が脊椎骨と関節したままなので、草刈鎌で頭を切り離すという。しかし、13～17年目に改葬を行う同県渥美町においてはそのようなことはない（伊東1974）。したがって、これらの例からみて、腐朽が完了かそれに近いほど進行するのには10年程度を見込んでおけばいいだろう。

風化土層の形成期間もいちがいいにはいい難しいものである。しかし、風化土層の色調には濃淡があり、厚さにも差があり、これは、形成期間の差とも関連すると考えられる。これには48号横穴墓が参考となる。この横穴墓では、単体埋葬であるにもかかわらず、埋葬後一定の時間をへて再び閉塞部を開け、「瓜状炭化物」を供献したと考えられる。その際に、遺体の左胸部を払うようにして乱し、右膝蓋骨を動かして「瓜状炭化物」の下に置いていた。そして、前庭部には淡い風化土層が認められたのである。したがって、この例からみると、風化土層の形成にはやはり10年かそれ以上の時間を見込んでおいた方がいいだろう。また、濃くかつ厚い風化土層の場合には、さらに長い形成期間を考える必要もあろう。

具体的な手順は、上記の情報から得られる埋葬間隔をもとに、各々の横穴墓における初葬者死亡時の年齢構成を求める。例えば、被葬者の埋葬順位と推定年齢が1号人骨（40才）→2号人骨（30才）→3号人骨（40才）であったとし、埋葬間隔が1号－2号人骨間20年、2号－3号人骨間10年であったとすると、1号人骨死亡時の2号人骨は、死亡年齢から1号－2号人骨間の埋葬間隔を逆算して（30才－20年＝10才）、3号人骨は、死亡年齢から1号－2号人骨間、2号－3号人骨間の埋葬間隔を引いて（40才－20年－10年＝10才）となる。すなわち、この3体の生前の年齢構成は1号人骨（40才）、2号人骨（10才）、3号人骨（10才）となって、二世代の構成であったことになるのである。

人骨の年齢推定や埋葬間隔の推定はおおまかなものであるので、厳密な年齢構成の復元はもとより困難である。しかし、おおまかではあっても、考えられる時間幅の中でいくつかのケースを考慮しながら、同世代か次世代かを判断して、世代構成を復元することは可能である。したがって、以下、各横穴墓について検討する。

11号横穴墓

人骨は4体が出土している。1号人骨（熟年男性）→2号人骨（成～熟年男性）・3号人骨（成年後半の女性）→4号人骨（熟年女性）の順に埋葬されていた。原位置を保っていたのは4号人骨のみであり、他の3体はいずれも片付けられていた。したがって、遺体の軟部組織（靭帯・軟骨等）の腐朽を考慮すると、埋葬と埋葬の間隔が長かったことが理解される。

次に、前庭部の土層観察所見は、明らかな追葬の痕跡を認め、初葬時の埋土は追葬時に削平されているため明らかではないものの、追葬時の埋土は風化（黒色化・腐植化）していないというものであった。したがって、3回の追葬のうち少なくとも1回は、比較的短い間隔をおいて行われたことがうかがえる。

そして、横穴の構造と前庭部出土の土器が示す年代観は、初葬が上ノ原横穴墓群におけるⅠ・Ⅱ期、最終埋葬がⅢ期の古い段階、すなわち5世紀後半～末から6世紀前半（第一四半期）に及ぶというものであり、人骨出土状態と前庭部土層の観察所見を支持するものである。したがって、これらの事実に基づいて、世代構成の復元を行う。

まず、1号人骨→2号人骨→3号人骨→4号人骨の順に埋葬されたとすると、1号人骨は主として下肢が大きく乱されていることから、これと差し違えに葬られた2号人骨の追葬にあたって片付けられたものと判断される。したがって、1号－2号人骨間には1号人骨の軟部組織が腐朽するまでの時間を見込む必要がある。つぎに、3号～4号人骨間は、2号・3号人骨ともに片付けられていることから、2号・3号人骨の軟部組織の腐朽に要する時間を考慮すると、相当の時間を見込む必要がある。また、前庭部の土層所見で認められた短い埋葬間隔は、人骨の片付けの状況からみて、1号－2号人骨間や3号－4号人骨間ではなく、2号－3号人骨間に相当すると

みるべきであろう。

さて、11号横穴墓のおおよその年代は、初葬が5世紀後半から末にかけて、最終埋葬が6世紀の前半であった。したがって、30～40年を前後する時間幅の中で埋葬が行われたと考えられる。そこで、上記の情報に基づき、まず、1号人骨が2号人骨の追葬時に片付けられていることから、1号－2号人骨間を10年程、2号－3号人骨間を5年程度、3号－4号人骨間を10年程度と、各々の埋葬間隔を短めに考えて、1号人骨死亡時における4体の世代構成を復元してみる。そうすると、2号人骨は、成年～熟年と推定されていることから、1号人骨死亡時の年齢は成年の幅の中に収まるものと思われる。しかし、2号人骨の年齢は、下顎第二小臼歯の咬耗度がBrocaの1度で咬耗がエナメル質全体に及んでいることから、通常は成年の後半と推定されるものの、1本のみであることを考慮して、熟年まで幅をもたせたものである。したがって、可能性としては成年後半が最も強いといえよう。そうすると、2号人骨の1号人骨死亡時における年齢は成年の前半であったことになる。3号人骨も(10+5)年を逆算すると、1号人骨死亡時には成年前半であったと推定される。しかし、3号－4号人骨間は、人骨の片付けと風化土層の存在から、埋葬間隔は大きいと推定される。これを20年程と考えると、4号人骨は熟年と推定されていることから、(10+5+10)年を逆算すると成年の幅に収まることになる。

以上から得られる被葬者の生前における世代構成は、1号人骨(熟年男性)、2号人骨(20代?男性)、3号人骨(20代女性)、4号人骨(成年女性)というものであり、1号人骨を第一世代、他を第二世代とす二世世代構成である。また、この世代構成は、1号－2号人骨間と3号－4号人骨間を長めに取っても基本的には変わらない。さらに、埋葬順位が1号人骨→3号人骨→2号人骨→4号人骨の順であっても、3号－2号人骨間の間隔は短いと考えられるので、結果には影響しない。

21号横穴墓

人骨は4体が出土している。1号人骨(熟年男性)→3号人骨(20代前半の女性)→4号人骨(熟年女性)→2号人骨(20才前後の男性)の順に埋葬されていた。全体的に体部骨の保存が悪く、3号・4号人骨の下肢骨が二次的に動かされていることのみ観察された。しかし、3号人骨の右寛骨と大腿骨は関節に近い状態のまま動かされており、4体とも頭は動いていない。すなわち、遺体の軟部組織の腐朽はかなり進行してはいたものの、完了した状態ではなかったものと考えられる。したがって、各々の埋葬間隔はそれほど大きいものではなかったと思われる。

前庭部土層の観察所見は、3回の追葬の跡が認められ、かつ埋土は風化していないというものであった。したがって、それぞれの埋葬間隔が、埋土が風化するほど長くなかったことを示している。そして、出土した土器からみて、初葬が上ノ原横穴墓群におけるⅠ期、最終埋葬がⅡ期、すなわち5世紀後半から末にかけての時期幅に収まるものである。

さて、これらに基づき世代構成の復元を行う。まず、人骨の出土状態から、1号－3号人骨間はともかくとして、3号－4号人骨間、4号－2号人骨間には人骨を二次的に移動できるほどの時間幅を見込む必要がある。ところが、前庭部土層の所見は、それらの間隔が、風化土層を形成するほどの長さではなかったことを示している。したがって、数年以上で10年(もしくはそれ以上)をこえない程度の埋葬間隔が考えられる。そこで、それぞれの間隔を5年程と短めに考え、1号人骨の死亡時の年齢構成を計算すると、1号人骨(熟年男性)→3号人骨(20才前後の女性)→4号人骨(成年女性)→2号人骨(5才前後の男性)となる。この場合、4号人骨の年齢が問題となろうが、年齢推定にあたっては、歯牙咬耗度がBrocaの1～2度で成年後半に相当するものの、大臼歯が脱落していることから熟年としたものである。したがって、熟年でも成年に近い年齢である可能性が強い。そうすると、この埋葬間隔では4号人骨は30代でも若い方ということになろう。また、埋葬間隔を長めに取って10年近くとすると、1号人骨(熟年)→3号人骨(10代)→4号人骨(10代)→2号人骨(10才前後)となる。しかし、これらを土器が示す年代からみると、前者の場合の15年程というのはやや短いように見え、後者の場合の30年はやや長いと感じられる。そこで、人骨の片付けを考慮して中間の7～8年ほどの間隔を考えると、1号人

骨（熟年）→3号人骨（10代後半）→4号人骨（20代）→2号人骨（-5才前後）となる。したがって、これら
のことから、1号人骨が第一世代、3号・4号人骨が第二世代、そして2号人骨が第三世代という三世代の構成
を考えるのが最も妥当であろう。⁽³⁾

25号横穴墓

人骨は3体が埋葬されており、1号人骨（40才前後の男性）→2号人骨（小児）→3号人骨（成年女性）の順
に埋葬されていた。人骨の片付けはなく、2号人骨の頭骨下に位置する1号人骨の右足根骨が関節状態を乱され
ていなかったことから、1号-2号人骨間の埋葬間隔が短かったことがうかがえる。

前庭部土層の観察所見は、2回の追葬の痕跡を認めるものの、追葬の際に上面を削平されているために、明瞭
な風化土層の存在は確認できていない。

出土土器は、初葬時が上ノ原におけるⅠ期、最終埋葬時にはⅡ期まで下るものが供献されていた。したがって、
10~20年ほどの時間幅に収まると考えられる。

さて、2号人骨は、歯式（ m^2 が残存し M^2M_2 が萌出）からみると11~12才程と推定される。また、3号人骨は、
歯牙咬耗度（Brocaの1~2度）と冠状・矢状縫合の閉鎖程度（内板・外板ともほぼ開離）からみると、成年で
も半ば程である可能性が強い。したがって、これらから、世代構成の復元を行うと、1号・2号は時間をへずし
て埋葬され、2号-3号人骨間には土器に示された間隔があったと考えられることから10数年を逆算すると、1
号人骨（40才前後）→2号人骨（10才前後）→3号人骨（10代後半）となり、二世代の構成が得られる。

27号横穴墓

人骨は3体が出土している。1号人骨（熟年男性）→2号人骨（成年男性）→3号人骨（成年女性）の順に埋
葬されていた。

このうち、1・2号人骨は礫床上に、3号人骨は床面上に直接葬られていた。そして、1号人骨は2号人骨追
葬の際に壁側へと押しやられており、遺存した全ての関節が外れていた。したがって、1号人骨と2号人骨の埋
葬の間には、1号人骨の軟部組織が腐朽するまでの時間を見込む必要がある。

前庭部土層の所見は、少なくとも1回の追葬の痕跡と風化土層が認められた。これは、初葬時あるいは1回目
の追葬時の埋土が風化して、最終埋葬時に切り込まれたものである。これをいずれの埋葬の埋土とするかが問題
となるが、初葬時のものとする、2号人骨埋葬時の埋土は3号人骨埋葬時に削り取られたことになる。また、
2号人骨追葬時のものとする、初葬時の埋土は2号人骨追葬時に削り取られたことになる。

副葬の土器は、2号人骨の足元にⅡ期からⅢ期（古段階）にかけての須恵器、3号人骨の大腿部にはⅢ期（古
段階）に属する土師器が副葬されており、前庭部の埋土中には初葬時のものと思われるⅡ期の土師器が認められ
た。したがって、本横穴墓における埋葬は5世紀末から6世紀前半にかけて行われたものである。

このように、人骨の状態からみて1号・2号人骨間には相当の時間幅が見込まれ、2号・3号人骨間では副葬
土器に時期差が認められた。また、前庭部の風化土層は、どの埋葬の埋土であるのか決め難いものの、1号-2
号人骨間、2号-3号人骨間とも相当の埋葬間隔が考えられるため、いずれの場合も可能性がある。人骨の年齢
については、歯牙咬耗度と頭蓋主縫合からみると、1号人骨は熟年のなかでも前半期（40代）、2号・3号人骨
は成年のなかでも後半期（30代）⁽⁴⁾と考えられる。

これらの情報をもとに世代構成の復元を行う。まず、1号・2号人骨は5世紀後末から6世紀初頭にかけての
時期幅の中で埋葬され、1号人骨の靱帯や軟骨が腐朽してから2号人骨が追葬されたと推定される。そこで、埋
葬間隔を10年~20年と考えると、2号人骨は10代~20代となり、親子ほどの年齢差があったことになる。2号-
3号人骨間は土器に示される年代観にしたがうと、10~20年の間隔が考えられる。そうすると、1号人骨死亡時
の3号人骨は、最も短い時間幅をとれば10+10を逆算して10代、最も長くとれば20+20で-10~0才ということ
になる。つまり、埋葬間隔を短くとれば2号・3号人骨は同世代で、長くとれば世代差があったことになるので

ある。したがって、27号横穴墓の被葬者は、1号人骨－2号・3号人骨という二世代と、1号人骨－2号人骨－3号人骨という三世代の二つの場合が考えられる。

30号横穴墓

人骨は4体が出土している。1号人骨（成年～熟年の男性）→2号人骨（若年）→3号人骨（成年女性）→4号人骨（熟年男性）の順に埋葬されていた。このうち、1号・2号人骨は片付けられており、3号人骨もその可能性がある。1号は、2号追葬時に壁側へと押しやられたものである。また、2号人骨は、4号人骨の追葬の際にやはり壁の方に押しやられたもので、一部1号人骨の上ののっている。4号人骨は、他の3体と異なり礫床に直に接しておらず、礫床上に1～2cmの厚さで堆積した土の上ののっていた。したがって、3号人骨埋葬後に土砂が流入もしくは降下した後で、4号人骨が葬られたことになる。

前庭部土層の所見は、少なくとも2回の追葬の痕跡が認められ、初葬時と追葬時の埋土に風化が認められた。

出土土器は、閉塞部近くから初葬時のものと思われるⅠ期の須恵器が検出され、追葬時の埋土からⅠ～Ⅱ期の須恵器が出土している。また、3号・4号人骨にはそれぞれ1個ずつ土師器が副葬されており、前庭部にも最終埋葬に伴う土師器が埋置されていた。これらは同一型式ではあるものの、最終の4号人骨に伴う土師器はⅢ期（古段階）にまで下ろうかというもので、3号人骨に副葬されたものはそれらよりやや古相を呈する。したがって、30号横穴墓における埋葬は、5世紀後半に始まり、6世紀前半には終了したものといえる。

さて、これらに基づいて被葬者の世代構成を復元する。まず、1号－2号人骨間は、1号人骨が壁側へと片付けられ風化土層が形成されているため、10年ほどの間隔を考えると、1号人骨（成年から熟年にかけて）と2号人骨（～10）という世代差が得られる。また、この程度の間隔は前庭部検出の土器が示す年代間とも矛盾しないものである。次に、2号人骨と4号人骨との間隔であるが、最終埋葬までに風化土層が形成され、また4号人骨に伴う土器が6世紀前半まで下るため、20～30年の間隔を考える必要があるだろう。そうすると、1号－2号人骨間の間隔とこの間隔とをあわせ、それを逆算して求められる1号人骨死亡時の4号人骨の年齢は、0～成年前半となり、1号人骨との間に世代差があったことになる。3号人骨については、2号人骨と4号人骨の間に葬られているものだが、前庭部に認められた風化土層がいつ形成されたかが問題となる。すなわち、2号－3号人骨間に形成された場合は2号人骨との間隔を長くする必要があり、3号－4号人骨間であった場合には逆に短くなるのである。しかし、後者の場合でも、3号人骨に伴う土師器と2号人骨に伴うとみられる前庭部出土須恵器にはやや時期差があることから、2号－3号人骨間はそれほど短い間隔ではありえない。そこで、2号－3号人骨間を長めに20年ほどと考えると、3号人骨の1号人骨死亡時の年齢は10～10才程となる。逆に、短めに10年程としてみると、0～20才程となる。3号人骨は、歯牙咬耗度から推定すると成年でも後半期の可能性が高いと考えられるので、前者の場合でも3号の年齢がマイナスになることはないと思われる。したがって、いずれの場合でも1号人骨との間に世代差が認められることになる。

以上から、30号横穴墓の被葬者は、1号人骨を第一世代とし、2号・3号・4号人骨を第二世代とする二世代の構成であったといえる。

63号横穴墓

人骨は3体が検出された。1号人骨（成年前半の男性）→2号人骨（10才前後の小児）→3号人骨（10才前後の小児）の順で埋葬されており、片付けは行われていない。

前庭部の土層所見は、弱い風化土層が1枚認められるというものである。また、出土土器はないが、横穴墓の構造からみて、Ⅱ期に属するものとみて大過ない。

これらから被葬者の生前の世代構成を復元する。前庭部の風化土層の存在から、埋葬間隔が開いたことが1度はあったことがうかがえるが、これが1号－2号人骨間か2号－3号人骨間かが問題となろう。これについては、2号・3号人骨が同時かあるいは時間的に近接して葬られたと考えられることから、1号－2号人骨間を考える

べきであろう。そうすると、風化土層の形成を10年ほどとすると、1号人骨（成年前半：20代）－2号人骨（0才前後）・3号人骨（0才前後）という二世代の構成が得られる。

4. 親族関係モデルの抽出

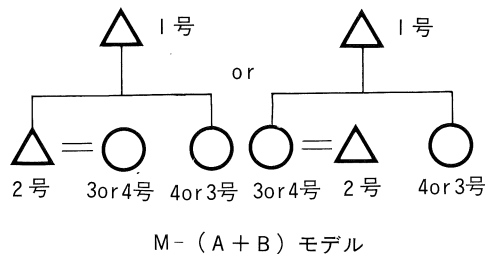
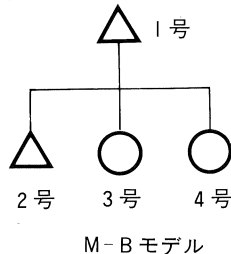
横穴墓の被葬者は、これまでほとんどの研究者が予想していたとおり、親族であったことが明らかにされつつある（田中他1985；池田1986等）。したがって、上ノ原横穴墓群においても親族が葬られたということが予想される。しかし、親族であったとしても、同世代の男女が夫婦か兄弟（姉妹）なのか、世代の継承は父系・母系のいずれによって行われているのか、などが問題となってくる。そこで、同世代男女をA（夫婦）、B（兄弟・姉妹）とし、単体の場合はM（男性）、F（女性）で表す。また、同世代が同性である場合にはCとする。そうすると、同世代において男女が混在する場合には、夫婦とそのキョウダイ⁽⁵⁾（A+B）か兄弟・姉妹（B）ということになるだろうが、前者の場合やや不自然である。したがって、仮に三世代にわたる夫婦が葬られていたとし、世代ごとにハイフン（-）でつなぐことにすると、A-A-Aと表記されるわけである。なお、父系か母系かという世代間の継承については後で検討したい。

さて、11号横穴墓における世代構成は、1号人骨（男性）を第一世代とし、2号人骨（男性）・3号人骨（女性）・4号人骨（女性）が第二世代であるというものであった。第一世代は男性一人なのでMで表されるが、第二世代はB（キョウダイ）かA+B（夫婦+キョウダイ）で表記される。したがって、11号横穴墓における被葬者の親族関係は、

$$M-B, M-(A+B)$$

のいずれかになろう（第510図）。

21号横穴墓は、1号人骨（男性）を第一世代とし、3号人骨（女性）・4号人骨（女性）が第二世代、2号人骨（男性）が第三世代という構成であった。これも第一世代は男性一人なのでMで表され、第二世代は女性二人なのでキョウダイ（B）と考えられる。また、第三世代は、男性のみなのでMで表記される。そうすると、21号横穴墓の被葬者における親族関係は、M-B-Mで表記される。（第511図）。



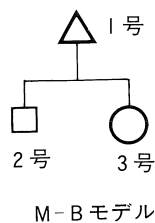
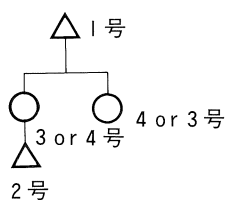
第510図 11号横穴墓被葬者の親族関係モデル

25号横穴墓は、3体の埋葬で、第一世代が1号人骨（男性）、第二世代が2号人骨（小児）・3号人骨（女性）という世代構成であった。2号人骨と3号人骨は、生前は同世代であったと考えられるものの、2号人骨が

小児期の終わり頃に死亡しているため、夫婦ではありえない。したがって、25号横穴墓の被葬者における親族関係は、

$$M-B$$

で表される（第512図）

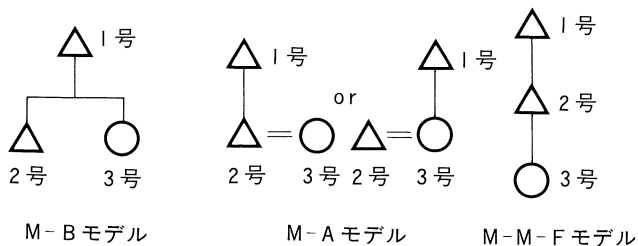


第511図 21号横穴墓被葬者の親族関係モデル

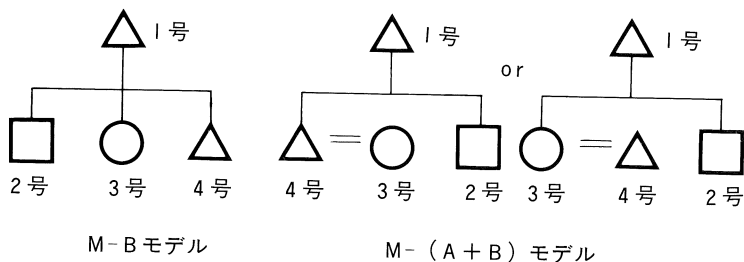
第512図 25号横穴墓被葬者の親族関係モデル

27号横穴墓は、3体の埋葬であるが、世代構成は二つの場合が考えられている。一つは、1号人骨（男性）が第一世代、2号人骨（男性）・3号人骨（女性）が第二世代という二世代モデル、もう一つは、一世代1体ずつの三世代モデルである。

まず、二世代モデルで考えると、第二世代に夫婦とキョウダイの二つの場合がありうるので、M-B、M-Aの二つが考えられる。



第513図 27号横穴墓被葬者の親族関係モデル



第515図 30号横穴墓被葬者の親族関係モデル

る。したがって、30号横穴墓における被葬者の親族関係は、

M-B、M-(A+B)

の二つの場合が考えられる(第515図)。

63号横穴墓には、3体が葬られていた。1号人骨(男性)が第一世代、2号人骨・3号人骨(ともに小児)が第二世代という二世構成であった。したがって、これら3体は、

M-B

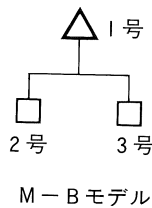
で表される(第514図)。

5. 検証

以上にモデル化した被葬者の親族関係を、歯冠計測値を用いた方法を中心にして、モデルの選択・検証を行う。歯の保存状態の関係で、必ずしも血縁者推定に有効な組合せが十分に得られたとはいえないが、計算結果を第228~232表に示す。

まず、11号横穴墓は、歯の保存が不良であったため、歯冠計測値を用いた分析はできなかった。しかし、頭蓋非計測的小変異である前頭縫合が4体全てに、上矢状洞溝左傾が、観察可能であった1号・2号・4号人骨の3体に認められた。頭蓋非計測的小変異は遺伝性が高いことが知られており(Sjϕvold 1984)、このうち前頭縫合は、西日本出土古墳人(九大解二 1988 以下同様)では6.2%(男女)、北部九州・山口地方弥生人(九大解二1988)では8.9%(男女)と低頻度であることからみても、これら4体が血縁者であった可能性は高いといえよう。そうすると、二つのモデルのうち、M-(A+B)すなわち第二世代が夫婦+キョウダイというモデルは成立しがたい。それに対して、M-B(父とその子たち)においては、父と子、キョウダイの関係がそれぞれ検証されたことになることから、このモデルが選択される。

21号横穴墓においては第228表の組合せで分析が可能であった。この分析法では、便宜的に有効な組合せで0.500以上の値が得られたペアが血縁者であったろうと推定しているが(土肥他1986)⁶⁾、1号-2号人骨間、2号-3号人骨間において、複数の組合せで0.500以上の値が得られた。また、1号-3号人骨間においてもI₁I₂CP₁P₂M₁M₂の組合せのみではあるが、高い値が得られている。これらを視覚的に表現するために、4体一緒に分析が可能であったI₁I₂CP₁P₂M₁M₂の組合せで、西日本出土古墳人とともにクラスター分析(群平均法)を行っ



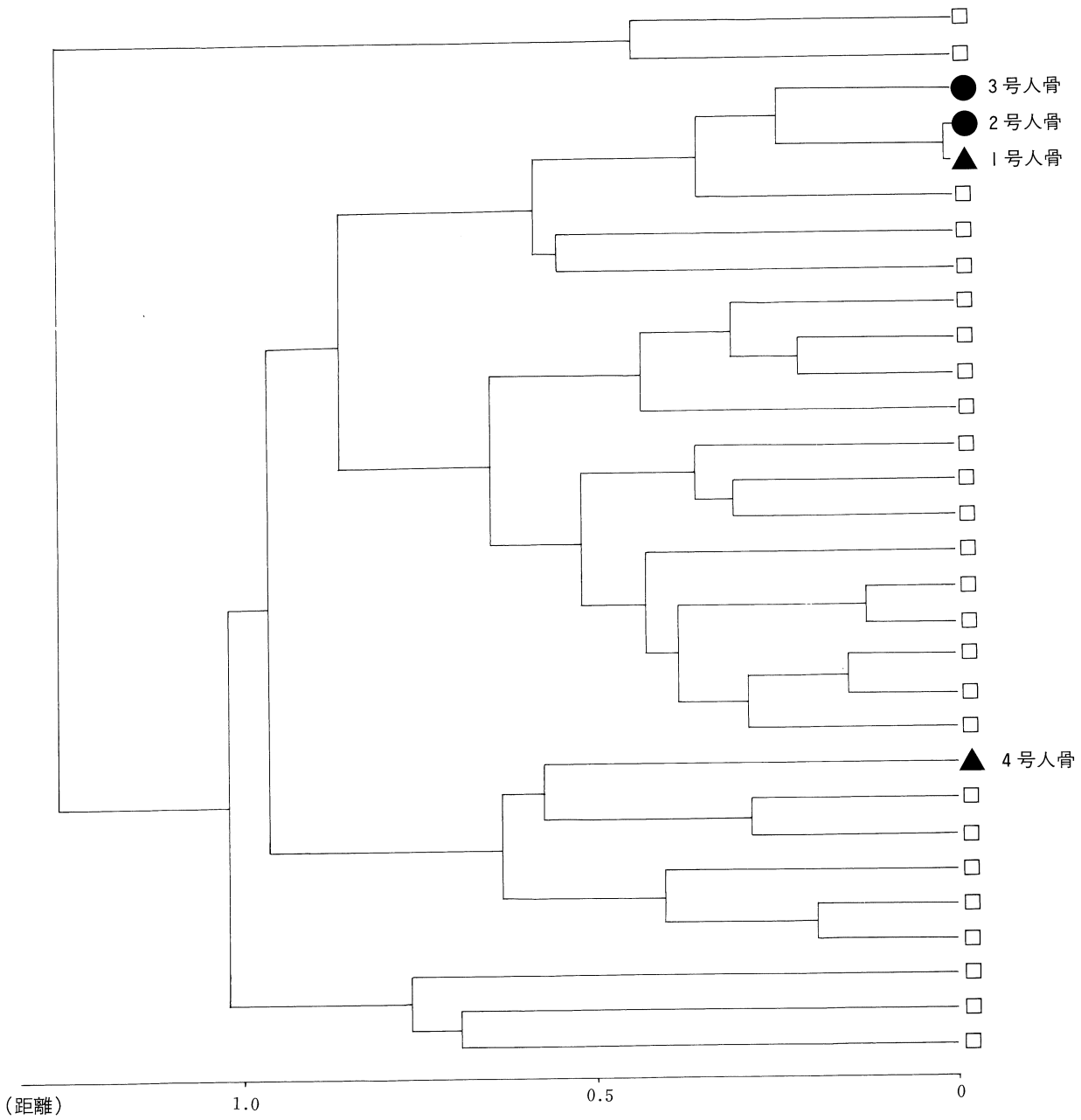
第514図 63号横穴墓被葬者の親族関係モデル

また、三世モデルでは、M-M-Fというモデルになる。したがって、27号横穴墓被葬者の親族関係は、M-B、M-A、M-M-Fの三つの場合が考えられる(第513図)。

30号横穴墓は、4体が出土しており、1号人骨(男性)が第一世代、2号人骨(若年)・3号人骨(女性)・4号人骨(男性)が第二世代という二世構成である。このうち、第二世代は、2号人骨が若年で性別もわからないものの、3号人骨・4号人骨いずれとも夫婦にはならないものと考えられ

第228表 21号横穴墓被葬者のQ-相関係数

組み合わせ	ペア	21-1	21-1	21-1	21-2	21-2	21-3
		21-2	21-3	21-4	21-3	21-4	21-4
$I^2 C P^1 P^2 M^1 M^2$		0.539	-0.020	—	0.572	—	—
$P^1 P^2 M^1 M^2$		0.426	-0.017	—	0.638	—	—
$I^2 C P^1 P^2 M^1 M^2 I_1 I_2 C P_1 P_2 M_1 M_2$		0.734	0.327	—	0.594	—	—
$P^1 P^2 M^1 P_1 P_2 M_1$		0.937	0.216	—	0.294	—	—
$C P^1 P^2 M^1 M^2 C P_1 P_2 M_1 M_2$		0.647	0.060	—	0.465	—	—
$I_1 I_2 C P_1 P_2 M_1 M_2$		0.973	0.678	-0.121	0.798	-0.065	-0.135
$I^2 C P^1 P^2 M^2 I_1 I_2 C P_1 P_2 M_1 M_2$		0.698	0.308	-0.107	0.620	-0.206	-0.195



第516図 21号横穴墓被葬者のQ-相関係数に基づくクラスター分析

第229表 25号横穴墓被葬者のQ-相関係数

組み合わせ	ペア		
	25-1 25-2	25-1 25-3	25-2 25-3
P ¹ P ² M ¹	0.232	0.524	0.317
P ¹ P ² M ¹ M ²	0.140	0.437	-0.054
I ₁ I ₂ C P ₁ P ₂ M ₁ M ₂	0.683	—	—
P ¹ P ² M ¹ M ² I ₁ I ₂ C P ₁ P ₂ M ₁ M ₂	0.484	—	—

第230表 27号横穴墓被葬者のQ-相関係数

組み合わせ	ペア		
	27-1 27-2	27-1 27-3	27-2 27-3
C P ¹ P ² M ¹ M ²	—	—	0.549
P ¹ P ² M ¹ M ²	—	—	0.809
P ¹ P ² M ¹	—	—	0.737
M ² C P ₁ P ₂ M ₁	0.535	0.300	0.003
M ² P ₁ P ₂ M ₁	0.539	0.344	0.007

第231表 30号横穴墓被葬者のQ-相関係数

組み合わせ	ペア		
	30-2 30-3	30-2 30-4	30-3 30-4
P ¹ P ² M ¹	0.789	—	—
C P ¹ P ² M ²	0.590	—	—
P ¹ P ² C P ₂ M ₁ M ₂	0.390	0.406	0.531
P ¹ P ² C P ₂ M ₁	0.567	0.426	0.578

第232表 63号横穴墓被葬者のQ-相関係数

組み合わせ	ペア		
	63-1 63-2	63-1 63-3	63-2 63-3
P ¹ P ² M ¹	—	-0.098	—
C P ¹ P ² M ¹ M ²	—	-0.334	—
P ¹ P ² M ¹ P ₁ P ₂ M ₁	—	0.094	—
C P ² M ¹ M ² M ₁ M ₂	-0.091	-0.279	0.773
M ¹ M ² M ₁ M ₂	-0.379	-0.176	0.866

的小変異の翼上骨が1号・2号人骨に、ラムダ小骨が2号・3号人骨に認められた。

30号横穴墓は、1号人骨が分析不能であり、4号人骨もほとんどの組合せにおいて不能であった。しかし、2号-3号人骨間では複数の組合せにおいて、0.500以上の値が得られた。また、4号人骨の分析が可能であった組合せ (P¹P²CP₁M₂) において、3号-4号間で0.578という値が得られた (第231表)。また、上矢状洞溝左傾が1号・4号人骨に認められた。したがって、モデルのうち、第二世代が夫婦といずれかのキョウダイであるとすると、M-(A+B)は棄却され、M-B (父とその子達) における第二世代のキョウダイ間の関係が検証されたことになる。

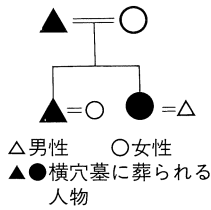
63号横穴墓は、2号人骨の歯の保存がやや不良であったが、分析可能であった組合せでは2号-3号人骨間で高い値が得られた (第232表)。したがって、この結果はモデルM-B (父とその子達) における第二世代のキョウダイの関係を検証したことになる。

たのが第516図であるが、2号人骨と3号人骨は同一クラスターに入っている。

このように、1号人骨と2号人骨、2号人骨と3号人骨は血縁関係にあるらしいという結果が得られた。これは、モデルに照らしてみると、第一世代男性と第三世代男性、第二世代の2体の女性の一人と第三世代の男性が血縁者であろうということであり、モデルM-B-M (父-娘二人-二人の娘のうちいずれかの男子) を支持するものである。なお、頭蓋非計測的小変異は、外耳道骨腫が4体全てにみられた。

25号横穴墓では、第229表に示したように、1号-2号人骨、1号-3号人骨の間で高得点が得られた。これはモデルにおける父と子にあたるもので、モデルM-Bを支持する結果といえる。なお、頭蓋非計測的小変異は、3号人骨では観察不能であったものの、1号・2号人骨にインカ骨が認められた。

27号横穴墓は、1号人骨の歯が保存不良であったが、2号人骨と3号人骨の間で高得点が得られた。また、1号-2号人骨間においても、M¹CP₁P₂M₁の組合せで0.535の値が得られており、血縁者であった可能性を示している (第230表)。この結果は、二世モデルにおけるM-A (第二世代が夫婦) を棄却させるものである。これに対して、モデルM-Bにおける父とその子達、第二世代のキョウダイの関係、モデルM-M-Fにおける父と男子、男子と孫娘の関係がそれぞれ検証されたことになる。したがって、27号横穴墓においては、M-B、M-M-Fの二つのモデルが選択された。なお、頭蓋非計測



6. 考察

前節で選択・検証されたモデルをあげると

M-B (11号横穴墓、25号横穴墓、二世代の場合の27号横穴墓、30号横穴墓、

63号横穴墓)

M-B-M (21号横穴墓)

M-M-F (三世代の場合の27号横穴墓)

第517図 上ノ原11号横穴墓群の埋葬の基本モデル

となり、M-Bが最も多いことが判る。そして、これらの共通点をあげると、第一世代は成人男性のみであること、それに対して、第二世代以降は男女・若年・小児と変異に富むことである。このような相違は、第一世代と第二世代の被葬者の性格が異なることを示すと考えられる。

第一世代被葬者に関していえば、各横穴墓とも成人男性の死を契機として築造されている点が注目される。上記の事例だけでなく、この分析に使用しなかった他の横穴墓のうち、埋葬順位が明らかとなっている19号・35号・64号横穴墓においても初葬者は男性である。また、被葬者を一人だけに絞り込んだ単体埋葬例(5号・48号・50号・52号横穴墓)においても、被葬者は男性に限られる。したがって、このようなあり方は、強い男性優位の社会を反映したものであり、初葬の男性は家長であったと考えられるのである。

第二世代被葬者は、歯冠計測値を用いた分析から、同世代の男女も夫婦とは考えがたく、キョウダイであったと考えられる。ただ、これについては、イトコ婚であった可能性も考慮する必要がある。また、異母キョウダイによる近親婚を主張する研究者も存在する(辻村1988)。近親婚については大王家とその周辺だけでなく、横穴墓被葬者クラスまで広く行われていたかどうかを検討したうえで、その可能性を考慮すべきであろう。しかし、それ以前に、初葬者である家長の妻が埋葬されていないこと、第二世代にあっても男女のペアのみではないこと。63号横穴墓のように第二世代が小児のみで構成される例もあることなどを考え合わせると、第二世代における埋葬が夫婦を単位とするとは考えるには無理がある。やはり、追葬され、互いに血縁関係にあると考えられる被葬者達は、キョウダイであったとすべきであろう。したがって、上ノ原における埋葬の基本原理は、父子関係、すなわち、父系の血縁原理であったと考えられる。第一世代、第二世代とも被葬者の配偶者は葬られていない。しかも、追葬された女性で確認が可能であった25号横穴墓3号人骨および27号横穴墓3号人骨の寛骨に前耳状溝が認められた。これは、経産婦である可能性を示すものであることから、結婚・出産を経ているにもかかわらず死後は父の墓に追葬される娘があったことがうかがえるのである。

さて、以上の基本原理をモデル化するとどうなるであろうか。これまで得られた個別横穴墓のモデルでは、M-B(父とその子達)が最も多く、例外は2例にすぎない。したがって、図に示すと第517図のようになる。この図では、実際の家族集団の中から墓に葬られる人物を黒く塗りつぶし、同じ墓には葬られなかった人物を白抜きのままにしてある。墓に葬られるのは父とその子、すなわち父系の血縁者のみであることがここに示されている。ところが、これを累代的にモデル化しようとするとう問題がでてくるのである。つまり、これには次の世代の家長が含まれているのか、という問題である。上記のように、第一世代と第二世代では被葬者の構成に相違がみられ、後者には必ずしも男性が含まれているわけではない。しかし、第一世代と第二世代の相違は構成のみではない。副葬品をみても、11号横穴墓では、初葬の1号人骨(男性)には鉄剣・鉄鏃・刀子が副葬されるのに対して、第二世代では3号人骨(女性)に刀子が副葬されるのみである。21号横穴墓では、副葬品は初葬1号人骨(男性)の直刀・鉄鏃のみ、25号横穴墓においては、第一世代の1号人骨(男性)に鉄剣・直刀、第二世代の2号人骨(小児)に鉄鏃、3号人骨(女性)には鉄斧がそれぞれ副葬されていた。27号横穴墓では、初葬の1号人骨(男性)には副葬品がなく、第二世代の2号人骨(男性)に鉄鏃・刀子、同世代もしくは第三世代の3号人骨(女性)には玉類・土師器が副葬されていた。30号横穴墓においては、第一世代の1号人骨(男性)に鉄剣・鉄鏃、第二世代の2号人骨(若年)に刀子、3号人骨(女性)に土師器、4号人骨(男性)には鉄鏃・刀子・土師器がそれぞれ副葬されていた。63号横穴墓では、副葬品は初葬者の1号人骨(男性)への鉄鏃のみであった。また、この分析には使用しなかった64号横穴墓でも、初葬の1号人骨(男性)のみが鉄鏃・刀子を副葬されていた。

た。

このように、第一世代と第二世代の被葬者では副葬品に格差が認められ、とりわけ鉄製武器において顕著である。すなわち、刀・剣をもつのは初葬者のみであり、そのような横穴墓では鉄鏃は第二世代の男性でも副葬される。また、刀・剣を副葬していない横穴墓では鉄鏃がこれに代わる。このようなあり方は造墓主体である家族集団の格差を示していると思われるが、27号横穴墓では初葬者が副葬品を持っておらず、2号人骨には鉄鏃等が副葬されていた。しかし、この場合でも、この横穴墓の被葬者から考えられた二世と三世の二つのモデルのうち、三世モデルを選択して、二世の男性までを家長とすれば矛盾はなくなる。

以上のように、二世モデルにおいては第一世代と二世では副葬品に格差が認められた。したがって、第一世代の成人男性を家長とすれば、次世代の家長は同じ墓には葬られていなかったということになる。上ノ原横穴墓群においては、初期横穴墓に隣接してより新しい時期の横穴墓が築造されており、一つの単位をなしているかにみえる。これは、時期的にみても次世代の家長の死を契機として、作られた可能性があるものである。しかし、その可能性を確かなものにするためには、時期的に連続する横穴墓の被葬者が代的に連続することを明らかにする必要がある。したがって、以下に、隣接する横穴墓における被葬者の代的連続を検討してみる。

まず、63・64・65号横穴墓の事例を検討する。これは、3基の横穴墓が隣接するもので、64号→63号→65号の間に築造されている。すなわち、64号横穴墓は、初葬がⅠ期で追葬はⅢ期（古段階）に及び、63号横穴墓は築造がⅢ期（古段階）、65号横穴墓はⅣ期（新段階）に作られている。このうち、63号横穴墓についてはすでに記し、65号には人骨が残っていなかった。これらの時期幅だけを見ると、64号と63号が比較的近接した時期に築造されており、65号の築造までに相当の時間がたっていて、家長の代的連続では説明できないように思えるだろう。しかし、64号横穴墓は、歯の保存が不良であったため上記の分析には使用しなかったものの、人骨は遺存していた。そこで、この64号横穴墓の被葬者について検討したい。

さて、64号横穴墓からは人骨4体が検出された。1号人骨（熟年後半期の男性）→2号人骨（20才前後の女性？）→3号人骨（熟年女性）→4号人骨（成人女性）の順で埋葬されていた。4号人骨以外は全て二次的に動かされており、1号人骨は、2号人骨追葬の際に壁側へと片付けられている。2号人骨も3号人骨追葬の際に片付けられ、3号人骨は4号人骨追葬時に片付けられている。したがって、各々の埋葬は、先行して葬られた遺体の靱帯・軟骨等の軟部組織が腐朽するほどの時間が経過してから行われたものである。

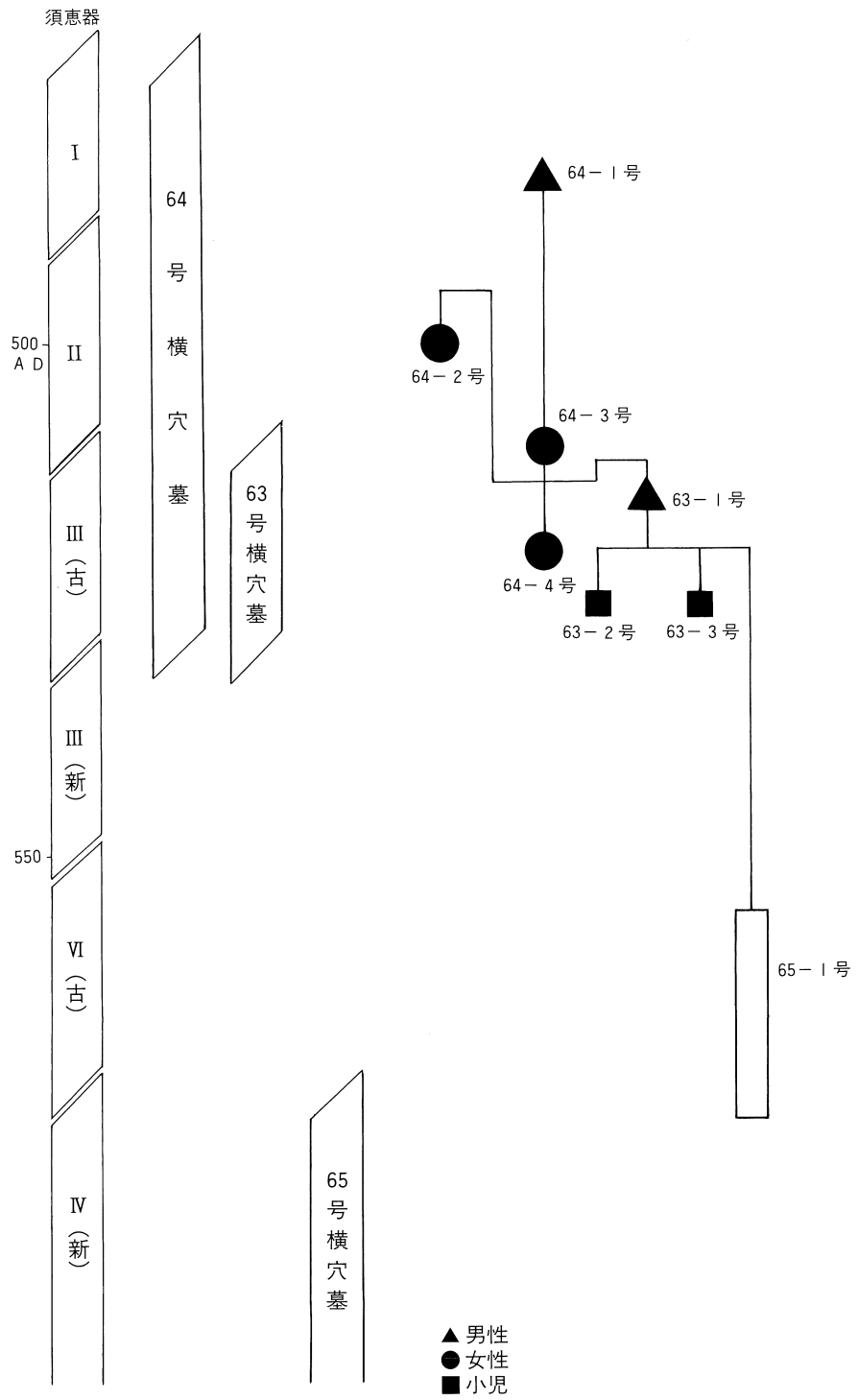
前庭部土層の所見は、3回の追葬の痕跡が認められ、初葬と2回の追葬の際の埋土に弱い風化が認められた。したがって、それぞれの埋葬間隔は短いものではなく、相応の時間幅を見込む必要がある。

出土土器は、テラスから初葬時のものと考えられるⅠ期の須恵器が、前庭部からは追葬に伴うⅡ期からⅢ期（古段階）の土師器が検出されている。したがって、この横穴墓の埋葬は5世紀後半から6世紀前半まで行われたもので、約30年から50年ほどの時間幅に収まるものである。

以上から、被葬者の世代構成を復元する。まず、いくつかの場合を想定する必要がある。それは、埋葬間隔がほぼ等しい場合と、1号人骨と2号・3号人骨の片付けられ方が異なることから、1号-2号人骨間よりも、2号-3号人骨間、3号-4号人骨間の埋葬間隔の方が長かったと考える場合である。

そこで、まず、時間幅がほぼ均等であったとしてこれを10年とすると、埋葬間隔を逆算して得られる1号人骨死亡時の世代構成は、1号人骨（50代）、2号人骨（10才前後）、3号人骨（成年：20代～30代）、4号人骨（10～30才）となる。また、間隔を長めに15年とすると、1号人骨（50代）、2号人骨（5才前後）、3号人骨（10代～20代）、4号人骨（-25～15才）となる。これらは、1号人骨を第一世代とし、3号人骨を第二世代、2号人骨を第三世代とするもので、4号人骨は第二世代・第三世代双方の可能性があるというものである。ただし、4号人骨は、調査時には大臼歯が数本検出されており、この所見からみると、成人でも老年やそれに近い熟年ではない可能性が高い。したがって、4号人骨も第三世代に属する可能性が高いと考えられる。

つぎに、2号-3号人骨間、3号-4号人骨間の時間幅がより長かった場合として、それぞれ10年、20年、20年の間隔を考えてみる。そうすると、1号人骨（50代）、2号人骨（10才前後）、3号人骨（10代～20代）、4号



第518図 63・64・65号横穴墓被葬者の家系的連続

第233表 64-3号人骨と63号横穴墓被葬者のQ-相関係数

組み合わせ	ペア		
	64-3 63-1	64-3 63-2	64-3 63-2
P ¹ P ² M ¹	0.282	—	0.796
C P ¹ P ² M ¹ M ²	0.056	—	0.695
I ² C P ¹ P ² M ¹ M ²	0.020	—	0.671

人骨（-30～10才）となり、2号人骨が第二世代になるものの、やはり上記の世代構成と同じ三世代が得られる。

このように、64号横穴墓においては三世代が埋葬されていたと考えられる。そこで、63号横穴墓との関係を検討したいが、この場合64-2号人骨（64号横穴墓

2号人骨、以下同様）が第二世代に属するのか第三世代なのかが問題となる。しかし、64-1号人骨（50代）との年齢差を考えると、64-2号人骨の10才前後あるいは5才前後という年齢は親子とするには離れすぎており、やはり64-2号は第三世代に属するとすべきであろう。そうすると、64-2号人骨が20才前後で死亡していることから、同人骨死亡時の64-3号人骨の年齢は40代に達していたと考えられる。また、64-1号人骨は50代で死亡しているので、この人骨が死亡したときの64-3号人骨の年齢は、1号が20代から30代にかけての子とすると、おおむね20～30才となろう。そこで、64-1・2号間の間隔を10年とすると、64-2号人骨死亡時の64-3号の年齢は30～40才になり不都合となる。したがって、それ以上の間隔を見込む必要があるわけである。ところが、20年の間隔をとると、64-2・3号人骨間にも一定の間隔（10年かそれ以上）を見込む必要があるため、仮にそれを10年としても、64-3号人骨の死亡年齢は、30年（20年+10年）を加算して50～60才となり、人骨推定年齢の上限ぎりぎりとなる。第518図には、埋葬間隔を15～10年として示したが、この場合での64-3号人骨の年齢は40代～50代程度となる。ここで、64-1号人骨の死亡時期をⅠ期でも後半（480～490年ほど）とすると、64-3号人骨の死亡時期は505～515年ほどとなり、Ⅱ期とⅢ期の過渡期あたりに相当すると思われる。そうすると、最終埋葬の4号人骨はⅢ期に相当し、64号横穴墓の使用時期にきれいに重なるわけである。さらに、63-1号人骨は20代で死亡し、Ⅲ期に葬られている。これが64-3号人骨の埋葬後、ほどなくして死亡したものとすると、年齢は親子の年齢差となる。すなわち、64-3号人骨の次世代（男子）は、隣接する63号横穴墓に葬られたのである。そして、64号横穴墓の第三世代である2号・4号人骨と63号-1号人骨は同世代であり、キョウダイであると考えられる。

次に、63号横穴墓と65号横穴墓の連続を考えると、65号の人骨が遺存していなかったためはっきりとはいえないものの、63-1号人骨が20代で死亡していることから、その子は63号横穴墓築造時には0才に近い幼児であったと思われる。そして、この人物が熟年で死亡したとすると、63号の40～60年後に65号横穴墓が築造されたことになるが、第518図に示したように、65号横穴墓が築造されたⅣ期（新段階）という年代観とも重なりをもってくるのである。つまり、この3基の横穴墓は、64号と63号が時期的に近く、63号と65号との間の時期幅が大きいということで、世代の連続とするには難があるかにみえたが、それは63号横穴墓に葬られた家長が若くして死亡したことと、おそらくは65号横穴墓の家長が長寿であったことによると考えられるのである。

63号横穴墓被葬者におけるモデル化と検証は既に記したが、64号横穴墓でも3号人骨1体のみは歯の保存が比較的良好であった。そこで、64-3号人骨と63号横穴墓被葬者とを分析してみた。その結果は第233表に示したように、63-3号人骨との間に高い値が得られた。この結果は、上記の家系の連続（第518図）における祖母と孫の関係が検証されたことになるだろう。

さて、次に同一横穴墓を長期間にわたって使用している35号横穴墓について検討する。この横穴墓には少なくとも7体が埋葬されていた。その順位は1号人骨（30代男性）→3号人骨（熟年男性）→4号人骨（小児）・成人男性→5号人骨（熟年男性）→6号人骨（成人男性）であり、2号人骨（熟年男性）は、1号人骨と5号人骨の間に埋葬されたと考えられる。成人が全て男性であるという点は父系の血縁者のみという埋葬原理をよく表したものである。出土土器は初葬に伴うⅠ期のものと最終埋葬のⅣ期（新段階）の土器が得られており、前庭部の土層所見は、4枚の風化土層が認められるというもので、いずれも長期間の使用を示している。そして、この横穴墓には4口の直刀が副葬されていた。すでに述べたように、上ノ原においては直刀は家長のシンボルといえるものである。そこで、上記のモデルに基づき、これを4代にわたる家長とその血縁者と考えて検討を加える。

直刀は、1号・3号・5号人骨に伴うことはほぼ間違いなく、もう1本は6号人骨に伴うと考えられている。しかし、最後の1本については、事実報告の項でもふれたように、5号人骨と6号人骨の間にもう1体の男性被葬者が存在した可能性がある。

直刀を持つ4体は、1号→3号→5号→6号の順で埋葬されていた。そして、5枚の風化土層も確認されており、一定の埋葬間隔を持つ追葬が4回は行われたことがうかがえる。そこで、1号人骨と3号人骨の間隔をみると、1号が30代、3号が熟年で死亡していることから、3号を40代とすると、1号死亡時には10才程度であったと思われるので、30数年の埋葬間隔が見込まれる。また、3号が50代であったとすると40数年の間隔となる。次に、3号人骨と5号人骨の埋葬間隔は、5号人骨が40才程度と考えられているので、3号が40代で死亡したとすると20年、50代でなら10年ほどの埋葬間隔となろう。さらに、5号人骨と6号人骨の間は、6号人骨の死亡年齢が明らかでないためはっきりとはいえないものの、40代で死亡したと仮定すると20年程度、60才程度とすると40年ほどの埋葬間隔となろう。

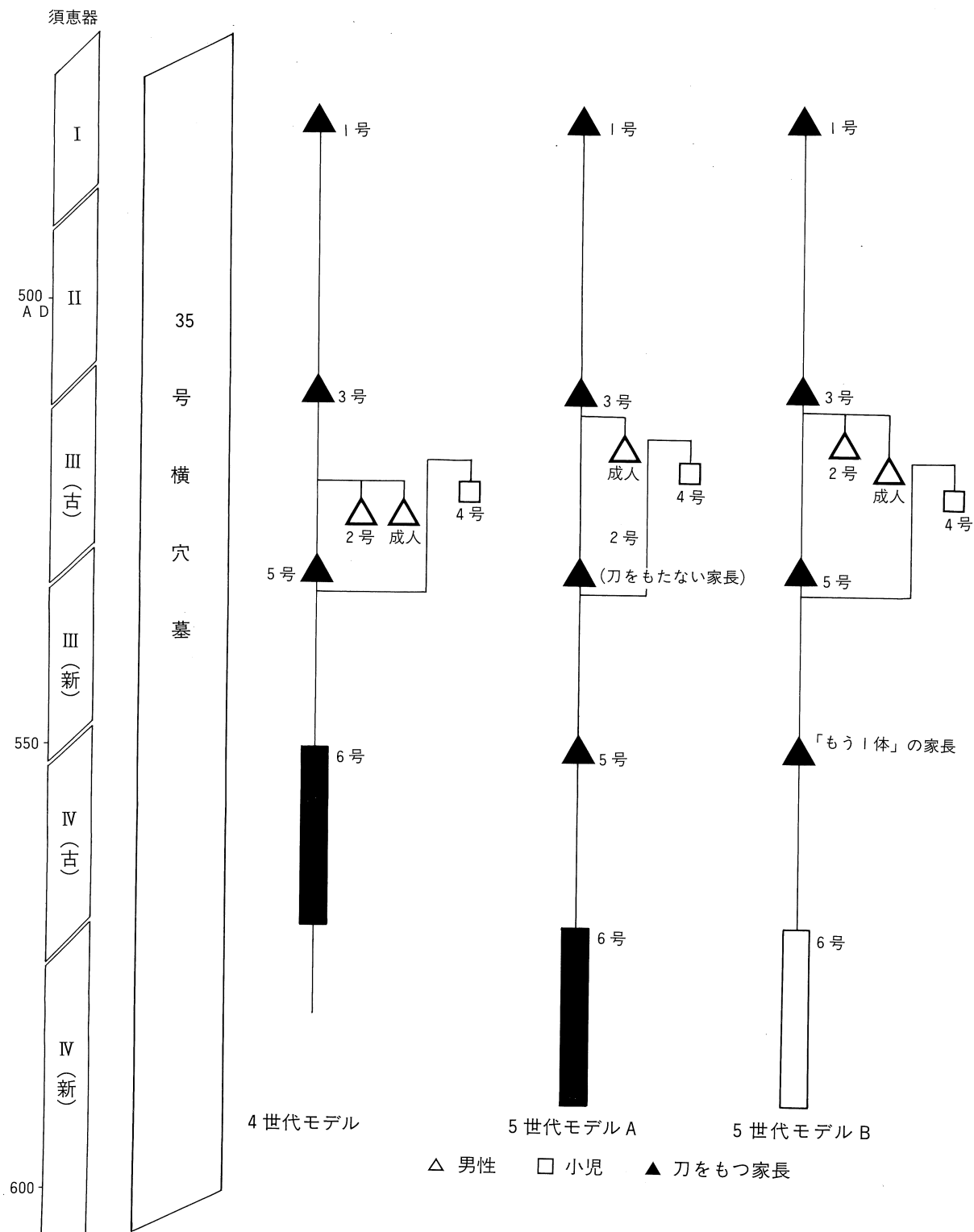
これらを風化土層と対応させると、10年以上の埋葬間隔は、1号・3号間、3号・5号間、5号・6号間に考えられた。しかし、土層所見はあと1回は一定程度の埋葬間隔があったというものである。そこで、2号人骨の埋葬を1号人骨と3号人骨の間に考えると、1号・2号間と2号・3号間にそれぞれ風化土層が形成されたとすることができる。ところが、2号人骨も熟年に達しているため、1号・2号間も30年ほどを見込む必要があり、それからさらに10年ほどとすると3号人骨の死亡年齢は熟年でも後半期（50代）に近いということになる。そうすると、3号人骨と5号人骨の間が10年ほどということになってしまい、この間に4号人骨と成人男性を葬ったとするには風化土層との関係で無理がある。

2号人骨の埋葬を、3号人骨と5号人骨の間に考えれば、3号と5号の埋葬間隔は上記のように20年ほどとなり、その間に2号・4号人骨と成人男性が葬られたとすると、まだ可能性があるといえる。ただし、この場合でも、3号人骨と5号人骨の間の20年ほどの時間の中で3体が埋葬され、かつ2枚の風化土層が形成されなければならなくなり、やや苦しい説明といえる。

風化土層と人骨の状況を矛盾なく説明できる解釈の一つは、3号人骨と5号人骨の間に直刀を持たない家長を考えることである。つまり、2号人骨が成人男性を家長とし、それと3号人骨及び5号人骨との埋葬間隔が一定程度あったとすると風化土層との矛盾はなくなる。この場合成人男性（家長が成人男性の場合は2号人骨）と4号人骨は、3号人骨および直刀を持たない家長との年齢差の関係から、3号人骨の埋葬時期に比較的近いことになろう。ただ、この想定も、副葬品、横穴墓の規模とも上ノ原では群を抜くこの横穴墓で、直刀を持たない家長の存在は考えにくい、という難点がある。

もう一つの解釈は、事実報告の項でも指摘した5号人骨と6号人骨の間にもう1体の被葬者を考えることである。6号人骨に伴うとされた4本目の直刀は、鏝金具との位置関係から原位置をほぼ保っているといえるが、6号人骨との関係でいえば、大腿骨と交差するような方向にあり、6号は最終埋葬で原位置を動いていないと考えられるため、やや不都合な観がある。また、直刀の刃部が6号人骨の体の方に向いているのも、この横穴墓では全て外に向いており、上ノ原全体でも外向きが多いこと、6号人骨の右隣に所属不明で直刀に平行する四肢骨片が認められたことなどから、もう1体埋葬されていたのではないかという可能性が指摘されるのである。この「もう1体」が存在したとすると、その埋葬に際して5号人骨を片付けたと考えられ、かつ6号人骨よりも羨門に遠いことから6号よりも前の埋葬と考えられよう。そうすると、5号人骨と「もう1体」、「もう1体」と6号人骨の間にそれぞれ一定程度的間隔を見込めば、風化土層の数と対応することになるのである。

いずれの場合にせよ、5世代にわたる構成となるが、前者を5世代モデルA、後者を5世代モデルBとし、風化土層との関係からやや苦しい説明としたものを4世代モデルとする。そして、各モデルごとに35号横穴墓の使用の時間幅を検討してみる。まず、4世代モデルでは、1号人骨と3号人骨の間が30年程度、3号人骨と5号人骨の間が20年ほど、6号人骨が40代で死亡したとすると5号・6号間は20年ほどと考えられるので、初葬から最終埋葬まで合わせて70年ほどということになる。5世代モデルAでは、6号人骨を40代とすると、30年－20年－



第519図 35号横穴墓被葬者の世代構成

20年-20年で90年、5世代モデルBでも、「もう1体」と6号人骨を40代とすると、30年-20年-20年-20年で90年となる。この横穴墓の初葬はI期、最終埋葬はIV期（新段階）であることから、4世代モデルではやや短く、5世代モデルが合致する。ただ、4世代モデルでも、6号人骨が老年に達していれば80年以上となり、不都合ではなくなる（第519図）。

このように、長期間同一横穴墓を使用した35号横穴墓でも、家長とその血縁者が葬られたとするモデルで世代の連続を考えていくと、横穴墓の使用時期幅と合致してくるのである。それでは、墓道の重複や切合関係によって考古学的にくくられるまとまりとの関係はどうであろうか。以下、人骨出土の初期横穴墓が連続する20号-30号横穴墓について検討したい。

これらは考古学的に大きく3群に分けることができる。すなわち、22号・24号横穴墓は墓道が23号横穴墓に向かっており、さらに24号は25号とテラスの切合関係をもつことから、これらを1群としてくくることができる。また、26号・28号横穴墓は27号横穴墓のテラスと切合関係があり、28号と29号は墓道が重複することから、これらをひとくくりにできる。また、30号横穴墓は29号などと、20号と21号も隣接する。

さて、第520図は各横穴墓の時期幅を示し、人骨が遺存していたものは、家長の死亡時期について考えられる時期幅を黒く塗りつぶしてある。21号横穴墓は、時期幅の半ばに家長が示してあるが、これは三世代で構成される横穴墓であり、次の家長との連続を示すために第一世代の家長を省いてある。また、27号横穴墓は、二世代の家長が葬られた可能性が高く、前後に連続する横穴墓があるために、第一世代、第二世代とも示してある。そして、灰色で示したのは、各群で最初の横穴墓に葬られた家長が20代で子をなし、その子が上ノ原で最も多い死亡年齢である40代で死亡したと仮定して、その時期幅を示し、代を重ねたものである。ただ、27号横穴墓については、人骨が残っていて二世代にわたる家長の推定死亡年齢が判っていることから、30号横穴墓家長の年齢から求めたそれぞれの死亡推定年齢（熟年、成年）の時期幅を示している。そこで、各横穴墓をみると、灰色で示した時期幅が各横穴墓の築造年代とほぼ重なることが判る。24号のように、きれいに重複しない場合でも、初葬者の死亡年齢を40代ではなく30代や50代としても若干の重なりをみせるのみである。しかし、この横穴墓は、削平がひどく初葬時の遺物がはっきりしないことと、少数ではあるがIII期（新段階）まで上る須恵器もあるので、もう少し築造年代が上る可能性がある。しかし、そうではなくとも、この横穴墓の家長がさらに長寿であったのかもしれない。というのも、同じ群にほぼ同じ築造時期の26号横穴墓が存在するが、29号横穴墓の家長が長寿であれば、その死亡時には26号の家長も相当の年齢に達していたことになり、両者の築造年代が近接していても不思議はないからである。

また、これらの横穴墓のうち、27号・30号の二つの横穴墓には人骨が遺存しており、双方の被葬者の歯冠計測値を用いた分析が可能であった。第234表はその結果を示したもののだが、27-2号と30-2号、27-2号と30-3号、27-3号と30-3号との間において血縁者と推定される高得点が得られている。これらは、上記の横穴墓の連続でいえば、27-2・3号からみて叔父・叔母・大叔父・大叔母にあたるものであり、先に示した63・64号横穴墓の事例と同様、隣接する横穴墓の連続が家系的連続の所産であることの一端を示している。そして、これら家系的連続を示す横穴墓の単位は数メートル間隔で並んでいる。また、5世紀後半から6世紀後半までの埋葬を1基のみで行った、35号横穴墓の両脇には一定の空地が存在する。これらの事実は横穴墓群築造開始の時点で、すでに造墓主体（家族集団）ごとに地割（墓城の分割・配分）が行われていたことを示している。さらに、各小

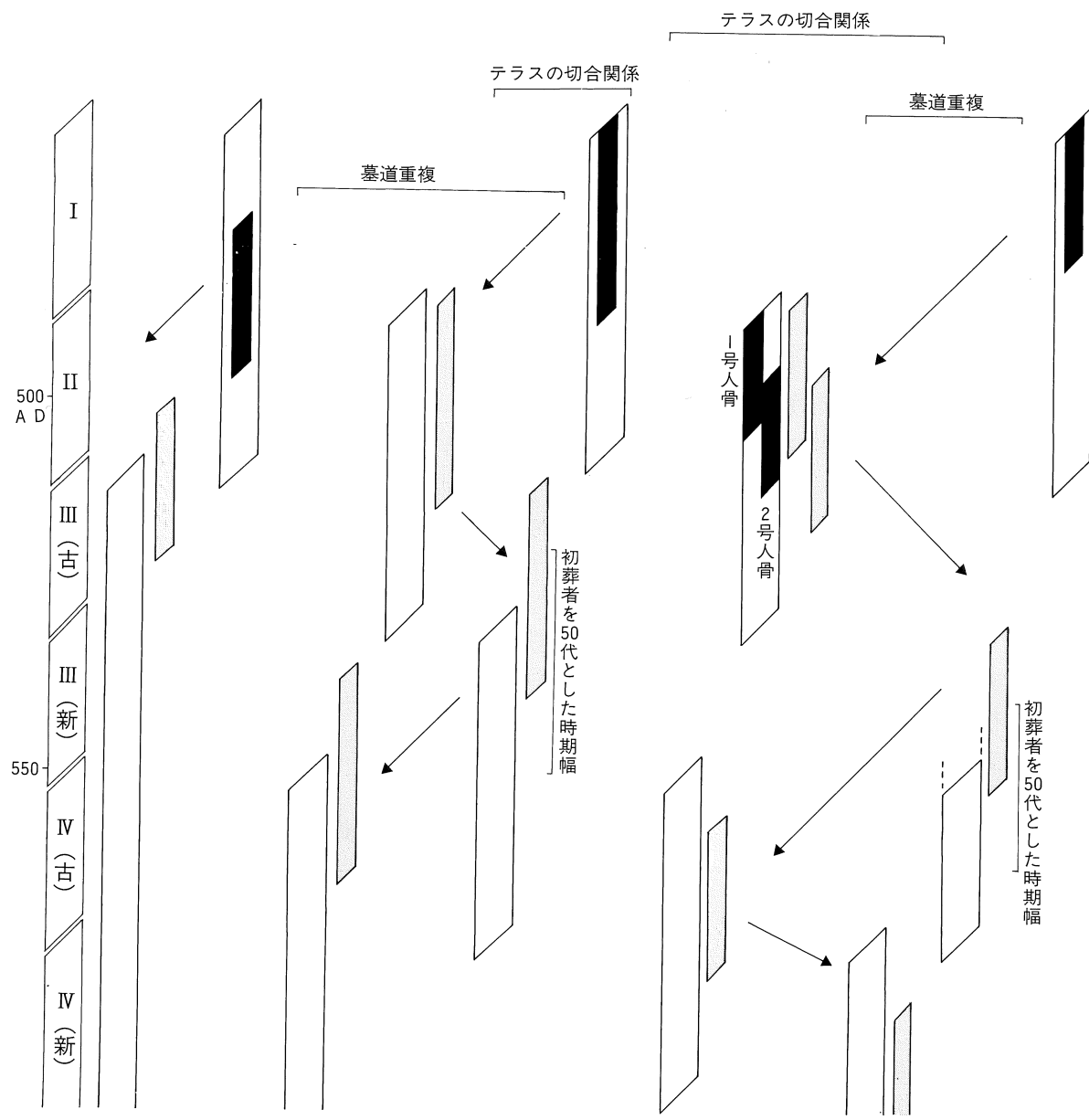
第234表 27号横穴墓被葬者と30号横穴墓被葬者間のQ-相関係数

組み合わせ	ペア	27-2	27-2	27-3	27-3
		30-2	30-3	30-2	30-3
C P ¹ P ² M ¹ M ²		0.472	—	0.450	—
P ¹ P ² M ¹ M ²		0.289	—	0.501	—
P ¹ P ² M ¹		0.194	0.570	0.225	0.454
P ¹ P ² M ¹ M ² P ₁ P ₂ M ₁ M ₂		—	0.502	—	0.382
C P ¹ P ² M ¹		0.650	0.288	0.232	0.452
I ₁ I ₂ C P ₁ P ₂ M ₁ M ₂		—	—	—	0.727

単位ごとに追える家系的連続が一系列であることからみて、上ノ原横穴墓群の築造期間中、少なくともこの範囲においては造墓主体の分節化・独立（いわゆる「分家」）が行われていなかったことをも示している。

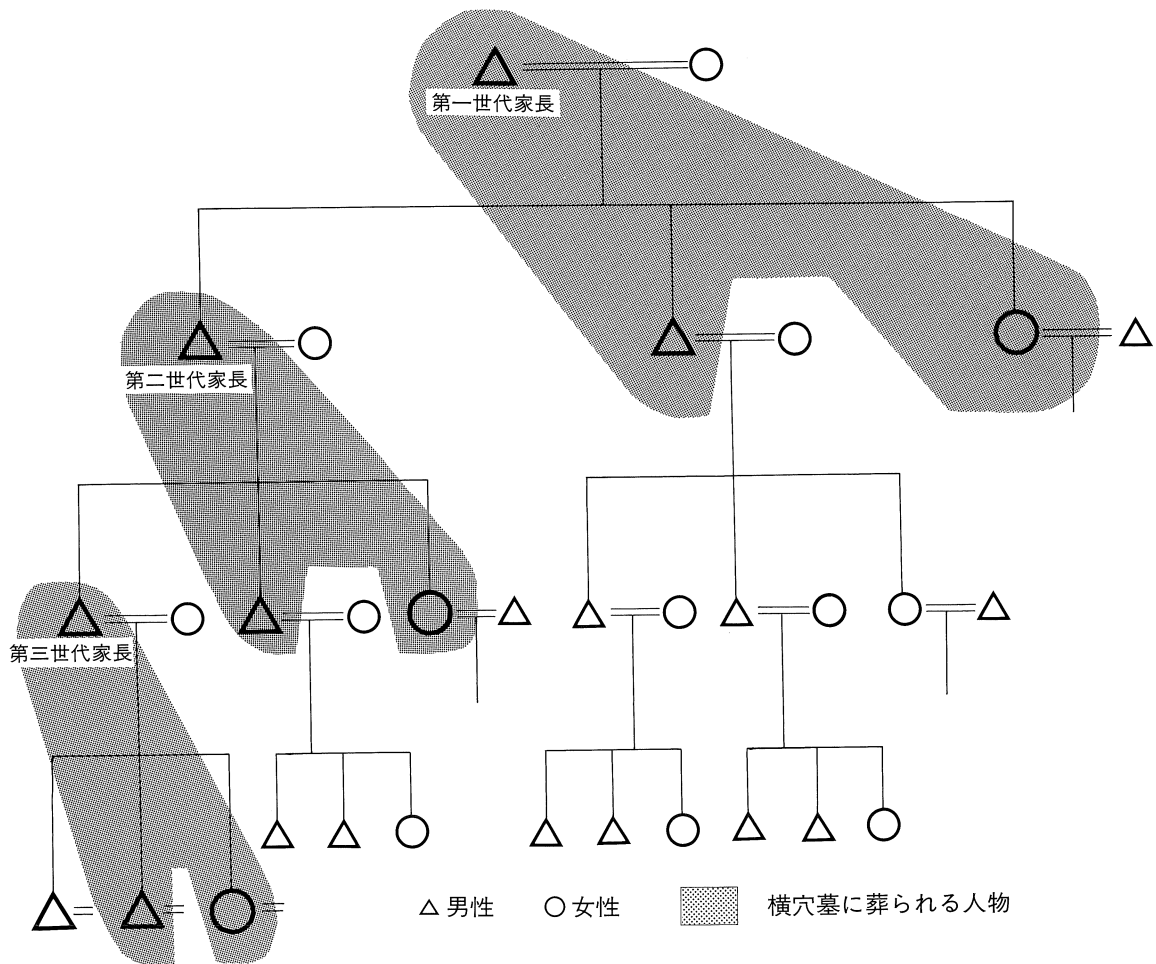
以上から、上ノ原横穴墓群においては、隣接し、考古学的特徴でくくられる横穴墓群は、

横穴墓 順恵器	20号	21号	22号	23号	24号	25号	26号	27号	28号	29号	30号
------------	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----



第520図 上ノ原横穴墓群（20号～30号）における家系の連続

それぞれの家系の連続を示すとみなされる。そして、その原理は、父系の血縁原理であり、二世モデルを基調として、家長と家長の地位を継がなかった子たち（男女、小児～若年あり）が葬られるというものである。次世代の家長は、隣接して築造された新たな横穴墓に葬られるが、同一横穴墓に二代以上の家長が葬られることもある。したがって、このような埋葬の累代にわたる基本システムを求めると第521図のようになるだろう。ここでは、墓に葬られるのは家長とその子のみであり、各々の配偶者も葬られない。次世代の家長は新たな墓に葬られる。家長とならなかった子達は、その父の墓に葬られるものの、彼（彼女）らの子はもはや追葬されることはない。また、上記のように造墓主体の分節化・独立が行われた形跡がないことから、実際に居住する家族集団の規模は、横穴墓に葬られる直系親族のみではなく、傍系親族をも含めたものであったと考えられる。すなわち、第521図の第二世代家長でみると、娘とその家族は他所へ嫁いだとして除外しても、彼の妻、二人の息子とその家族をあわせて12人、傍系親族である彼のキョウダイとその男子の家族をあわせると24人という規模になるのである。これに先代家長のキョウダイとその家族を含めると、家族の規模はさらに大きなものとなる。したがって、傍系親族が何世代存続しえたかという問題があるものの、各々の家族集団は概ね20～30人程の人数で構成されると



第521図 上ノ原横穴墓群における埋葬システム

考えられる。また、この規模は、住居跡や集落の研究から導き出された数軒の住居からなる世帯共同体のそれ（都出1989）とも一致するものである。このように、横穴墓に葬られた数体の被葬者は、20人を超える構成員の中からそれぞれの配偶者と傍系親族を排除したかたちで選択された人々なのである。そして、その選択の基準は、父系の直系であることと家長の血縁者であることの二つであったと考えられる。

それに関して、いくつか注意すべき点がみられる。まず、21号横穴墓と64号横穴墓の第二世代が、男性ではなく、女性であるということである。この二つの横穴墓は、世代構成をみると、男性-女性-男性という関係になっており、双系であるかのようにもみえる。しかし、これらは三世代構成横穴墓の二世代目という点が共通しており、女性が初葬者であるというわけではない。この点を、上ノ原では女性の単体埋葬も例をみないことと考え合わせると、横穴墓築造の契機はやはり男性家長の死であったということになる。そして、追葬者の配偶者はおろか家長の妻も埋葬されていないことは、血縁性をとりわけ重視していたことを示すものである。さらに、上記の21号横穴墓における同世代の被葬者は女性であり、64号横穴墓でも同世代の被葬者が存在したとしても女性の4号人骨であることなどを考えると、これら2横穴墓における第二世代女性の性格は、女性家長というよりは、女子しか生まれずに婚養子を迎えながらも、埋葬にあたっては血縁性を重視してこれを排除し、先代家長の血縁者であるこれら女性のみが葬られたケースであることと考えるべきだろう。また、63号横穴墓と65号横穴墓の連続をみてみると、63号の家長が死亡した時、65号に葬られた家長はまだ0才に近い幼児であったと推定される。27号横穴墓と29号横穴墓の連続においても、27号の二代目の家長（2号人骨）が死亡した時には、29号の家長は10才程度であったはずである。この事実は、このような場合でも、それぞれの家族集団は、おそらくは先代家長の兄弟がその家族集団を維持しながらも、彼らがそれを継承するのではなく、次世代の家長が成人するのを待っていたことを示している。

このようなあり方は、父系の直系継承が浸透していたものとして評価することができる。しかし、家長の妻を葬らず、結婚し出産を経た娘が父の墓に葬られるなど、血縁性を重視する点で、家長夫妻を中心とする家父長制家族（近藤1966）とは異なっている。筆者らは、いくつかの事例をもとに、5世紀中葉までの古墳における複数埋葬は兄弟・姉弟を中心としたキョウダイ原理に基づくことを示してきた（田中・土肥1986、1987、1989 a・b）。また、山口県朝田墳墓群の分析から、6世紀前半～中葉に家長の妻が葬られるようになったことを示した（田中1990）。したがって、上ノ原における埋葬原理は、5世紀中葉までの血縁を重視した原理から、6世紀前半～中葉に出現する家長夫妻を中心とした埋葬原理の中間にあたる、過渡的段階ととらえることができる。すなわち、キョウダイを基本とするモデルから家長のキョウダイが脱落し、代わって家長の子達が葬られるようになり、上ノ原のモデルとなる。これは、同じ血縁原理でも、キョウダイ関係から父子関係へと変化したもので、（男性の）家長と直系への傾斜と評価することができる。しかし、この段階でも、血縁性を重視するため、家長の妻や子達の配偶者はまだ葬られない。そして、6世紀代の朝田墳墓群のモデルは、上ノ原のモデルに家長の妻（おそらくは次世代家長の母）が加わったものである。

この古墳時代における変化の過程は、曖昧な（おそらくは父系の）継承システムから、家父長制的システムへと移行する過程といえ、5世紀後半に強い父系イデオロギーが浸透したことを物語るといえよう。とはいえ、6世紀の段階でもなお、第二世代の被葬者はキョウダイの関係であり、その配偶者は葬られていない。これは、未だ夫婦を基本としたシステムが確立しておらず、前代の遺制を引きずっていたことを示している。また、既婚である可能性が高い娘が父親の墓に追葬されることは、帰葬や別居婚の可能性を示唆するものである。これは、婚姻システムや婚後居住システムと埋葬システムにズレがあったことを示すと思われるが、これらの問題については別の機会にゆずりたい。

7. おわりに

人骨出土の横穴墓を主たる対象として行ってきた分析と考察の結果は以下のように要約されよう。

- ・被葬者は、第一世代（成人男性）、第二世代（成人男女・若年・小児）という二世代の基本モデルで表される。
- ・第一世代と第二世代の被葬者はいずれも血縁関係にあると推定される。
- ・第一世代と第二世代では副葬品（特に武器類）に格差がみられ、第二世代被葬者は、家長の子達のうち、家長を継がなかった人たちと推定される。
- ・家長および追葬された子達の配偶者は葬られておらず、強い血縁性重視の原理がうかがえる。
- ・男子が得られず女子のみの家族集団では、婿養子を迎えたと考えられるが、そのような場合でも、婿は横穴墓には葬られておらず、血縁性重視の原理は貫徹している。
- ・次世代の家長が死亡すると、隣接して新たな横穴墓が築造される。したがって、墓道の重複等によって考古学的に単位としてくられる、隣接する横穴墓は家系的連続の所産と考えられる。
- ・これらをふまえると、家長が死亡した時点では次世代家長が幼・小児であったケースがあるが、この場合でも家長の兄弟が家長を継ぐのではなく、成人した次世代家長が隣接する横穴墓に葬られている。したがって、これらのあり方から、上ノ原における継承は父系の直系であったと考えられる。
- ・上ノ原における埋葬原理は、キョウダイ原理に基づく4～5世紀の形から、家長夫妻を中心とした6世紀の埋葬システムへの変化における過渡的段階に位置づけられる。
- ・追葬された女性には経産婦であった可能性が高いものも含まれており、結婚—出産をへても死後は父の墓に葬られたことを示している。これは、帰葬や別居婚が存在した可能性を示唆する。

註

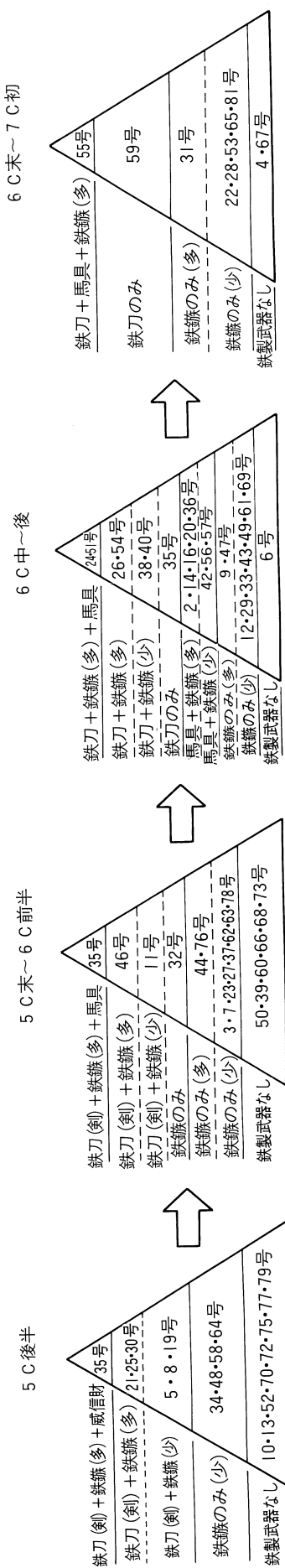
- (1)11号横穴墓全体の時期幅を40年程と考えた場合、4号人骨の1号死亡時の年齢が0～20才となり、4号人骨の死亡年齢を低く考えると、三世代の構成となる。しかし、大白歯が脱落していることからみると、熟年でもそれほど若い方ではない可能性が強いと思われるので、三世代構成となる可能性は低いと考えられる。
- (2)4号人骨は頭骨と下顎骨が石枕を離れているが、これは落石によるものと考えられる。
- (3)埋葬間隔を短く考えた場合、4号人骨が1号人骨と同世代と考えられなくもない。しかし、本文中に記したように、4号人骨は、歯の咬耗度だけからみれば成年後半と推定され、実際にそうである可能性もあることと、1号人骨が熟年でも半ばぐらいと考えれば、やはり1号人骨と4号人骨との間に世代差があることになる。
- (4)この年齢推定は概報（田中他1985）によっている。
- (5)兄弟・姉妹・兄妹・姉弟関係をさす。小稿では煩雑であるのでキョウダイと表記する。
- (6)古墳、とりわけ群集墳の造墓主体については、これまで家父長制的家族であるとされてきた。しかし、こんにち奈良時代においてすら家父長制家族の存在を否定する見解もあり、古墳の造墓主体に対して無批判に家父長制家族の概念をあてることには問題があると思われる。ところが、上ノ原においては家族集団あるいは世帯共同体の他の成員から突出した成人男性（初葬者）の存在が知られる。このようなあり方は家父長制家族とも通ずるものではあるが、その条件の全てを満たすものではなく、さらなる検討が必要であろう。したがって、ここではこの成人男性を、家族集団のリーダーである headman の意味で「家長」と呼んでおきたい。
- (7)この分析法では、非血縁者を特定することは困難である。というのも、現代人血縁者を用いた分析の結果、子は両親に均等に似ることはなく、父親似、母親似といった偏りがみられたからである（田中他1985：土肥他1986）。したがって、似ていない血縁者の存在が予想され、これと非血縁者の判別はこの方法では困難といえる。
なお、第228～232表に示した歯の組合せは、大半が土肥他（1986）において有効とされているものであるが、同文献に記されていない組合せの計算結果も含まれている。それらについては、現代人非血縁者同士において求めた0.500以上の値をとるペアの出現頻度を以下に示す。

$CP^2M^1M^2M_1M_2$ (17.9%),
 $I^2CP^1P^2M^1M^2$ (20.2%),
 $I^2CP^1P^2M^2I_1I_2CP_1P_2M_1M_2$ (14.9%),
 $P^1P^2M^1M^2I_1I_2CP_1P_2M_1M_2$ (16.1%),
 $M^2CP_1P_2M_1$ (29.4%),
 $M^2P_1P_2M_1$ (33%),
 $P^1P^2CP_2M_1M_2$ (16.6%),
 $P^1P^2CP_2M_1$ (12.2%)

- (8) 1号人骨の上に片付けられた四肢骨が、2号・3号のいずれか一方のものであるのか、あるいは双方が混在しているのが問題である。しかし、現地での調査時には骨端まで確認し得た四肢骨が数本はあり、いずれにも骨端線は認められなかった。したがって、1号人骨上の四肢骨は3号人骨のものである可能性がより強いと思われ、2号人骨の四肢骨は頭とともに奥壁側に片付けられていた可能性がある。
- (9) 4号人骨は成年から熟年まで(20~60才)として計算した。しかし本文中にも記したように、大臼歯数本が遺存していたことから老年やそれに近い熟年である可能性は低いと考えられる。
- (10) いわゆる「分家」に関しては、実際には分節化・独立を行って、独立した分節単位が全く別の集落・墓地を営んでいた可能性がないわけではない。しかし、その場合でも、分節単位は本来の家族集団から居住・埋葬ともに独立していることになり、小稿の考察結果には直接関係しない。

文献

- 土肥直美・田中良之・船越公威, 1986: 歯冠計測値による血縁者推定法と古人骨への応用. 人類学雑誌, 94 (2)
- 藤田恒太郎, 1949: 歯の計測基準について. 人類学雑誌, 61 (1)
- 古畑種基, 1964: 簡明法医学.
- 池田次郎, 1985: 横穴墓被葬者の親族関係 (1) 鳥根県広瀬町本郷上口遺跡—シンポジウム国家成立前後の日本人—. 季刊人類学, 16 (3)
- 伊東宏, 1974: 人骨改葬を伴う愛知県渥美町(高木)と旭町(浅谷)の両墓制. 葬送墓制研究集成1. 名著出版, 東京.
- 九州大学医学部解剖学第二講座, 1988: 九州大学医学部解剖学第二講座所蔵古人骨資料集成. 日本民族・文化の生成2. 六興出版, 東京.
- 長田須磨, 1974: 奄美大島の洗骨と風葬. 葬送墓制研究集成1. 名著出版, 東京.
- 酒井琢郎・花村肇・大野紀和, 1971: アフガニスタンのPashtunとTajikの歯の大きさについて. 人類学雑誌, 79 (2)
- Sj ðvold, Toresen, 1975: Allocation of single or some few Individuals to one or more groups by means of non-metrical variants in the skeleton. Osaa, 2(1)
- 田中良之・土肥直美・船越公威・永井昌文, 1985: 上ノ原横穴墓被葬者の親族関係. 上ノ原遺跡群IV. 大分県教育委員会, 大分.
- 田中良之・土肥直美, 1986: 古墳被葬者の親族関係について. 日本考古学協会第52回総会研究発表要日本考古学協会, 東京.
- 田中良之・土肥直美, 1987: 古墳時代の親族関係について. 九州人類学会報, 15
- 田中良之・土肥直美, 1989 a: 人骨と血縁. 古代史復元4. 講談社, 東京.
- 田中良之・土肥直美, 1989 b: 出土人骨から親族構造を推定する. 新しい研究法は考古学になにをもたらしたか. クバプロ, 東京.
- 田中良之, 1990: 朝田墳墓群被葬者の親族関係. 九州大学文学部九州文化史研究所紀要, 35.
- 都出比呂志, 1989: 日本農耕社会の成立過程. 岩波書店, 東京.
- 辻村純代, 1988: 古墳時代の親族構造について. 考古学研究, 35 (1)



第522図 上ノ原横穴墓群階層変遷図

(2)上ノ原横穴墓群における武器所有形態による階層変遷

村上 久和 吉留 秀敏

本横穴墓群は数基を除き盗掘等の2次的改変は認められない。このことは個々の横穴墓が所有する武器あるいは威信財等の差異から階層性を検討することが有効である。

群集墳における武器の階層性については近藤義郎^{註(1)}、新納泉^{註(2)}等の研究がある。近藤義郎氏は製塩集団や農業集団でも乗馬階層・刀剣階層・弓矢階層ともいべき軍事的秩序が編成されていたと指摘する。さらに新納泉氏は装飾付大刀を持つ古墳を頂点とし、次に直刀や馬具をもつ古墳、その下位に鉄鏃のみを持つ古墳、最下層の武器をまったく持たない古墳とに分ける。このうち、装飾付大刀は、群集墳のなかの頂点をなす階層以上を中心とし、最大の地方豪族を含む階層にとまなうと指摘している。

以上の両氏の卓見をもとに本横穴墓の武器所有形態を示したものが第522図である。5C後半(上ノ原I期)段階では鉄刀+鉄鏃(多)+威信財としての器台を持つ35号横穴墓1基をトップとして鉄刀+鉄鏃(多)の横穴墓3基、鉄刀+鉄鏃(少)の横穴墓3基、鉄鏃のみ(少)の横穴墓4基、武器無しの横穴墓8基とほぼピラミッド状の階層構造となっていることが解かる。このことは本横穴墓群の築造契機が35号横穴墓を中心としてなされたことを意味するものであろう。次に、5C末～6C前半では前代に引続き35号横穴墓が鉄刀+鉄鏃(多)+馬具を持ちトップとなり、鉄刀+鉄鏃(多)1基、鉄刀+鉄鏃(少)1基、鉄刀のみ1基、鉄鏃のみ(多)2基、鉄鏃のみ(少)8基、武器無6基と階層構造がより細分化してくるとともに本横穴墓群の馬具の所有がこの時期より最上層のクラスに始まることと鉄鏃を所有するクラスが増加する特徴を示している。6C中頃から後半にかけては前代の階層構造の様相が大きく変化する。それは前代までは鉄鏃のみの所有グループであったF・N小支群(付図3)の24号・51号横穴墓が鉄刀+鉄鏃(多)+馬具を持ち階層構造のトップとなり、前代までのトップであった35号横穴墓は鉄刀のみのクラスに下落する。また、24号と51号を比較した場合51号横穴墓には圭頭太刀が副葬されていることからより上位と考えられよう。さらに第522図のごとく階層構造はより細分化され前代同様鉄鏃のみのクラスが最も多く、次いで馬具+鉄鏃のクラスが続き、武器無のクラスが1基と減少するのが特徴である。このような階層構造の変化は511年から562年にかけて5回に及ぶ朝鮮出兵や派兵計画^{註(3)}といった対外的緊張関係や筑紫君磐井に代表される国内情勢の不安定さに起因^{註(3)}するところが大きいと推定される。6C末～7C初頭にかけては全体に横穴墓数が減少するが前代にトップであったN小支群内の55号横穴墓が鉄刀+馬具+鉄鏃(多)を持ちトップを維持するが全体にピラミッド構造が単純化される傾向が読みとれる。

以上本横穴墓群では大きくはI大支群内(付図3)の横穴墓群が全体としてはリーダー的性格を持ち、その内でも5C後半～6C前半では35号が、6C中頃～7C初頭では24号・51・55号がそれぞれ本横穴墓群を統括するリーダー的存在であったことが武器所有形態の変化過程で認めることができよう。(村上・吉留)

註 (1) 近藤 義郎 『前方後円墳の時代』 1983年
 (2) 新納 泉 「装飾付大刀と古墳時後期の兵制」 『考古学研究』 119 1983年
 (3) 鈴木 靖民 「東アジア諸民族の国家形成と大和王権」 『講座日本歴史1』 1984年

(3)上ノ原横穴墓群における葬送儀礼の諸相

村上 久和 吉留 秀敏

本横穴墓群は、盗掘等の2次的な変化を受けてなく、玄室内および前庭・墓道部において、多様な祭祀儀礼行為を確認した。さて、古墳時代後期の古墳祭祀儀礼については、小林行雄⁽¹⁾・白石太一郎⁽²⁾氏の卓見がある。小林氏は記紀に表されたイザナミ神の黄泉の国における「ヨモツヘガイ」と横穴式石室における土器の出土状態などが一致することを指摘し、土器が古墳における葬送儀礼の道具であることを指摘した。白石氏は、イザナギ神の黄泉の国からの逃走物語に見える「コトドワタシ」⁽³⁾に注目し、これが石室の封鎖時における死者の現世との訣別を意味する祭祀儀礼であるとした。その後、亀田博氏⁽⁴⁾は、両氏の見解に基づきながら細かく、土器を使用した葬送儀礼の各段階を復元している。さらに、土生田純之氏は、このような祭祀儀礼の導入過程について汎西日本的に類例を集め、特に北部九州においてこの種の儀礼が渡来人との関係で導入されたと考えている。以上の古墳時代後期における葬送儀礼の研究をもとに、本横穴墓の葬送儀礼を復元してみる。

儀礼の各段階を復元している。さらに、土生田純之氏は、このような祭祀儀礼の導入過程について汎西日本的に類例を集め、特に北部九州においてこの種の儀礼が渡来人との関係で導入されたと考えている。以上の古墳時代後期における葬送儀礼の研究をもとに、本横穴墓の葬送儀礼を復元してみる。

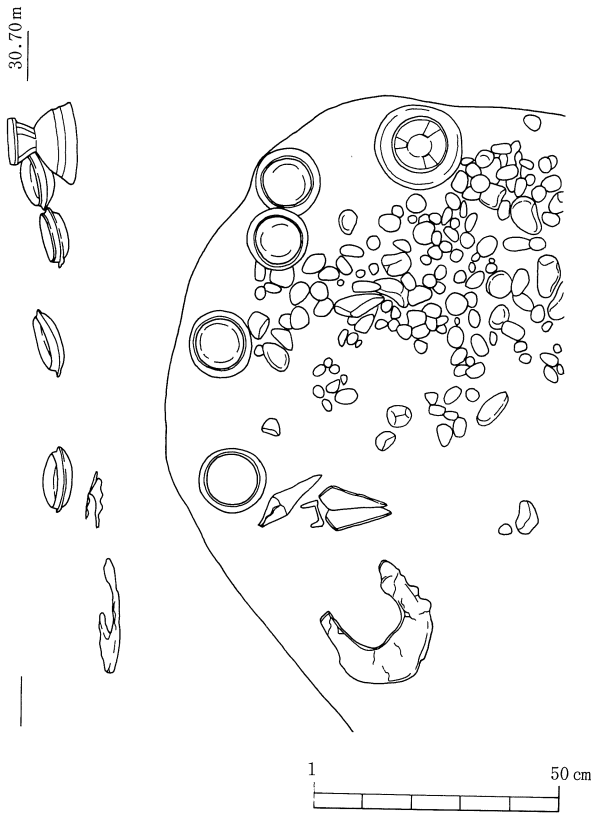
1) 玄室内祭祀

玄室内祭祀は上ノ原Ⅰ期の段階から認められる。この段階では35号横穴墓に見られるように大型器台、甕、甗など飲物供献儀礼に使用するものが主体である。ただし、この種の土器の中には、宝器的なあつかいを受けた可能性のあるものものこる。また、48号横穴墓に見られるように埋葬後数年経過した後に、飲食物をそのまま玄室内に置いた例も認められる。上ノ原Ⅰ期後半からⅡ期にかけては8号・23号横穴墓などに見られるように坏、高坏、埴を主体とした食物供献儀礼が出現する。しかしながら、若干ではあるが17号横穴墓に見られるように土師器小壺、甕を使用した飲物供献儀礼も残る。

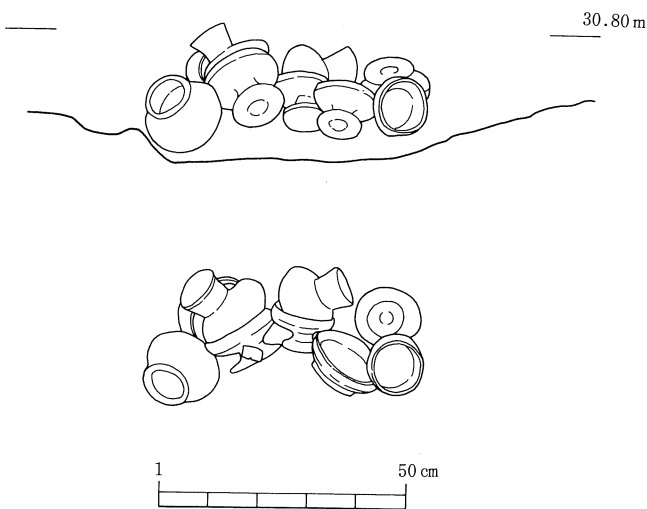
上ノ原Ⅲ期には、14号・45号に代表されるように、提瓶、甗を使用する飲物供献儀礼が定着し、坏・高坏などを用いた食物供献儀礼は前庭部へ移動し二者の儀礼は分離する状態がみられるのが特徴である。提瓶の出現がこの時期の飲物儀礼に大きな影響をもたらしたと考えられる。

2) 前庭部・墓道部祭祀

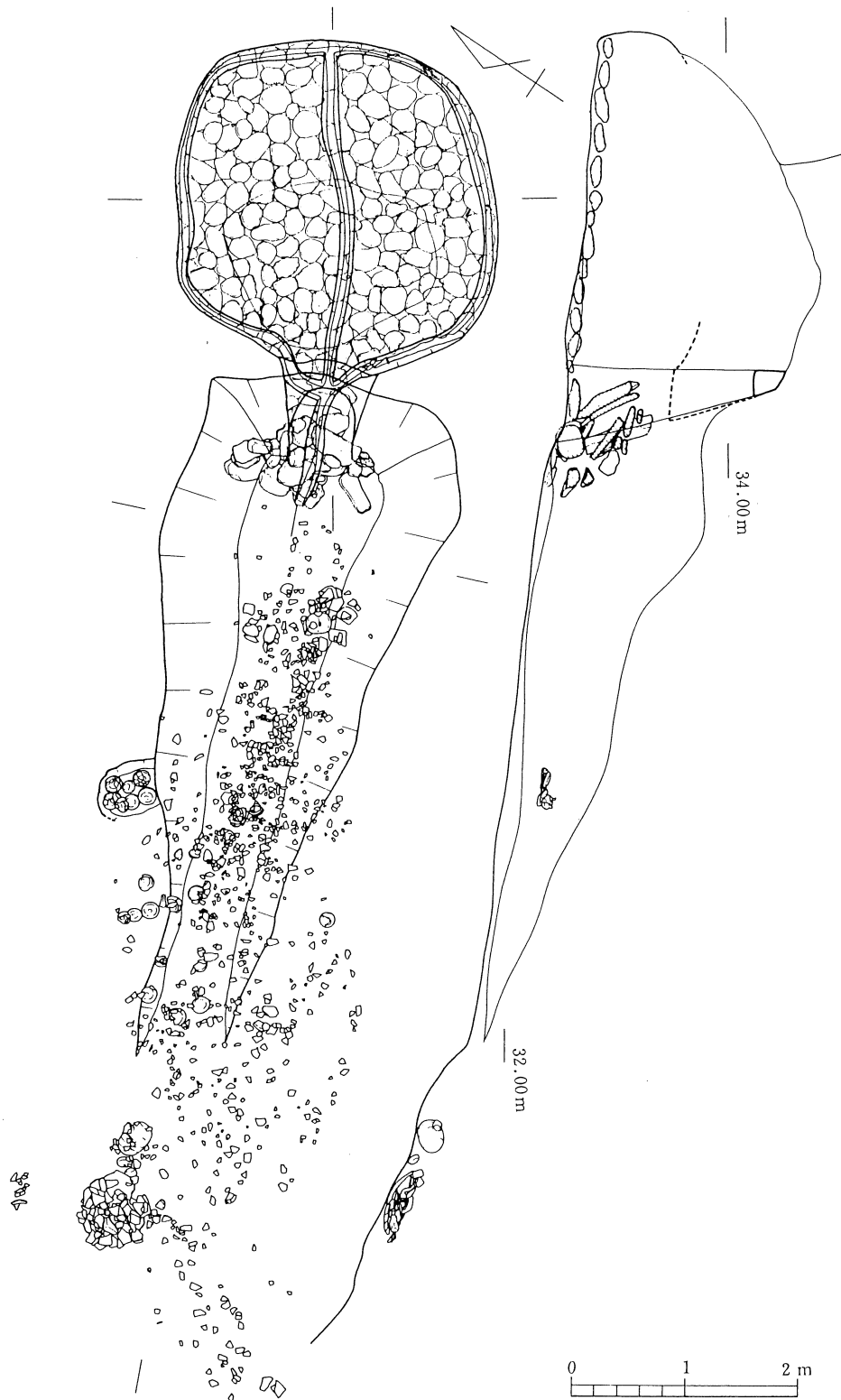
上ノ原Ⅰ期には、8号横穴墓などに代表される坏・高坏を使用した飲食物供献儀礼が行われるが、横穴ごとにその組成と祭祀の有無にばらつきが認められる。また、この時期から前庭部において挽火行為も認められる。



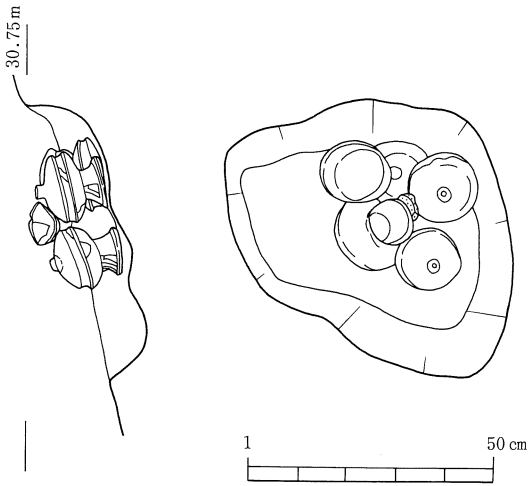
第523図 8号横穴墓玄室内配列埋置土器出土状態



第524図 17号横穴墓玄室内一括埋置土器出土状態



第525图 26号横穴墓墓道部破碎散布土器出土状态



第526図 5号横穴墓前庭部配列埋置土器出土状態

第235表 上ノ原横穴墓群土器接合表

横 穴 番 号	器 種
1+④	甕 (小)
4+7	甕 (口、胴)
④+7	坏身
④+12	甕 (大)
4+6+⑦	長頸壺
4+6+⑦+9	甕 (大)
10+⑫	提瓶
10+⑫+18	高坏
⑯+26	横瓶
16+18+20+⑳	甕 (大)
⑱+20	甕 (口、胴)
18+㉑	高坏
㉒+22	器台
20+㉒+24	横瓶
㉒+26	甕 (口、胴)
㉒+22	甕 (口、頸)
26+㉓	高坏
26+㉓	長頸壺
㉔+29	高坏
㉓+31	高坏
29+㉕	提瓶
29+㉕	長頸壺
26+㉕	器台
㉖+39	坏蓋
42+43+44+45	甕 (大)
49+51	甕 (大)
51+54	脚付壺
55+59+81	甕 (大)
59+61	甕 (大)
61+65	脚付甕
65+67	甕 (大)
67+69	甕 (大)
67+71	甕 (口縁部)

※図○は、多数出土した横穴墓

上ノ原Ⅱ期には、68号横穴墓に見られるように、坏・高坏を中心とした供献儀礼の土器組成が明確になり、その内容も充実する。

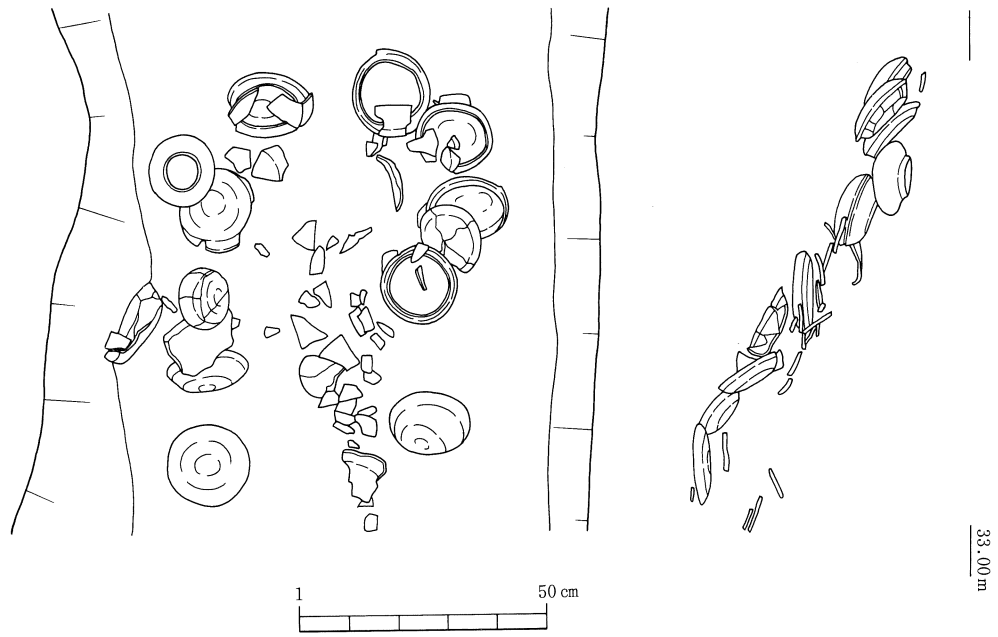
上ノ原Ⅲ期になると、4号・7号・9号横穴墓などに見られるように、前者の儀礼に加え、非埋葬祭祀儀礼が顕著になる。非埋葬祭祀儀礼は甕を主体としており、儀礼後破碎され、複数の横穴墓に散布される例が多数認められる。またこの時期より土器の一括埋置状態が認められる。この行為は埋葬時における食物供献儀礼後の片付けと非埋葬儀礼に伴う同様の片付けとの二者が考えられる。この儀礼は、前庭部に穴を掘り、儀礼使用土器を集積後上に埋土および大石で封鎖するものと、墓道側壁に小穴をうがち、儀礼使用土器を埋納し、その後埋土・石で入り口を塞ぐものがある。

このような前庭部における飲食物供献儀礼は、Ⅰ・Ⅱ期においては初葬者のみに対して行われ、基本的に追葬者には認められない。このあり方は、本章における田中の考察(5-(1))において推定された初葬者=家長という結論に従えば、このような儀礼も初期横穴墓においては家長のみに対して行われ、追葬者との間に格差を設けていることがうかがえる。

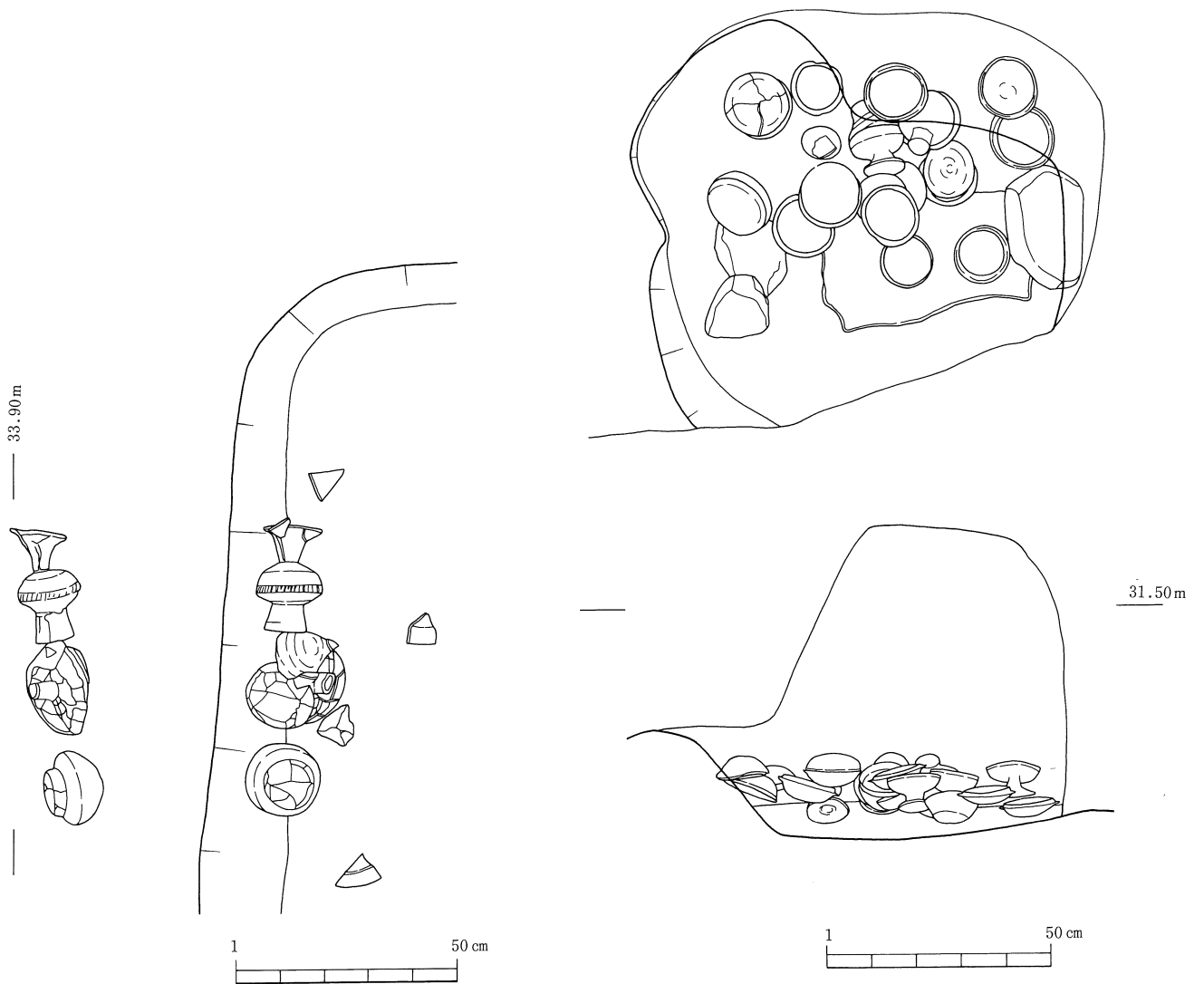
ところが、Ⅲ期には追葬者に対してもこの行為が行われるようになり、ここに一つの画期が認められる。

また、複数の横穴墓にまたがる土器の破碎散布行為がこの時期から始まる(第235表、付図3参照)この行為に使用される器種は、甕、壺など飲用土器が圧倒的に多く、坏、高坏などの食用器が少ないことがその特徴である。これは、複数の家族集団間に共通の儀礼を行うことにより、何らかの紐帯を表現したものと考えられよう。その紐帯の具体的内容については、墳墓における儀礼であり、なおかつ個々の埋葬に伴わないことを考慮すれば、祖霊祭祀の可能性が最も高いといえよう。田中の本章における考察(5-(1))によれば、横穴墓の小群は父系的に編成された家族集団(世帯共同体)における家長血族の累代墓であり、個々が経営帯としての一定の自立性をもつものと考えられている。しかし、律令期の戸籍の例からもうかがえるように、この時期の婚姻形態は完全な村落外婚ではなく、ある程度の村落内婚が存在したと考えられる。これを前提にすると、これら家族集団ごとに一定の婚姻関係が取り結ばれていた可能性は高いといえよう。したがって、横穴墓の小群間を結びつける紐帯は、実質的な姻族関係を反映したことが考えられる。

ところで、この種の行為はⅠ期から行われ続けたものではなく、Ⅲ期になって初めて開始されるものである。上ノ原の地に造墓が開始されるにあたって、これら家族集団が一つの横穴墓群としてまとめられたことは、本来はこれらがあるレベルにおいて結合した社会集団を反映していたと考えていいだろう。造墓開始期にお

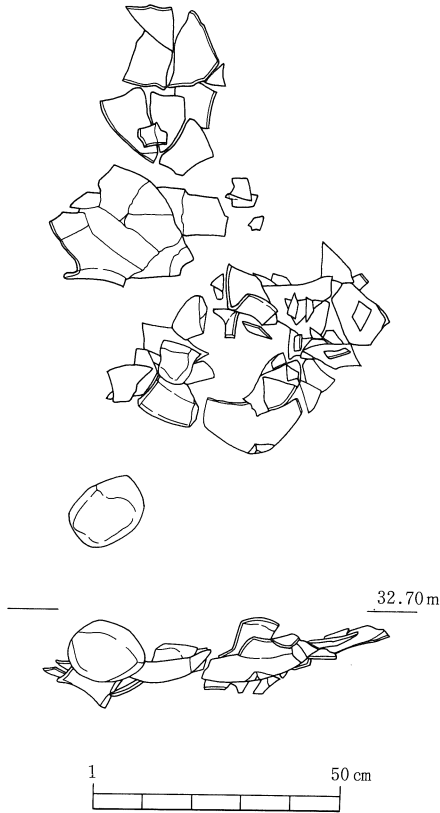


第527図 20号横穴墓墓道部配列埋置および破碎散布土器出土状態



第528図 18号横穴墓墓道部一括埋置土器出土状態

第529図 59号横穴墓ポケット状横穴配列埋置土器出土状態



第530図 11号横穴墓テラス状遺構破散散布甕出土状態

いては父系血縁集団を基礎として集団編成が行われ、この時期すなわち6世紀後半に至って、さらに婚姻関係を通じて家族集団間を結びつけ、集団の同一性を再確認する必要が生じたのではないだろうか。この儀礼は、個々の埋葬に伴う一回的なものではなく、数度にわたり繰り返し行われていることからみて、同一性再確認の要請がこの時期から強いものとなったと考えられよう。

この種の儀礼は上ノ原横穴墓群に限られるものではない。熊本県瀬戸口横穴墓群、福岡市堤ヶ浦古墳群、鞍手町小牧西牟田横穴墓群など、上ノ原と同様精密な調査が試みられた後期群集墳において類例が知られるようになってきており、今後も類例の増加が予想される。したがって、このような儀礼は6世紀後半において広域に認められる可能性が高い。こうしたことから、この儀礼は地域的な現象ではなく、少なくとも北部九州の該期において共通した集団関係を背景としたものと考えられる。

3) 墳丘(テラス)祭祀

I・II期において認められる。高坏、坏を使用した食物供献儀礼と甕、壺を使用した飲物供献儀礼の両者が認められる。使用された土器は配列状態で埋置される場合が多い。甕には底部穿孔が認められるものが多い。これらは、前時期や同時期の古墳においておこなわれる儀礼に共通する内容をもつ。III期にはこれらの儀礼は認められていない。これらの儀礼は前庭部祭祀儀礼に取り込まれていったものと考えられる。

註

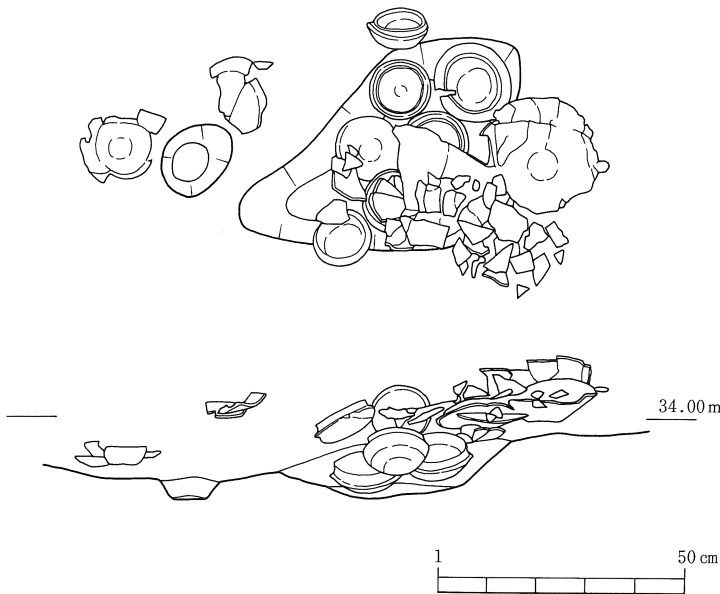
(1)小林行雄「黄泉戸喫」『考古学集刊』第2冊 1949。

(2)白石太一郎「ことどわたし考—横穴式石室の儀礼をめぐって—」

『橿原考古学研究所論集』創立35周年記念 1975。

(3)亀田博「後期古墳に埋納された土器」『考古学研究』23巻4号 1977。

(4)土生田純之「古墳出土の須恵器(1)」『末永先生米寿記念献呈論文集』1985。



第531図 25号横穴墓テラス配列埋置および破碎散布土器出土状態

(4)上ノ原横穴墓群被葬者の集団関係

村上 久和・吉留 秀敏・田中 良之

1. 横穴墓の群構成

上ノ原横穴墓群は、分布からみて大きく2群に分かれる。すなわち1号から55号までの北支群、および56号から81号までの南支群の2群である(付図3)。これらは横穴墓の構造においても群ごとに一定の共通性をもっており、例えば初期横穴墓においては南支群は楕円形プランを主体にするのに対して、北支群は方形プランが主流を占める。ただ、これについては6世紀前半段階から両支群とも形態に統一性がでてくる(村上考察：形態……)。そして、各群を構成する横穴墓は、墓道の重複やテラスの共有あるいは切り合いなどから3～5基ほどの小群にまとめられる。そして、これら小群は、5世紀後半～6世紀前半の初期横穴墓とそれ以降のもので構成されており、時期的に連続するという特徴を持っている。

本章第一節の田中の考察(「上ノ原横穴墓被葬者の親族関係」)において、これら小群のいくつかは家系的連続を示すことが指摘されている。すなわち、20～30号は三つの小群に分かれ、それぞれ5世紀後半に最も古い横穴墓が築造されている。初期横穴墓の被葬者は家長とその子たち(非家長)によって構成され、次世代の家長は原則として新たに隣接して築造された横穴墓へと埋葬される。このようにして隣接する横穴墓の小群は家長の死を契機として築造された墓の直系的連続としてとらえられ、歯冠計測値を用いた分析でも小群内の隣接する横穴墓の被葬者が血縁関係にあることが検証されている。これは63～65号横穴墓でも同様であり、一基に5世紀後半から6世紀後半まで、埋葬を行っている35号横穴墓でも4～5世代にわたる家長の世代的連続としてとらえられた。したがって、考古学的に小群としてくくられた隣接する数基の横穴墓群は、人骨の保存が比較的良好であったものについては、家長墓の直系的連続を示すことが知られたのである。

それでは、人骨が検出されていない横穴墓においても同様なのであろうか。付図3は調査された全横穴墓の時期と位置関係を視覚的に表現したものであるが、やはり5世紀前半～6世紀前半の初期横穴墓から築造が始まり、6世紀後半～末のものまで時期的に連続する横穴墓が隣接している。これらの小群は墓道やテラスの切合関係から考古学的にも単位として認識されるものであり、小群内に同時期の横穴墓が存在しないことが大きな特徴である。したがって、これらの小群は、20～30号横穴墓と同様に、家長墓の直系的連続を示すことがうかがえるのである。

これらの家長墓の背後には父系的に編成された血縁集団の存在が推定され、その具体的内容は直系親族と傍系親族によって構成される家族集団(世帯共同体)であったと考えられている。そうすると、上ノ原横穴墓群全体では、調査された80基が21の家族集団から構成されるといえる。そして、家族集団の規模は直系親族と傍系親族を合わせて概ね15～20人程度と考えられ、これまで3～5軒の住居のまとまりで考えられてきた世帯共同体の規模と一致すると思われる。したがって、あくまでも試算ではあるものの、上ノ原横穴墓群の造墓集団は、人数にして315～420人、住居にして63～105軒という規模となろう。

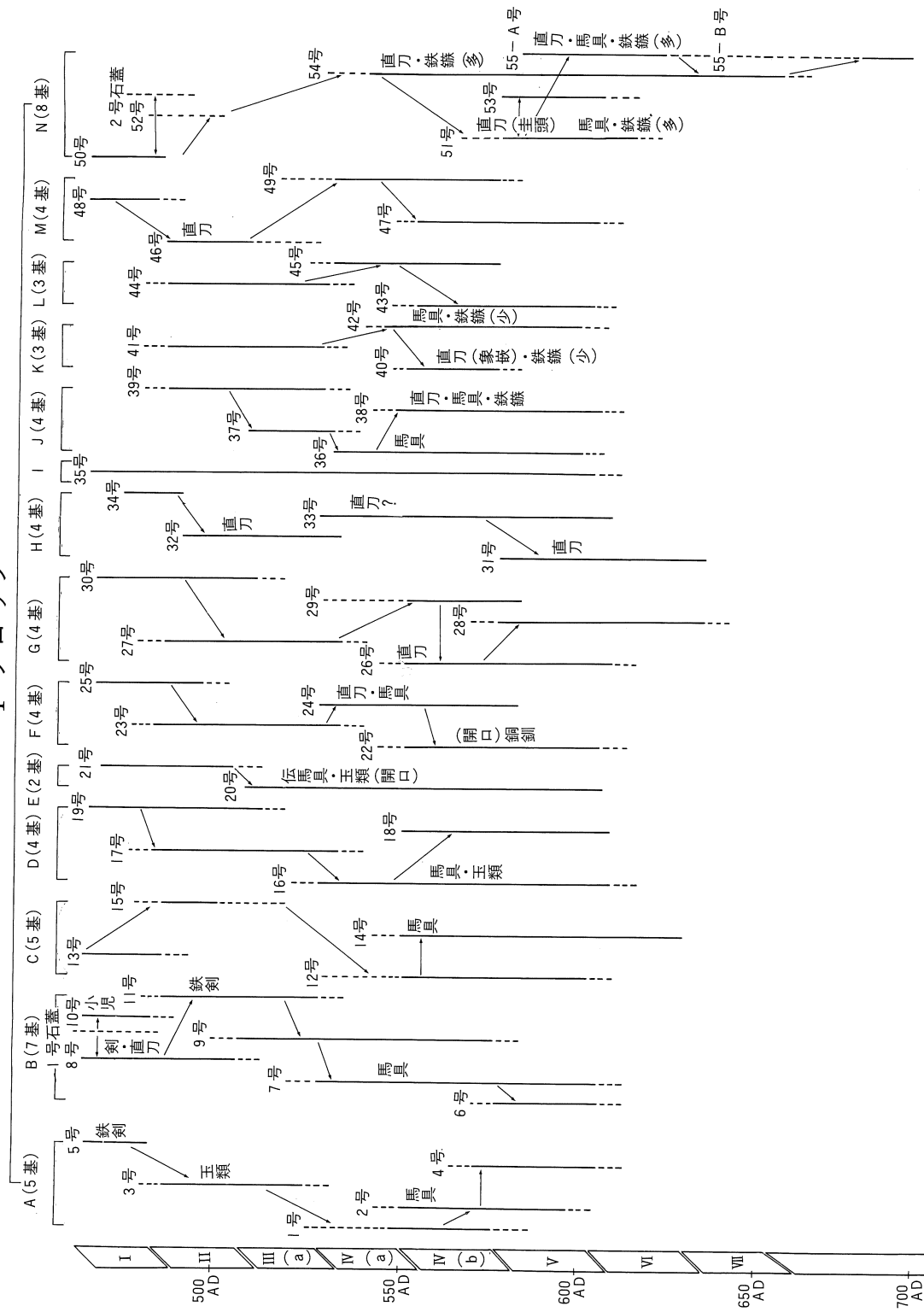
上ノ原横穴墓群の周辺には三光村佐知遺跡、福岡県築上郡太平村上唐原遺跡をはじめ山国側流域の自然堤防上

第236表 元和8年の人畜御改帳

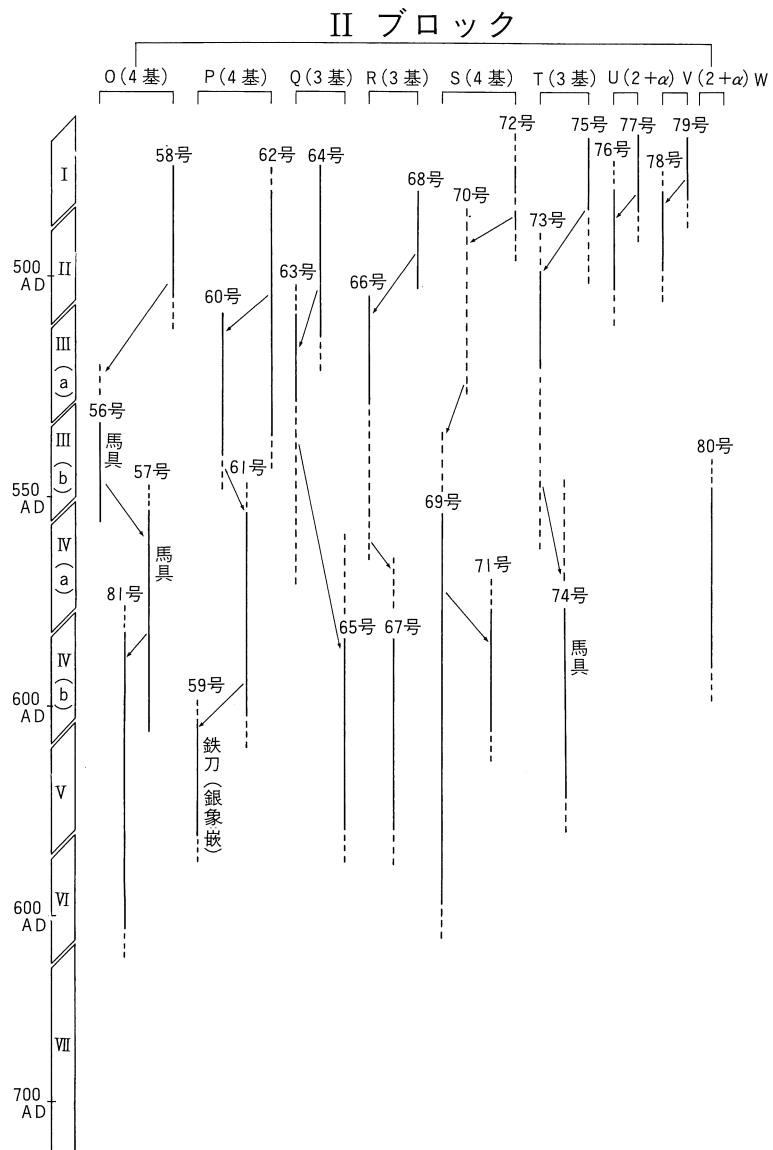
村名	人数	男	女	15歳より上の男	15歳より下の男	本小百姓	名子	その他	牛	馬	合計
佐知	143	81	62	22	12	30	12	鍛冶4、牢人1	22	9	31
小袋	30	16	14	3	3	9	1	—	5	1	6
〃	13	10	3	4	3	2	1	—	1	2	3
土田	52	29	23	12	3	9	5	—	8	5	13
〃	8	4	4	—	—	2	2	—	2	1	3
白木	81	51	30	7	13	18	9	山ノ口1、神主1、坊主2	16	11	27
〃	11	6	5	2	1	2	1	—	1	1	2
〃	33	18	15	4	3	9	2	—	4	4	8
嶋	29	20	9	9	1	6	2	神主1、社人1	5	5	10
(真坂計)	400	235	165	63	39	87	35	11	64	39	103

(三光村誌より)

I ブロック



第532図 上ノ原横穴墓群築造時期一覧表 (Iブロック)



第533図 上ノ原横穴墓群築造時期一覧表 (IIブロック)

にいくつかの古墳時代集落が形成されている。今のところ住居跡が検出されているのは佐知遺跡のみであるが、表採資料等からみると、当時もこれらの自然堤防上にいくつかの集落が同時に存在していた可能性が強い。しかしながら、個々の自然堤防の規模は、上記の住居数および人口を満たすだけの大集落を成立させるものではない。たとえば、江戸初期の元和の人畜御改帳には佐知村には143人しか人口が認められない。第236表がその傍証となろう。したがって、上ノ原横穴墓の群全体は1集落ではなくいくつかの集落が集まったものの可能性が高いのではないかと思われる。横穴墓群が大きく2群に分かれるということからみると、少なくとも2集落の奥津城として形成された可能性が高い。

ところで、本章における村上・吉留の考察（5-②）では、副葬品の所有形態から5レベルの格差が指摘されており、同一群内において家族集団間に階層差が認められている。その様態は、ほぼ固定的ではあるものの、指導的家族集団に時期的な変化が認められるというものであった。そして、横穴墓群全体が、少なくとも二つの集落からなるとすると、北群が副葬品の質・量ともに南群を凌駕しており、村落間においても格差が存在したことが見て取れる。ところが、本章第2節に記したように、6世紀後半において横穴墓の小群をこえて破碎散布儀礼が行われ、北群あるいは南群の群内のみならず群間においても破碎散布は行われている（第235表・付図3参照）。この破碎散布儀礼については、造墓集団が本来持っていた社会集団としての同一性をこの時期において再確認したものと考えている。そうすると、この南北二群は大きくはあるレベルにおける同一社会集団として認識されており、その中で階層分化を遂げていたとすることができよう。

以上のように、上ノ原横穴墓群は、父系の血縁原理に基づく家族集団（世帯共同体）を基礎単位とする累代の家長墓として築造され、これら単位間の格差および、おそらくは集落レベルを背景とする二群間における格差を内包しつつも、同一集団として機能した社会集団の墳墓であったということができよう。

(5)上ノ原墳墓群の変遷

村上久和

上ノ原横穴墓群は、八面山より派生ある洪積世丘陵の南側斜面部に築造されている。

この丘陵の北側平坦部には、数基の古墳の存在が認められていた。本バイパス工事に伴っても2基の低塚系方墳およびそれに付属する土壙墓、石蓋土壙墓で構成される勘助野地墳墓群が調査されている。さらに、同一丘陵上の浅谷を挟んだ西側でも、低塚系方墳1基と高塚系円墳1基で構成される幣旗邸古墳群が調査されている。また、この古墳群の北側約50mの地点に、横穴式石室を主体とする円墳2基（相原古墳群）が存在した。

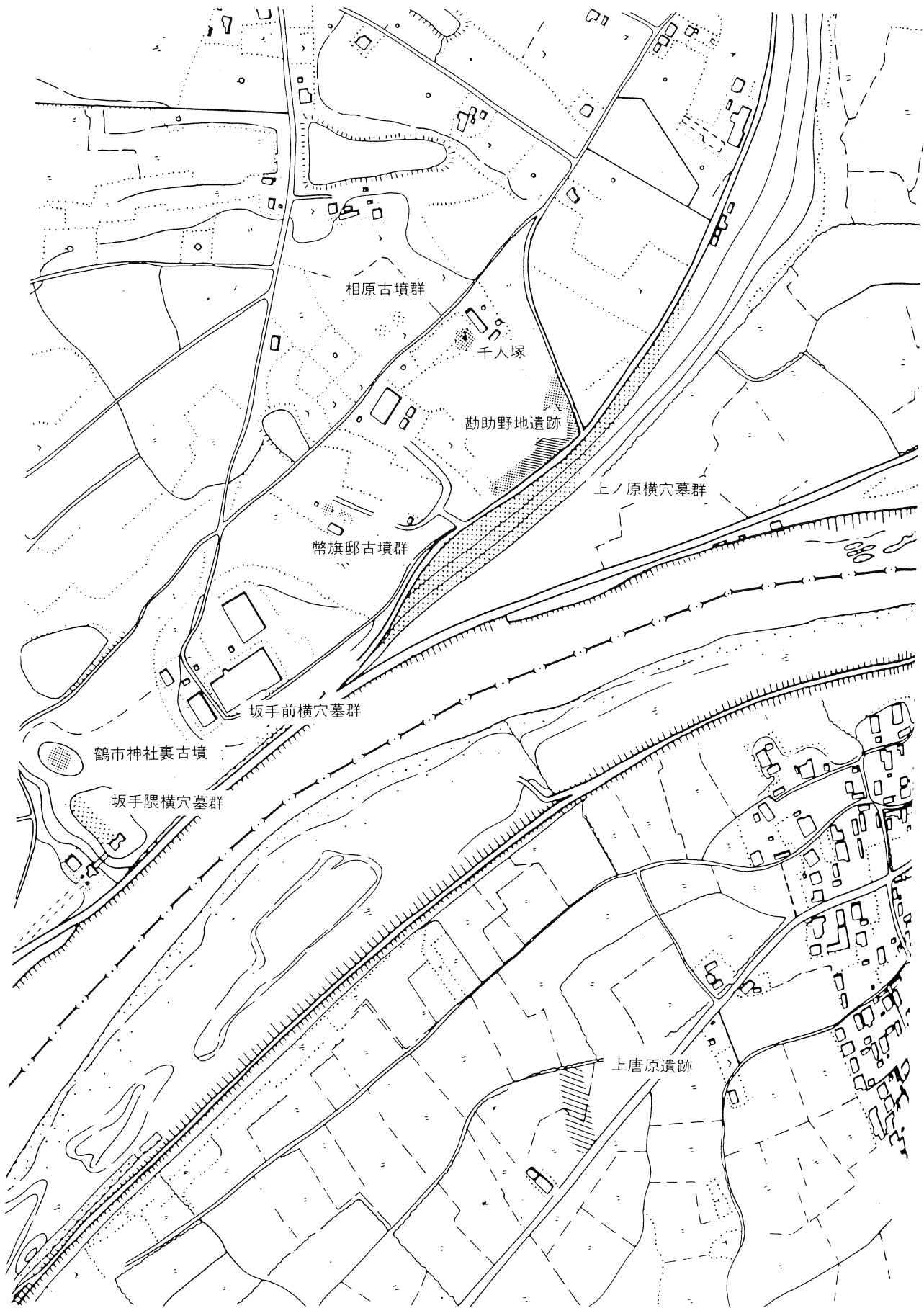
本節では、これら墳墓群の変遷を通じて本横穴墓群の性格を検討したい。

これら墳墓群のうち、出土遺物からみて最古に位置づけられるものに勘助野地3号石蓋土壙墓がある。この土壙墓からは鉄鉈と有透孔長三角形式鉄鏃が出土し、4世紀前後に比定されている。さらに試掘資料ではあるが、2号低塚系方墳の周溝から4世紀中頃と判断される特殊器台の脚部片が採集されている。このことから、本丘陵上には4世紀中頃前後より低塚系方墳十石蓋土壙墓・土壙墓という図式の墳墓群の形成が始まると考えられる。次に、4世紀末～5世紀初頭前後に勘助野地1号墳が出現する。本墳は総長18m×15mの低塚系方墳で、中心主体は内法180cm×60cm、深さ67cmの大型箱式石棺墓であり、鉄剣、農工具、玉類、竹櫛等の出土をみた。この石棺墓の東側に内法170cm×70cmの粘土槨、西側に内法121cm×20cmの石蓋土壙墓が付設されているところから、本墳は1墳多棺墓である。また、周辺にも同時期と考えられる石蓋土壙墓、土壙墓が認められた。本墳の周溝から壺形埴輪が出土しており、その数量および出土状態から、墳丘上を一系列で巡っていたものと推定される。さらに、この中心主体部（箱式石棺墓）は土層観察から2体以上埋葬されており、副葬品の組成から中心埋葬者（初葬者）は女性であった可能性が強い。

本墳および周辺の埋葬主体は石棺墓、粘土槨（二木棺墓）、石蓋土壙墓、土壙墓とバリエーションに富んでいるが、副葬品の有無あるいは組成の違いなどから石棺墓→粘土槨→石蓋土壙墓・土壙墓という埋葬主体の違いによる明確なヒエラルキーが認められる。このように周溝（＝墳丘）の有無や主体部の相違から階層的分解が一層進み、明確になったことを示している。しかし、この段階までは主墳と小墳墓群がいぜんとして同一墓域に形成されている。これらの墳墓群の性格としては、小平野を統括する小首長（村落首長）とその特定構成員の墓域と考えられると同時にその規制力が小首長に対していまだ強くおよんでいる状態を示していると考えられよう。さらに、このような小首長権は女性をも継承されうることが推定される。

ついで、5世紀中頃前後に幣旗邸2号墳が築造される。この古墳は総長12×10mの低塚系方墳で、中心主体は大部分が後世の造成によって破壊されていたが、内法180×40cmの河原石積みの堅穴式石室であり、床面の断面形から小型の割竹型木棺が納められていた可能性も考えられる。出土遺物は盗掘を受けていたこともあり、主体部内からは何も認められなかった。この時期になると墳丘および周辺から中心主体部以外の埋葬施設は認められないことから、このような小首長墳においても一般構成員からの隔絶化が進んだものと考えられる。

さらに、5世紀後半になるとこの丘陵上の墳墓群のあり方に大きな変化が起こる。それは、丘陵平坦部には幣墓邸2号墳に続き、同1号墳が築造されるが、それとほぼ時期を同じくして南斜面上に横穴墓群が築造されることである。幣墓邸1号墳は、径約20m、高さ約1.5mの高塚系円墳で中心主体部は内法190×60cm、深さ50cmいわゆる石棺系石室である。石室内より熟年男性人骨1体と直刀、刀子、鑷子、長頸片刃箭式鉄鏃などの鉄器類および炭化植物が出土している。なお、炭化植物はその出土状態から、人骨が白骨化した後に埋納された可能性を田中良之氏は指摘している。また、墳丘中より馬歯も検出されている。詳細な時期や古墳の性格については報告書に譲るとして、鉄鏃の種類が長頸片刃箭式鉄鏃のみの組成であることおよび同様な形状の炭化植物が50号横穴墓より田中が指摘したのと同様な状態で出土していることなどからおおむね5世紀後半前後のものと考えて差し支えなからう。本墳も墳丘中あるいはその周辺に埋葬施設が見られないことから、2号墳同様小首長の単独墳と見られる。ここには、熟年男性が埋葬されているのが特徴である。さらに、ほぼ時期を同じくして丘陵斜面部に横穴墓がつくられ始める。5世紀後半に築造された横穴墓数は17基で、この内、特に35号横穴墓が規模、副葬品



第534図 上ノ原横穴墓群周辺墳墓分布図

の内容とも他の横穴墓を圧倒している。また、50号横穴墓では前述した幣旗邸1号墳と同一・同状態の炭化植物が出土しており、主体部は相違するものの同一形態の祭祀儀礼が行われていることが注目される。このように、丘陵平坦部には円墳、斜面部には横穴墓群も形成される。このような主体部の相違は、部族・氏族における首長や世帯共同体の家長間の出自等の差異と考えられよう。すなわち、本墳墓群では5世紀後半に丘陵頂部を奥津城とする氏族と新たに丘陵斜面に横穴墓を形成する氏族が加わり、墳墓群を形成する現象を読みとることができる。さらに、35号横穴墓が副装品から見て最も優位であることから新来の氏族の抬頭が認められる。また、5世紀後半代の横穴墓の被葬者は、出土人骨あるいは玄室内の遺物出土状態から、熟、成年の男性が初葬されていることが特徴である。このような主体部の状況から推定して、初期横穴墓あるいは石棺系石室は北部九州東側地域特有の墓制であり、上ノ原墳墓群における古墳群築造の原理は、畿内政権による一元的身分関係を表わしたものでなく、特定地域内においての部族・氏族内の首長と世帯共同体の家長との関係を示すものと考えられる。

また、この時期においては前代ほどの埋葬主体の相違による階層差は認められず、むしろ副葬される威信財によってのみ、その格差が判断されるように変化するの大きな特徴である(5-2)。

5世末～6世紀中頃になると横穴墓のみが、墓域を分割専有しながら、累代墓状に築造されていることが認められ、さらに横穴墓形態が統一的になっていく。ここでも第5節(2)に記したように直刀、馬具、鉄鏃等の所有状況から各横穴墓に格差があり、5世紀後半では35号横穴墓が、6世紀中頃～後半には24・51号横穴墓がそれぞれ頂点にたち各横穴墓群がピラミッド状に構成されていることが認められる。

6世紀後半～末では、斜面部にひき続き横穴墓が築造される一方、丘陵平坦地に相原1、2号墳が出現する。この古墳は昭和42年頃に破壊消滅しているが、直径15m前後の円墳で主体部は巨石を用いた横穴式石室であった。直刀、馬具、須恵器等の出土が伝えられている。また、横穴墓においても直刀、馬具、鉄鏃を副葬した55号横穴墓があり、両者間には階級的格差は認められず、前代(5世紀後半)の横穴墓群と石棺系石室に見られたような部族あるいは氏族などの出自集団の差と考えるべきであろう。

7世紀前半～中頃では、斜面部に横穴墓が2基築造されるのみで、本墳墓群は急激に減少する。この現象は、当期にある種の墳墓規制を受け、造墓を停止するようになったのか、墓域が当初より分割専有されていたため、新たに造墓する余地がなく他の造墓地へ移行した結果であるのか明確ではない。しかしながら周辺部の横穴墓群築造時期は、当該期前後であるところから後者の見方が妥当かと思われる。7世紀中頃～後半には、平坦地、斜面とも墳墓の築造はなく、2基の横穴墓に追葬が認められる。

8世紀後半～9世紀前半にかけて丘陵平坦地の斜面ぎわに5基の火葬墓が累代墓状に築造されるとともに、築造後の横穴墓道を再利用して新たに小型の横穴墓を築造した55号横穴墓が認められる。

以上のように本墳墓地は4世紀前後から9世紀前半までの約500年間続いた中津平野最大級の墳墓地の一つであると考えられ、墳墓群の立地・埋葬主体部の差異などから少なくとも三つの部族あるいは氏族の小首長とそれに関わる世帯共同体の家長層の奥津城として形成されたものであろう。

註(1) 広瀬 幸吉 「下毛群古墳横穴一覧表」『大分県史蹟名勝天然記念物調査報告書』五 1927年

註(2) 村上 久和 「勘助野地遺跡」『中津バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書』(1) 1988年

註(3) 村上 久和 『幣旗邸古墳』中津市教育委員会 1984年

註(4) 賀川 光夫 「相原古墳」『中津市史』 1966年

註(5) 註(2)に同じ

註(6) 北部九州の同期の人骨残存墳墓では男性人骨に鉄鏃が副葬される場合が多い。

森 浩一編『日本の古代12 女性の力』 1987年

註(7) 註(3)に同じ

註(8) 1989年にセメント工場増築の為、中津市教育委員会により調査。

栗焼憲児「幣旗邸古墳1号墳」大分県考古学会会報No 5 1989年

註(9) 山中英彦氏によって定義された名称で箱式石棺状の腰石の上に河原石等を平積みして竪穴石室にしたものである。

山中 英彦『東宮ノ尾古墳群』北九州市教育委員会 1974年

註(10) 群集墳(群小墳)出現の社会関係については大和政権の身分秩序に編成されたことを示すものとする西嶋定生氏の説、大和政権と造墓主体たる家父長との間に、墓域の賜与を媒介とした政治的關係が形成されたとし畿内政権がより下位のレベルまで地域支配を拡大させたとする広瀬和雄氏、辰巳和弘氏の説などが今日の主要な理解となっている。これに対して山中敏史氏は群集墳造営主体や被葬者構成に地方差が認められることから、これはそれぞれの部族・氏族の組織や習俗によって規定された多様性であるとして大和政権の一元的身分体系を示すものでなく、部族・氏族内部における首長と世帯共同体の家長との關係を表現する手段と考えている。

筆者は、本墳墓群の成立と展開の時期、主体部の様相等から見て山中説を支持したい。

西嶋 定生 「古墳と大和政権」『岡山史学』10 1961年

広瀬 和雄 「群集墳論序説」『古代研究』15 1978年

辰巳 和弘 「密集型群集墳の特質とその背景」『古代学研究』100 1983年

山中 敏史 「律令国家の成立—群集墳の性格—」『岩波講座日本考古学』6 1986年

註(11) 註(4)に詳細はあるが、出土遺物については地元の長谷川正美氏が昭和42年頃に墳丘上で須恵器を発見している。筆者実見

(6)上ノ原横穴墓群の保存をめぐる

清水 宗 昭

昭和56年度から発掘調査を実施してきた北大道路中津バイパス建設工事に伴う上ノ原横穴墓群については、最初の予想をはるかに上回る規模と内容であり、調査年度を追うごとにその重要性の認識が高まった。このため三年次の昭和58年度には、南半部のⅡ区についても北半部のⅠ区同様に相当数の横穴墓の存在が確認されたため、工法、設計の変更による保存について建設省大分工事事務所に検討を要請した。これに対して、建設省サイドで盛土工法、ブリッジ工法等の工法について種々検討し、県教委とも協議を重ねたが、取付道の地盤の強度の面等で保存はきわめて困難であるとの結論に達し、引続き本調査を行うこととした。

一方、Ⅰ区の傾斜面下部に多く造営された初期横穴墓群については、墓道が短く、玄室の位置も取付道法面の境界上にあるところから、法面の傾斜角を立てることによって相当数の横穴墓が保存できる可能性を見出すことができた。これについては、上ノ原横穴墓群の重要性に関心をもった中津地方の重要文化財保存推進協議会の要望もあり、再び建設省大分工事事務所に要請した。その結果、Ⅰ区55基の横穴墓のうち初期横穴墓10基が保存可能であるとのことであった。しかし実際の工事に際しては、工事上の手順のため完全に保存できたのは、21号、23号、25号、27号、30号、32号の6基のみとなった。

上ノ原横穴墓群については、不運にも取付道の新設工事と重なり、地形上設計の変更が困難であったため、最終的にはその大半を失うことになり、関係者としてはきわめて残念な思いがある。その中にあって一部の横穴墓が関係者の熱意と協力により保存できたことはわずかな救いといえよう。なお、Ⅱ区の南部の斜面についても横穴墓の存在が予想されるところであり、この部分については将来保存されることを期したい。

(7)上ノ原台地周辺の集落・耕地・墓地の変遷

坂本嘉弘

はじめに

三光村の象徴である八面山の山裾から北に延びる台地は、途中で西に張り出し、北にある中津市の沖代平野と南の三光村佐知地区を分断している。地元では平地から見れば比高差約20mの急斜面で囲まれた、この張り出し部分の台地上を上ノ原と呼んでいる。上ノ原台地の上面は標高約40mのほぼ平坦な地形であるが、谷頭に溜め池のある細い谷が北からいく筋も切れ込んでいる。また、台地の西端は山国川に臨む断崖になっている。

一方、台地周辺の平野は、上ノ原台地と福岡県側の大平山から北に延びる山塊により区切られ二つに別れている。最大の面積をしめるのが台地の北に広がる山国川の沖積地である沖代平野で、周防灘まで続いている。もうひとつは上ノ原台地の南に広がる平地で、中央を山国川が流れ、東は大分県三光村佐知地区、西が福岡県大平村唐原地区に別れている。平地は東南北を上ノ原とそれに続く台地にとりまかれ、西を大平山から延びる山塊で遮断される小世界を形成している。この平地は標高は30～25mで、比高差1m前後の微高地と低湿地、山国川による自然堤防、大平山の山塊を刻む幾筋もの谷間など細かな微地形が観察できる。

このような地形がおりなすなかで、近年上ノ原台地の南側の平地とその周辺での発掘調査が相次ぎ、縄文時代から鎌倉時代までのさまざまな遺跡の実態が明らかになってきている。そこで、その成果から遺跡の動態、特に地形的背景のなかで集落・墓地・耕地の変遷について北部九州の状況を参考にしながら考えてみる。

縄文時代の集落と墓地

まず、本格的な稲作の伝播する以前の世界である縄文時代の集落と墓地との関係を見ると、両者は近接する傾向が強いことはすでに指摘されている。豊前地方でも宇佐平野東部の寄藻川沿いにある石原貝塚では、ハマグリが9割以上占める生活と密着した貝層の中から屈葬された埋葬人骨が出土している。この人骨は出土土器から縄文時代後期後半から晩期前半と考えられている⁽¹⁾。また、上ノ原台地の東にある中津市棒垣貝塚でも縄文時代後期前葉の住居跡内から埋葬人骨が検出されている⁽²⁾。このように、弥生時代に近い縄文時代後晩期では集落内の日常的な部分に埋葬地が選定されている。

上ノ原台地周辺の自然堤防上の微高地には佐知遺跡や佐知久保遺跡、上唐原遺跡や下唐原川下遺跡など幾つかの縄文時代後期前葉から晩期の集落遺跡があるが、これらの遺跡でも、おそらく集落内の日常的な位置に墓地が営まれているものと考えられる。

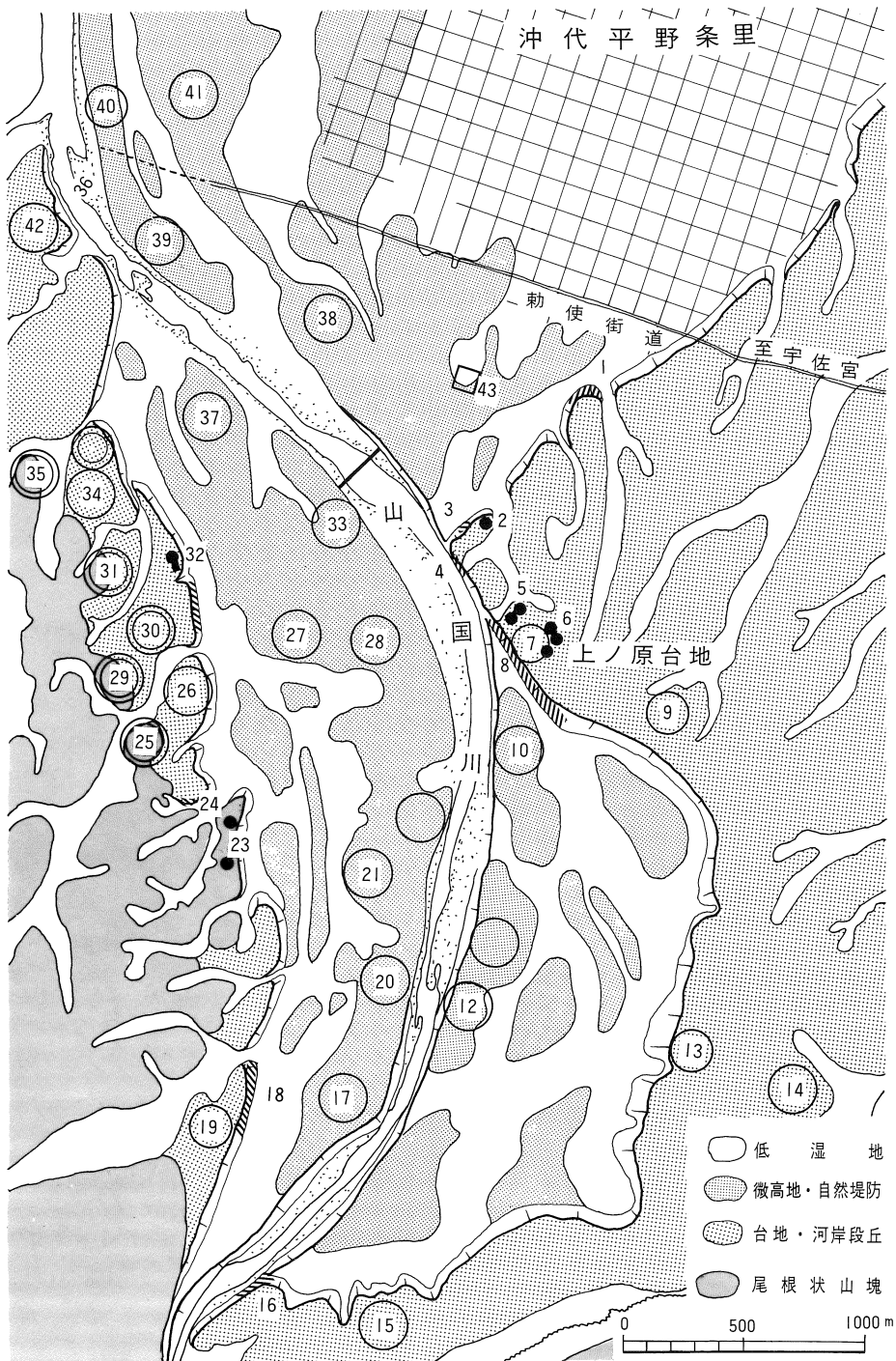
弥生時代の集落・耕地・墓地

稲作の始まる弥生時代になると、集落形成にとって水田を経営するための耕地の確保は重要な要素となる。しかし、土木技術の未熟な時代の水田開発は佐賀県菜畑遺跡や福岡県板付遺跡の例で知られるように、小河川沿いや海岸部の低湿地に限られ、集落もその近くに営まれる。

上ノ原台地周辺の弥生前期の遺跡は、中津市大池南遺跡、佐知遺跡、福岡県新吉富村中桑野遺跡が知られている。大池南遺跡は上ノ原台地に切れ込んだ谷頭に営まれた小集落であり⁽³⁾、佐知遺跡の周辺には低湿地が広がっている⁽⁴⁾。さらに、中桑野遺跡は東側を山国川の本流が流れるものの、西側はその支流の小河川である土佐井川があり、その周辺に低湿地が形成されている⁽⁵⁾。初期水田としてはこれらの低湿地が想定できる。

この時期の墓地を墓地遺構の明確な北部九州にみると、弥生前期から支石墓や甕棺墓など墓地施設の集落からの分離と集中化が認められる。豊前地方でも環濠の検出された苅田町葛原遺跡では、環濠内とその周辺には袋状貯蔵穴など生活遺構があるものの、死者のための施設は確認できなかった⁽⁶⁾。また、大分県大野郡千歳村の平石遺跡では台地の北縁に10数基の甕棺で構成された弥生前期の墓地が検出されたが、その周辺では集落遺構は確認できなかった⁽⁷⁾。上ノ原台地周辺では、先の3遺跡で住居跡や貯蔵穴などを検出しているが墓地遺構は無く、逆に唯一調査されている台地先端の弥生前期の土壙墓周辺には集落跡はない。このように、集落と墓地の分離はこの地域でも明確化している。

弥生時代中期になると、さらに集落・耕地・墓地の区分は明確化する傾向が伺われる。行橋市の下稗田遺跡で



- | | | | |
|------------------|------------------|------------------|-----------------|
| 1. 平原横穴墓群 | 2. 鶴居神社裏古墳 | 3. 坂手隈横穴墓群 | 4. 坂手前横穴墓群 |
| 5. 幣旗邸古墳群 | 6. 千人塚・相原古墳群 | 7. 勸助野地遺跡(古前) | 8. 上ノ原横穴墓群 |
| 9. 大池南遺跡(弥前) | 10. 佐知久保遺跡(縄~古) | 11. 佐知遺跡(縄~古) | 12. 白池遺跡(古後) |
| 13. 諫山遺跡(縄・弥中~後) | 14. 原口遺跡(弥中~後) | 15. 白木遺跡(古後) | 16. 城横穴墓群 |
| 17. 百留野池遺跡(弥前~中) | 18. 百留横穴墓群 | 19. 百留遺跡 | 20. 重古遺跡 |
| 21. 梶屋遺跡(弥中~後) | 22. 水出遺跡 | 23. 四ツ塚山古墳群 | 24. 上唐原横穴墓群 |
| 25. 皿山古墳群 | 26. 壇ノ野地遺跡(弥前~中) | 27. 下唐原遺跡(弥後~古前) | 上唐原遺跡(縄・古後) |
| 29. 上熊古墳群 | 30. 金居塚古墳群 | 31. 上野地八幡宮遺跡(古前) | 32. 金居塚古墳(前方後円) |
| 33. 川ノ上遺跡(縄) | 34. 下野地遺跡(弥前~中) | 35. 下野地古墳群 | 36. 能満寺古墳群 |
| 37. 川下遺跡(縄) | 38. 上万田遺跡(弥中~古後) | 39. 南高瀬遺跡 | 40. 北高瀬遺跡 |
| 41. 高瀬遺跡 | 42. 下桑原遺跡(弥前~中) | 43. 相原廃寺(奈良) | |

第535図 上ノ原台地周辺の遺跡と地形概念図

は平野に囲まれた丘陵上に円形住居跡で構成される集落が形成され、尾根続きになる丘陵に墓地が営まれている⁽⁸⁾。また、宇佐市の駅館川の東の東上田台地にある野口遺跡⁽⁹⁾では約300基、樋尻道遺跡⁽¹⁰⁾では約80基の土壙墓や石蓋土壙墓で構成される墓地が祭祀遺構と共に調査されている。この台地では地点を異にして、幾つかの住居跡が検出されている。このように、墓地は前期に比較すると規模の拡大化も目立ち、集落構成員のほとんどが、この共同墓地的色彩の強い墓地に埋葬されると考えられ、日常生活部と非日常生活部が明瞭に区別されるようになる。

上ノ原台地周辺の弥生時代中期の遺跡をみると、大分県三光村諫山遺跡をはじめ、福岡県大平村では百留遺跡・壇ノ地遺跡・下野地遺跡・中桑野遺跡など上唐原・下唐原地区を望む各台地上に立地する。これら、台地上の遺跡の特徴は前期から継続して営まれているが、中期以降は存続するものは少ない。これに対し山国川沿いの自然堤防上の大平村梶屋遺跡、三光村佐知遺跡・中津市上万田遺跡・高瀬遺跡などは中期以降も集落が継続して維持される。また遺跡は数から推測すると、前期に比べ増加し、規模も拡大する。このことは集落の拡大ととらえる事ができ、その背景には前期から始まる低湿地での水田経営が順調に発達していることを示している。

墓地はこれまで台地上では見つかっていない。しかし下裨田遺跡や東上田台地の集落と墓地のありかたを見れば、台地の集落はその続きや台地に、微高地の集落は隣の同じような微高地に営まれている可能性が強い。

後期になると上ノ原台地周辺の遺跡は新たな動きをみせる。先に述べたように、これまで台地上にあった中桑野遺跡や百留遺跡・壇ノ野地遺跡などの遺跡は中期以降の遺物や遺構は検出されない。かわって後期の遺構や遺物が検出されるのは山国川沿いの自然堤防上である。佐知遺跡では5基の方形住居跡が調査されており、大平村の下唐原遺跡でも後期の集落が調査されている。また、高瀬遺跡や上万田遺跡、大平村の梶屋遺跡や下唐原川ノ上遺跡でも後期の遺物が採集されており、この時期の集落の存在が想像できる。このように、集落の低地への移動が目立つ。この背景には水田経営のさらなる発達と、水田化できない微高地や自然堤防上での畑作など農業生産の向上が考えられる。そこで、耕地の管理や収穫・貯蔵の作業を合理的にするため、耕地と集落の近接化を計ったものとする。

一方、この時期の大分県の墓地は、日田郡天瀬町大坪遺跡のように中期以来継続するものもある⁽¹¹⁾。しかし、宇佐市京徳遺跡⁽¹²⁾や大丸遺跡⁽¹³⁾は後期だけの墓地として知られている。また、日田市草場遺跡は弥生時代後期から古墳時代まで続く墓地遺跡であるが、これら弥生時代後期からの墓地遺跡は微高地の端部や平地を見下ろす台地の縁辺などに立地する。しかも、この時期の墓地は中期の墓地が二列埋置など地形に沿って細長くなる傾向が強い⁽¹⁴⁾のに対し、集塊状になる。このことは、農業生産の向上を目指すことによる耕地の拡大と定住生活の継続による墓地の拡大という矛盾する事柄を解消するため、耕地化できない部分への移動、あるいは耕地確保のため墓地の限定の結果と考えることができる。

古墳時代の集落・耕地・墓地

弥生時代後期に見られる集落と耕地からの墓地の分離化傾向は、古墳時代になるとさらに明確化する。古墳時代前期の集落は佐知遺跡や下唐原遺跡、中津市高瀬遺跡・上万田遺跡など山国川に沿って形成された自然堤防上で確認されており、すべて弥生時代後期から継続したものである。これまで台地の上には大規模な集落遺跡は見つかっていない。この状況は中・後期も変わらず、佐知遺跡では5世紀後半から6世紀のカマドを持った住居跡が5基調査されており、佐知久保遺跡でも6世紀の住居跡が確認されている。また大平村上唐原遺跡でもカマドを持った住居跡が調査されている。この他、高瀬遺跡・上万田遺跡・白地遺跡でも須恵器が採集されていることから同様な集落が存在するものと推測できる。このように弥生時代後期に本格的に始まる自然堤防上での集落形成は古墳時代も継続され発展し古代・中世へと継承したものと考えられる。

一方、墓地は自然堤防上に造られるものも一部あるが、基本的には平地を見下ろす台地の上を選地するようになる。古墳時代前期の墓地は三光村岡崎遺跡や大平村上野地八幡宮遺跡があり、平地を見下ろす台地の上に石棺墓・土壙墓・石蓋土壙墓で構成された墓地が営まれている。この立地は弥生時代後期からみられる台地の縁辺の選地傾向が強まったものであり、上ノ原台地でもこの時期から墓地としての聖域化が本格的に始まる。

古墳時代の上ノ原の台地上には土壙墓や石蓋土壙墓、方形周溝墓で構成される4世紀から5世紀はじめの勸助

野地遺跡、5世紀代の円墳と考えられる幣旗邸古墳⁰⁸・千人塚古墳⁰⁷・相原古墳群・鶴居神社裏古墳などがあり、斜面には5世紀中ごろから7世紀にかけて上ノ原横穴墓群・坂手前横穴墓群・坂手隅横穴墓群が造られている。こうして、山国川東岸では平地の微高地に集落や畑地、低湿地が水田、台地が墓地という景観ができあがる。

これと同じように、山国川西岸でも平地の集落・耕地、台地上の墓地という景観が見られる。上野地八幡宮遺跡は多数の石棺群で構成されることから勸助野地遺跡の時期とほぼ同じである。また、最近確認された前方後円墳である金居塚古墳は5世紀頃と考えられ、上ノ原台地の円墳群と同時期である。そして台地の西にある大平山から延びる尾根の斜面には6世紀から7世紀の横穴式石室の群集墳が幾つも見られる。さらに、台地の斜面には百留横穴墓群、上唐原横穴墓群、下唐原横穴墓群など、5～7世紀の墳墓群が造られている。

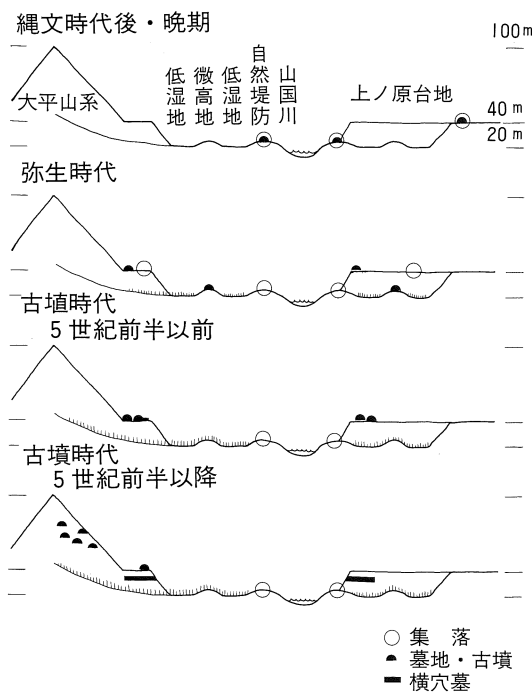
このように山国川を挟んで東と西で同じような景観ができるが、墓地は内容や時期で異なる部分が見られる。すなわち、上ノ原台地では4・5世紀までは台地上に円墳や方形周溝墓などの墳墓が造られるが、5世紀後半以降はほとんど横穴墓に埋葬されるようになる。このため、横穴式石室を主体部とする古墳は造られない。ところが、西岸の台地群の墳墓は、勸助野地遺跡と同じ時期から造られはじめられるものの、5世紀頃には上ノ原台地と大平山から延びる尾根で囲まれ、山国川周辺に広がる平地を中心とする小世界を統括した首長墓と考えられる、前方後円墳の金居塚古墳が造られる。また、6世紀以降も尾根の斜面に幾つもの横穴式石室を主体部とする群集墳が造られ、上ノ原横穴墓群と同時期の横穴墓群が各台地の斜面に営まれている。

以上のように、山国川東岸と西岸の古墳時代の墳墓を比較すると、内容や継続性のうえで西岸の墳墓群が変化に富むと言える。この差を考えると、ひとつは両地域の地形の相違が大きく関わっているものと考えられる。つまり、弥生時代に稲作が開始されて以来に日本列島では、その生産量の向上と耕地の拡大が人々の目指す一致点のひとつであったと考えられる。その結果、生産性の高い地域により大きな勢力が出現することになり、さらにその支配地域の象徴として、古墳が築かれる。このように、古墳の立地と集落・耕地は密接に関係する。

そこで、山国川兩岸の耕地を比較すると、平地は自然堤防と微高地と低湿地のおりなす地形で共通し、面積もほぼ同じである。しかし、平地の後背地形は大きく異なる。東岸は標高40m前後の平坦な台地であるのに対し、西岸は標高約600mの大平山があり、それから延びる標高100m前後の山塊がある。この後背地の相違は、水田経営にとって大きな差を生じたものと考えられる。

山国川の河床面まで比高差があるため、近年まで水田化が困難であった両地域の平地部は、集落地以外の水田や畑地の面積は変わらない。ところが、西岸地域は山塊からの湧水で形成される谷が発達している。灌漑技術の未熟な古墳時代の水田開発にとって限界のある平地部より、水量も豊富な谷部とそれに続く低湿地は水稻栽培を行なうに魅力的な土地であったものと推測できる。このことを裏付けるように、この谷水田を見下ろす、尾根の斜面や頂部に上ノ熊古墳群や下野地古墳群・能満地古墳群・皿山古墳群・穴ヶ葉山古墳群など横穴式石室を主体部とする6・7世紀の群集墳が築かれている。逆に、このような谷水田のない東岸地域は6・7世紀の群集墳は形成されず、この時期の墓地は上ノ原横穴墓群にしか認められない。

ところで、5世紀は日本の古代史にとって大きな劃期と言われている。考古資料からみても、横穴式石室の採用、新しい武具・馬具・装身具の出現、須恵器の生産の開始、カマド付き住居の築造など、それまでの日本列島の文化の伝統になかったものが見られるようになる。この背景には



第536図 上ノ原台地周辺の集落
耕地・墓地の変遷概念図

「好太王碑」の碑文にみられるように四世紀末から始まる倭政権の朝鮮半島での軍事行動に象徴されるように大陸文化との新しい関係があると考えられている。この大きな変革は上ノ原台地周辺の小世界にも当然現われる。すなわち、5世紀前半までのこの小世界の社会は、前方後円墳である金居塚古墳に埋葬された首長を頂点に、堅穴式石室を主体部とする幣旗邸古墳群などの小円墳、勸助野地遺跡の方形周溝墓や石蓋土壙墓・土壙墓等に埋葬される人々で構成されている。ところが、5世紀後半以降は、前方後円墳の築造は認められず、東に隣接する宇佐平野で4世紀代から6世紀代まで継続して前方後円墳が造られる状況とは異なる。また、5世紀後半からは台地と平地をつなぐ斜面に横穴墓が多数造られるようになり、さらに6世紀代からは横穴式石室を主体とする群集墳も築造されるようになる。

このような、墳墓の変化はこの時代の社会変革を代弁するものにとらえられる。つまり、前方後円墳の築造を畿内政権との関係で出現したものと考えれば、上ノ原周辺地域での停止は畿内政権との関係が質的な変化を受けたことを意味する。このことは6世紀まで造られる宇佐平野の勢力、または「豊前国」の中心とも言われている行橋市周辺とは異なる状況であったと考えることができる。またこの地域で5世紀後半に出現する横穴墓は4世紀末に百済の墓制の影響を受け北部九州で採用される横穴式石室との関係で考えられている¹⁰⁾。そして、山国川西岸では以後墓制の主体として、7世紀まで横穴式石室を主体部とする群集墳や横穴墓に、東岸では横穴墓に集落構成員の有力者たちが埋葬されるようになる。

このように、上ノ原台地周辺では集落と墓地が弥生時代から時代を経るにつれ変遷することが、遺跡の分布状態から考えられる。この背後には人々の精神文化も大きく関わるものと思われるが、その根幹となるのは、水稻栽培が始まって以来、生産規模拡大のための水田開発と、その経営の効率化を目指す意志の結果にとらえることができる。しかし、中津市のある沖代平野に条里が造られる時代になっても、この地域は山国川の両岸の平地の取水部が断崖となっているため水田化するのは困難であった。この両地域の平地は弥生時代以来耕地としては畑地の卓越地であり、現在のような全面的な水田化は明治42年の唐原用水路の開設まで待たねばならなかった。

註(1) 清水宗昭・坂本嘉弘「石原貝塚・西和田貝塚」大分県教育委員会・宇佐市教育委員会

(2) 村上久和氏教示

(3) 渋谷忠章篇「一般国道10号線バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書(1)」大分県教育委員会 昭和63年

(4) 坂本嘉弘「佐知遺跡」大分県文化財調査報81輯 大分県教育委員会 平成元年11月

(5) 前川咸洋・馬田弘念「中桑部遺跡」新吉富村文化財調査報告書第3集 新吉富村教育委員会 昭和53年3月

(6) 酒井仁夫「葛川遺跡」荊田町教育委員会 昭和59年3月

(7) 坂本嘉弘「高添台地の遺跡」千歳村教育委員会 平成元年3月

(8) 長嶺正秀・末永弥義「下稗田遺跡」行橋市文化財調査報告書第17集 行橋市教育委員会 昭和60年3月

(9) 小倉正五・佐藤良二郎「駅館川流域遺跡群発掘調査報告書Ⅱ」

宇佐市文化財調査報告書第3集 宇佐市教育委員会 昭和62年3月

(10) 小倉正五・佐藤良二郎「駅館川流域遺跡群発掘調査報告書Ⅰ」

宇佐市文化財調査報告書第2集 宇佐市教育委員会 昭和61年3月

(11) 坂本嘉弘・綿貫俊一「五馬大坪」矢瀬町教育委員会 平成元年3月

(12) 宇佐市教育委員会が昭和48年調査 小倉正五氏から教示

(13) 宇佐市教育委員会が昭和58年調査 小倉正五氏から教示

(14) 高橋徹「草場第二遺跡」九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(1) 大分県教育委員会 平成元年3月

(15) 三光村教育委員会が昭和57年調査 玉永光洋氏から教示

(16) 注(3)に同じ

(17) 田中布由彦・村上久和「幣旗邸古墳」中津市文化財調査報告第4集 中津市教育委員会 昭和59年3月

中津市教育委員会が平成元年度調査 栗焼憲児氏から教示

(18) 小田富士雄「百済古墳の系譜」古文化談叢13集 昭和59年

(19) 三光村誌刊行委員会「三光村誌」 昭和63年6月

6. 附編

(1)大分県の横穴墓

渋谷 忠章

1 はじめに

昭和47年、大分県と愛媛県を結ぶ国道197号線の改良工事に伴って32基の横穴墓の調査が行われた。遺跡は、大分市東上野にあり飛山横穴群とよばれ、大半は未掘墳で鉄製品を中心とした豊富な副葬品が出土した。また、築造時期は6世紀中頃～7世紀初頭を中心としたものであるが、表採した須恵器からすでに6世紀前半までさかのぼる可能性が示された。このことは、この調査が大分県における最初の本格的な横穴墓の発掘調査というだけでなく、横穴墓に対するそれまでの概念や問題意識を改めさせるものであった。

その後、開発事業の増大に伴って日田市北友田横穴群、大分市蟹喰横穴群等の調査が進む中で、福岡県行橋市竹並遺跡では約1000基に及ぶ横穴墓の調査が行われた。この驚くべき数の調査は、横穴墓の形態的変遷や被葬者の性格等について言及し、我国の横穴墓に画期的な調査成果をもたらした。特に、5世紀後半～6世紀前半の初期横穴墓の存在は、後期古墳文化のそれまでの研究を大きく塗り替えるものであった。上ノ原横穴墓群の調査は、そうした初期横穴群が学会で注目されているさなかであり、竹並遺跡の調査経験をもとに特に横穴墓における葬送儀礼の解明を主にして行われ、その調査方法と成果は全国的に注目された。また、この竹並・上ノ原横穴墓群の調査を契機に、それ以前に調査が行われていた大分市高来山横穴墓や竹田市扇森山横穴も注目されるようになり、その後も日田市羽野横穴群、大野郡三重町十六山横穴墓など初期横穴墓の発見が相次ぎ、改めて大分県の横穴墓に対する調査・研究の見直しに迫られている。

2 横穴墓の分布

九州における横穴墓は、風化しかかった安山岩や阿蘇熔結凝灰岩が厚く堆積した地域が選ばれている。従ってその分布は福岡・熊本・大分・宮崎・鹿児島県に多くの密度で分布を示している。大分県では、これまで約250ヶ所で横穴墓が確認されており、その総数は3000基以上に及ぶものと思われる。また分布の上では筑後川上流域、豊前地域、別府湾沿岸地域、大野川上・中流域に集中した分布を見せ、その概要は次のようである。このうち初期横穴墓は、上ノ原横穴墓群の他に筑後川上流域の日田市羽野横穴群・九重町二日市横穴、別府湾沿岸地域の大分市高来山横穴、大野川上・中流域の竹田市扇森山横穴・三重町十六山横穴があり、豊前地域に限らず広範囲に分布することが明らかである。また、装飾された横穴墓は、豊前海に面した宇佐市から豊後高田市に分布するなど地域的な様相を呈している。

(1)豊前地域の横穴墓

中津平野の山国川と、宇佐平野の駅館川及び豊後高田市を流れる桂川流域を中心とした、凝灰岩質の崖面や斜面に多く見られる。山国川流域では、中津市や三光村に集中し上流の耶馬溪町や山国町にも分布する。特に三光村では、上ノ原横穴墓群のほかに約20基からなる城の百穴、40基前後が確認されている庵ノ尾横穴群、42基の存在が推定される鴨山横穴群、35基が確認されている野辺田横穴群など多くの横穴群が存在する。一方、宇佐平野や桂川流域には貴舟平横穴群、加賀山横穴群、一鬼手横穴群、穴瀬横穴群など彩色の施された横穴を含む横穴群が集中する。

四日市横穴群 四日市平野を望む台ノ原台地の東側急斜面に立地し、谷を挟んで一鬼手横穴群と加賀山横穴群に分かれる。北側の一鬼手横穴群は4段の造成がなされ、86基の横穴墓が確認される。一方、加賀山横穴群は6段に造成が行われ76基が確認される。両者共に早くから開口し、また後世の墓地と重複していることもあって出土遺物は大半が不明である。装飾を施す横穴墓は数基確認され、良好な遺存状況を残すものは両群に1基ずつある。これらは墓門正面に装飾が施され、一鬼手横穴が赤色で同心円文を多数描いているのに対し、加賀山横穴は

人が手を広げたようなヒトデ状の文様が描かれ、赤の地文に黒で縁取りした珍しいものである。

穴瀬横穴 桂川右岸の台地崖面に位置し、19基の横穴のうち10基に赤色を主とした彩色が施されている。一鬼手・加賀山横穴と同じく墓門正面に描かれており、円文や同心円文が見られる。玄室の造りが簡単なのに対し墓門は二重や三重にした入念な構造となっている。早くから開口しており出土品は明らかでないが6世紀後半と推定される。

船塚横穴群 穴瀬横穴群の西側約1.2kmの丘陵崖面に位置し11基の横穴墓が調査された。玄室平面は方形と長楕円形に大別されるが、床面は大半が掌大の偏平河床礫を用いている。天井部はドーム形、蒲鉾形、両者を折衷した形態の三つに分けられる。出土品は玉類・耳環・土器に限られるが、造営時期は6世紀末～7世紀前半代と考えられる。

(2)別府湾沿岸の横穴墓

大分川下流域や別府湾に面した崖面と佐賀関半島中央付近の別府湾に面した砂丘背後地崖面に集中する。大分川流域では、大分川と七瀬川に挟まれた丘陵崖面に、玄室の壁をさらに掘り込んでいくつもの羨道と玄室を設け、子持横穴と称する特殊な横穴墓をもつ小野鶴横穴群や、30基以上が確認されそのうちの1基より珠文鏡が出土した高来山横穴群等が所在する。また、大分川河口付近では73基を確認する滝尾横穴群や、妻入りで寄棟形天井及び奥壁に一段高い屍床のある玄室をもつ下郡横穴群などがある。一方、別府湾に面した別府市浜脇から大分市八幡にかけての崖面には、別府市金比羅山横穴群・平尾横穴群、大分市蟹喰横穴群・穴蟹喰横穴群・白木横穴群など6世紀後半から7世紀を中心とした横穴群が見られる。一方、佐賀関半島中央付近の砂丘背後地は、屋宗横穴群・城原横穴群・飛山横穴群など所在するが、この地域は古代海部の中心地であり県内有数の前方後円墳集中地でもある。

高来山横穴群 30基以上の横穴が確認されそのうちの1基が調査された。横穴は2.2m×2.0mの平入り方形で天井部は家形を呈している。床面には玉砂利を全面にしいている。玄室からは、珠文鏡、鉄剣、鉄鉾、鉄鋏、刀子、貝輪状のものが出土したが、玄室の奥壁に2個の突起があることから剣や鉾はこの突起にかけられていた可能性がある。出土遺物や横穴の形態から五世紀後半～六世紀前半代に比定される。

小野鶴横穴群 26基の横穴が同じ高さに並行して分布する。調査は行われていないが、このうち群中の中央に位置する1基は特殊な構造を呈している。この横穴墓は、前室を中心にして奥に1号室と2号室の2室があり、両側にもそれぞれ1室ずつがある。前室は、長さ1.8m、幅3mで、天井高は1.3mの平坦な形状をしている。入口部分は当初から閉塞施設がなかったものと思われる。また、1号室は他の4室に比べ最も規模が大きく整った形態を呈している。天井は、寄棟妻入りの家形を呈するものである。2号室は、羨道が右方に片寄っており意識的に1号室と接することを避けたものと考えられる。天井はドーム状となっている。3号室と4号室はややいびつな楕円形を呈している。

飛山横穴群 国道197号線のバイパス工事により32基の横穴が調査された。玄室は、平面形が正方形及び隅丸方形でドーム形・アーチ形の天井を呈するものが多い。このうち1号・4号・15号・23号墓はいずれも寄棟形天井を呈し、特に1号墓は奥壁より高さ20cmの屍床を設けた精美な構造である。これらの横穴墓は6世紀中頃から7世紀前半代を中心とする横穴墓であるが、表面採集の遺物から6世紀前半代の可能性がある。金銅製雲珠・銀張鏡板・金銅張杏葉をはじめ、多数の鉄製品が副葬されていた。

屋宗横穴群 大分市大字角子原屋宗にあり、砂丘につき出た標高15m前後の斜面に位置する。土地区画整理事業により4基の横穴墓が調査された。このうち6世紀後半に考えられる2号墓は天井部がドーム状を呈している。また、これに続く6世紀末～7世紀前半頃の1号墓はドーム状をやや残す形態となっている。そして、7世紀中葉以後は箱形へと変化する。他に横穴墓は見られず、有力家父長家族（小豪族層）の累代的墳墓に推定されている。

(3)大野川上・中流域の横穴墓

阿蘇溶結凝灰岩の発達した地域で、多くの横穴群が存在するが豊前地域や日田地域にあるような大規模な横穴

墓は見られない。中流域では平野部に面した崖面にも分布するが、小河川に浸食された谷部に10基程度の単位で分布することが多い。調査例が少なく玄室の構造や副葬品の明らかでないものが多いが、玄室は小規模で天井部がアーチ形やドーム形をしたものが一般的である。そうした中で竹田市市用横穴群は墓門を二重にした入念な作りをしているが、そのうちの1基は墓門が屋形風の作りで玄室は家形の構造をしたものもある。また、竹田市扇森山横穴、三重町十六山横穴は初期横穴墓に含まれるものであるが、横穴式石室墳の殆ど無い地域であるだけに、出現の背景及び被葬者の性格に興味をもたれる。

扇森山横穴 竹田市街地に近い扇森山にある横穴で、墳丘をもつ横穴であったことが伝えられているが、玄室の構造などは明らかでない。しかし、内部から横剣板鋌留短甲・直刀・鉄鏃が出土し、竹田市歴史資料館に保管されている。短甲は定形化した形式で、県内では佐伯市宝剑山古墳からの出土例があるが、横穴墓からは唯一の出土例である。5世紀後半から6世紀初頭の年代が考えられ、竹田盆地周辺に高塚古墳が見られないことから、5世紀末頃にこの地域にいち早く定着した集団の有力者の墓であった可能性が高い。

十六山横穴 三重盆地を貫流する大野川によって開析された小支谷の最奥部にある。工事によって1基のみ調査されたが、羨道・墓道については不明である。玄室は長さ1.65m、幅2.5mの平入り不正長楕円形を呈している。床面は、奥壁側に玉砂利を敷き屍床としている。玄室からは、直刀・剣・鉄鏃・刀子・鉄鏃・毛抜形鉄器・鹿角製刀装具・鳴鏑等が出土している。また人骨は、男女各一体が出土し、これらの遺物は初葬の40才代男性にともなうことが判明している。5世紀末～6世紀初頭の造営と考えられている。

(4)筑後川上・中流域の横穴

横穴式石室墳と共に横穴墓が多く見られる地域である。特に日田盆地をとりまく台地や丘陵崖面には、数十基以上からなる大規模な横穴群が分布する。このうち羽野横穴1号墓は5世紀後半代の須恵器が出土している。また、玄室の形態は、天井部がドーム形や、アーチ形の他に月隈横穴群、北友田横穴群、星隈横穴群には家形天井をしたものが多く含まれる。

羽野横穴群 急傾斜砂防工事に伴い11基の横穴を調査した。玄室平面は、平入り方形、方形、隅丸方形、妻入り方形、平入り長方形等様々で、天井部も家形、ドーム形、アーチ形に分けられる。このうち1号墓は、羨道から玄室へ段をなして降りる初期横穴墓特有の形態を呈している。玄室の平面はやや不正であるが平入り方形を呈し、奥行約1.4m、中央部の最大幅約1.9mを測る。天井部は失っているが奥壁・両側壁は垂直に立ち上がり、緩やかに屈曲して天井部に続く。床面は奥壁にわずかに高い屍床を設ける。また、玄室は床面から35cm内外の幅に赤色顔料を塗布している。須恵器大型臙、勾玉、ガラス玉が出土し、造営時期を5世紀後半代に求められる。

小迫横穴群 九州横断自動車建設に伴って約60基の横穴を調査したが、全体的な総数は100基を越すものである。台地斜面の尾根を中心にして、3群以上に別れる。このうち1・2群は、6世紀中頃を中心にする。この地域では数少ない長い墓道と、造り付けの屍床をもつ横穴が多く見られる。屍床は、奥壁側・奥壁と片側壁・奥壁と両側壁に分けられ、その部分は人頭大の礫を敷いたものや、一段高い造りだしをしたものがある。このうちの1基からは、県内唯一の革袋形須恵器が出土した。3群は、調査した16基のうち4基が小規模なもので、7世紀中葉を中心とした一群である。

以上、大分県の横穴墓は県南地方にやや希薄であるが、その他は全域に分布を示している。竹並横穴群に続き上ノ原横穴墓群で発見された初期横穴墓は、形態的にはやや異なるものの豊前地方に限らず日田市、大分市、三重町、竹田市などにも見られる。しかし、それらは今のところその地域で1基だけが確認されているにすぎず、竹並や上ノ原横穴墓群のように集中した分布ではない。日田市羽野1号墓は、地理的にみても豊前地方の影響を強く受けたことが推察されるが、大分市においては6世紀後半代以降の横穴式石室がわずかに3基、三重町、竹田市は横穴式石室墳が全く確認されていない地域であり、豊前地域の初期横穴墓との関連がいかなるものか興味をもたれる。また、大分市高来山横穴、三重町十六山横穴、竹田市扇森山横穴は、多くの副葬品を出土しその内容も高塚古墳と何ら遜色のないものであり、古墳の造営こそ許されなかったもののヤマト政権あるいは在地首長と深いかわりをもった人物と思われる。

3 横穴墓の形式と時期

横穴墓は、玄室・羨道といった単純な構造ながら、形式のうえでは多種多様にわたっている。従って、その形式を分類し比較検討することによってある程度の時期差と地域差を捕えることが可能であり、九州では小田富士雄氏や佐田茂氏によってそうした試みがなされ、特に佐田氏は横穴墓を群集墳としてとらえ、初期、盛期、終末期の3期に分類した。また大分県においては、池邊千太郎氏が県内横穴墓の分類を行い、各横穴群の形態の変遷を試みたうえ「筑前・豊前型」、「肥後型」に対しアーチ形並びに平形天井の導入からの横穴墓を「豊後型」とすることを提唱しているが、大分県の横穴墓の発掘例は少なく、また内容の判明するものも少ないため、個別地域ごとの地域色が十分に確認されていない現状である。従ってここでは、初期、盛期、終末期の3期にわけそれぞれの特徴について触れてみる。

初期横穴墓 竹並横穴墓の発見以後、5世紀後半から6世紀前半の横穴墓を、これまでの横穴墓と区別するために用いられたものである。上ノ原横穴墓群を除いては、高来山横穴、羽野横穴、十六山横穴、扇森山横穴、九重町二日市横穴がこの時期の横穴墓である。この他、飛山横穴群では表採資料のなかに6世紀前半代の須恵器が含まれており、その時期の横穴墓の存在が考えられる。しかしこれらは、上ノ原や竹並横穴群とは異なり群のなかで主流を占めるものではなく1～2基程度の存在である。それだけにこの時期の横穴墓には特殊性を認めることができる。

形態的には、玄室平面は方形・長方形・楕円形・平入り長方形など様々であり、また天井部も家形・ドーム形・アーチ形などに別れるが、上ノ原横穴墓群の初期横穴墓には家形天井部は見られない。一方、十六山横穴及び羽野横穴もドーム形天井であり、初期横穴墓の中でも家形天井はやや後出的なものとしてとらえられる。また、上ノ原の初期横穴墓は、玄室に向かって下向する短い羨道や墓道をもち、羽野横穴は玄室へ段をもって降りる羨道が認められる。傾斜をもつ入口部を通して地下へ遺体を埋葬するという構造的特質は、竪穴系横口式石室にも類似し、そうした埋葬観念が初期横穴墓の出現に大きく影響したものと思われる。

盛期横穴墓 6世紀後半代を中心とした横穴墓で、全体的な構造は規模が大きくなり整備されたものが多くなる。竹並横穴群や上ノ原横穴墓群では方形の玄室に長大な墓道が付く。豊後側では、この時期の横穴墓の調査例の少ないこともあるが殆ど見られず、日田市小迫横穴群で確認されている程度である。したがって、こうした長大な墓道の付く横穴墓は豊前地域の特徴的な構造と言える。玄室も平面は、方形や長方形を呈するものが多く、また天井部は家形やドーム形の形式が主流となる。

初期横穴墓においては、ドーム形から家形への移行が確認されたが、別府湾沿岸のそれぞれの横穴群には、家形からドーム形への変遷が考えられる。特に、飛山横穴群では1号・4号・15号・23号といった6世紀中葉の横穴墓はいずれも寄棟形天井を呈している。しかし次の6世紀後半には早くも寄棟形天井は姿を消し、ドーム形やアーチ形天井に移行している。一方、大分平野側の穴蟹喰横穴群、大曾横穴群、滝尾百穴などは6世紀末から7世紀初頭においても寄棟形が用いられるが、全体的には家形天井からドーム・アーチ形天井へと移行する傾向にあり、しかも時代が下がるにつれ規模が小さく作りも雑となる。

床面は、人頭大の礫や玉砂利を全面に敷いたものが多くなるが、小迫横穴群は屍床の両側に枕を造り出すものがあり、築造時において追葬を意識したものと考えられる。また飛山1号墓は、玄室を3区に区画し奥壁側は高さ約20cmの屍床を設け、屍床を区画する障壁左右の側壁に接する部分は太い門柱状の造りだしを設けている。このようにこの時期の横穴墓は天井部だけでなく、屍床においても整備したものが多くなる。

終末期横穴墓 6世紀末から7世紀にかけての横穴墓で、大半の横穴墓はこの時期のものである。玄室平面は、盛期のものとは違いはないが全体的に規模は小型となり、ややいびつな不整形をしたものが多くなる。また盛期にみられた長い墓道は姿を消し、前庭部を共有した横穴墓が一般的となる。天井部は、ドーム形・アーチ形が主となり高さも低くなって全体的な造りは雑となる。しかし地域によっては、大分平野側の横穴墓のように、横穴墓の造営がこの時期にあたることもあって、7世紀前葉から中葉にかけて盛期をむかえ、玄室の規模が拡大し家形天井が多く残る場合もある。

以上、大分県における横穴墓を初期、盛期、終末期の3期に分け、大まかであるがその時期的な特徴について触れてみたが、初期の出現期の横穴墓は、規模もさほど大きくはなく、また天井部はドーム形を呈し玄室に向かって降りて行く羨道部をもつ。このことは初期群集墳が竪穴系横口式石室を内部主体にもつものが多く、埋葬数は1、2体で単次葬を基本とするのに共通している。そして、こうした初期横穴墓の形態や埋葬理念は豊前地域に限らず豊後地域の初期横穴墓にも少なからず影響を与えたものと思われる。初期横穴墓に葬られた人物は、高塚古墳と何ら遜色のない副葬品をもつことから、政治的・経済的にある程度の基盤をもち、農業を主とした有力農民であったり、手工業や生産を統一した世帯共同体の家長層で、在地首長との政治的関係性から横穴墓築造の権利を獲得した人物と思われる。盛期横穴墓は、形態的には内部の規模が大きくなり屍床などが設けられ整備されたものが増える。また、豊前地方では長大な墓道がこの地方の特徴的な形態としてとらえられ、その一部が日田地域に及んでいる。また規模の大型化や出土人骨からこの時期の埋葬理念が複数埋葬を基本としていることは明らかである。また、飛山横穴群のように直刀や鉄鎌などの武器類の出土率が一層高まりを見せるのは、大和政権あるいは在地首長の軍事的編成の拡大と対応して、新たな有力集団の台頭と、その家族や類縁家族にまで造墓が広がった結果とみなされる。また末期には、山間部の小河川流域沿いなどその分布は一層拡大する。しかしその規模は盛期のものに比べると小規模なものが増え、この段階において新たな葬送儀礼における思想的な変革や政治的な変動があったものと思われる。

参考文献

- 1 大分県教育委員会「飛山」『大分県文化財調査報告』第二十八輯（昭和48年）
- 2 竹並遺跡調査会編『竹並遺跡』（昭和54年）
- 3 渋谷忠章「古墳文化の展開」『大分県史・先史篇Ⅱ』（平成元年）
- 4 宇佐市教育委員会「宇佐地方の装飾横穴」『宇佐市文化財調査報告書』第一集（昭和50年）
- 5 註4に同じ
- 6 大分県教育委員会「船塚遺跡」『大分県文化財調査報告』第六十九輯（昭和60年）
- 7 杉崎重臣「木ノ上・高来山の横穴古墳」『大分県地方史』第三十二・三十三号（昭和39年）
- 8 大分県教育委員会「屋宗横穴」『大分県文化財調査報告』
- 9 真野和夫「竹田市扇森山横穴出土遺物」『大分県地方史』第八十四号（昭和51年）
- 10 三重町教育委員会『十六山横穴墓』（昭和58年）
- 11 大分県教育委員会『日田市羽野横穴群発掘調査概報』（昭和60年）
- 12 大分県教育委員会「小迫墳墓群」『九州横断自動車に伴う埋蔵文化財調査概報』（昭和63年）
- 13 小田富士雄「横穴墓総覧—北九州地方—」『歴史読本』二十卷八号（昭和50年）
- 14 佐田茂「北部九州における群集墳の推移」『九州文化史研究所紀要』第二十五号（昭和55年）
- 15 池邊千太郎「豊前・豊後の横穴墓形態変遷論」『おおいた考古』第3集 1990

「正倉院文書」に収められた戸籍のうちには、上ノ原遺跡群の所在する豊前国にかかるものとして仲津郡丁里、上三毛郡加自久也里、同塔里のものがある。このうち特に塔里は多くの史家によって現在の太平村大字唐原の地に比定されている。この地は、山国川下流にあり、上ノ原遺跡群とは山国川を挟んでいわば対面する位置にあたる。これまで報告されたように上ノ原遺跡群の年代は、最も年代の下がる横穴墓の追葬を考えて七世紀前半である。一方塔里戸籍は大宝二年(702)のものであるから、われわれは上ノ原遺跡群の終焉にさほど遠くない時期の、しかも遺跡の所在地に至近の位置にあった里におけるイエと戸の実態を考察する格好の史料をもっていることになる。当然塔里の戸籍は、今後上ノ原遺跡群の、特に横穴墓群の被葬者たちの集団関係等の考察をすすめる上で、何かと引きあいに出されることとなると思われるので、ここにその全文を掲載し、若干の付論を添えておきたい。

1 塔里戸籍の特色

塔里戸籍は4通の断簡からなり、少なくとも6戸分、計129名が記載されている。ここでは便宜上六つの戸にA～Fの背番号を付して掲載した。このうち戸の構成員の全体を知ることのできるものはB・C・Eの3戸である。

これら塔里の戸籍については、すでに多くの先学の研究があるが、特に西別府元日氏は豊前国戸籍全体を古代の地域史の視点で総括的に分析する中で、この塔里の戸籍についても詳細に論じている⁽²⁾。ここで氏は豊前国戸籍のうち特に塔里戸籍の戸の特色として、およそ以下のような点を指摘している。

- ① 各戸は正丁3～6人、各戸にすべて兵士がおり、正丁3人に1人の理想的な構成を実現していること。
- ② 各戸の正丁の人数は比較的平均していること。
- ③ 婚姻関係では塔勝と秦部の同姓間、あるいはその相互間の婚姻が主体を占め、例えば加自久也里の場合と比べてわりあい閉塞的な婚姻関係を示していること。
- ④ 夫婦同籍の比率も加自久也里に比べて著しく高いこと。

これらの貴重な見解をふまえて、上ノ原遺跡群の考察との関連を視野におきつつ、さらに二、三の問題について所見を付しておこう。

2 塔勝と秦部

まず塔里の中核となるのは塔勝姓の戸である。中でも構成員計51名におよぶE・塔勝岐弥の戸の卓越ぶりが注目される。この塔勝岐弥の戸について西別府氏は、この戸は構成員こそ多いが、実はその中に、夫婦同籍を果たした寄口世帯4戸を含むものであり、例えば、同じく豊前国丁里戸籍中の最大の戸にして進小初位の位を持ち奴婢を所有する川辺勝法師の戸(54名以上)とは性格を異にするとしている。氏の見解は寄口を隷属的世帯と考えず、戸籍の編成上の必要によって生じたものとする見解に立つものである。これに対し寄口をなんらかの隷属的性格のものとして理解する立場にたてば、この岐弥の戸はにわかに卓越した戸と読めることになる。

塔里で塔勝集団について多いのは秦部集団である。秦部集団はいうまでもなく豊前国の他の戸籍に広汎に散見する集団であるが、そのあらわれ方は各里によって様々である。例えば仲津郡丁里では秦部姓の戸主が最も多くを占め、里の中核集団のように見える。これに対し塔里ではその多くは塔勝の戸の寄口として編成されている。西別府氏はこの点について触れて、秦部集団は豊前国では「おそらく仲津郡一帯を中心に居住し、周辺部へひろがっていったものと考えられる」と指摘している⁽⁵⁾。氏の見解は豊前の秦部集団を文字どおりある程度一元的な出自を持つ渡来系集団と見る場合になじむ見解である。これに対しこれら秦部集団はそれぞれ在地の集団が秦氏に属したものであり、それぞれの地域差はそれぞれの集団の在地での勢力の本来的な差異によるという見方も成り立つはずである。この見解は当然秦部といえども、渡来人(系)集団そのものではなく、渡来系氏族である秦氏の部民とされた在地の農民を意味するという前提に立つことになる。

すでに某勝姓集団については、これが渡来系氏族である秦氏の下部組織に位置する集団であるのは確かとして⁽⁶⁾も、それが多くは地名を冠し、しかもしばしば郡司等としてあらわれることからして、伝統的な在地集団であるとする指摘がある⁽⁷⁾。

これら渡来系氏族の姓やカバネをいなく集団がそのまま渡来系集団であるかどうかについては多くの論議があるところであり、豊前国の秦部や勝姓の場合もそれが問題となるわけであるが、この問題を考えるについては、当該地域での考古学的資料、とりわけ5～7世紀の遺構・遺物における渡来的要素の有無濃淡についての地域ごとの研究が不可欠であろう。なおこの秦部について南部昇氏は勝部姓戸主より経済的に下位の集団であった可能性が強いとしている⁽⁸⁾。少なくとも塔里ではうなずける指摘であるが、その相互の婚姻関係を見ると最大戸である塔勝岐弥が秦部黒壳を妻としているほか、塔勝の戸と秦部の戸との婚姻はほかにも見える。おそらく両者の勢力的位相差はわずかなものであり、その間にはある程度の族制的な紐帯も成立していたのかもしれない。

3 勲十一等塔勝岐弥について

塔里の中で最も卓越する戸の戸主である塔勝岐弥は無位ではあるが勲十一等を受けている。この記載は上ノ原横穴墓群出土の武器等について考える上で興味深い問題を提起するものと思われるので、その意味するところについて今少し検討しておこう。

この塔里の戸籍の作成された大宝二年といえは、いわゆる隼人に対する最初の出兵のあった年である。すなわち『続日本紀』大宝二年八月条に「薩摩、多櫛、化を隔てて命に逆ふ。是に兵を發して征討す。遂に戸を校べ吏を置く」とあるのがそれである⁽⁹⁾。

薩摩、大隅の隼人は少なくとも七世紀後半の天武朝には朝廷の支配下に入ったとみられているが、その後の朝廷の支配に対しすでに文武天皇四年六月には薩末の首長たちが、南島に派遣された覺国史を襲うという事件を起こしていた。そうした動きの中でこの大宝二年の出兵となったのである。この征討は九月には終わったようで、同年九月には「薩摩の隼人を討つ軍士」への授勲がおこなわれた。さらに十月には薩摩に唱更国司が置かれ、その後の薩摩国建置にいたるのである⁽¹⁰⁾。「正倉院文書」の戸籍に散見する勲位は、この九月戊辰寅の授勲にあずかったものとみられるものである⁽¹¹⁾。ちなみに大宝二年の戸籍では件の塔勝岐弥のほか仲津郡丁里の狭度勝与曾弥の勲十等、筑前国嶋郡川辺里戸籍の追正八位肥君猪手、同肥君泥麻呂、同葛野部長西の各勲十等が見える。わが国の勲位は唐の勲品制および武散官制にならったものであり⁽¹²⁾「官位令」に官位との比当がなされている。これによれば勲十等は従七位下相当、十一等で正八位相当とされている。ただ戸籍等の人名に付された勲位は多くは征鎮勲すなわち反乱等の鎮圧にかかる軍功にかかるものが主体とされている。これらによれば郡司大領クラスはなべて九～十等を受けたようである。例えば天平九年「豊後国正税帳」では（日田郡）大領日下部連吉嶋が勲九等、同少領日下部君大国が勲十等とある⁽¹³⁾。これは隼人の最後の反乱とされる養老四年（720）の反乱にかかる授勲とみられているものである⁽¹⁴⁾。

こうした中で「薩摩国正税帳」に見える薩摩郡主帳肥君広竜が勲章十二等を受けている例が目目される⁽¹⁵⁾。郡の大領、少領、つまりいうところの郡領クラスの多くが勲十等以上を得ている中で、その下の主帳が十二等をうけていることが注意をひくのである。そうして見ると勲十一等にして無位の塔勝岐弥は郡領クラスの人物ではないが、すくなくとも「里（郷）」を代表するクラスの人物であった可能性が高い。もし岐弥が塔里の最有力者であるとすれば、塔里からは郡領クラスの人物は出ていなかったことになる。

大宝二年豊前国戸籍は断簡であるので、例えば上三毛郡の郡領が誰であり、その人物がこの大宝二年の出兵に参戦したかどうか定かではない。しかし状況としてはこの大宝二年の隼人征討にあたり、上三毛郡においても郡領クラスの人物の率いる軍が編成され、塔里の塔勝岐弥はその一部将または兵として参戦した可能性が高いであろう。

その時の軍の編成を窺う直接の手がかりはもとよりのないが、参考となるのは、この出兵のおよそ四十年後に起こった藤原広嗣の乱における豊前の豪族の動きである。豊前国はこの乱のいわば主戦場となったのであるが、こ

のとき京都郡大領外従七位上栲田勢麻呂は兵五百騎とともに、また仲津郡擬少領無位膳東人は兵八十人を、下毛郡擬少領勇山伎美麻呂、築城郡少領外大初位上佐伯豊石はそれぞれ兵七十人を率いて政府軍に帰順して活躍した。⁽¹⁸⁾ 彼らはいずれも豊前国の有力な在地首長の系譜を引くとみられる人物である。特に勇山氏は下毛郡諫山郷の在地首長と見られるもので、言ってみれば上ノ原遺跡群に至近の位置に依拠していた豪族である。

これらの郡領たちは、制度の上では律令制下の軍団の軍穀として軍団兵を率いていたはずであるが、実際に彼らが政府軍に帰順したときに率いていた八十人、あるいは七十人という兵は、彼らが⁽¹⁹⁾大化前代から国造等の在地首長として実際に率いていた兵の遺制をひく者たちであろうと見られている。岸俊男もいわゆる防人の制度に、⁽²⁰⁾大化前代の国造軍の遺制が色濃く残っていたことを指摘している。これら国造軍は、特に五～六世紀の大和政権による朝鮮の半島出兵にあたり、その主力となったと見られるものである。のみならずこのような軍事的要請こそ国造制成立の第一の契機であったとする所見もあるのである。⁽²¹⁾

そうした遺制をひいて擬少領無位膳東人は兵八十人を、擬少領勇山伎美麻呂等は兵七十人を率いて活躍したのである。こうしてみると大宝二年の隼人征討戦での塔勝岐弥をとりまく軍団の、およその構成も彷彿とされるであろう。彼は下毛郡領の率いる軍にその有力武将として参加した。彼には塔里から少なくとも何人か、多ければ数十人の兵が従ったであろう。つまり上三毛郡領クラスー岐弥のような郷長クラスーそれに従ういくらかの兵士たち。そうした軍団の構成が想定されるのである。こうした状況はまた大化前代において、この地域の在地首長とそれにつらなる有力者たちが、朝鮮半島出兵等に参戦したときの軍団の組織や構成を考える上でも参考とすべきものであろう。

そしてそこに、六～七世紀の古墳から出土する馬具や直刀などの武器の保持者の階層関係と、それを保持するにいたる政治的、軍事的契機を考えるひとつの手がかりがありはしないであろうか。

以上要するに塔里は塔勝の集団を中核とし、多くは寄口に編成された秦部集団やその他の戸を内包していた。この塔勝集団相互、また塔勝集団と秦部集団相互の間には、それぞれある程度の経済的あるいは社会的地位の差異が生じていたが、それは決定的に大きなものではなかった。各戸にふくまれる房戸の夫婦同籍の達成度は豊前国の他の里に対しても相対的に高いものであった。そして周辺の他の里に対しては、比較的閉塞的な婚姻関係を持っていた。つまり家族制的には、その中になお古い世帯共同体の遺制を残すとはいえ、比較的発達した段階に立つ集団であり、そのような集団として、地域において、周辺の諸地域に対して、わりあい明瞭な輪郭をもって存在した里であったといえることができる。

その中核となる塔勝岐弥は勲十一等を持つ里長的な地位に立つ有力者であり、おそらくは大宝二年の隼人征討に参戦し功績をあげた。そこに大化前代以来の在地首長、あるいはそれに連なる有力者についての軍事的側面からの考察の手がかりを見ることができる。

この岐弥をはじめとする塔勝集団は一応渡来系氏族である可能性も考えておかねばならないが、伝統的在地勢力であった可能性が高いといえる。秦部集団についても、例えば美濃国半布里的の秦人集団などの場合とはちがって、渡来系、在地系の二面から考えてゆくべきであろう。

註(1) 掲載した戸籍は『寧楽遺文』(上巻)によった。

(2) 門脇禎二『日本古代共同体の研究』1971

高島正人「大宝二年豊後国戸籍の分析」『立正大学文学部論叢』—20 1964

平野邦雄『大化前代社会組織の研究』1969

平野邦雄『豊前の条里と国府』「九州工業大学研究報告」—6 1957

(3) 西別府元日「大宝二年豊前国戸籍とその歴史的背景」大分大学教育学部『山国川—自然・社会・教育』1989

(4) 前掲(3)

(5) 前掲(3)

(6) 八木充「カバネ勝とその集団」『ヒストリア』—21

(7) 井上辰雄「大宝二年の豊前国戸籍をめぐる諸問題」『日本史研究』—22 1954

(8) 南部昇「古代戸籍の基礎的考察」『北大史学』—15 1975

(9) 『続日本紀』大宝二年八月丙申条

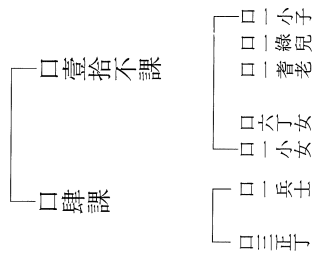
- (10) 『続日本紀』 大宝二年九月戊寅条
- (11) 『続日本紀』 大宝二年十月丁酉条
- (12) 少なくとも和銅二年六月までには置かれたと見られている。(岩波版新日本古典文学大系『続日本紀』Ⅱの補注)
- (13) 井上辰雄『隼人と大和政権』 1974
- (14) 前掲の新日本古典文学大系『続日本紀』Ⅱの補注2—三八参照
- (15) 「官位令」
- (16) 天平九年豊後国正税帳『寧楽遺文』上巻
- (17) 同薩摩国正税帳『寧楽遺文』上巻
- (18) 『続日本紀』天平十二年九月己酉条
- (19) 山内幸子「九州の軍制」『九州史研究』 1968
- (20) 岸俊男「防人考」『日本古代政治史研究』 1966
- 篠川賢『国造制の成立と展開』 1985

○豊前國上三毛郡塔里戸籍字面ニ「豊前國印」アリ。正倉院文書

〔^{（新日本書）}豊前國上三毛郡塔里太實二年籍〕 ○塔里ノ字面ニ「豊前國印」アリ。

- A
- | | |
|---------------|-----------|
| 男秦部多祁留、年貳拾貳歳、 | 正丁 嫡子 |
| 男秦部多加牟志、年拾陸歳、 | 小子 嫡弟 |
| 女秦部久波志實、年參拾歳、 | 丁女 |
| 女秦部校會實、年貳拾貳歳、 | 丁女 上件二口嫡女 |
| 外孫秦部刀良、年壹歳、 | 縁兒 久女波志實男 |
| 妹秦部神實、年伍拾貳歳、 | 丁女 |
| 塔勝稻手、年貳拾貳歳、 | 兵士 寄口 |
| 秦部刀良、年參拾漆歳、 | 正丁 寄口 |
| 妻秦部小民實、年伍拾參歳、 | 丁妻 |
| 女秦部宇提實、年拾壹歳、 | 小女 嫡女 |

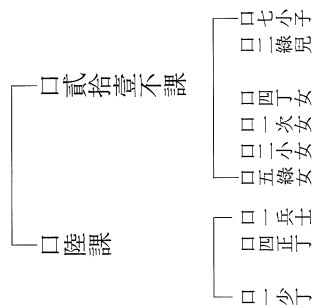
凡口壹拾肆



受田壹町玖段拾漆步

B	戸主塔勝山、年參拾漆歲、	正丁	課戸
	妻秦部宮實、年參拾貳歲、	丁妻	
	男塔勝宇麻呂、年拾參歲、	小子	嫡子
	男塔勝古麻呂、年玖歲、	小子	
	男塔勝古安、年伍歲、	小子	上件二口嫡
	女塔勝妹實、年參歲、	綠女	
	女塔勝宇提實、年壹歲、	綠女	上件二口嫡
	秦部稻手實、年陸拾歲、	丁女	宮實母
	秦部夜惠實、年貳拾歲、	次女	寄口
	秦部金石、年伍拾歲、	正丁	寄口
	妻秦部乎比實、年參拾伍歲、	丁妻	
	男秦部小根、年貳拾歲、	少丁	嫡子
	男秦部牛麻呂、年拾參歲、	小子	
	男秦部龍、年玖歲、	小子	上件二口嫡
	女秦部根牟實、年拾陸歲、	小女	
	女秦部龍實、年參歲、	綠女	
	女秦部小龍實、年壹歲、	綠女	上件三口嫡
	弟秦部刀良、年肆拾肆歲、	正丁	
	弟秦部刀牟、年肆拾貳歲、	兵士	
	妻秦部乎提實、年肆拾壹歲、	丁妻	
	男秦部猪手、年拾陸歲、	小子	嫡子、先嫡男
	男秦部乎邨、年肆歲、	小子	
	男秦部麻呂、年貳歲、	綠兒	上件二口今
	女秦部羊實、年捌歲、	小女	
	女秦部牟志那實、年壹歲、	綠女	上件二口今
	弟秦部夜惠、年參拾玖歲、	正丁	
	男秦部宇手、年壹歲、	綠兒	嫡子

凡口貳拾漆



受田參町漆段參佰伍拾漆步

C 戸主塔勝宇志麻呂、年肆拾陸歲、 正丁 課戸
 妻秦部馬手賣、年參拾貳歲、 丁妻
 男塔勝刀良、年貳拾伍歲、 兵士 嫡子、先嫡男
 男塔勝龍、年貳拾壹歲、 正丁
 男塔勝根鳥、年拾伍歲、 小子 上件二口嫡弟
 男塔勝宇麻呂、年壹歲、 綠兒 今嫡男
 女塔勝阿麻賣、年拾陸歲、 小女
 女塔勝廣賣、年拾歲、 小女
 女塔勝廣瀨賣、年壹歲、 綠女 上件三口今嫡女
 秦部牛麻呂、根參拾陸歲、 正丁 寄口
 母秦部宮賣、年伍拾捌歲、 丁女
 妻調勝馬手賣、年肆拾歲、 丁妻
 弟秦部許麻、年貳拾肆歲、 兵士
 男秦部廣庭、年壹歲、 綠兒 嫡女
 男秦部乎許麻、年拾捌歲、 少丁
 弟秦部大國、年拾貳歲、 小子
 妹秦部羊賣、年參拾貳歲、 丁女
 女 虫名賣、年貳歲、 綠女
 女 小虫賣、年壹歲、 綠女
 女 宇提^(實 麻力)、年壹歲、 綠女
 妹秦部犬手賣、年貳拾陸歲、 丁女
 海部龍手、年陸拾伍歲、 老夫 寄口

┌ 口二小子
└ 口二綠兒

D 弟強勝波利年肆拾歲、 正丁
 弟強勝根手、年參拾捌歲、 兵士
 妻塔勝宮賣、年參拾歲、 丁妻
 男強勝牛麻呂、年拾參歲、 小子 嫡子
 男強勝龍、年拾壹歲、 小子
 男強勝羊、年捌歲、 小子上件二口嫡弟
 女強勝犬手賣、年參歲、 綠女 嫡女

凡口壹拾肆

┌ 口玖不課
└ 口伍課

┌ 口四小子
├ 口三丁女
├ 口二次女
├ 口二綠女
└ 口二兵士
 └ 口四正丁

受田貳町壹佰參拾伍步

E	戸主動十一等塔勝岐彌、年參拾肆歲、正丁	課戸
	妻 若實、年肆拾歲、	丁妻
	妾秦部黑實、年肆拾貳歲、	丁妾
	妾塔勝德實、年參拾漆歲、	丁妾
	男塔勝荒弓、年拾貳歲、	小子 嫡子
	男塔勝廣庭、年拾歲、	小子 妾德實男
	男塔勝法麻呂、年玖歲、	小子 妾黑實男
	男塔勝安麻呂、年陸歲、	小子 妾德實男
	女塔勝妹實、年拾肆歲、	小女
	女塔勝小妹實、年玖歲、	小女
	女塔勝阿泥實、年漆歲、	小女
	女塔勝小根實、年陸歲、	小女 上件四口嫡
	女塔勝蘇提實、年伍歲、	小女 妾黑實女
	妹塔勝黑實、年拾玖歲、	次女
	秦部惡間、年肆拾壹歲、	正丁 寄口
	妻物部首古志實、年參拾陸歲、	丁妻
	男秦部牧夫、年拾陸歲、	小子 嫡子、先嫡男
	男秦部比羅乎、年拾伍歲、	小子 嫡弟
	男秦部荒熊、年伍歲、	小子 今嫡男
	女秦部彌豆那實、年拾伍歲、	小女
	女秦部古也實、年貳歲、	綠女 上件二口今
	塔勝麻呂、年參拾歲、	正丁 寄口
	母秦部鳥實、年肆拾貳歲、	丁女
	弟塔勝小麻呂、年拾漆歲、	少丁
	弟塔勝意等麻呂、年玖歲、	小子
	塔勝惠師、年參拾玖歲、	正丁 寄口
	弟塔勝古麻呂、年參拾漆歲、	兵士
	妻秦部宮實、年參拾伍歲、	丁妻
	男塔勝根手、年捌歲、	小子 嫡子
	女塔勝牛手實、年漆歲、	小女
	女塔勝小身實、年陸歲、	小女 上件二口嫡
	弟塔勝阿蘇毗、年貳拾漆歲、	殘疾
	弟塔勝犬手、年貳拾肆歲、	正丁

□塔勝德瀨、年拾漆歲、 少丁
 □塔勝刀彌賣、年參拾肆歲、 丁女
 妹塔勝牛手賣、年拾漆歲、 次女
 妹塔勝牟志那賣、年拾參歲、 小女
 秦部廣、年參拾貳歲、 正丁 寄口
 妻秦部猪手賣、年貳拾漆歲、 丁妻
 男秦部羊、年肆歲、 小子 嫡子
 女秦部牛手賣、年拾壹歲、 小女
 女秦部根手賣、年貳歲、 緣女 上件一口嫡
 妹秦部比禮賣、年參拾肆歲、 丁女
 妹秦部犬手賣、年貳拾玖歲、 丁女
 從子秦部羊、年拾陸歲、 小子
 秦部宇那賣、年漆拾歲、 蒼女 寄口
 姊秦部妹賣、年參拾貳歲、 丁女
 女秦部久波志賣、年拾捌歲、 次女
 膳大伴部沙與知、年貳拾貳歲、 兵士 寄口

秦部細日賣、年伍拾玖歲、 丁女 寄口
 女橋勝赤賣、年參拾貳歲、 丁女

凡口肆拾不課 凡口十一小子

F 女塔勝赤賣、年肆歲、 小女 上件三口今
 塔勝身麻呂、年肆拾陸歲、 正丁 嫡女 寄口
 妻榎本勝牟久提賣、年參拾陸歲、 丁妻
 男塔勝身手、年貳拾歲、 少丁 嫡子
 女塔勝妹賣、年拾漆歲、 次女 嫡女
 弟塔勝加羅閑、年參拾陸歲、 兵士
 塔勝加志波賣、年貳拾漆歲、 丁女 寄口
 男秦部麻呂、年肆歲、 小子
 女秦部黑賣、年貳歲、 緣女
 秦部小廣、年肆拾貳歲、 正丁 寄口
 難波部牛麻呂、年參拾歲、 正丁 寄口
 妹難波部根賣、年肆歲、 小女

凡口三小子

凡口貳拾伍

凡口肆課 凡口二緣女
 凡口二兵士 凡口二正丁

The excavation of the Uenoharu Rock-Cut Tomb Cluster, Oita Prefecture, Japan.

Hisakazu Murakami

The Uenoharu Rock-Cut Tomb Cluster is located in Sanko Village, Oita prefecture. The site is on the east bank of the lower drainage of the River Yamaguni, which draws the boundary between Oita and Fukuoka prefectures. The tombs are dug in to the middle level of the southern slope of a fluvial hill. The excavation was carried out prior to the construction of a new route of the National Road No. 10. 81 tombs were excavated. As the tombs were very well preserved with no human disturbances such as tombrobbing, informations about mortuary practices could be recovered including the chronological position of each tomb, modes of mortuary practices, the physical anthropological character of skeletal remains and the kin-relations of the interments.

In terms of temporal changes in the morphological character of the tombs, the following points can be made. Tombs dated to the late 5th century AD possess a short open forecourt inclined to the main chamber, the size of which is on average small. The chambers are square, oval and rectangular in plan, although rectangular ones are rare. The ceiling is domed and there is no step in the ceiling separating the main chamber from the passage-way. Tombs dated to the period from the end of the 5th century AD to the earlier half of the 6th century AD possess almost the same morphological characters as that of the previous period, but are different in the following points: the open passage-way becomes longer and approaches the main chamber horizontally, and there appears a step in the ceiling separating the main chamber from the passage-way. Tombs dated to the period from the mid to late 6th century AD show significant differences from those of the previous Periods. A significant characteristic is that the tombs possess an open passage-way which is on average 10 meters in length, and goes gradually up to the main chamber. The chambers are mostly rectangular with four rounded corners in plan and the ceiling is without exception domed. The tombs dated to the late 5th century are the oldest examples of rock-cut tombs in Japan together with the Takenami Rock-Cut Tomb Cluster of Yukuhashi City, Fukuoka Prefecture, not far away from the Uenoharu Cluster. This suggests that rock-cut tombs as a mode of burial in the Japanese "Mounded Tomb" period originated on the eastern side of northern Kyushu. The morphological characteristics and temporal variants are closely related to earlier examples of chambered tomb, and this suggests that the origin of rock-cut tombs were influenced by the earlier examples of chambered tomb in the same area.

The distribution of the tombs on the site is highly formalized. The site consists of two areas divided by a gully. The western area has 15 groups of tombs, each of which consists of two or three tombs successively constructed over approximately one hundred years. The eastern area has 10 groups. One group is inferred to have been the cemetery of a family, and to have been formed through the successive tomb constructions of individual generations.

The important role played by pots in mortuary practice could be reconstructed from the results of the careful three dimensional recording applied throughout the excavation. Practices that occurred in the main chamber show the following transformation from that of the late 5th / early 6th century AD to that of the mid / late 6th century AD. The former involved mainly pots as bowls and pedestalled bowls that were used to serve food, while in the latter pots such as flask-shaped hanging bottles, used to serve drink, played an important role. This change can be related to some sort of transformation in the image of the afterworld possessed by the practitioners of the mortuary practices. The timing of transformation of the practices that took place in the passage-way coincides with the above. In this case the transformation occurred in the mode of deposition of the pots rather than in the con-

tents of the assemblage. Pots were located or discarded according to certain rules in the late 5th / early 6th century AD, while in the mid / late 6th century AD some pots were deliberately smashed and scattered. Besides that, several sherds from three to five tombs belonging to different groups can be refitted. This appears to suggest that a reorganization in kin and groupe relations took place in the period of this transformation in mortuary practices.

The results of physical anthropological research, which gives very important insights into the physical character and kinship structure of the interments of the site, are presented in the following summary written by Yoshiyuki Tanaka and Naomi Doi of Kyushu University.

The kin structure of the human skeletons from Uenoharu Rock-Cut Tombs, Oita Prefecture, Japan
Yoshiyuki Tanaka

More than eighty rock-cut tombs, which were built from the late fifth century A.D. to the seventh century A.D., were excavated at Uenoharu site in Sanko Village, Oita Prefecture. Various invaluable information on burial practices were obtained from the excavation which was carried out with the intention to maximise the possibility of decoding burial evidences. Those includes: the date and morphological character of each individual tombs; age and sex of human skeletons; and which individual was buried before/after which and how long it took from the one burial to the next.

Models were built on such issues as generation structure and kin relations of deceased in each tombs, and the models were examined by referring to various genetic traits of the skeletal remains. Tooth crown measurements were mainly referred to, and non-metrical cranial variants were also examined supplementarily. The assumption that high value (above 0.500) of Q-mode correlation coefficients based on tooth measurements obtained between two individuals buried in one tomb showed the two were kins was adopted in testing the validity of the models.

The conclusions obtained were as follows:

- 1) Individuals buried in each individual tombs could be described with the two-generation model, which consisted of the first generation (an adult male) and the second generation (adult males and/or adult females and/or juveniles and/or children). The all individuals were estimated to be kins.
- 2) Significant differences were seen in the assemblages, weapons in particular, buried with the deceased of the first generation and with that of the second generation. The male deceased of the first generation was more richly furnished than others. It could be considered from this that the male was the head of a family, and the others were his children who did not succeed the headmanship from their fathers.
- 3) From the fact that none of the spouses of individuals buried in each individual tombs were buried together with their partners, it could be considered that the emphasis of kinship-ties was the underlying principle which determined the form for the burial practice of the site.
- 4) It was inferred that a family, which did not have male child who was expected to succeed the headmanship, took a husband to be the head of the family. However, even in the case like this, the husband was interpreted to have been buried in the tomb of his native family. This interpretation also supported the assumption that the emphasis of kinship-ties was the underlying principles of the burial practice of the site.
- 5) The tomb of the new headman of a family was considered to have been built next to that of the tombs of the former heads from the examination of the stratigraphical relations of the tombs. Each individual tomb-clusters at the site was considered from this interpretation to have resulted from the successive construction of family tombs.
- 6) Those would have been the case that the eldest male child of a family was too young to succeed the headmanship of the family. Even in cases like this, headman's brothers did not seem to succeed the headmanship, and the eldest male child of the headman seemed to succeed the headmanship when he was grown up enough to do so. From the interpretations 1) to 6) above, it could be concluded that the basic kinship system which determined the form of the burial practices of the site was patrilineal.
- 7) It was considered that principles determining the form of burial practice in the Kofun (mounded tomb) period changed through time. The principle adopted around the 4th and 5th century A.D. was considered to have been that brothers and sisters of the head of a family could be buried together. This principle was transformed in the 6th century A.D. to the one that the headman of a family and his wife were buried together with

their children. The principle seen at Uenoharu Site could be interpreted to be a transitional form from the former to the latter.

- 8) Some females of the second generation had pre-auricular sulcus on their hip bones, which indicates high probability that they had given birth. The fact that some females, who had the trace of having given birth, were buried in the tombs of their native families suggested that there was a kind of separate-marital-residence system or that wives were sent back to their native families at their death.

Human Skeletal Remains from the Uenoharu Tunnel Tomb Group, Oita Prefecture

Naomi Doi

Department of Anatomy,
Faculty of Medicine,
Kyushu University

Total of 58 skeletal remains, belonging to the Kofun period, were excavated from the Uenoharu tunnel tomb group, Oita prefecture. They were 30 males, 14 females and 14 sex unknown. Their ages were 1 infant, 6 children, 2 juveniles, 47 adults and 2 age unknown. The conditions of bone preservation were generally worse.

These skeletons were examined by both metrical and non-metrical methods, and compared with some skeletal series of the Kofun, Yayoi, Jomon and recent Japanese. Penrose's distances based on 9 cranial measurements (1, 8, 17, 45, 48, 51, 52, 54, 55) from the Uenoharu series were calculated for these comparative series to estimate affinities among them.

The skulls of the Uenoharu population were characterized by relatively long vaults and low upper faces. Penrose's distance analysis indicated that the Uenoharu population have closer relationship to the native group than to the group assumed genetic influence from immigrants. The average stature of male (158.6cm) estimated by pearson's method was shortest of all the comparative series.

Additionally, it was suggested that the custom of tooth evulsion might have remained in this area up to the Kofun period.

上ノ原横穴墓群Ⅱ

一般国道10号線中津バイパス発掘調査報告書(Ⅱ)

1991年3月

編集 大分県教育庁管理部文化課
発行 大分県教育委員会
印刷 明治印刷株式会社
